郡家町文化財調査報告書　第19集

鳥取県八頭郡郡家町

山ノ上通山遺跡発掘調査報告書

1997

郡家町教育委員会

序　　文

郡家町は、鳥取県の東部、鳥取市の南側に位置しています。兵庫県との県境に位置する扇ノ山の懐に抱かれた人口約10,200人の町です。本町は、古来より原始・古代遺跡も多く、歴史豊かな風土と自然に恵まれた環境にあります。このような環境を維持し子孫に伝えていくことが、時代を担う青少年の育成にとっても重要なことであります。郡家町教育委員会といたしましても、このような緑豊かな自然と文化財の重要性を充分に認識し、その保護・保存に努力しているところであります。しかしながら、近年の各種開発関連事業の増加に伴い生活環境も大きく変貌しつつあります。埋蔵文化財は、貴重な歴史の証人として、様々な情報を提供してくれるばかりでなく、いろいろな生活の知恵をも現代人に与えてくれるものがあります。今日、開発と文化財の共存は、地域文化の発展にとって年をおって重要な課題ともなっています。このような認識にもとずき、関係各機関との協議を重ね、また地元町民のご理解をいただきながら、地域の発展と文化財の共存を図るよう文化財保護行政を推し進めているところであります。

ここに報告する山ノ上通山遺跡の発掘調査は、町営工場団地造成事業に伴い実施したものですが、関係各機関と協議・調整を図った結果、記録保存と言う形で残すことになったものです。調査の記録としては、必ずしも満足すべきものではありませんが、郡家町ひいては鳥取県の古代史を解明するうえでも重要な資料を得ることが出来ました。本書が、町民・関係者各位ならびに古代史研究者に活用され、文化財保護意識の高揚に役立てていただければ幸いです。

発掘調査に際しましては、事業者ならびに関係各機関のご協力とご理解とご協力をいただきました。最後になりましたが、心より感謝申し上げる次第であります。

平成９年３月

郡家町教育委員会
教育長　北　村　一　利

例　　言

1．本書は、平成３年度（1991）～平成７年度（1995）に郡家町教育委員会が、町営工場団地造成事業に伴い実施した山ノ上通山遺跡の発掘調査報告書である。

2．山ノ上通山遺跡は、鳥取県八頭郡郡家町大字口山ノ上字通山に所在する。

3．調査は、平成３年度に試掘調査を行ない、その結果をもとに平成３年度より平成７年度まで５ケ年間にわたり現地調査を実施した。平成７～８年度は整理作業を行ない、平成９年３月31日に報告書を刊行し全作業を終了した。

4．本書で使用した方位の内第１・２図は真北を示し、他の遺構図は全て磁北である。また、図中の標高は、東京湾平均潮位を基準としている。

5．遺構図中の遺物に付した番号は、遺物実測図の遺物番号に対応する。また、写真図版中の番号も同様である。

6．遺物実測図のスケールは、須恵器・土師器は１／４、石製品・鉄製品は１／２、玉製品は１／１である。また、遺物観察表の法量の単位はcm表示である。

7．出土した石材の材質鑑定については、鳥取大学教育学部地学教室の赤木三郎教授の御教示を得た。また、熱残留磁気測定に関し、島根大学総合理学部の伊藤晴明・時枝克安教授にサンプリング・測定の労を煩わし、測定結果の玉稿を戴いた。

8．本書の執筆･編集は、中野　知照がこれにあたった。従って、文責は全て中野にある。

9．調査にあたり、下記の機関及び諸氏に御指導・御教示ならびに御協力を得た。ここに記して深謝の意を表す。

鳥取県埋蔵文化財センター、郡家町総務課、岡森組、株式会社ウエスコ、赤木　三郎、穴澤　義功、伊藤　晴明、植野　浩三、神谷　伊鈴、亀田　修一、久保　穣二朗、杉谷　美恵子、武末　純一、田中　清美、時枝　克安、杉谷　美恵子、中野　知亮、中原　斉、新納　泉、西尾　克巳、西浦　日出夫、深澤　芳樹、道谷　富士夫、八峠　興、山桝　雅美、若林　久雄

本　文　目　次

序　文

例　言 …… II

目　次 …… II

第１章　序　説 …… 1

第１節　はじめに …… 1

第２節　山ノ上通山遺跡の位置と歴史地理的環境 …… 2
第２章　調査の概要 …… 6
第１節　調査の方針と調査区の設定 …… 6
第２節　古墳の名称 …… 7
第３節　調査の概要 …… 8
第３章　調査の記録 …… 10
第１節　平成２年度の調査 …… 10
１．山ノ上27号墳 …… 10
第２節　平成３年度の調査 …… 12
１．Ｊ地区 …… 12
２．Ｋ地区 …… 28
第３節　平成４年度の調査 …… 45
１．山ノ上15号墳 …… 45
２．山ノ上16号墳 …… 49
３．山ノ上25号墳 …… 52
４．山ノ上32号墳 …… 52
５．Ｄ地区、遺構外出土遺物 …… 55
６．山ノ上28号墳 …… 55
７．山ノ上29号墳 …… 58
８．山ノ上30号墳 …… 59
９．山ノ上24号墳 …… 59
10．山ノ上26号墳 …… 60
第４節　平成５年度の調査 …… 61
１．山ノ上４号窯 …… 62
２．山ノ上５号窯 …… 65
３．山ノ上６号窯 …… 67
４．山ノ上７号窯 …… 69
第４章　総　　括 …… 70
第５章　熱残留磁気測定の結果 …… 81
第１節　山ノ上通山遺跡の窯跡の地磁気年代 …… 81
第２節　花原窯跡群の３基の窯跡の地磁気年代 …… 89

調査関係者一覧

調査を実施するにあたり、郡家町役場総務課をはじめ地元各氏より多大なる協力を賜わった。ここに記して感謝の意を表したい。

調査委託者	郡家町役場総務課	
調査主体	郡家町教育委員会	
	教育長	北村　一利
	教育次長	丸山　勉（平成5年～平成8年度）
	社会教育係長	中川　義隆（平成5年～平成8年度）
	社会教育主事	市村　茂（平成3年～平成4年度）
	社会教育主事	平木　章治（平成4年～平成5年度）
調査指導	鳥取県埋蔵文化財センター	
調査員	中野　知照	
調査補助員	松本　美佐子（平成4年度）	
	上田　昌彦（平成4年～平成6年度）	
	兼田　育子（平成6年度）	
整理作業員	飯田　和代、池谷　徳裕、岡村　弘恵、兼田　育子、木原　美和衣笠　弘美、田村　文子、中野　知亮、羽田　和恵、平井　真一郎、松村　明典、村上　起枝子、森　克之、森本　哲史	
作業協力者	阿部　孝子、阿部　信道、池谷　徳裕、大野　昌之、大野　美佐栄、清水　なみ子、清水　好夫、新竹　忠三、田中　貞子、田中節子、田中　孝子、田中　正明、田渕　美道、中野　知亮、平井真一郎、福本　司、福本　弘江、和田　政子	

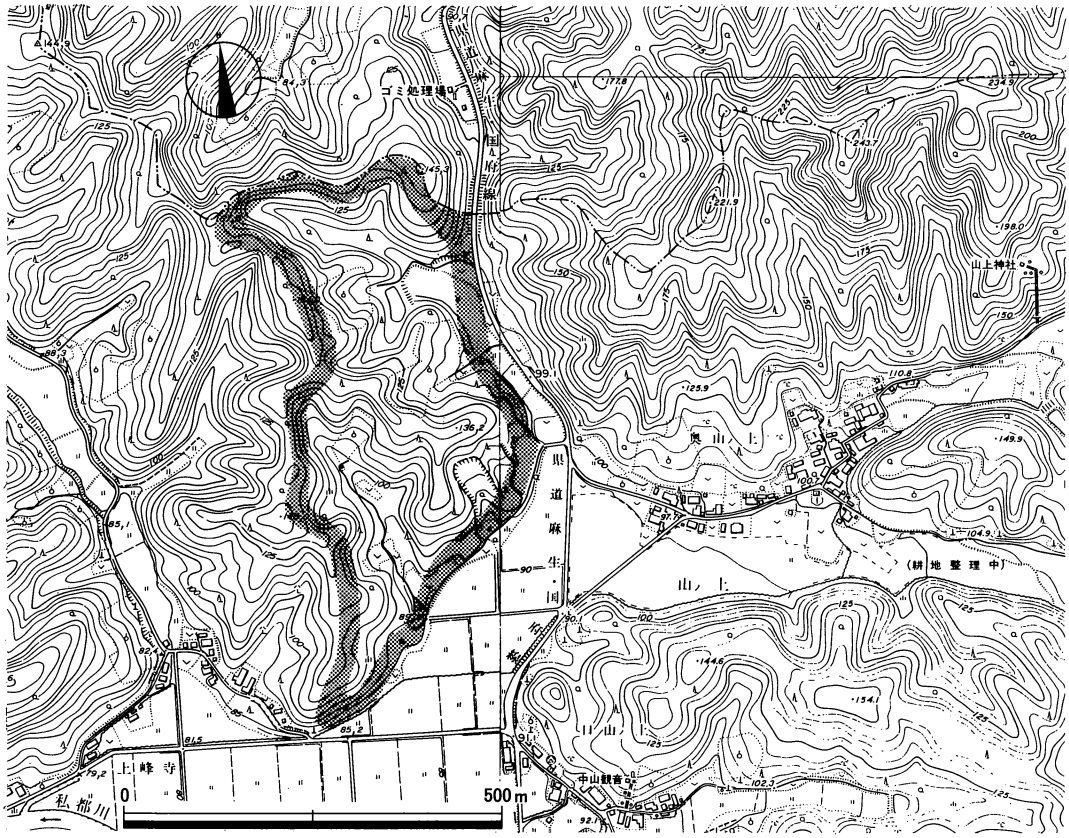
第1章　序　　説

第1節　はじめに

山ノ上通山遺跡が位置する郡家町北部の私都川中流域から下流域は、肥沃な水田地帯が広がっている。この私都川に面した丘陵地には、多くの先人の残した遺跡が点在しているが、近年各種開発事業によって僅かづつその姿を変えつつある。

山ノ上通山遺跡の所在する山ノ上地区に於いても、1985年に町営による工場団地造成の計画が持ちあがった。1986年、第1期工事として丘陵斜面の掘削がなされて工場誘致が行なわれた。第2期工事以降は、その対象が丘陵部に及ぶため、郡家町教育委員会では現地踏査を実施するとともに、関係各機関と協議を行なうこととなった。現地踏査によって、当該地内において古墳及び古墳の存在を予測させる平坦部などを認めるに至った。

関係各機関との協議の結果、先ず当該地内における遺跡の性格や所在を確認するため、試掘調査を実施することとした。この試掘調査によって得られた成果をもとに、再度関係



第1図　山ノ上通山遺跡、工事予定地全体図（網目内）

各機関と協議を重ねた結果、丘陵部においては9基の古墳、丘陵裾部では掘立柱建物跡群の発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、郡家町教育委員会が調査主体となり、郡家町役場総務課の委託を受けて実施した。

調査は、工事施工が急がれる山ノ上27号墳については平成3年度に実施した。現地調査は11月1日より開始し、12月26日に終了した。他の調査区では、平成4年度に丘陵裾部に位置するＪ・Ｋ地区、丘陵部の古墳については平成5年度に発掘調査を実施した。また、平成5年度の古墳の調査中、丘陵斜面において須恵器窯の存在が知られることとなった。この為、随時トレンチ調査を行なったところ4基の窯跡を確認するに至った。このことにより、関係各機関と協議した結果、窯跡の調査は平成6年度に実施することとなった。従って調査は、平成4年4月1日より平成7年3月末日までを現地調査を行ない、平成7年度は整理作業を行なった。報告書作成は平成8年度に行なった。

第2節　山ノ上通山遺跡の位置と歴史地理的環境

位置と環境

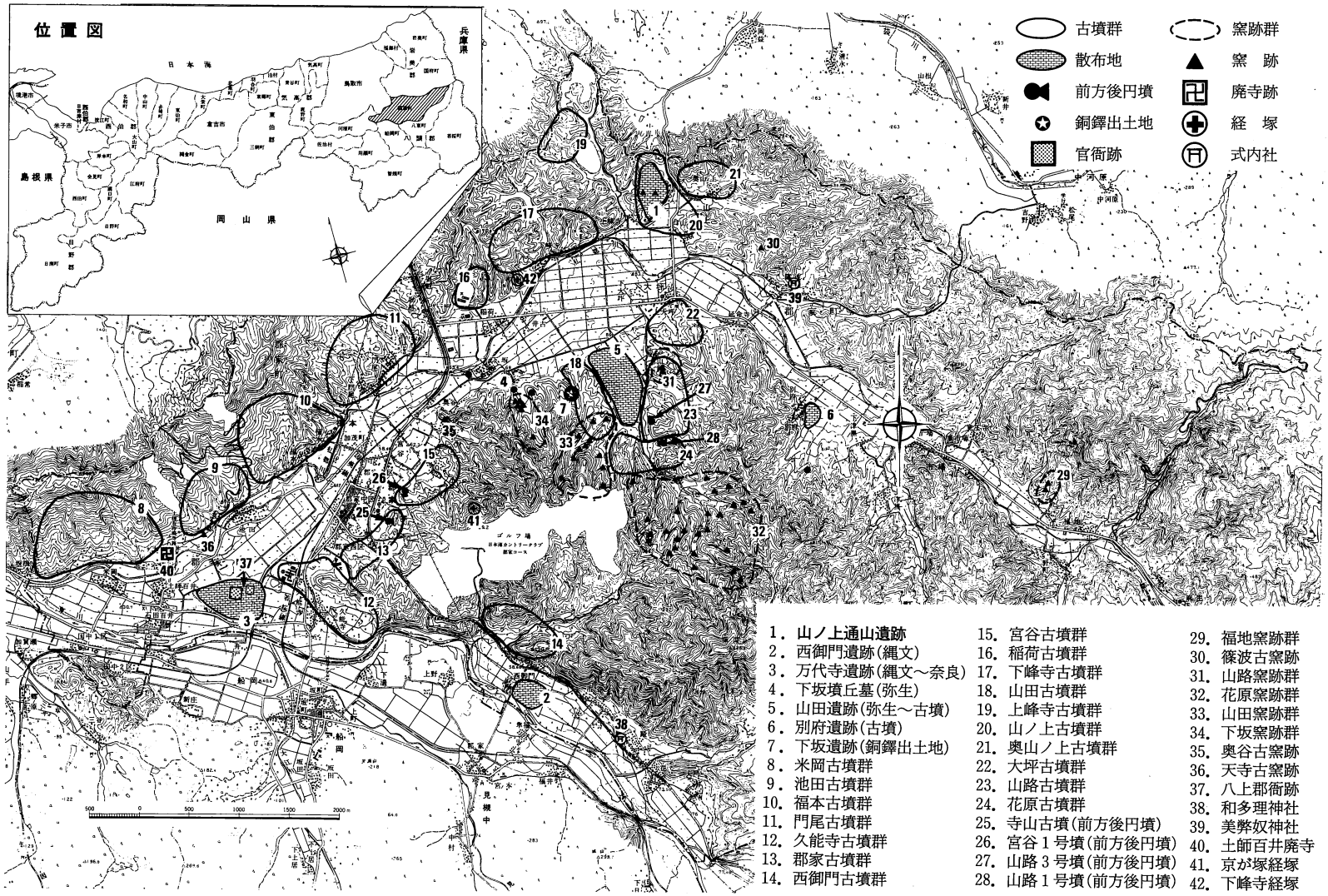
山ノ上通山遺跡は、ＪＲ郡家駅より北東約5㎞に位置し、鳥取県八頭郡郡家町大字口山ノ上字通山に所在する。

郡家町は、鳥取県東部を南北に流下する最大河川の千代川流域に位置し、町内を千代川に流入する八東川と私都川が西流する。北側は鳥取市と国府町に接し、西側は河原町、南側は船岡町と八東町が隣接する。東側には、私都川がその源を発する扇ノ山が位置して県境をなし、兵庫県美方郡美方町が接している。私都川は、扇ノ山に源を発し、一旦南西に下った後、麻生付近で北西に向きを変える。その後、大坪付近で再び南西に流れを変え、霊石山南麓で八東川に合流したのち、千代川に達する。私都川の中流域から下流域にかけて谷平野を形成しているが、山ノ上通山遺跡の南に位置する大坪付近より比較的広い平野が開けている。

山ノ上通山遺跡は、この谷平野が開けてくる地点の北側に展開する丘陵部に位置する。山ノ上通山遺跡は、町界境を東西に延びる丘陵の主稜線より南に分岐し、南側あるいは東側に展開する丘陵上や丘陵斜面・丘陵裾部に古代人の生活の痕跡が営まれている。遺跡の立地する丘陵の東側には、本町より国府町岡益方面へ通じる県道麻生谷線が通っている。また、西側には往古の幹道「京道」が、上峰寺地区より国府町の笑い道（現広西）を経て因幡国府へ通じていた。

歴史的環境

私都川周辺は、水田として利用される農村地帯であるが、近年の各種開発工事等によって大きく変貌しつつある。またこれらに伴う事前調査によって貴重な遺跡が発見・発掘さ



第2図　郡家町内遺跡分布図

れ、八頭郡内でも遺跡の密度の高い地域となっている。

私都川周辺の谷平野縁辺部に、古代人が生活の場を求めた初源は縄文時代に遡る。同時代の遺跡としては、私都川の最下流部と八東川に挟まれた河岸段丘上に立地する万代寺遺跡が在る。また、同遺跡の東方約3㎞の八東川右岸に西御門遺跡が見られる。これらの遺跡では、石斧や深鉢形土器が出土しており、その年代を縄文時代後期に求められている。

弥生時代においては、私都川左岸の中流域から下流域にかけての段丘上に山田遺跡や、弥生時代中期に比定される「六区画袈裟襷文銅鐸」を出土した下坂遺跡が見られる。弥生時代の墳墓としては、この下坂遺跡の西方約0.6㎞の丘陵突端部に弥生時代後期後半の木棺墓群が営まれた下坂墳墓群が所在する。また、私都川下流域に位置する万代寺遺跡に於いても木棺墓群が確認されている。これらの弥生時代の遺跡は、私都川によって形成された段丘上に展開しており、私都川周辺の肥沃な沖積低地に営んだ水田耕作を、生産基盤とした農耕集落の存在が窺われる。

古墳時代以降、私都川流域を中心として遺跡の数は増加するが、下坂墳墓群に代表される弥生時代後期の墓制に続く古墳時代前期の古墳は確認されておらず、山田遺跡で土器の散布が知られるのみである。古墳時代中期になると、私都川下流域右岸の丘陵突端部において、埴輪を囲繞させた径約20m、高さ約3.6mの御建山古墳が出現する。出土した埴輪は、家形・人物・動物などの形象埴輪と、底部調整を施していない円筒埴輪が見られる。これにより、同墳は5世紀末から6世紀初頭にかけて、私都川下流域においての盟主墳といえよう。また、私都川下流域のなかでやや上流側に位置する（通称、私都谷の入り口部分）稲荷古墳群に於いては、出土古墳は不明だが「四神四獣鏡」の倭鏡が出土している。倭鏡は4世紀後半代の特徴をもつが、古墳群の年代は5世紀末から6世紀初頭が考えられており、この時期の有力な氏族集団の存在が、稲荷古墳群周辺にも想定される。

古墳時代後期に入ると、遺跡の数は飛躍的に増加し、私都川・八東川流域に25ヵ所の古墳群が認められ、古墳の総数約500基がしられる。古墳の分布状況は、私都川下流域両岸の丘陵上、特に右岸の霊石山山麓と私都谷入口部分の低丘陵上に集中して見られる。霊石山山麓の米岡・池田・福本・門尾地区に所在する古墳は約210基を数え、町内の古墳総数の41パーセントを占める。また、八東川に面した万代寺・久能寺・西御門・市谷・大門地区では1～27基の小群を形成している。これらの古墳はほとんどが円墳である。町内で確認されている前方後円墳は小型で、郡家3号墳（全長37.5m）・宮谷1号墳（同32m）・山路1号墳（同27m）・山路3号墳（同20m）・大坪4号墳（同24m）の5基が確認されている。このうち、郡家3号墳と宮谷1号墳は、御建山古墳に続く時期の私都川下流域における盟主墳であったと考えられる。

古墳時代後期の古墳の埋葬施設として、横穴式石室があげられる。町内における横穴式

石室は、鳥取県東部の特に千代川以東に通有な、玄室の中央部を一段高く架構する「中高式天井」の構造をもつ古墳が多く見られる。一部に天井の平坦な畿内系横穴式石室も見受けられるもののその数は少ない。また霊石山山麓では、線刻壁画をもつ古墳が見られる。線刻壁画は、石室の側壁や奥壁などに装飾が施されるもので、米岡１号墳では人物・綾杉文・木葉文が見られる。福本４号墳では鳥・弓・綾杉文が描かれている。

近年発掘調査がなされた福本70号墳では、金銅製馬具・金銅製双龍環頭柄頭や青銅製の匙が出土している。福本70号墳は、通称「空山」の南側の山裾に立地するが、北側山麓の鳥取市古郡家でも双龍環頭柄頭の出土が知られている。その他に、この空山を中心として郡家町で２点、鳥取市側でも２点が知られており、この地域に於ける古墳時代終末期の古墳文化の特異性が指摘されよう。また同墳では、青銅製の匙が出土しているが、この匙は現在のところ韓国の武寧王陵出土のものが知られるのみで、国内では初見であり、この地に於ける大陸文化との交流をも裏付ける事実といえよう。

私都川中流域（私都谷）に展開する古墳群は、下流側より稲荷・下坂・山田・花原・山路・大坪・下峰寺・上峰寺・口山ノ上・奥山ノ上・篠波・延命寺の各古墳群の分布が見られる。各古墳群は、２～54基で形成される。この中でも大坪・山路・山田古墳群は30～54基の古墳が密集している。これら３古墳群と、私都川を挟んで北側に位置する口山ノ上・奥山ノ上・上峰寺・下峰寺古墳群でも56基余の古墳が点在している。この両地域は、私都川が南西に流れを変え、谷平野が急に開けてくる要所にあたる。霊石山山麓に位置する古墳群の規模には及ばないが、大坪地区を中心とした地域は私都川中流域に於ける中心地であったといえよう。

古墳時代終末期より奈良時代に入っても依然として古墳の造営は続くが、その中でも有力な氏族集団が建立したと思われる土師百井廃寺がその存在を知られてくる。土師百井廃寺は、白鳳時代後期の法起寺式の伽藍配置を取っていたことが発掘調査によって明らかになっている。また、この時期、私都川中・下流域に面した丘陵裾部から斜面にかけて須恵器窯が築かれてくる。窯跡は、奥谷・下坂・山田・花原・山路・山ノ上・篠波・福地地区に１～30余基の須恵器窯が所在し、これら全てを総称して私都古窯跡群と呼ばれている。土師百井廃寺で使用された瓦や鴟尾と同一形態のものが奥谷窯跡の出土品の中に見られる。この私都古窯跡群の操業時期は、出土遺物の年代観より６世紀代から12世紀初頭まで続くが、その盛期は８～９世紀である。

奈良時代に入ると、私都川最下流部と八東川に挟まれた段丘上において、八上郡衙跡に想定される掘立柱建物跡群が検出された万代寺遺跡遺跡が見られる。建物跡群は東西に分かれる。東側のそれは一辺約99×97.5mを測る溝によって区画され、柵列に囲まれた中に庇付きの正殿と、その両側に脇殿を配置している。西側の建物跡群は、溝によって区画さ

れたと思われるが、西限が不明であり掘立柱建物跡群を検出しているもののその性格等については不明である。同郡衙跡より出土した須恵器杯蓋・壺や円面硯等と同一形態のものが、花原窯跡群の出土品の中に見られることから供給元が知られた。また、隣接する国府町に所在する因幡国府や国分寺・国分尼寺等の出土品の中にも、私都古窯跡群で生産された須恵器と同一形態のものが見られる。

今回、調査がなされた山ノ上通山遺跡で確認された掘立柱建物跡群は、建物の規模やその規格性などから一般集落とは考えられない。むしろ、同遺跡内で確認された窯跡や私都古窯跡群から生産された製品の集荷・搬出などを管掌する官衙的な性格をもつものと考えられる。

第２章　調査の概要

第１節　調査の方針と調査区の設定

本調査に先行して実施した試掘調査において、丘陵部の５地区（Ｂ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｈ地区）において８基の古墳が確認された。丘陵裾部のＪ・Ｋ地区においては掘立柱建物跡の存在を示すピット群の検出を見た。このうち、Ｆ地区の山ノ上31号墳は造成工事予定地の範囲外に位置するため、調査の対象外とした。この試掘調査の結果は以下の通りである。

Ａ地区…遺構は検出されなかった。

Ｂ地区…木棺墓を埋葬主体とする古墳を確認した。

Ｃ地区…遺構は検出されなかった。

Ｄ地区…広い尾根上に３～４基の古墳の存在を確認した。

Ｅ地区…尾根先端部の２ケ所の平坦部において古墳の存在を確認した。

Ｆ地区…尾根上に古墳状の高まりを確認した。

Ｇ地区…遺構は検出されなかった。

Ｈ地区…北東に延びる尾根上に古墳の存在を確認した。

Ｉ地区…丘陵頂部に、住居跡が存在すると思われるが遺構は確認されなかった。

Ｊ地区…掘立柱建物跡に伴うピット群を確認した。

Ｋ地区…掘立柱建物跡に伴うピット群を確認した。

以上の試掘調査の成果を元に、工場団地造成工事によって破壊される丘陵部（Ｂ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｈ地区）と丘陵裾部（Ｊ・Ｋ地区）が調査の対象となった。調査を開始するにあたり、以下の調査方針を考え実施することとした。

〈古墳の調査〉

i　個々の古墳の調査にあたっては、古墳築造に関する全面積を対象とする。

ii　古墳築造に伴う地山整形は全面にわたって調査し、墳丘盛土は全て除去、もしくは断割りによる断面観察を行なう。

iii　古墳築造に伴う各種の遺構の存在を考慮し、最大限広範囲を調査する。

〈丘陵裾部の調査〉

i　当該調査区の平坦部は、最大限広範囲を対象とする。

ii　畑地の耕作・造成が行なわれているため、遺構の前後関係の判定が困難であることを考慮し、ピット埋土の色別による建物跡の確定が必要である。

等であった。また、D・E・F・H・J・K地区においては、国土座標を基準とした調査グリッドの設定を行った。B地区は、造成工事施行が急がれたために行いえていない。D地区では、丘陵の尾根上全面に5m方眼のグリッドを設定し、E・F・H地区においては尾根の軸線とそれに直行する方向杭を、可能なかぎり5m単位で杭打ちを行なった。J・K地区では、谷部あるいは山裾部にあるため、山裾ラインを基準として5m方眼のグリッドを平坦面のほぼ全面に設定した。

古墳の調査では、盛土の遺存していたのは15・16・28・30号墳のみであったが、各古墳の立地と排出する土量の関係上盛土除去は行なわず、断面観察のみとした。
また、JK地区においても排土処理の為、平坦面の全面調査は行なえなかった。

第2節　古墳の名称

山ノ上通山遺跡内に所在する古墳は、山ノ上古墳群に所属している。山ノ上古墳群は、従来一般県道麻生国府線を挟んで東西の丘陵に所在する古墳を合わせて、一つの古墳群として扱ってきた。しかしながら、東西の丘陵における古墳の有り様はそれぞれに特徴があるように思われる。従って、本来ならば別の古墳群の単位として取り扱うべきであるが、今後の混乱をさけるため、今回の調査では便宜的に山ノ上古墳群（西群）とした。

古墳群は、町境を西に延びる丘陵より開析されて分枝した低丘陵の尾根から山裾にかけて分布している。その在り方は、1ケ所に集中することなく、2～4基がひとまとまりとなって尾根上と山裾部に散在していた。このため2～4基が所在する小尾根を古墳群形成の小単位と考えた。また未発見の古墳の出現があっても混乱がないように、それぞれ北よりⅠ支群～Ⅳ支群の呼称を与えた。調査が進行する過程で、新たに4基の古墳を確認したため、古墳番号に統一性が見られない結果となってしまった。支群構成は、以下の通りである。

Ⅰ支群…Ｂ地区（山ノ上27号墳）

Ⅱ支群…Ｄ地区（山ノ上15・16・17・18・25・32号墳）

Ｅ地区（山ノ上28・29号墳）

Ｆ地区（山ノ上30・31号墳）

Ⅲ支群…Ｇ・Ｈ地区（山ノ上19・20・21・22・23・24・26号墳）

Ⅳ支群…Ｋ地区（山ノ上33・34号墳）

第３節　調査の概要

調査は、平成３年度より平成６年度までの４ケ年間にわたって実施した。調査した古墳は12基、掘立柱建物跡10棟、窯状遺構（炭窯）５基、須恵器窯２基であった。以下に、調査の成果を調査年度ごとに概略を述べることとする。

〈平成３年度〉

27号墳　木棺墓を中心主体とする円墳である。土坑より土師器甕の出土を見た。

〈平成４年度〉

Ｊ地区　Ｈ地区とＩ地区に挟まれた谷部に位置する。掘立柱建物跡９棟、柵列７基、溝状遺構９基を検出し、丘陵斜面下端部で登り窯状遺構（炭窯）１基を確認した。出土遺物は、須恵器・土師器・石製品・鉄斧等が見られた。

Ｋ地区　Ｉ地区の南側山裾部に位置する。畑地及び造成による攪乱・削平を受けているため、遺構の残存状態は良好ではなかったが、掘立柱建物跡１棟以上、柵列、古墳周溝などを検出した。また、平坦面より丘陵斜面へ移行する山裾部において、横口をもつ窯状遺構（炭窯）２基を検出した。出土遺物は須恵器・土師器・石製品等が見られた。

〈平成５年度〉

15号墳　木棺墓を中心主体とする円墳で、墓壙上面に供献土器が見られた。木棺墓内からは鉄刀１のみ出土した。周溝内より土師器甕・須恵器瓿の出土を見た。墳丘盛土中及び旧表土中において、黒曜石・チャートの細片等とともにサヌカイト製の石鏃が確認された。

16号墳　木棺墓を中心主体とする円墳である。第１主体の棺底より約200個のガラス小玉を検出した。周溝内より土師器椀・須恵器瓿口縁部片の出土を見た。

25号墳　墳丘の大半を削り取られた円墳である。周溝のみの検出で、周溝底部より土師器甕片の出土を見た。また、周溝の東側より北側にのびる道状遺構を確認した。

32号墳　Ｄ地区の北端部に位置する円墳である。墳丘の上半は削平を受けており、埋葬施設は確認できなかった。しかしながら、周溝内には良好な状態で遺物が遺存していた。即ち、須恵器杯身・杯蓋・壺等と共に樽型瓹が破砕された状態で出土した。

28号墳　Ｅ地区の尾根上に位置する円墳で、箱式石棺を埋葬主体とする。東側の墳裾部で須恵器窯を破壊して墳丘を構築していた。

29号墳　28号墳の南側に位置する。墳形は不明で、半円形状のテラスを設けている。テラス部の中央やや西寄りに集石遺構が見られたが、下部構造は石列が検出されたのみで、埋葬施設は確認できなかった。

30号墳　Ｆ地区の尾根上に位置する。墳丘盛土はその大半が流失しており、埋葬施設の確認には至っていない。墳丘盛土中より須恵器片の出土を見た。墳形は円墳と思われる。

24号墳　Ｈ地区の尾根突端部に位置する円形墳である。木棺墓を中心主体とする。

26号墳　Ｈ地区の尾根の基部に位置する。古墳の大半が調査区域外にあり、墳形は不明である。基部より北側に張り出し部分において、木棺墓を検出した。

〈平成６年度〉

４号窯　Ｌ地区に所在し、山ノ上28号墳の東側墳裾部に位置する。全長約12m、窯体最大幅約1.5mを測る地下式登り窯である。28号墳造営に際し破壊を受けており、窯体のほぼ中央部の埋土中に埋葬施設が作られていた。埋葬施設内からは、須恵器杯蓋・高杯・壺・把手付碗・耳環などの供献遺物が見られ、棺底は木炭の細片が敷き詰められていた。窯体内及び灰原より出土した遺物は、須恵器杯身・杯蓋・高杯・大型甕・提瓶・横瓶などが見られた。また、窯体の特徴として、窯尻より連続する送風溝が右側に作られていた。

５号窯　Ｍ地区に所在する全長約８ｍの比較的小型の半地下式の窖窯である。４号窯と同様に、窯体の右側に送風溝を有していたと思われる。窯体内に遺存していた遺物は少なく、また灰原の規模も比較的小さい為・操業回数としても１～２回程度と思われる。出土した遺物は、４号窯と様相を異にし須恵器杯身・杯蓋・壺蓋・提瓶・高杯・横瓶・大型高杯・大型杯蓋・大型甕などが見られ器種の多様性が見られた。

６号窯　Ｌ地区に所在し、４号窯の東側に隣接して位置する。所謂「八ツ目窯」と呼ばれる窯状遺構（炭窯）で、窯体は地下式である。窯体の一部は樹根によって破壊を受けているが、ほぼ完存していた。焚口部及び作業面に堆積した炭・灰は少ない。６号窯が廃絶し埋没した段階で、４号窯の排水溝が作られてい

た。

7号窯　M地区に所在し、5号窯の南東の山裾部に位置する。窯体は地下式で、丘陵斜面に斜行して築かれていた。試掘調査の段階で窯体の一部を破壊したが、ほぼ完存していた。窯体の横口の一部に、閉塞状態で石材・焼土等の充塡が見られたため、規模の縮小や操業時期の異なることも考えられる。

第3章　調査の記録

第1節　平成2年度の調査

平成2年度は、山ノ上古墳群（西群）の最も北側に位置する山ノ上27号墳の調査を行なった。町境を東西に延びる丘陵より、南に分枝した稜線から東側に突出した尾根の先端部に、山ノ上27号墳は位置する。

1．山ノ上27号墳（第4～10図、図版2～4）

1）　位置と現状

本墳は、丘陵尾根上の先端部に立地し、標高117m付近で若干の平坦面が認められたため古墳の存在が予測された。墳丘の東側基底部で標高116mを測る。墳丘の西側では、尾根の軸線に直交して馬蹄形をなす周溝が掘り込まれていた。

2）　墳　丘

墳丘は、尾根軸線に直交して設けられた溝と、それに連続した浅い周溝によって区画されている。この浅い溝は、墳丘の北側にのみ見られ、南側では検出されなかった。墳丘には、若干の盛土が施されたものと思われるが、現状を観察するかぎりその大半は既に流失していた。このことは、墳丘築成が、若干の盛土と地山整形によることを示唆するものと考えられる。

周溝は、墳丘の西側と北側の一部に見られた。西側に見られる周溝は、丘陵の尾根を断ち切るように直交して馬蹄形状の堀割りをなす。尾根軸線上の最大幅で約2.0mを測る。周溝底部の幅は約0.2～0.25mである。墳丘の北側には、西側の馬蹄形状の周溝から連続する浅い溝が残存していた。この浅い溝の北側の周溝肩部は、丘陵の斜面部にあることで検出されなかったものと思われる。この溝は約0.35～0.4mの幅で墳丘を巡っており、墳丘基底部をなすと考えられる。

墳丘の裾線は、南側では墳丘斜面が流失しているために不明だが、北側および東側に残る浅い溝が墳丘基底部とみてよい。これにより、墳丘の中心部より西側の周溝まで約4.4m、

北側の墳丘基底部まで約3.9mを測ることから、山ノ上27号墳は径８～９ｍの円墳であることが判明した。

３）　埋葬施設

本墳の埋葬施設は、墳丘中央部に地山面に掘り込まれて作られた木棺墓である。木棺墓は、墳丘中央とその東隣の２基が検出された。この２基の木棺墓は、地山面を掘り込んで二段掘りの隅丸長方形の墓壙を作り、その中心部に木棺を埋置していた。

第１主体　墳丘中央に位置する埋葬施設で、主軸はＮ－20°－Ｅを測る。墓壙掘り方は、長辺2.5m、短辺1.3m、深さ0.4mを測る土坑の中央に、内法長2.2m、幅0.56mの箱形木棺を埋置したものと思われる。土坑内には、西側の長側辺に幅約0.35m、東側に於いても幅約0.1mのテラスが設けられている。このテラスは、南北の小口側の一部にも認められる。棺底は、長辺1.95m、幅0.47mを測り、東側には長側板を安定化させるための溝が一部に残存していた。

第２主体　第１主体の東側に位置する埋葬施設で、主軸はＮ－20°－Ｅを測る。墓壙掘り方はやや不整な隅丸長方形をなし、長辺2.4m、短辺1.45m、深さ0.57mを測る。土坑内のやや西側に内法長1.93m、幅約0.65mを測る箱形木棺を埋置したものと思われる。土坑の北側には、墓壙底に「Ｕ」字形の掘り込みが見られた。この掘り込みは、木棺の小口板に細長い板を組合せて「Ｕ」字形に設置したことが考えられる。

土　坑　第１主体の西側に位置する。長径0.68m、短径0.5m、深さ0.25mを測るやや楕円形の土坑で、土師器壺の体部が半載された状態で遺存していた。この土坑の性格としては埋葬施設とは考えにくく、ここでは一応土器埋納坑としておきたい。

４）　出土遺物

本墳で出土した遺物は、土器埋納坑より土師器壺の１点のみが見られた。壺（１）は、口縁部と体部下半を欠く。胴部最大径24.5cm、残存高9.9cmを測る。球形の体部をなし、丸みを帯びた肩部より外反気味の口縁部へ続く。体部内面は、半時計回りでヘラケズリを行ない、外面は不整方向のハケメを施す。肩部上半より頸部にかけてはヨコナデを施す。胎土は、砂粒を多く含み、焼成は甘い。体部外面は淡赤褐色、内面は赤橙色を呈する。　この壺は、その特徴からみて鳥取市「岩吉遺跡」土器編年に見るⅦ期古段階～Ⅷ期新段階と併行関係にあると考えられ、布留出現併行時期よりやや後出するものである。概ね、古墳時代中期前半より中頃の所産と考えられる。

第２節　平成３年度の調査

平成３年度は、丘陵裾部に位置するＪ地区、Ｋ地区の調査を行なった。両地区とも、試掘調査において掘立柱建物跡の柱穴と思われるピット列が検出されていた。Ｊ・Ｋ地区は、その立地と調査区が制限されていたため一部で未調査部分が生じている。

１．Ｊ地区（第11～31図、第１～12表、図版５・６・８・51・52）

１）位置と現状

Ｊ地区は、Ｈ地区とＩ地区とに挟まれた丘陵裾部の小さな谷部分に位置する。この谷部分は、北東方向に開析している。調査前は畑地として耕作されており、調査地全体に三段の畑地が展開していた。調査の結果、畑地の崖部分は客土に依るものであることが判明した。この客土部分は、丘陵の山裾部分を削り取り構築したものであった。従って、遺構面への影響は余り無いものと思われた。

２）検出した遺構

調査の結果、掘立柱建物跡９棟、柵列７基、溝状遺構10基、窯状遺構（炭窯）１基、焼土坑及び多数の柱穴状ピットを検出した。掘立柱建物跡及び柵列・溝状遺構は、調査区中央部と東側の斜面下位に集中して見られ、これらに伴うものと考えられる多数の柱穴状ピットが検出された。溝状遺構は、掘立柱建物跡と共有関係にあると考えられ、建物跡に平行して確認された。調査区中央部分で見られた溝状遺構は、地山を混入させた盛土・整地層で被覆され、その後さらに掘立柱建物が作られていた。また溝状遺構の埋土は、その堆積状況に先後関係が見られないことから、それぞれ余り時を隔てることなく作り替えられたものと思われる。

Ｊ地区で検出した各遺構は、その長軸方位を概ねＮ－17.5°～23°－Ｗの範囲に納まるように作られていることが確認された。また、調査区の東側において焼土・炭片を含んだ焼土坑も確認され、これに先行する溝状遺構の存在も知られた。この焼土坑より須恵器高杯・杯身等が出土し、おおむね須恵器編年第II型式第４段階の特徴を有している。調査区中央部の南端部分では、全長約４ｍを測る横口をもたない窯状遺構が確認された。この窯跡は、所謂「炭窯」と呼ばれているもので熱残留磁気年代としてＡ．Ｄ640年±15年の測定結果が知られた。調査区中央部では、溝状遺構を被覆している盛土中及び盛土に先行する柱穴状ピットの一部から、陶邑編年第IV型式第１段階の特徴を有する須恵器壺の出土を見た。以下、検出した各遺構について述べることとする。

［柵列状遺構］

ＳＡ－０１（第13図、図版５）

位　置　調査区東側に位置し、ＳＢ－０３の西側の桁行に沿うように並ぶ。ＳＢ－０３に付属する柵列の可能性がある。

形　態　ＳＢ－０３とほぼ主軸が同じでＮ－16°－Ｗをとる。各柱穴間距離は、Ｐ１より2.13・2.1・2.12・1.85・2.25・2.3・2.3・2.25mで全長は約17.2mを測る。

柱　穴　各柱穴の規模は、Ｐ１（50×45×33）・Ｐ２（53×52×30）・Ｐ３（48×47×25）・Ｐ４（65×60×13）・Ｐ５（45×57×20）・Ｐ６（70×65×35）・Ｐ７（60×65×40）・Ｐ８（70×57×15）・Ｐ９（65×60×40）cmを測る。

土　層　Ｐ１・２は褐灰色粘質土、Ｐ３～６は灰褐色粘質土、Ｐ７～９は暗褐色粘質土を埋土とする。

遺　物　須恵器高台付杯、つまみ付杯蓋、布目土器（製塩土器）の出土を見た。

時　期　出土した遺物の特徴からみて８世紀代と推定される。

ＳＡ－０２（第13図、図版５）

位　置　調査区中央部の北側に位置し、ＳＡ－０４の東側に隣接する。

形　態　主軸はＮ－16°－Ｗをとる。各柱穴間距離は、Ｐ１より1.9・1.42・1.68mで全長は約５ｍを測る。

柱　穴　各柱穴の規模は、Ｐ１（65×56×18）・Ｐ２（44×40×10）・Ｐ３（42×40×30）・Ｐ４（52×50×24）cmを測る。

土　層　暗褐色粘質土を埋土とする。

遺　物　検出しなかった。

時　期　ＳＢ－０８と併行する時期が考えられる。

ＳＡ－０３（第13図、図版５）

位　置　調査区中央部の南側に位置する。ＳＤ－０１の東側に平行して作られている。

形　態　主軸はＮ－16°－Ｗをとる。各柱穴間距離は、Ｐ１より2.22・2.2・2.2・1.94・1.9mで全長は約10.5mを測る。

柱　穴　各柱穴の規模は、Ｐ１（80×90×73）・Ｐ２（134×64×45）・Ｐ３（70×70×30）・Ｐ４（72×70×45）・Ｐ５（48×65×67）・Ｐ６（47×50×38）cmを測る。

土　層　灰褐色粘質土を主体とした埋土であった。

遺　物　Ｐ３より回転糸切り底の須恵器杯身が出土している。

時　期　ＳＡ－０１と併行する時期と思われる。

ＳＡ－０４（第13図、図版５）

位　置　調査区中央部の北側、ＳＢ－０７の東側に隣接して位置する。ＳＤ－０４とは一

体のものと思われる。

形　態　主軸はN－14°－Wをとる。各柱穴間距離は、Ｐ１より2.08・1.94mで全長約４mを測る。

柱　穴　各柱穴の規模は、Ｐ１（45×45×26）・Ｐ２（60×50×54）・Ｐ３（90×62×36）cmを測る。

土　層　暗褐色粘質土を埋土とする。

遺　物　検出されなかった。

時　期　ＳＢ－０７と併行する時期が考えられる。

ＳＡ－０５（第13図、図版５）

位　置　調査区中央部のやや北側に位置し、ＳＡ－０４の東側に隣接する。

形　態　主軸はN－10°－Wをとる。柱穴列の北端より東側に折れ曲がる。各柱穴間距離は、Ｐ１より1.34・1.65・1.6・1.62・1.85mを測り、全長は約6.25mである。

柱　穴　各柱穴の規模は、Ｐ１（18×18×18）・Ｐ２（40×35×25）・Ｐ３（58×60×41）・Ｐ４（48×52×45）・Ｐ５（52×52×41）・Ｐ６（50×50×38）cmを測る。

土　層　暗褐色粘質土を埋土とする。

遺　物　検出されなかった。

時　期　不明。

ＳＡ－０６（第13図、図版５）

位　置　調査区中央部に位置する。ＳＤ－０１の西側に隣接する。

形　態　主軸はN－13°－Wをとる。各柱穴間距離は、Ｐ１より1.84・1.8・1.64・1.67mを測り、全長は約6.9mである。

柱　穴　各柱穴の規模は、Ｐ１（38×40×21）・Ｐ２（48×63×23）・Ｐ３（45×39×25）・Ｐ４（45×47×29）・Ｐ５（44×41×47）cmを測る。

土　層　灰褐色粘質土を埋土とする。

遺　物　Ｐ３より須恵器高台付杯を出土している。

時　期　ＳＢ－０５と併行する時期が考えられる。

ＳＡ－０７（第13図、図版５）

位　置　調査区中央部に位置し、ＳＤ－０５の西側に隣接する。

形　態　主軸はN－18°－Wをとる。各柱穴間距離は、Ｐ１より1.57・2.48・1.75mを測り、全長は約 5.8mである。

柱　穴　各柱穴の規模は、Ｐ１（58×56×39）・Ｐ２（48×50×30）・Ｐ３（45×45×48）・Ｐ４（59×55×43）cmを測る。

土　層　灰褐色粘質土を埋土とする。

遺　物　特に遺物の検出はなかった。

時　期　ＳＤ－０５と併行する時期と思われる。

［掘立柱建物跡］

ＳＢ－０１（第14図、図版５）

位　置　調査区東端の南側に位置する。ＳＤ－１０の東側にＳＢ－０２と対をなして建てられていた。谷部の出口部分にあたり、比較的平坦地に立地する。

形　態　梁行３間（4.26m）、桁行３間（5.94m）の建物である。各柱穴間距離は、Ｐ１より1.4・1.35・1.5・1.9・2.1・1.44・1.53・1.35・1.38・1.93・2.16・1.85mを測る。床面積25.2m²。主軸方位は、Ｎ－14°－Ｗである。

柱　穴　柱穴は10個で、Ｐ10は調査区外に当たる。各柱穴の規模は、Ｐ１（80×68×34）・Ｐ２（50×50×32）・Ｐ３（60×56×40）・Ｐ４（82×74×45）・Ｐ５（70×60×65）・Ｐ６（80×66×72）・Ｐ７（78×60×70）・Ｐ８（80×70×30）・Ｐ９（52×40×20）・Ｐ11（53×46×30）・Ｐ12（52×52×25）cmである。これら柱穴のうち、Ｐ１・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ11は二段掘りに掘られておりＰ１の規模によって柱の直径が窺い知られる。即ち、二段目の柱穴の規模16～18cmが柱の直径だと思われる。各柱穴間も比較的揃っており、規格性のある建物である。

土　層　灰褐色粘質土を柱穴の埋土としている。

遺　物　Ｐ６より、立上りを有する須恵器杯身の出土を見た。

時　期　遺物より７世紀初頭のものと思われる。

ＳＢ－０２（第15図、図版５）

位　置　調査区東端の中央部に位置する。ＳＢ－０１の北側に立地する。建物跡の東側半分は、調査区域外に有り詳細は不明である。

形　態　梁行２間（4.56m）、桁行３間（6.42m）の建物と思われる。各柱穴間距離は、Ｐ１より2.28・2.2・2.2・2.1mを測る。床面積29.3m²。主軸方位は、Ｎ－15.5°－Ｗである。建物は、棟持ち柱を有する掘立柱建物跡である。

柱　穴　柱穴は５個を確認した。各柱穴の規模は、Ｐ１（50×50×43）・Ｐ２（85×64×64）・Ｐ３（64×50×42）・Ｐ４（55×51×46）・Ｐ５（65×60×52）cmで、Ｐ４・Ｐ５は二段掘りの柱穴である。柱の太さは、柱穴の規模から推定して約16～18cmが考えられる。

土　層　柱穴の埋土は、黒褐色粘質土・暗褐色粘質土・黄橙色粘質土が見られた。

遺　物　時期を特定する遺物の出土は見られなかった。

時　期　ＳＢ－０１併行時期と思われる。

ＳＢ－０３（第16図、図版５）

位　置　調査区の東側に位置する。西側にはＳＡ－０１が隣接する。

形　態　梁行２間（3.82m）、桁行６間（12.6m）の総柱建物である。各柱穴間は、Ｐ１より2.2・1.85・1.96・2.07・2.37・2.26・2.02・1.94・2.02・2.38・2.04・2.02・1.85・2.12・1.81・2.0・2.11・1.86・1.99・2.08・2.38・2.16mを測る。床面積48.1m²。主軸方位は、Ｎ－16°－Ｗである。

柱　穴　柱穴は21個で、Ｐ１・Ｐ16は二段掘りである。各柱穴の規模は、Ｐ１（38×32×40）・Ｐ２（88×80×35）・Ｐ３（56×48×48）・Ｐ４（64×62×37）・Ｐ５（78×76×54）・Ｐ６（42×32×15）・Ｐ７（38×27×12）・Ｐ８（60×53×37）・Ｐ９（47×42×30）・Ｐ10（43×39×18）・Ｐ11（60×48×57）・Ｐ12（75×60×57）・Ｐ13（68×58×24）・Ｐ14（45×40×41）・Ｐ15（42×40×25）・Ｐ16（48×46×26）・Ｐ17（80×60×22）・Ｐ18（60×50×28）・Ｐ19（40×35×18）・Ｐ20（30×28×18）・Ｐ21（68×63×40）cmである。柱は、直径約18cm程と思われる。

土　層　灰褐色粘質土を柱穴の埋土とする。

遺　物　柱穴内より須恵器杯身・高台付杯・つまみ付蓋・土師器甕等の出土が見られた。

時　期　遺物より７世紀後半代～８世紀前半代のものと考えられ、ＳＡ－０１と併行関係にあると思われる。

ＳＢ－０４（第17図、図版５）

位　置　調査区中央部の南側に位置する。

形　態　梁行２間（4.25m）、桁行５間（9.8m）である。各柱穴間は、Ｐ１より2.1・1.7・2.0・2.2・1.8・2.13・(2.0)・(1.8)・(1.9)・2.0・1.9・2.12・2.1・2.14mを測る。床面積41.7m²。主軸方位は、Ｎ－14°－Ｗである。

柱　穴　柱穴は12個で、Ｐ８・Ｐ９を欠く。各柱穴の規模は、Ｐ１（78×72×62）・Ｐ２（70×63×54）・Ｐ３（98×73×53）・Ｐ４（90×76×54）・Ｐ５（56×52×44）・Ｐ６（60×55×44）・Ｐ７（50×46×12）・Ｐ10（66×62×24）・Ｐ11（40×37×14）・Ｐ12（54×52×24）・Ｐ13（70×68×18）・Ｐ14（50×46×15）cmである。Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５・Ｐ６は二段掘りの柱穴で、推定される柱の太さは約16～20cmを測る。

土　層　柱穴の埋土は灰褐色粘質土・褐灰色粘質土が見られた。

遺　物　須恵器高台付杯・布目土器（製塩土器）の出土が見られた。

時　期　遺物より８世紀代のものと思われる。

ＳＢ－０５（第18図、図版５）

位　置　調査区中央部の南端に位置する。建物の西側でＳＤ－０１に隣接する。

形　態　梁行３間（4.2m）、桁行３間（5.85m）である。各柱穴間は、Ｐ１より1.42・1.

42・1.59・2.01・1.82・2.02・1.4・1.42・(1.4)・(2.02)・(1.79)・2.02mを測る。床面積24.6m²。主軸方位は、N－14.5° －Wである。

柱　穴　柱穴は10個で、P10・P11を欠く。各柱穴の規模は、P１(72×68×32)・P２(38×36×26)・P３(42×38×64)・P４(80×80×40)・P５(55×50×30)・P６(48×45×34)・P７(62×50×30)・P８(68×65×42)・P９(43×40×17)・P12(67×56×22)cmである。P４・P６・P７は二段掘りの柱穴で、推定される柱は約16～18cmを測る。

土　層　柱穴の埋土は、暗褐色粘質土・灰褐色粘質土が主体となる。

遺　物　P８に先行する柱穴より回転糸切り底の杯身の出土を見ている。

時　期　SD－０１併行時期と考えられる。

SB－０６（第19図、図版５）

位　置　調査区の中央部に位置し、西側にはSD－０２が隣接する。

形　態　梁行３間（5.96～6.44m）、桁行３間（6.65～6.8m）である。各柱穴間は、P１より2.38・2.42・2.02・1.95・2.02・2.0・2.0・2.19・2.44・2.29・2.47・1.68mを測る。床面積約40m²。主軸方位は、N－76° －Eを測り斜面に直交して建てられている。

柱　穴　柱穴は12個である。各柱穴の規模は、P１(53×53×24)・P２(43×38×32)・P３(68×55×29)・P４(68×66×67)・P５(70×65×38)・P６(65×62×24)・P７(60×56×24)・P８(58×50×18)・P９(70×63×30)・P10(88×65×50)・P11(60×58×32)・P12(58×43×22)cmである。P２・P５・P６・P９～P12は二段掘りの柱穴であった。推定される柱の太さは、約10～20cmと幅が見られる。

土　層　柱穴には、灰褐色粘質土を埋土とし一部に焼土を混入したものも見られた。

遺　物　須恵器高台付杯の出土を見た。

時　期　遺物より８世紀後半代が考えられる。

SB－０７（第20図、図版５）

位　置　調査区中央部の北側に位置する。東側にSD－０４・SA－０３があり、西側にはSD－０３が隣接する。

形　態　梁行３間（5.52～5.68m）、桁行４間（7.6～8.05m）である。各柱穴間は、P１より1.6・4.1・2/02・1.8・2.0・1.78・2.02・1.6・1.9・1.98・2.0・2.0・2.05mを測る。床面積43.2m²。主軸方位は、N－13.5° －Wである。

柱　穴　柱穴は13個でP３を欠く。各柱穴の規模は、P１(42×36×25)・P２(82×75×40)・P４(67×60×42)・P５(76×72×58)・P６(74×70×50)・P７(92×

74×59)・P 8 (90×80×44)・P 9 (78×70×37)・P10 (66×60×48)・P11 (83×68×40)・P12 (85×75×27)・P13 (110×95×45) cmである。P 4～P 6・P 8・P12・P13は二段掘りの柱穴である。この柱穴の規模から推定される柱は、約10～20cmの太さが想定される。

土　層　暗褐色粘質土を柱穴の埋土としている。

遺　物　P 7より須恵器甕の出土を見た。

時　期　遺物より8世紀末～9世紀初頭が考えられる。

SB－08（第21図、図版5）

位　置　調査区中央部の北側に位置し、SB－07と重複して立地する。

形　態　梁行2間（4.1m）、桁行3間（5.92m）である。各柱穴間は、P 1より2.07・1.74・2.22・2.05・1.95・2.22・1.74・1.95・2.0・2.1mを測る。床面積24.3m²。主軸方位は、N－72°－Eである。建物は主軸方向を、斜面に直交して建てられている。

柱　穴　柱穴は10個である。各柱穴の規模は、P 1 (110×95×45)・P 2 (55×54×20)・P 3 (34×33×24)・P 4 (64×52×57)・P 5 (58×50×58)・P 6 (58×42×51)・P 7 (76×74×46)・P 8 (48×46×20)・P 9 (84×70×57)・P10 (86×76×30) cmである。P 1・P 4・P 5・P 9は二段掘りの柱穴で、想定される柱は約10～20cmの直径を保っていたと考えられる。

土　層　柱穴の埋土は、暗褐色粘質土である。

遺　物　時期を特定する遺物の出土は見られなかった。

時　期　SB－06と併行すると思われる。

SB－09（第22図、図版5）

位　置　調査区の西端に位置する。SB－09の北側は、未調査であるが遺構の広がりは十分に考えられる。

形　態　梁行2間（3.98m）、桁行3間（5.84m）である。各柱穴間は、P 1より1.86・2.12・1.91・1.95・1.93・2.01・1.97・1/67・2.04・2.14mを測る。床面積23.2m²。主軸方位は、N－10°－Wである。

柱　穴　柱穴は10個である。各柱穴の規模は、P 1 (61×54×41)・P 2 (55×46×51)・P 3 (78×62×60)・P 4 (36×26×10)・P 5 (78×68×25)・P 6 (67×60×42)・P 7 (46×38×27)・P 8 (74×60×45)・P 9 (50×50×26)・P10 (56×52×25) cmである。P 1～P 3・P 5・P10は二段掘りの柱穴で、P 2の土層断面観察により柱の直径は約14cmと推定される。

土　層　柱穴には、褐色系の粘質土を埋土としている。

遺　物　時期を特定する遺物の出土は見られなかった。

時　期　建物の規模からみて、ＳＢ－０８に併行する時期が考えられる。

［溝状遺構］

ＳＤ－０１（第12図、図版５）

位　置　調査区中央部から南側に位置する。

形　態　直線状に作られた溝で、南端部分で東へ屈曲する。主軸方位は、Ｎ－14°－Ｗである。

規　模　全長約16m、最大幅約100cm、深さ約10～28cmを測る。

遺　物　須恵器高台付杯・壺・皿（糸切り底）・土師器鉢等の出土をみた。

時　期　溝の占有する位置と、周囲の建物の配置及び出土遺物より８世紀前半～中頃の時期が考えられ、ＳＢ－０４と併行関係にあると思われる。

ＳＤ－０２（第12図、図版５）

位　置　調査区中央部の西側に位置する。

形　態　「コ」字状に作られた溝で、両端部分が東側に屈曲する。主軸方位は、Ｎ－18°－Ｗである。

規　模　全長約9.7m、最大幅約80cm、深さ約8cmを測る。

時　期　溝の位置からみてＳＢ－０６併行時期と考えられる。

ＳＤ－０３（第12図、図版５）

位　置　調査区中央部北端の西側に位置する。

形　態　「Ｌ」字状に残存していた溝で、ＳＢ－０７のＰ７付近で東向きに屈曲する。主軸方位は、Ｎ－12°－Ｗである。

規　模　全長約５m、最大幅約55cm、深さ約10cmを測る。

時　期　ＳＢ－０７及びＳＢ－０８併行時期と考えられる。

ＳＤ－０４（第12図、図版５）

位　置　調査区中央部の北側に位置する。

形　態　谷部斜面に平行に作られた溝である。主軸方位は、Ｎ－8.5°－Ｗである。

規　模　全長約4.9m、最大幅約50cm、深さ約10cmを測る。

時　期　ＳＡ－０３もしくはＳＢ－０７・０８と併行関係にあると考えられる。

ＳＤ－０５（第12図、図版５）

位　置　調査区中央部のやや西側に位置する。

形　態　谷部斜面に平行に作られた溝で、南端部分で東向きに屈曲する。溝の北側でも東向きに屈曲する部分が見られるが、同一の遺構と考えておきたい。主軸方位は、Ｎ－15°－Ｗである。

規　模　全長約5.9m、最大幅約50cm、深さ約５cmを測る。

時　期　ＳＡ－０７と併行関係にあると考えられる。

ＳＤ－０６（第12図、図版５）

位　置　調査区中央部のＳＤ－０６の東隣に位置する。

形　態　ＳＤ－０５と同様に、南端部分で東向きに屈曲する。主軸方位は、Ｎ－8.5°－Ｗ
Ｗである。

規　模　全長約３ｍ、最大幅約30cm、深さ約20cmを測る。

時　期　ＳＤ－０５より後出すると考えられる。

ＳＤ－０７（第12図、図版５）

位　置　調査区中央部のＳＤ－０１の西隣に位置する。

形　態　ＳＤ－０１とほぼ平行に作られた溝で、ＳＤ－０６の屈曲した部分とつながる。
主軸方位は、Ｎ－14°－Ｗである。

規　模　全長約６ｍ、最大幅約55cm、深さ約15cmを測る。

時　期　ＳＤ－０１より後出すると思われる。

ＳＤ－０８（第12図、図版５）

位　置　調査区の東側に位置する。

形　態　溝の南端部分は、東向きに屈曲する。北側ではＳＫ－０３につながる。主軸方位
は、Ｎ－13°－Ｗである。

規　模　全長約９ｍ、最大幅約30cm、深さ約7～22cmを測る。

時　期　ＳＫ－０３併行時期と思われる。

ＳＤ－０９（第12図、図版５）

位　置　調査区東端部の南側に位置する。

形　態　谷部斜面に平行で直線状に作られた溝で、南端部で東向きに屈曲させる。主軸方
位は、Ｎ－15°－Ｗである。

規　模　全長約12.3m、最大幅約70cm、深さ約9～23cmを測る。

遺　物　須恵器杯身・杯蓋・短径壺・石製品等の出土を見た。

時　期　ＳＢ－０１・０２と併行関係にあると考えられ、６世紀末～７世紀初頭のものと
思われる。

ＳＤ－１０（第12図、図版５）

位　置　調査区中央部南側のやや西寄りに位置する。

形　態　谷部斜面にやや斜行して作られている。溝の北側は樹根によって攪乱を受けてい
るため不明だが、西側に湾曲してＳＤ－０２へ繋がっていたものと思われる。主
軸方位は、Ｎ－24°－Ｗである。

規　模　全長約3.5m、最大幅約70cm、深さ約16cmを測る。

時　期　ＳＤ－０２と併行関係にあると思われる。

［土坑状遺構］

ＳＫ－０１（第12図、図版５）

位　置　調査区東側のやや南に位置する。ＳＤ－０８の中央部からＳＤ－０９にかけて広がる焼土坑である。

形　態　やや不整な楕円形を呈する。

規　模　長辺約3.0m、短辺約1.9m、深さ約10cmを測る。

遺　物　須恵器杯身・甕等の出土を見た。

時　期　遺物より７世紀初頭が考えられる。

ＳＫ－０２（第12図、図版５）

調査区中央部のやや南側に位置し、一辺約0.9mを測る方形の土坑である。遺物の出土は見られず、性格・時期等は不明である。

ＳＫ－０３（第12図、図版５）

位　置　調査区東側のやや中程に位置する。ＳＤ－０８の北端部に隣接する。

形　態　やや不整な隅丸長方形を呈する。

規　模　長辺約2.6m、短辺約1.1m、深さ約６～20cmを測る。

遺　物　須恵器杯身・杯蓋・高杯・無蓋高杯・脚付把手付碗・瑕・広口壺・甕等の出土を見た。

時　期　遺物より７世紀代のものと思われる。

ＳＫ－０４（第12図、図版５）

調査区東側のやや南に位置する。長辺約2.15m、短辺約1.57m、深さ約50cmを測る長円形の土坑である。遺物の出土は見られたが、周辺の遺構群とは関連性が薄いと思われた。従って、ここでは攪乱穴として取り扱っている。

ＳＫ－０５（第12図、図版５）

調査区中央部の北側に位置する。ＳＫ－０４と同様、後世の攪乱穴である。

［窯　跡］

３号窯（第12・23図、図版５・６）

３号窯は、調査区南西側の谷部平坦面より丘陵斜面へ移行する地点に築かれていた。窯体は地山を掘り下げた半地下式の窖窯で、所謂炭窯と呼ばれる窯状遺構（炭窯）である。本窯は窯状遺構（炭窯）に通有な横口を持たない形式のもので、全長約3.93mを測る。焼成部全長は、約3.0mあり、同幅60～85cmを測る。主軸方位は、Ｎ－12°－Ｅである。主軸の南端に煙道を設け、北端に焚口を作っている。焼成部床面は、焚口部より煙道部に向か

って徐々に上昇し、中間地点に緩やかな段を設けた後傾斜角を増して行く。その傾斜角は15～25度を測る。焼成部壁面は、両側とも直立し還元炎焼成を受けている。煙道煙出し部は、壁面は酸化炎焼成を受け直立する。右側の壁面に突出部が造り出され、障壁あるいは分炎柱の用をなしたと考えられる。

窯体の壁面には、粘土及びスサ入り粘土等の張りつけはみられず、地山を直接掘り込んでいたことが知られた。窯体内の埋土を観察するかぎり、天井部焼土の崩落は窯の規模に比較して非常に少ないことから、窯体本来の高さは60cm程度であったと推定される。

焚口部の床面直上に24×15×30cm大の炭化材が遺存していたが、現段階では燃料と焼成材との区別は不明である。

焚口部前面の前庭部に於ける埋土下層より、陶邑編年の第II型式第5段階の須恵器瑳の出土が知られた。3号窯における熱残留磁気年代は、A．D 640年±15年の測定結果が得られており、7世紀の前半代にはその機能を停止したものと思われる。

3）出土遺物

J地区より出土した遺物は、土師器・須恵器・石製品・鉄製品等が見られた。遺物の特徴から時期の推定が可能な 100点余を図化した。本書では、遺構内（ピット・土坑等)、及び遺構に関連する可能性の有るものを中心に取り上げている。

遺物の分類については、器形、大きさ等の違いによりA・B・C……。I・II・III……とそれぞれグループ分けした。なお、これらの符号は、時間的序列、形態変化の方向を示すものではなく、単なる類別上のものであることを断っておく。

石製品・鉄製品については、観察表に委ねることとする。以下器種別に記述する。

［須恵器］(第24～26図、図版51・52)

J地区で最も多く出土した遺物が須恵器である。器種にもバラエティーが見られ、杯(身)・杯蓋・高杯・脚付碗・脚付把手付碗・瑳・壺・甕等が見られた。以下に、出土した須恵器の特徴を記述するにあたり、分類を試みた。

杯(身)は、A：丸底で口縁部に立ち上がりを有するもの、B：高台を有するもの、C：平底を呈するものとに分類した。さらに大きさで細分できるものについては、I・II・IIIと区分した。

杯蓋は、A：丸い天井部を呈するもの、B：平坦な天井部を呈するもの、C：宝珠形つまみを付すものに区分できた。

高杯は、有蓋高杯と無蓋高杯が見られた。

ＳＫ－０３出土遺物（第24図、図版51）

Ｊ地区において検出した遺構のなかでも、ＳＫ－０３より出土した遺物が最も多く見られた。ＳＫ－０３出土遺物は、他の遺構の年代を推定するための指標となるため、最初に取り上げることとする。

杯Ａ（６～８）

杯Ａは、底部がほぼ丸底を呈し口縁部の内側に立上りを有するものである。立上りは、短く内傾した後上方につまみあげ、端部は尖り気味におさめる。基部径は11.4～13.2cm、受部径は14.0～15.6cm、器高4.0cmを測りやや小振りな感を与える。底部外面は、ヘラ切り未調整、内面はロクロナデ後不整ナデを施す。陶邑編年第II型式第５段階に相当するものと考えられる。

蓋Ａ（２～５）

基部径12.1～14.0cmの蓋で、全体的に丸く椀状を呈する。口縁部がやや直立気味なもの（２・３）と、頂部よりなだらかに縁部に続くもの（４・５）が見られる。口縁端部はいずれも丸くおさめる。天井部外面はヘラ切り後未調整で、３は板目圧痕を残す。内外面ロクロナデを施す。２は陶邑編年第II型式第４段階、他は同第５段階に相当する。

蓋Ｂ（１）

基部径14.6cmを測る。平坦な天井部より直立気味の口縁部へ続く。肩部に浅い一条の凹線を巡らす。天井部外面はヘラ切りの後ヘラケズリ調整を施す。内外面ロクロナデ調整を行なう。陶邑編年第II型式第４段階に相当する。

高杯（９～14）

有蓋高杯（９・10）、無蓋高杯（11・12）、脚部（13・14）が見られた。

有蓋高杯９は、口径11.6cm、受部径13.9cm、器高9.4cmを測る。丸底状を呈する底部より外方に開き気味に口縁部へ続く。口縁端部は丸くおさめ、その内側に短く内傾気味の立上りを有しその端部は丸く終わる。脚部は、「ハ」字状に開き脚端部へ続く。脚端部は外方気味に開く。受部底部外面は、ヘラケズリの後ロクロナデを行い、他は内外面ロクロナデを施す。受部内面の中心部は雑な不整ナデを行なう。有蓋高杯10は、口径13.0cm、受部径15.0cm、器高8.85cmを測る。平坦な底部より内湾気味に外傾して口縁部へ続き、口縁端部は外方につまみ出す。立上りは、やや直立してつまみ上げ尖り気味におさめる。脚部は、「ハ」字状に開き脚端部へ続く。脚端部は直立気味に終わる。内外面ロクロナデを施し、受部外面の屈曲部にヘラケズリを行なう。陶邑編年第II型式第５段階に相当する。

無蓋高杯11は、口径10.6cm、器高11.8cmを測る。丸底状を呈する底部より、やや外傾気味に立ち上がる口縁部へ続く。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には２条の沈線が巡る。脚部は、比較的細い基部より「ハ」字状に開き脚端部は屈曲して丸くおさめる。長方

形二段二方向の透かしを有し、上段の透かしは貫通していない。下段の透かしは台形状を呈する。脚部中段に５条の沈線を巡らす。受部の底部外面は、ヘラケズリの後ロクロナデを施し、内外面ロクロナデを行なう。脚部内外面ロクロナデを行なう。無蓋高杯12は、口径13.2cm、器高11.0cmを測る。やや丸みを帯びた底部より外傾気味の口縁部へ続く。口縁端部は外反し、先細り気味に終わり丸くおさめる。脚部は、「ハ」字状に開き、脚端部は屈曲して丸く終わる。内外面ロクロナデを施し、受部の底部内面は不整方向のナデを行なう。陶邑編年第II型式第５段階に相当すると思われる。

脚部13・14は、「ハ」字状に開く脚柱部である。脚柱部の中段に２条の沈線を施す。内外面ロクロナデを施し、基部内面に絞り痕を残す。

脚付椀15は、口径9.4cm、器高11.5cmを測る。平坦な底部より緩やかに湾曲し、直立した口縁部へ続く。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には、ほぼ全面にカキメを施す。脚部は、「ハ」字状に開いた低い脚柱部で、外面にはカキメを施す。脚端部は比較的丸くおさめる。内外面ロクロナデを施し、椀部内面の底部は不整ナデを行なう。口縁部の１／２を欠いている為不明だが、把手を付していたものと思われる。陶邑編年第II型式第４～５段階に相当すると思われる。

脚付把手付椀16は、口径13.4cm、器高19.2cmを測る。椀部最大径は16.8cmである。丸みを帯びた底部より緩やかに立ち上がり、内湾気味の口縁部へ続く。口縁端部は、やや角張り気味におさめる。口縁部上半の二ヵ所に２条の沈線を施し、その区画された部分に波状文と刺突文を施文する。椀部最大径部分に剝離痕が見られるため、把手を有していたものと考えられる。脚部は、大きく「ハ」字状に開き、脚端部は屈曲し接地部分は丸くおさめる。脚柱部には、長方形二段四方向透かしを行なう。椀部外面の全体にカキメを施す。カキメの後、下半１／４をナデ消す。上半の施文は、カキメの後に行なっている。椀部内面はロクロナデ。脚部内外面は、ロクロナデを施し外面の一部にカキメを行なう。陶邑編年第II型式第５～６段階に相当すると考えられる。

瓻17は、口径12.0cm、器高14.4cmを測る。丸い底部から、やや肩のはった肩部より屈曲して頸部に続く。頸部は、大きく外反した後屈曲して外傾気味の口縁部へ続く。口縁部下端には、ややシャープな稜を付ける。頸部中央に２条の沈線を施す。肩部にも１条の沈線を施し、最大胴径部分に円孔１を穿つ。内外面ロクロナデを施し、底部外面は静止ヘラケズリを行なう。陶邑編年第II型式第６段階に相当する。

短頸壺18は、口径4.7cm、器高7.3cm、胴部最大径8.1cmを測る小形の壺である。丸底気味の底部より、内湾しながら立ち上がりやや肩の張る肩部へ続く。口縁部は、頸部より屈曲して短く直立する。口縁端部は丸くおさめる。底部外面は、ヘラ切りの後ナデを施し、胴部下半はヘラケズリの後ナデを行なう。他は内外面ロクロナデ。陶邑編年第II型式第６段

階に相当する。

壺19は、口径20.7cm、残存高約7.4cmを測る比較的大形の広口壺である。やや張り気味の肩部より「く」字状に屈曲し、外反した頸部より口縁端部へ続く。口縁端部は、角張り平坦面をつけ、外方に肥厚させ１条の沈線と稜を造り出している。内外面とも風化が著しいがロクロナデ調整を施したものと思われる。陶邑編年第II型式第５～６段階に相当すると思われる。

４）他の遺構出土遺物（第25～31図、図版51・52）

Ｊ地区に於いては、遺構内遺物としてＳＫ－０３一括遺物の確認が出来ているが、他の遺構（焼土坑・ピット等）では１～４点の出土が知られたのみで、図化できたものも少ない傾向にある。また、掲載した実測図の順位は時間的序列を示すものではないことをあらかじめ断っておく。

杯Ｃ（第25図20～27）

20は、口径9.7cm、器高3.5cmを測り壺蓋の可能性が強い。平坦な底部よりやや内湾気味に口縁部へと続き、口縁端部は凹面をなす。底部切り離しは、回転糸切りによる。内外面ロクロナデ調整を施し、底部内面は不整ナデを行なう。21は、口径11.6cm、器高5.7cmを測る。わずかに上げ底気味の底部より、やや内湾しながら逆「ハ」字状に開く口縁部へ続く。口縁端部は丸くおさめる。底部切り離しは、回転糸切りによると思われる。内外面ロクロナデ調整を施したものと思われるが、磨滅により不明瞭。24は、口径15.6cm、残存高3.9cmを測る。内湾気味に立ち上がる口縁部で、端部は丸くおさめる。内外面ロクロナデ調整を施す。22・25～27は杯の底部である。いずれもやや上げ底気味の底部より、逆「ハ」字状に開く口縁部に続くものと思われる。底部切り離しは、回転糸切りによる。内外面ロクロナデ調整である。23は、皿Ｃに分類され、口径12.2cm、器高2.0cmを測る。平坦な底部よりやや内湾気味に大きく開く口縁部に続く。口縁端部は、わずかに外方につまみだし丸くおさめる。内外面ロクロナデ調整を施し、底部切り離しは、回転糸切りによる。20は、陶邑編年第IV型式第２段階に相当すると思われる。21～27は、山田12号窯併行時期と考えられる。

杯Ａ（第25図33～37・40・41）

いずれも底部を欠く。36は平坦な底部を有し、40・41も同様と考えられる。受部は内湾気味に立ち上がり、やや外反する口縁端部へ続く。口縁部内側の立上りは、短く直上に立ち上がるもの（33・34・40・41）と、内傾気味に立ち上がるもの（35～37）が見られる。端部は丸くおさめるが、33•37は尖り気味に終わる。基部径は11.6～12.8cm、受部径は13.6～14.6cmを測るもの（33・34・35・40）、基部径13.3～13.5cm、受部径15.2～15.7cmのもの（36・37・41）が見られた。内外面ロクロナデ調整を施す。35・40は陶邑編年第II型式

第4段階、他は第5段階に相当するものと思われる。

蓋A（第25図28～32）

基部径13.0～15.2cm、器高4.2～4.6cmを測る。基部径で見ると、13.0～13.2cmのもの(29・31・32)、14.2～15.2cmのもの（28・30）にグルーピングが出来る。やや丸みを帯びた天井部より、内湾しながら口縁部へと続く。口縁端部はやや肥厚させるもの(28)、丸くおさめるもの（30～32）が見られる。内外面ロクロナデ調整を施す。陶邑編年第II型式第5～6段階に相当すると思われる。

蓋B（第25図39）

基部径14.7cm、器高3.3cmを測る。扁平な天井部より内湾気味に口縁端部へと続く。天井部外面は、ヘラ切り離しの後ヘラケズリを施すが中央部分は未調整。内外面ロクロナデ調整を施し、天井部内面に当て具痕を残す。陶邑編年第II型式第4段階に相当するものと考えられる。

高杯（第25図38・42～44）

38は高杯の脚部である。「ハ」字状に開く。内外面ロクロナデ調整を施す。42～44は高杯の口縁部と思われる。口径12.8～14.6cm、残存高2.2～2.8cmを測る。平坦な底部より外傾気味に開く口縁部に続く。口縁端部は丸くおさめる。口縁部下端部分に1条の沈線を施す。内外面ロクロナデ調整である。陶邑編年第II型式第5段階に相当すると思われる。

蓋C（第26図45～55）

基部径13.2～15.2cmを測り、宝珠形つまみを有する蓋である。基部径で見るかぎり2グループに分けられる。すなわちI：15.0～15.2cm、II：13.2～14.0cmである。平坦な天井部よりなだらかに口端部へ続くもの48・52・53、天井部斜面を屈曲させるもの45～47・49・50・51が見られる。口端部先端部分は、屈曲して外方へつまみだし先細るもの45・46・48、外方につまみだしやや尖り気味のもの47・50・51・52、垂下させてやや丸みを帯びたもの49・53が見られた。つまみは、やや扁平で中心部分を盛り上げるもの53・55と凹むもの54が見られる。天井部切り離しは、回転糸切りによる49・53・54。天井部屈曲部分において、52はヘラケズリを施す。内外面ロクロナデ調整を施す。45～47は陶邑編年第IV型式第1段階、48・54は同第2段階、49～53・55は同第3段階に相当するものと考えられる。

杯B（第26図56～79）

杯底部外面に高台を有する杯である。口径11.0cm～16.7cmを測り、I：16.0～16.7cm、II：11.0～13.6cmのグループが認められる。口縁部は、逆「ハ」字状に開く。口縁部は短めで、端部を丸くおさめるもの（56・59）と、やや先細り気味のもの（57・58）が見られる。また、口縁部がやや長めで、外傾したまま丸くおさめるもの（60・64)、口縁端部を外反させて丸くおさめるもの（61・62)、つまみだし気味に先細らせるもの（63）が見られた。

高台は「ハ」字状に開き、底部から口縁部へ続く屈曲部の内側に付けるもの(56～58・65～71・73～79）と、屈曲部に付けるもの（59・64・72・）が認められる。底部外面は、回転糸切りによる切り離しをおこなう。内外面ロクロナデ調整を施す。底部内面に不整ナデを行なうもの（57～59・64・68・70・71・73・74・77～79）も認められる。69・76の底部内面は、ナデを磨り消して滑らかな面を呈しており転用硯の可能性が考えられる。

高杯（第28図93・95～97）

93は口径14.7cmを測る高杯の受部である。受部底部より内湾気味に立ち上がり、口縁部で屈曲してやや外反気味に開く。端部は丸くおさめる。屈曲部の外面に１条の沈線を施す。内外面ロクロナデ調整を行なう。陶邑編年第II型式第５段階と考えられる。95～97は脚部である。「ハ」字状に開き、96は大きく開き透かしを有する。脚端部を屈曲させるもの(95・96）と、内側に肥厚させるもの（97）がみられる。内外面ロクロナデ調整を施す。97は陶邑編年第II型式第４段階、95・96は同第５段階に相当すると考えられる。

壺（第28図94・98・99・101～106)、**甕**（第28図100・107)

94は、口径9.0cmを測る小壺の口縁部である。「く」字状に屈曲した頸部よりやや外反気味に開く口縁部へ続く。口端部は、わずかに内側に折り返した後上方につまみだす。内外面ロクロナデ調整を施す。98は、口径16.6cmを測る横瓶の口縁部と思われる。逆「ハ」字状に開く口縁部で、端部は平坦な面をなす。内外面ロクロナデ調整を施す。99は、口径15.4cmを測る短頸壺の口縁部である。「く」字状の頸部より外反気味の口縁部へ続き、端部はやや浅く凹ませた平坦面をなす。内外面ロクロナデ調整を施す。100は、口径20.1cmを測る外反する甕の口縁部で、端部を丸くおさめる。端部内面に沈線状の段をなす。内外面ロクロナデ調整を施す。101は、口径28.6cmを測り、やや外傾気味に直上に延びる直口壺の口縁部である。口端部は丸くおさめ、内側で肥厚する。口縁部下端に、浅くやや鈍い２条の沈線を施す。内外面ロクロナデ調整である。102は、口径24.4cmを測る広口長頸壺の口縁部である。なだらかな肩部より屈曲し、やや外傾気味にのびた後大きく外反する口縁部へ続く。端部は、やや垂れ気味に外方へのびた後上方へ屈曲させる。口縁端部の先端部は平坦な面を持つ。内外面ロクロナデ調整を施す。103は、口径26.0cm、器高31.6cm、体部最大幅28.7cmを測る広口長頸壺である。平坦な底部より内湾気味に立ち上がる体部から、丸みを帯びた肩部へ続き「く」字状に屈曲した頸部をなす。口縁部は、外傾気味に立ち上がった後、大きく外反して端部へと続く。端部は、一旦垂れ下った後屈曲して外方へつまみだす。体部上端部に５条の沈線を施す。高台は、底部の屈曲部に逆三角形の高台を貼りつける。内外面ロクロナデ調整を施す。104～106は、壺の底部である。104は、高台径11.0cmを測る広口長頸壺の体部である。平坦な底部から、外傾し立ち上がる体部へと続く。底部外面の屈曲部に台形の高台を貼りつける。内外面ロクロナデ調整を施す。105は、底径19.2cmを測る。

平坦な底部より、外傾する体部へ続く。底部内外面は不整ナデ、体部内外面ロクロナデ調整を施す。106は、底径9.0cmを測る長頸壺の底部である。平坦な底部より、やや外傾気味に開く体部に続く。内面はロクロナデ調整を行ない、体部外面はヘラケズリの後ナデを施す。体部下端はナデにより凹線状の窪みをつける。底部外面は、未調整。107は、口径36.2cmを測る甕の上半である。やや肩の張る肩部より、大きく外反する口縁部に続く。端部は上下につまみだす。口縁部内外面ロクロナデ調整を施し、肩部外面は平行タタキメ、内面は同心円の当て具の痕跡が認められる。97は陶邑編年第II型式第4段階93～96は同第5段階、98は第IV型式第1段階、99～101は同第2段階、102～105は同第3段階、106・107は同第3～4段階に相当すると考えられる。

土師器、甕（第27図80～88）

口径12.8cm～29.2cmを測る。体部の脹らみを持たないもの（80・81・85）、やや脹らみを持つもの（84・88）、球形のもの（82・83・86・87）が見られる。体部に脹らみを持たない甕の口縁部は、逆「L」字状に屈曲して外反する。やや脹らみを持つ甕は、逆「L」字状に外反もしくは外傾した口縁部に続く。球形の体部を有する甕は、屈曲した頸部より外反気味の口縁部に続く。体部内面は、ヘラケズリを行なう。口縁部内外面及び体部外面はナデ調整を行ない、80・82～84は頸部外面および体部上半にハケメを施している。80・83は6世紀末～7世紀初頭、82・85～88は7世紀代、81・84は7世紀後半代の所産と考えられる。

土師器、鉢（第27図89～92）

口径15.5cm～18.9cmを測る浅鉢形の製塩土器と考えられる。内湾して立ち上がる体部で、口縁端部は丸くおさめるもの（92）、先細るもの（90）、平坦な面を持つもの（89・91）が認められる。89は端部の内側を肥厚させる。内外面ナデ調整を行ない、90・92の体部外面に指押さえの痕跡を残す。91の体部内面には、非常に目の細かい布目痕が認められ、89・90・92は磨滅により不明瞭であるが布目状の痕跡が見られる。これらの製塩土器は、8世紀前半から8世紀中頃にかけての所産と考えられる。

2．K地区（第32～49図、第12～23表、図7～16・53・54）

1）位置と現状

K地区は、I地区の南側丘陵の裾部に位置する。調査地の前面には、水田が展開している。調査地は、丘陵裾部の南北約60m、東西約40mの平坦地で、畑地として耕作されていた。調査地は、二段に分かれており、上段の平坦地が比較的広い畑地となっていた。この上段の平坦地の南側には、江戸時代末期から近代初頭にかけて操業されていた瓦窯の窯跡の存在が知られた。この瓦窯の操業時に、調査地の上段南側、および下段部分になんらか

の施設を建造していたと思われる。このことは、調査地の南側において、遺構面が後世の削平によって失われていたことで判断された。

2）検出した遺構

調査の結果、掘立柱建物跡3棟、竪穴住居跡1棟、柵列状遺構7基、溝状遺構5基、窯状遺構（炭窯）2基、土坑7基および柱穴状ピット多数を検出した。掘立柱建物跡および竪穴住居跡は、調査区の上段部北側やや南寄りに位置している。柵列状遺構は、調査区の山裾部に沿い、丘陵斜面に平行して作られていた。溝状遺構は、柱穴列に沿って作られたものと、墳丘の大半が失われた周溝部分が認められた。窯状遺構（炭窯）は、調査区の北西部に位置している。調査区上段の中心部分は、大きくカットされているため、各柱穴の性格の判定作業に困難をきわめた。このため、本書では遺構の性格が明確なものについて記述することとし、建物あるいは柵列状の柱穴列等は図示するのみにとどめた。

K地区で検出した各遺構は、その長軸方位を概ねN－36°～53°－Eの範囲に納まるように作られていることが確認された。これはJ地区と同様、丘陵斜面に平行して作られたためと思われる。調査区上段の遺構面は、いわゆるクロボク土がベースとなっており、南西部分では弥生時代後期にまで遡る可能性が考えられる遺物包含層をなしていた。また、竪穴住居跡および窯状遺構（炭窯）は、丘陵斜面裾部の変換点に位置しており、クロボク土はみられない。竪穴住居跡南隣の溝状遺構や、窯状遺構（炭窯）の旧表土内は古墳時代前期の遺物包含層を形成していた。調査区の西側で確認した古墳の周溝は、後世における作業道の取り付けと、水田の開削により、墳丘部分が削平されてしまっていたことが判明した。検出した周溝部分は、いずれも全体の1／4程度であったが、周溝底部より古墳の築造時期を推定し得る遺物の出土をみている。これによると、いずれの古墳も概ね古墳時代後期後半代に所属すると考えられる。調査区北西部で確認した窯状遺構（炭窯）は、熱残留磁気測定を行なっているが良好な結果が得られていない。しかし、2号窯の作業面に作られたピット内より8世紀第2四半期の所産と考えられる須恵器横瓶が出土しており、この当該時期の前後を操業時期と推定しても看過ないと思われる。

以下、検出した各遺構について述べることとする。

［掘立柱建物跡］

ＳＢ－０１（第33・34図、図版7・9）

位　置　調査区北側の中央部やや南寄りに位置する。西側の斜面やや上手に窯状遺構（炭窯）、南隣に竪穴住居跡、東側にはＳＤ－０３（山ノ上33号墳）が所在する。ＳＢ－０２とは柱穴の一部を共用し、重複して建てられている。

形　態　梁行3間（5.36m）、桁行4間（7.36m）の建物である。各柱穴間距離は、Ｐ１より1.95・1.78・1.80・1.85・1.81・1.81・1.75・1.85・1.81・1.72・2.0mを測る。

床面積39.45㎡。長軸方位は、N－38.5°－Eである。建物の北西隅に位置するP5の外側にSD－06が位置するが、雨落ち溝と思われる。

柱　穴　柱穴は12個で、南側梁行部分を欠く。各柱穴の規模は、P1（80×72×40）・P2（72×65×37）・P3（86×82×40）・P4（80×70×58）・P5（114×90×73）・P6（70×62×24）・P7（74×70×40）・P8（70×62×53）・P9（82×78×47）・P10（53×47×19）・P11（48×46×15）・P12（60×58×17）cmである。これらの柱穴の内、P1～P3・P6・P7・P12は二段掘りに作られており、此れから推定した柱の直径は約20cm前後くらいと考えられる。東側の柱穴列は、後世の削平を受けたため柱穴の規模に矮小化傾向が見られるが、本来は西側柱穴列と同様であったと考えられる。各柱穴の規模と、柱穴間距離は比較的揃っており、規格性のある建物であったと思われる。

土　層　柱穴の埋土は、黒褐色土・灰褐色土・暗褐色土が見られた。

遺　物　柱穴内より若干の遺物の出土を見たが、時期を特定することは出来なかった。

時　期　遺構面より出土した遺物は、陶邑編年第Ⅳ型式第1～2段階の特徴を示す。

SB－02（第33・34図、図版7・9）

位　置　SB－01の内側に位置する。

形　態　梁行3間(4.0m)、桁行4間(7.36m)の建物である。各柱穴間は、P13より1.96・1.76・1.92・1.74・(1.10)・(1.20)・(1.60) mを測る。SB－01のP6とは共用関係にあると考えられる。床面積29.44㎡。長軸方位はN－38.5°－Eである。

柱　穴　柱穴は8個である。各柱穴の規模は、P13（54×54×32）・P14（46×33×13）・P15（48×38×24）・P16（60×43×35）・P17（60×57×37）・P6（70×62×24）P18（33×33×25）P19（78×66×70）cmである。P13・P17は二段掘りの柱穴で、推定される柱の直径は20～30cmである。東側と南側の柱穴列は、後世の開削により失ったものと思われる。ここでは敢えて1棟の建物として扱ったが、西側の柱穴列が本来SB－01の桁行であった可能性も考えられる。この場合、SB－01で記述した西側の柱穴列は庇部分となる。ただ、P13～P17間の各柱穴の規模と、P1～P5間のそれとは柱穴掘り方の規模に差が見られることで、別個の建物として扱っている。

遺　物　時期を特定する遺物の出土は見られなかった。

時　期　SB－01と同時期かやや後出するものと考えられる。

［竪穴住居跡］

SI－01（第33・35図、図版10）

位　置　調査区中央部のやや北西に位置する。北側にSB－01が隣接し、南側にはSD－

０１が所在する。

形　態　平面は隅丸方形を呈する。住居跡の東半分は、後世の開削により失っている。規模は、北辺2.35m、南辺1.35m、西辺3.95mを測る。掘り方のコーナー部分に柱穴と思われるピットが見られるが、主となる柱は４本柱と思われる。Ｐ１～Ｐ２の主柱穴間距離は、1.83mを測る。床面積は約15.2m²と推定される。建物の南北軸は、Ｎ－40°－Ｅである。

柱　穴　主柱穴は２個を検出した。各柱穴の規模は、Ｐ１（22×17×29）・Ｐ２（40×40×40）cmである。Ｐ２の北側70cmにＰ３が位置し、その規模は（35×25×40）cmを測る。柱穴Ｐ３はＰ２との先後関係は不明だが、主柱穴をなしていたことは充分に考えられる。

壁　溝　壁溝は、西辺、南辺と北辺の一部で確認できた。西辺と南辺の壁溝は、いずれも幅が広く、拡幅された可能性を示唆している。北辺に見る壁溝で、幅約17.0cm、深さ約5.0cmを測る。

床　面　床面にはＰ５の上面において、貼床が施されていることが判明した。厚さは２～３cm程度であったが、床面全体に行なわれていたかは不明である。Ｐ６は中央ピットと思われるが、その周囲において焼土面が検出された。焼土面は、厚さ約５cm前後で、ピットの南北両側のみの検出であった。

遺　物　遺物としては、須恵器杯身（第43図24）が埋土上層より出土した。床面よりの出土は見られなかった。

時　期　出土した遺物の特徴からみて、陶邑編年第II型式第６段階に相当するため、これ以前に廃絶したものと考えられる。

［溝状遺構］

ＳＤ－０１（第33・42・43・46図、図版９・53・54）

位　置　調査区中央部の西側に位置する。ＳＩ－０１の南側に隣接する。

形　態　東側と南側は、後世の開削により失っており遺存状態が悪い。溝は「コ」字状に作られていたと思われる。規模は、南北5.0m、東西1.6mが確認できた。幅1.5m、深さは最大約35.0cmを測る。溝断面は、緩やかな逆台形を呈し、西側がやや急傾斜をなすのに対し、東側では顕著な傾斜を持たない。この溝の東側には、方形土坑が作られていたが、後世の攪乱を受けているためＳＤ－０１との関連は不明である。

埋　土　埋土は３層に分層できた。

遺　物　表土下層および遺構面からは須恵器が確認されたが、溝の埋土である黒褐色土中や溝底部においては土師器類（第42図１～４・９）が検出された。

時　期　土師器の特徴からみて、古墳時代前期前半頃の溝と思われる。

性　格　遺構の大半を失っているため不明であるが、埋葬施設に伴うものと考えられる。

ＳＤ－０２（第33・42図、図版９・53）

位　置　調査区中央部の東側に位置する。北側にはＳＤ－０３が所在する。

形　態　調査区上段より下段部へ移行する傾斜地に在り遺存状態が悪い。溝は南北に分かれ、南側のそれは「Ｌ」字形をなし、本来は同一のものと思われる。規模は、北側で3.8m、南側は5.3mを測り、幅約50～70cm、深さ約20cmである。断面は緩やかな「Ｕ」字形をなす。

埋　土　褐灰色土を埋土とする。

遺　物　時期を特定し得る遺物の出土は見られなかった。

時　期　溝の東側に位置するＳＫ－０６より赤彩された土師器椀（第42図11）の出土をみており、特徴からみて７世紀後半頃に相当する。

性　格　ＳＤ－０２は、建物の雨落ち溝の性格を有すと思われ、この場合Ｐ244・243・247・249・258・262・250が掘立柱建物跡の柱を形成するものと考えられる。しかし、該当する柱穴には規則性が薄いと考えられることで、ここでは掘立柱建物跡として取り扱っていない。

ＳＤ－０３（第33・43図、図版７・11・53・54）

位　置　調査区上段中央部の東側に位置し、南側にＳＤ－０２、西側にＳＢ－０１が隣接する。

形　態　古墳の周溝部分のみ遺存しており、全周の１／３～１／４を確認した。周溝の規模は、上端部の幅1.9～2.3m、底部の幅0.9～1.1mを測る。溝の断面は逆台形を呈する。周溝外縁部での直径は約15mを測り、墳丘基底部では12mである。古墳の中央部を縦横に作業道が貫通しており、墳丘の大部分を失っている。

埋　土　黒褐色土（クロボク）を埋土とする。

遺　物　周溝北東部の底部において、須恵器鉢（第43図27・28）・短頸壺（第43図29）の出土を見た。

時　期　出土した須恵器は、陶邑編年第Ⅱ型式第６段階に相当すると考えられる。

性　格　径15m（墳丘基底部径12m）の円墳で、調査中の新規発見であるため山ノ上33号墳と呼称することとした。

ＳＤ－０４（第33・43図、図版７・11・53・54）

位　置　調査区下段部の南東隅に位置する。

形　態　古墳の周溝部分と思われる。全周の１／４を確認した。周溝の規模は、上端部の幅1.2～1.9m、底部の幅0.6～0.9mを測る。溝の断面径は逆台形を呈する。周溝

外縁部での直径約18m、墳丘基底部では約15mを測る。墳丘部分は後世の開削により消滅している。

埋　土　黒褐色土（クロボク）を埋土とする。

遺　物　周溝底部より土師器低脚杯（第43図31）を検出した。

時　期　遺物の特徴からみて、陶邑編年第II型式第５段階と併行する時期の所産と考えられる。

性　格　径18m（墳丘基底部径15m）を測る円墳で、新規発見の古墳であるため山ノ上34号墳と呼称することにした。

［土坑状遺構］

ＳＫ－０１・０２（第33図、図版７）

位　置　ＳＫ－０１はＳＤ－０３の周溝外縁部の北側に接して位置する。ＳＫ－０２は同西側に接する。

形　態　円形の土坑で、ＳＫ－０１の規模は径約80cm、深さ約116.5cmを測り、ＳＫ－０２は径約70cm、深さ約115.0cmである。いずれも若干斜めに掘り込まれており、ＳＫ－０１はややフラスコ状を呈する。

埋　土　黒褐色粘質土を埋土とする。

遺　物　顕著な遺物の出土は見られなかった。

時　期　時期は不明であるが、ＳＤ－０３より先行するものと思われる。

ＳＫ－０３（第33図、図版７）

位　置　調査区上段の中央部に位置する。

形　態　やや楕円形の土坑である。規模は長軸約1.16m、短軸約1.07m、深さ約1.54mを測り、やや斜めに掘り込まれており、開口部が開くラッパ形を呈する。

埋　土　黒褐色粘質土を埋土とする。

遺　物　検出されなかった。

時　期　不明である。

ＳＫ－０４（第33・42図、図版７・53）

位　置　調査区上段中央部のやや南に位置する。南にＳＢ－０３、西側にはＳＤ－０２が所在する。

形　態　長円形を呈する。規模は、長軸約1.0m、短軸約0.78m、深さ約11.0cmを測る。断面は浅鉢状である。

埋　土　黒褐色粘質土を埋土とする。

遺　物　土師器壺（第42図８）・甕等を検出した。

時　期　遺物からみて、古墳時代前期前半頃の所産と考えられる。

性　格　土器溜めと思われる。

ＳＫ－０５（第33図、図版７・53）

位　置　調査区上段中央部の西端に位置する。

形　態　不整形な長円形を呈していたものと思われる。規模は、長軸約1.45m、短軸約0.9m、深さ41cmを測る。断面は、緩やかな「U」字形を呈する。

埋　土　黒褐色粘質土を埋土とする。

遺　物　手捏ね土器の出土を見た。

時　期　判然としないが、一応古墳時代前期の時期を与えておきたい。

ＳＫ－０６（第33・42図、図版７・９）

位　置　ＳＤ－０２の東側に隣接する。

形　態　円形の土坑である。規模は長軸77.0cm、短軸72.0cm、深さ約23.0cmを測る。断面は浅鉢状を呈する。

埋　土　黒褐色粘質土を埋土とする。

遺　物　赤彩の施された土師器椀（第42図11）の出土を見た。

時　期　７世紀後半代の所産と考えられる。

性　格　土師器椀は、完形品で赤彩が施されていることから、土器埋納坑と考えておきたい。

ＳＫ－０７（第33図、図版７）

位　置　ＳＫ－０５の北側、ＳＩ－０１の西隣に位置する。

形　態　不整形な土坑で、溝状を呈し全長1.96m、最大幅0.68約cm、深さ約８cmを測る。

埋　土　黒褐色粘質土を埋土とする。

遺　物　顕著な遺物は見られなかった。

時　期　不明だが、古墳時代前期と考えておきたい。

［窯状遺構］

１号窯（第33・36～38図、図版７・12～15）

調査区上段の北西隅に位置する。丘陵南斜面に築かれた窯は、焚口を北に煙道部を南にして、等高線とほぼ同一方向に築造されている。窯は淡橙色土の地山層を刳り貫き、壁の一部に厚さ５cm程度の粘土を貼りつけて築造された地下式の窖窯である。窯体主軸の方向はＮ－43°－Ｅを測る。

窯体の一部は、遺構検出作業の過程で削平してしまい欠損したが、遺存状態は概ね良好であった。遺構は、前庭部から煙道部までの窯体と、作業面が完存状態で検出された。１号窯は、窯体のサイドに横口を有する通称「八ツ目窯」と呼ばれる横口付きの窯状遺構である。

窯　体

窯体の規模は、全長約9.7m、床面幅約0.55～1.0m、天井高約0.4mを測る。焼成部は、全て丘陵斜面の地下を刳り貫いて築かれていた。斜面下方の窯体側面には、９個の横口が備わっている。窯体内には、本来その天井部を形成していたと考えられる焼土塊が堆積していた。窯体の焚口部より２mの地点において、窯壁の一部が削りとられ小児頭大の岩礫３個程度の配石がみられたことで、規模の縮小が図られたものと思われる。焼成部床面と同壁体の一部は暗緑灰色を呈し、その周囲および横口の壁体部は黄灰色を、さらにその外側は赤褐色を呈している。焼成部床面は平坦ではなく、山側の壁体下部より横口を備わる側面に向けて約10度の傾斜をつけている。また、横口に対応する部分のみに弧状のえぐりが認められる。天井部は焼成部中程より煙道部にかけて良好な状態で遺存していた。焼成部床面よりの天井高は、最大で40cm程度であった。天井部は、横口を備わる壁面が最も高く、ほぼ水平に作られているため山側では殆どその空間を持たない。焼成部床面主軸方向の傾斜角は、焚口部から焼成部の約２／３は6.5度を測り、窯体南端部より第３穴辺りよりその角度を増し約17度の傾斜をつける。横口は楕円形を呈し、その幅は35～40cmを測る。横口の床面は、外側の作業面に向けて約６～10度の傾斜をつけている。

窯体の南端部分には、煙道部掘り方が検出された。焼成部床面と連続しており、煙道部は、他地域に見られるような独立した形態をとっていない。煙道部は、丘陵斜面を弧状に掘り込んで作られている。壁面はややフラスコ状ではあるが直立している。煙出し部分は２号窯築窯に際し、削平されており不明である。煙道部の規模は、直径約70cm、高さ約90cmである。壁面は暗緑灰色を呈し、還元炎被熱されている。

前庭部

窯体の北側には、焚口に連続した前庭部が作られている。前庭部は焚口部より「Ｌ」字状に屈曲して掘り込んで作られており、数回の小削平が確認された。前庭部内側の壁面は酸化炎被熱しており赤褐色を呈している。前庭部床面より側面の作業面に向けて溝状の掘り込みが見られる。この前庭部と側面の作業面との間には、障壁状の地山層の高まりを作っている。また、前庭部北側でも同様で、そのさらに北側の平坦部において土師器甕・竈形土器の出土が見られた。

作業面

横口の側面には窪地状の作業面が形成されている。作業面平坦部の東端においては、溝状の掘り込みが見られる。この溝より約20～35cmの高まりをつけて、丘陵裾部の平坦面に続く傾斜面となっている。作業面の規模は、東西約2.0m、南北約7.0mを測り、この平坦面は窯体の北側に延びている。作業面の面積は14.0m²である。作業面の横口側と溝状の掘り込み側に柱穴状のピット（Ｐ002～010・015・020）が認められる。此のピットの位置は、

概ね対応する配置をしており、なんらかの建物あるいは覆屋が作られていたものと考えられる。柱穴間距離は、P002より1.50・1.67m、P005より0.75・1.20・1.04・1.05・1.10m、P004～P020間は3.30mを測る。梁行1間（1.45m）、桁行4～6間（6.4m）で、横口側面の柱穴間が広くとられている。溝の北側と南側において、作業面より外方へ向けて、窯より排出された灰・炭等を排出させる溝が掘り込まれている。南側の溝で2.25m、北側では1.60mが確認できた。作業面東端の溝には、横口より連続した浅い窪みが認められる。

埋　土

窯体内の堆積状況の特徴として、焼成部南半部分では天井の焼土塊およびそれが土壌化したものが充満していた（第38図、E－F・G－H）。北側および煙道部においては、炭化物と灰および砂粒を多量に含む黒色土の堆積が顕著であった(第38図、C－D)。この黒色土は、窯体側面の作業面の下層部を覆うものと同一層（第38図、I－J）であることが確認された。

作業面の堆積状況としては、横口から排出された炭化物・灰・砂粒を多量に含む黒色土が、作業面全体を覆って薄い堆積層を形成する。この黒色土の堆積層は、最も厚い部分で約37cmを測る。下層ほど砂粒が細かく、上層では大きさを増し焼土塊を含む割合も増す傾向にある。

2号窯（第36・39～41・44図、図版7・12・13・15・16）

1号窯の上段に位置する。丘陵南斜面に築かれた窯は、焚口を南に煙道部を北にして、等高線に対しやや斜行して築造されている。2号窯は淡橙色土の地山を掘り込んで築造された半地下式の窯である。窯体主軸の方向はN－6°－Wを測る。

遺構は、焚口部から煙道部までの窯体と、作業面の一部が検出された。前庭部は、後世の開削により欠失していた。窯体の側面に横口を有する通称「八ツ目窯」と呼ばれる横口付きの窯状遺構（炭窯）である。

窯　体

窯体の規模は、全長約9.55m、床面幅約0.45m、壁高約45cmを測る。焼成部は全て丘陵斜面を掘り込んで築かれ、天井部は粘土で構築されたものと思われる。斜面下方の窯体側面には、13個の横口が備わっていた。窯体内には、本来その天井部を形成していたと思われる焼土塊の堆積が認められた。焼成部床面と壁面は緑黒色を呈し、その周囲および横口の壁面は暗赤褐色に被熱している。焼成部床面は比較的平坦であるが、地山を掘り込んだ後粘土の貼りつけを施していないため凹凸部分が認められる。横口に対応する部分には弧状の抉りが認められる。焼成部床面主軸方向の傾斜角は、14度を測る。横口は楕円形を呈し、その幅は約30～50cmを測る。横口床面は、作業面に向けて約15～20度の傾斜をつけている。

窯体の北端部分に煙道部が作られている。１号窯と同様、焼成部床面と連続している。煙道部床面は、焼成部床面より一段高く作られている。壁面は、焼成部のそれと同様内湾気味に立ち上がっており、下部は緑黒色に上部は赤褐色を呈している。

焼成部の南端部分の床面は一段低く作られていることから、前庭部に続くものと考えられるが後世の開削により欠失しているため不明である。

作業面

横口の側面には作業面が形成されている。作業面は、窯体部分より一段低く作られており、横口との比高差は0.17～0.4mを測る。およそ焼成部全長と同じ長さをもち、最大幅約1.15mを測り、開削された崖面に解消される。作業面北側にピットが作られ、須恵器横瓶（第44図、52)が検出された。この横瓶は完形品で、ピット上面に正置状態で検出された。横瓶はその特徴からみて、８世紀第２四半期に相当すると考えられる。

埋　土

窯体内の堆積状体は、焼成部床面には天井の焼土塊およびそれが土壌化したものの堆積が認められる（第40図、土層図)。焼成部上半部の床面においては、炭化物･灰を含む暗赤褐色砂質土の堆積が顕著である。この砂質土は、作業面最下層における炭・灰を多く含む極暗赤褐色砂質土（第40図、Ａ－Ｂ）とは同一層と考えられる。

作業面の堆積状況としては、横口から排出された炭化物・灰・砂粒を含む極暗赤褐色砂質土が、作業面床面に薄い堆積層を形成する。その後、焼土・炭を含む赤褐色土の堆積が続く。作業面の南側においては１号窯との切り合いがみられた。２号窯の築造に際し、１号窯煙道部の壁面を削平していることが断面観察により確認された（第40図、Ｅ－Ｆ)。

３）出土遺物

Ｋ地区より出土した遺物は、土師器・須恵器・石製品等が見られた。遺物の所属する年代の推定可能な107点を図示した。土師器は大きく分けて、古墳時代前期に所属するものと歴史時代のものがみられた。古墳時代前期のものは、ＳＤ－０１およびピット中のもので、他は遺物包含層もしくは表土中よりの出土である。個々の遺物の分類については、Ｊ地区のそれに従って行なった。

土師器（第42・43・45・46図、図版53・54)

１～７は土師器甕で、１～６の口径は13.0～15.8cmを測り、７は29.8cmである。いずれも複合口縁を有し、口縁端部を丸くおさめるもの（５)、面を持つもの（１・３・６)、外方にやや摘みだすもの（２・４・７）が認められる。口縁部内外面ヨコナデ調整を施す。頸部内面から体部内面にかけてはヘラケズリを行なっているものも見られる。８は、壺で口径17.2cm、残存高9.2cmを測る。湾曲した頸部から外反した後、内傾気味に立ち上がる口縁部へと続く。口縁端部は、やや外方に向けて摘み上げ、丸くおさめる。内外面磨滅が著

しく調整は不明である。9は、器台の受部である。口径19.0cm、残存高7.7cmを測る。いわゆる鼓形器台で、大きく逆「ハ」字状に開く受部片である。口縁端部でやや外反気味に開く。筒部は短く脚部へと続く。外面ヨコナデ。内面はナデを施す。10は、鼓形器台の脚部である。底部径17.0cm、残存高4.4cmを測る。大きく「ハ」字状に開く脚で、脚端部は水平にのばして丸くおさめる。外面ヨコナデ、内面は右下がりのヘラケズリを行なう。筒部内面と脚端部内面はヨコナデ調整を行なっている。1～4・9はＳＤ－０１、5はＰ54、6はＰ41、7は1号窯作業面埋土、8はＳＫ－０４、10はＰ63より出土した。12は、1号窯築窯以前の旧表土内より出土した高杯の脚部である。底部径7.2cm、残存高9.6cmを測る。脚柱部はやや開き気味で、脚端部に向けて大きく逆「ハ」の字に開き、端部は平坦な面をつける。受部内面は、円盤充塡による。外面はナデ調整、脚端部内面はハケメの後ナデを行なう。他はナデ調整を施す。1～10・12は、その特徴からみて概ね古墳時代前期前半頃の所産と考えられる。

11は、ＳＫ－０６より出土した土師器椀である。内外面赤彩が施されている。口径16.8cm、器高5.5cmを測る。平坦な底部よりやや内湾気味に立ち上がり、外方に開く口縁部に続く。口縁端部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。底部切り離しの後、体部の下半を静止ヘラケズリを行ない丁寧なナデを施す。底部内面不整ナデ。内外面ヨコナデ調整を行なった後、赤色顔料の塗彩をしている。遺物の特徴から7世紀後半頃に相当するものと考えられる。

13・14は、Ｐ78より出土した小型壺である。13は、口径8.4cm、器高7.3cmを測る。平底の底部よりほぼ垂直に立ち上がる体部から、外反する口縁端部へ続く。端部は丸くおさめる。口縁部外面はヨコナデ、体部外面は縦方向のハケメ、底部外面は不整ナデを行ない、内面は不整ナデを施す。14は、口径8.1cm、器高8.0cmを測る。丸底の底部より内湾気味に立ち上がり、ほぼ球形の体部をなす。頸部は屈曲し外傾気味の口縁部に続く。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内外面ヨコナデ調整を施す。体部外面は縦方向のハケメを施し、内面は反時計回りのヘラケズリの後ナデを行なう。13・14は、その特徴からみて7世紀後半から8世紀初頭に相当すると考えられる。

15は、ＳＫ－０５より出土した小壺の手捏ね土器である。口径約4.4cm、器高3.9cmを測る。底部より回しながら捏ねり上げ成形する。外面は、上に向けてナデ上げる。遺物の特徴から、古墳時代前期前半頃の所産と思われる。

16～21は、口径19.4～29.0cmを測る甕である。立ち気味の体部より「く」の字に屈曲して外反する口縁部に続く。口縁端部は丸くおさめる。いずれも体部下半は欠損している。口縁部内外面ヨコナデ調整を施すが、18・19は斜め方向のハケメを行なっている。体部外面は、縦方向のハケメを施す。内面は右上がりのヘラケズリを施すもの（16・18・19）、ヨ

コナデ調整のもの（17）が見られる。16～18は、遺物の特徴からみて７世紀中頃から後半代に所属するものと思われる。20･21は７世紀後半代に、19は６世紀後半代と推定される。

22は、口径15.8cm、器高10.0cmを測る鉢である。平底の底部より、やや内湾気味に立ち上がりわずかに丸みを持つ体部となす。頸部でわずかに屈曲し外傾気味の口縁部に続く。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面は縦方向のハケメを施し、体部下半まで連続する。口縁部内面は横方向のハケメを残す。体部内面はヨコナデ。底部外面はハケメを施し、内面は不整ナデである。この鉢は、概ね７世紀後半代より８世紀代の所産と考えられる。

23は、口径16.7cmを測る浅鉢形の布目土器（製塩土器）である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は平坦面をなす。体部内面には、非常に目の細かい布目痕を残す。体部外面はナデ調整を施し、部分的に指押さえを行なう。この布目土器（製塩土器）は、概ね８世紀後半代に相当するものと考えられる。

31は、ＳＤ－０４（山ノ上34号墳）の底部より出土した高杯である。口径12.0cm、器高8.5cmを測る。内湾して立ち上がる杯部で、口縁端部は内湾した後上方に摘み上げやや尖り気味におさめる。脚部は「ハ」字状に開く。内外面ヨコナデ調整を行ない、外面に赤彩を施す。遺物の特徴からみて、陶邑編年第II型式第５段階に併行する時期のものと考えられる。

81は、口径19.2cm、残存高4.7cmを測る鉢形土器と思われる。やや外傾気味だが垂直に立ち上がる体部で、口縁端部を外方に摘み出し丸くおさめる。口縁部内外面ヨコナデ調整を施す。体部外面は、縦方向のハケメ、内面は上向きのヘラケズリを施す。体部外面には煤の付着が認められる。この鉢形土器はその用途が不明であるが、製塩土器の可能性を指摘される。その所属する年代は、概ね８世紀代を考えられる。

82・86は、口径33.2～35.6cmを測る大形の甕である。屈曲した頸部より外反する口縁部に続き、口縁端部は丸くおさめる。体部は欠損するが、寸胴型を呈するものと思われる。82の口縁部内面はヨコナデ調整を行ない、外面にはやや斜め方向のハケメを施す。頸部内面より下半は、ヘラケズリを行なったものと思われる。86は、口縁端部内外面をヨコナデ調整し、外面は体部にかけて縦あるいは斜め方向のハケメを施す。口縁部内面の下半は、横方向のハケメを入れる。頸部内面より体部にかけてヘラケズリを行なう。製作年代は、７世紀末～８世紀初頭を考えておきたい。

84･102～105は甕で、84はＳＤ－０１の底部、他は黒褐色土の遺物包含層より出土した。口径12.6～13.8cmを測る。口縁部下端に稜を有するいわゆる複合口縁を呈する甕の口縁部である。口縁端部は、丸くおさめるもの（84・102）、面を付けるもの（103～105）がみられる。口縁部内外面ヨコナデ調整を施し、頸部内面の下半はヘラケズリを行なっている。102の口縁部外面には煤の付着が認められる。これらの甕は、その特徴からみて概ね古墳時代前期初頭から前半頃の所産と考えられる。

85・106・107は、複合口縁を有する壺である。85は表土中の出土で、他は黒褐色土を呈する遺物包含層よりもたらされたものである。107は体部下半を欠損する。やや肩の張る肩部から頸部は垂直に立ち上がり、大きく外反した後口縁部下端にシャープな稜を付け、外傾する口縁部へと続く。口縁端部は、やや凹み気味の面を持つ。体部外面および口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。107の肩部外面には、8条単位の櫛描波状文を施している。体部内面は、時計回りのヘラケズリを行なっている。これらの壺は、概ね古墳時代前期初頭から前半代を製作時期と考えておきたい。

須恵器（第43～47図、図版53・54）

杯A（56・57）

基部径11.4～13.8cm、受部径13.2～16.0cmを測り、口縁部の内側に短く摘み上げる立上りを有している。立上り端部は丸くおさめるもの（57）と、やや尖り気味（56）に終わるものが見られた。56の受部はやや外傾気味なのに対し、57は内湾気味に摘み出す。内外面ロクロナデ調整である。56は、陶邑編年第II型式第5段階に相当するものと考えられ、57はやや後出する。

杯B（40～44・46・50・68～76・92～94）

口径12.8～17.4cm、高台径9.4～12.2cmを測る。器高の判明したものは3点であるが、概ね3.8～4.2・6.9cmの範囲に納まるものと思われる。口径の大小によりⅠ：17.4cm 、II：16.5～16.8cm、III：12.8～14.1cmに分類できた。

杯BⅠ（50）は、口径17.4cm、器高6.9cmを測る。平坦な底部より屈曲し、わずかに内湾気味に逆「ハ」字状に開く口縁部に続く。口縁端部は、やや尖り気味に丸くおさめる。底部切り離しは、回転糸切りによる。底部の屈曲部のわずかに内側に、逆台形の高台を貼りつける。口縁部内外面ロクロナデ、底部内面は不整ナデを施す。遺物の特徴から、8世紀中頃以降を考えておきたい。

杯BIIは、40・69が該当する。40は、口径16.8cm、器高3.8cmを測る。平坦な底部より外傾気味の口縁部に続く。口縁端部は丸くおさめる。底部外面の屈曲部に、断面方形の高台を貼りつける。口縁部内外面ロクロナデ。底部内面は不整ナデ。底部外面はヘラケズリ調整を行なう。69は、口径16.5cm、残存高2.4cmを測る。底部を欠損するが、高台を有していたものと思われる。やや内湾気味に立ち上がる口縁部で、端部はわずかに外方に摘み丸くおさめる。内外面ロクロナデ調整を行なう。杯BIIは、陶邑編年第IV型式第1～2段階に相当するものと思われる。

杯BIIIは、41・46・68・70・71・92が該当する。口縁部は、底部の屈曲部より内湾気味に立ち上がるもの（46）、外傾するもの（41・68・70・92）、わずかに外傾したのち端部をやや外反させるもの（71）が認められる。いずれも口縁部内外面ロクロナデ調整を施す。

92は、屈曲部のわずかに内側に逆台形の高台を貼りつけている。92の底部内面は不整ナデを行なう。杯ＢⅢは、陶邑編年第Ⅳ型式第１～２段階に相当するものと思われる。42～44・72～76・93・94・96は、杯Ｂの底部である。高台径は9.6～13.2cmを測る。高台は、屈曲部に付けるもの（72・94・96)、屈曲部のわずかに内側に付けるもの（43・76・93)、屈曲部の内側に付けるもの（42・44・73・74・75）が認められる。高台の断面は、方形もしくは台形のものが多く見られ、その高さも低い。逆台形のもの（94）は、その高さも高いことが知られた。底部外面は、反時計回りのロクロ回転を利用したヘラケズリを施すもの（72)、ケズリの後ロクロナデを施すもの（42・44・73・75)、ケズリを行なわずロクロナデ調整のみのもの（74・76・93・94・96）が見られる。底部内面は不整ナデを行なうものが多く見られる。

杯Ｃ（24・27・90・91）

24・27は、杯から蓋へと移行する時期のものと考えられる。24は、口径11.1cm、器高3.35cmを測り、ＳＩ－０１より出土した遺物である。平坦な底部から外傾した体部へ続き、連続した「く」の字に屈曲し口縁端部は尖り気味に終わる。本来、口縁端部の屈曲部分に立上がりを貼りつけるものである。底部外面はヘラ切り離しの後板目圧痕を残す。風化が著しく調整は不明である。27は、ＳＤ－０３（山ノ上33号墳）の底部より出土した。口径13.3cm、器高5.2cmを測る。丸底気味の底部より、内湾して立ち上がり「く」の字に屈曲して外反する口縁端部へ続く。端部は丸くおさめる。口縁部の屈曲部のやや下方に１条の浅い沈線を施す。底部外面は、ヘラ起こしののち指押さえを行なう。底部内面は不整ナデを行ない、他はロクロナデ調整を施す。90・91は、高杯の杯部の可能性も考えられる。90の口径は14.0cm、残存高4.2cmである。平坦な底部より内湾気味に立ち上がり、口縁端部はわずかに外反し丸くおさめる。内外面ロクロナデ調整を施し、底部内面は不整ナデを行なう。91は、口径14.4cm、残存高4.0cmを測る。平坦な底部よりわずかに外傾する口縁部に続き、口縁端部は丸くおさめる。内外面ロクロナデ調整である。杯Ｃは、その特徴からみて陶邑編年第Ⅱ型式第６段階に相当するものと考えられる。

蓋Ａ（32～34・53～55）

丸みを帯びた天井部よりなだらかな傾斜で口縁部に続く。基部径11.6～15.4cm、残存高4.0～4.4cmを測る。天井部外面は、ヘラ切り離しののち未調整。口縁部内外面ロクロナデ調整を行なう。天井部内面は不整ナデを行なう。

蓋Ｂ（87・88）

平坦な天井部より内湾気味に口縁部へ続く。口縁端部は丸くおさめる。基部径11.7～13.2cm、器高3.0～3.5cmを測る。天井部外面は、ヘラ切り離しののちナデ調整を行なっていると思われる。88には、板目圧痕が見られる。内外面ロクロナデ調整を施す。

蓋A・Bは、その特徴からみて、概ね陶邑編年第II型式第5～6段階に相当するものと考えられる。

蓋C（35～39・51・61～67・89）

天井部外面の中央につまみを有する蓋である。基部径13.0～18.0cmを測り、その大小の差によりI：15.0～18.0cm、II：13.0～13.6cmに分類できた。

蓋CIは、37・38・51・61・62・66・89が該当する。平坦な天井部から屈曲して口端部へ続くもの（37）、緩やかに続くもの（38・51・61・66）、緩やかに続き端部でわずかに屈曲するもの（62・89）が認められる。口端部は、端部で屈曲したのち、さらに屈曲して外方に摘み出すもの（37・38・51・62・66）と、口端部より折り曲げたもの（39・61・89）が見られる。端部は丸くおさめるが、口端部より折り曲げたものは、その断面はやや逆三角形をなす。天井部外面は、ヘラケズリののちロクロナデを行なう。つまみはロクロナデである。内外面ロクロナデ調整を施す。

蓋CIIは、35・39・63・67が該当する。35のつまみは宝珠形を呈し、63のそれはやや扁平である。平坦な天井部より屈曲して口端部に続くもの(35)、緩やかに続くもの(39・67)、丸みを帯びた天井部から緩やかに口端部へ続くもの（63）が認められる。端部は、折り曲げ下垂させるもの（35・39)、屈曲し摘み出すもの（63)、屈曲下垂させ摘み出すもの（67）が見られる。35の天井部外面は回転糸切りののちロクロナデを行なう。63の天井部外面は、ヘラケズリののちナデを施す。天井部内面は不整ナデを行なう。他は、ロクロナデ調整である。

36・64・65は蓋Cのつまみである。つまみはいずれも扁平で、中央部を凹ませるもの(36)と、わずかに凹ませるもの（64・65）が見られる。天井部内面は不整ナデを行ない、外面はロクロナデ調整を施す。65の天井部外面はヘラケズリを施している。

蓋Cは、その特徴からみて陶邑編年第IV型式第1段階以降の所産と思われる。その中でも蓋CIIの35はやや後出するものと推定される。

高杯（26・45）

26は、口径15.1cm、残存高9.2cmを測る。やや丸みを帯びた底部より、外傾気味の口縁部に続く。口縁端部は丸くおさめる。口縁部下端に1条の沈線を施す。脚柱部は、一旦すぼまり「ハ」字状に開く。脚柱部の中央部に2～3条の沈線を施す。口縁部外面にカキメを施す。内外面ロクロナデ。杯部内面は不整ナデである。45は、口径14.2cm、残存高3.6cmを測る。平坦な底部より外傾気味の口縁部に続き、端部は丸くおさめる。底部外面はヘラケズリののちロクロナデを行なう。口縁部内外面、底部内面はロクロナデ調整である。遺物の特徴から26は、陶邑編年第II型式第5段階。45は、同第6段階以降に相当すると考えられる。

高杯脚部（49・59・60・80）

49は、底部径7.2cm、残存高2.6cmを測る。「ハ」字状に開く脚部で、端部は下垂させわずかに丸くおさめる。断面は逆三角形をなす。内外面ロクロナデ調整である。59は、大きく「ハ」字状に開き底部径16.0cm、残存高2.2cmを測る。端部はわずかに外方に摘み出し平坦な面を付ける。内外面ロクロナデ調整である。60は、底部径11.8cm、残存高4.0cmを測り、「ハ」字状に開く。端部はさらに開き気味で下垂させて丸くおさめる。脚柱部に、長方形透かしを有している。内外面ロクロナデ調整である。80は、底部径10.6cm、残存高1.1cmを測り、大きく開いた裾部である。端部は上下に摘み出す。内外面ロクロナデ調整である。これらの脚部は概ね陶邑編年第II型式第５～６段階に相当するものと思われる。

鉢（100）

100は、把手付の鉢で口縁部を欠く。胴部最大径21.4cm、残存高は11.8cmである。平坦な底部より、丸い胴部へと続き、肩部で内方に屈曲しさらに屈曲して口縁部にいたる。胴部の最も張りだした部位に２方向の把手を付けたものと思われる。底部外面から胴部の１／４にかけてヘラケズリを行なう。胴部外面はロクロナデを施す。胴部内面の上半はロクロナデ、下半と底部内面は不整ナデである。この鉢は、その特徴から概ね８世紀代の所産と考えておきたい。

壺（25・28・29・47・78・79・99）

25は、ＳＤ－０３付近の遺構面より出土した小壺である。胴部最大径8.5cm、残存高7.1cmを測る。丸底の底部より、内湾して立ち上がる胴部から肩の張る肩部に続く。頸部は屈曲し、逆「ハ」の字に開き口縁部へ続く。内外面ロクロナデ調整を施す。28・29は、ＳＤ－０３（山ノ上33号墳）の底部より出土したものである。28は、口径12.1cm、器高7.7cmを測る短頸壺である。やや丸底気味の底部より、内湾気味に立ち上がる体部をなし、体部上部でさらに内湾したのち屈曲して口縁部に続く。口縁端部は丸くおさめる。体部はやや歪な感を与える。内外面ロクロナデ調整を施す。29は、口径5.8cm、器高8.8cmを測る短頸壺である。平坦な底部よりわずかに内湾して立ち上がる体部をなし、胴部上半から丸みを帯びた肩部に続く。肩部よりわずかに屈曲して内傾気味の口縁部に続く。口縁端部は丸くおさめる。底部外面は、ヘラ切り離しののち屈曲部の内側にヘラケズリを施す。全体に剝落が著しく調整は不明であるが、内外面ロクロナデ調整と思われる。47は小壺の口縁部で、口径5.8cm、残存高2.6cmを測る。やや外傾する口縁部で、端部は丸くおさめる。内外面ロクロナデ調整を施す。78は、広口壺の口縁部下半から頸部にかけての遺存である。頸部径8.4cm、残存高4.7cmを測る。逆「ハ」字状に開く口縁部から、丸みを帯びた肩部に続くものと思われる。口縁部外面のほぼ中央部に１条の櫛描波状文を施す。内外面ロクロナデ調整を施す。79は、長頸壺の口縁部と思われる。口径11.4cm、残存高3.0cmを測る。逆「ハ」の

字に外傾する口縁部で、端部は丸くおさめる。内外面ロクロナデ調整である。99は、台付長頸壺の体部下半である。高台径11.0cm、残存高9.0cmを測り、残存する胴部最大径は15.0cmである。平坦な底部より外傾気味の体部に続く。底部の屈曲部に高台を貼りつける。内外面ロクロナデ調整を施す。

25・28・29は、その特徴から陶邑編年第II型式第6段階に相当する。47・78・79もほぼ同時期と推定される。99は、陶邑編年第IV型式第3段階以降の所産と思われる。

横瓶（52・77・83・95・98）

52は、2号窯作業面に位置するP001より出土した。口径13.8cm、胴部長径48.0cm、短径29.3cmを測る。器高は34.3cmである。ほぼ完形で、やや胴の張る長円形を呈する。口縁部は、わずかに直立する頸部より逆「ハ」字状に外傾する。端部の外側を外方に摘み出し、内側に段をつける。口縁部の接合は、胴部に穿孔したのち差し込んでナデつける。胴部の他方は、円盤充塡である。口縁部内外面ロクロナデ調整を施す。胴部外面は平行タタキメののち縦回りのカキメを施す。胴部内面は、同心円タタキメを残す。77は、横瓶の口縁部と思われる。口径12.6cm、残存高3.2cmを測る。逆「ハ」の字にやや外反する口縁部で、端部は平坦な面をつける。内外面ロクロナデ調整である。83は、口縁部径11.0cm、残存高8.2cmを測る。胴部はやや肩が張り気味である。口縁部は、内傾気味の頸部より外反して口縁端部に続く。端部は玉縁状をなし丸くおさめる。口縁部内外面ロクロナデ調整を施す。胴部外面は、平行タタキメののち縦方向のカキメを入れる。胴部内面は、青海波文タタキメを残す。95は、横瓶の口縁部と思われる。口径10.4cm、残存高4.9cmを測る。わずかに外傾気味に直立する口縁部で、端部は面をなしやや凹を持つ。内外面ロクロナデ調整である。98は、口径11.0cm、残存高5.3cmを測り、口縁部と胴部の一部の残存である。胴部より「く」の字に屈曲した頸部から外傾する口縁部に続く。口縁端部はわずかに上方に延び、丸くおさめる。端部の外側を肥厚させる。口縁部内外面ロクロナデ調整で、胴部外面は平行タタキメ、内面は同心円タタキメを残す。

52・77・95は、その特徴から陶邑編年第IV型式第1段階に相当するものと思われる。83・98は、陶邑編年第III型式第1段階併行時期と考えられる。

甕（48・97）

48は、1号窯前庭部の北側の遺構面より出土した。口径22.0cm、残存高16.4cmを測り、胴部最大径は36.6cmと推定される。丸みを帯びた肩部より、「く」の字に屈曲して立ち上がる頸部から大きく開く口縁部に続く。口縁端部は外反を強め、端部を上下に摘み出すことにより下垂する。上端部はやや凹む。口縁部内外面ロクロナデ調整を施す。胴部外面は平行タタキののち横方向のカキメを行なう。胴部内面は車輪文タタキメを残す。97は、口径18.5cm、残存高5.3cmを測る。胴部より「く」の字に屈曲して口縁部に続く。口縁端部は丸

くおさめる。頸部・口縁部内外面ロクロナデ調整を施す。肩部外面の上半は、頸部の回りを周回させる平行タタキメを施し、その下側には横方向のカキメを行なう。内面は、青海波文タタキメを残す。

遺物の特徴から97は陶邑編年第II型式第6段階に、48は同第IV型式第3段階に相当するものと思われる。

第3節　平成4年度の調査

平成4年度は、丘陵上に位置する古墳の調査を行なった。平成2年度に行なった試掘調査の結果により、D・E・F・H地区がその対象となった。D地区：4基、E地区：2基、F地区：1基、H地区：2基の調査を行なった。調査の結果、古墳の所属する年代は、古墳時代中期から古墳時代後期後半代に造営されたことが知られた。また、古墳の調査中に、墳丘の下に窯跡の存在することが知られた。このことにより、周辺部の試掘調査を行ない、新たに4基の窯跡を確認するにいたった。これらの窯跡の調査は、関係各機関との協議により、次年度に実施することとなった。

1．山ノ上15号墳（第50・51・54～57図、第25・26表、図版17～19・55）

1）位置と現状

山ノ上通山遺跡の中央部を、南東に延びる丘陵の先端部にD地区が位置する。このD地区の南東部に、15号墳は立地している。

D地区の東側は既に工場建設に伴い、丘陵斜面の開削が行なわれており、丘陵頂部の平坦部が辛うじて残存する状況にあった。丘陵斜面の開削は東側のみならず、南側斜面部に於いても同様で、本来の山容を著しく変容させていた。この為、丘陵上に営まれていたであろう古墳の数基は、既に消滅したものと考えられる。

15号墳は、墳丘の南側の一部が丘陵斜面部の開削による土砂採取により崩壊していた。東側においては、周溝外堤部の一部を失っている程度であった。墳丘の頂部は、明らかに後世の削平を受けており平坦面をなしていた。

2）墳　丘

地山整形

本墳は、丘陵頂部の平坦面に構築されている。このため墳丘の周囲を、幅1.2～1.85m、深さ0.4mの緩やかな「U」字状の溝を掘り下げ周溝としている。溝の北側は、隣接する16号墳の周溝を一段低く掘削している。溝の南側は、丘陵斜面の等高線が減じていくに連れてその深さも浅くなり、南西部で一部消滅する。墳丘の南側は、開削により消失しているため不明である。墳丘基底面は、周溝掘削に際して旧表土面を一部削平する程度で、削平

面も緩やかな傾斜をつけるものの殆ど平坦である。墳丘の南側は若干の盛り土を行なって基底面を作っている。墳丘の北側は自然地形をそのまま利用している。

墳　丘

本墳の墳丘は、マウンドとしての体裁をよく整えて良好な状態で遺存していたが、墳丘盛土の多くは後世の削平により失っていた。削平は、墳頂部の南側で顕著であった。墳丘盛土は、墳丘断割りトレンチによって観察することが出来た。それで見ると、墳丘は基本的には旧表土面を基底となし、周溝掘削面より盛土を行なう。

墳丘の盛土は、基本的には周溝掘削時に生じた地山土を盛り構築したものと思われる。このため層序の確認には不明瞭な部分も伴ったが、その築造過程は概ね2段階に分けられる。第1段階は墓壙掘り下げをはじめる地点までの盛土で、第2主体が最初に作られる。第2段階は、第2主体の埋葬が終了したのち、埋葬施設の上部を覆う盛土を行ない墳丘の体裁を整える。この盛土は、墳丘基底部より40cm以上の厚さで覆っていたものと考えられる。第1主体は、この盛土が完成したのち再度墓壙掘り下げを行ない、埋葬行為を営んでいる。

墳丘の裾線は、径約11mの円形を呈していた。周溝外堤部での径は約14mを測る。

3）埋葬施設

本墳の埋葬施設は、墳丘の中央部とやや北に偏した位置に営まれた2基の木棺墓であった。この2基の木棺墓は、盛土面より掘り込んで二段掘りの隅丸長方形の墓壙を作り、その中心部に木棺を埋置していたことが判明した。

第1主体　本墳での埋葬順位は、第2主体に次ぐものであるが、墳丘平坦部の中心に位置し規模も大きいことから考えて15号墳の中心主体となるものである。

墓壙掘り方は、長辺2.97m、短辺1.07m、深さ0.37mを測る狭長な隅丸長方形をなす。墓壙の主軸方位は、N－67°－Wである。この墓壙の中央に、内法長2.45m、幅0.27～0.38mの箱形木棺を埋置し、頭位を西に向けたものと思われる。墓壙内には、北側の長側辺と、東西の小口側にテラスが作られている。北側のテラスは、幅20.0～40.0cmを測り、小口側では14.0～22.0cmである。南側でも同様のテラスを有していたものと思われるが、後世の削平により消失している。墓壙内の北側テラスの東寄りに赤色顔料と思われる土塊が、（11×7×3）cmの範囲で検出された。墓壙底の東側においては、長側板と小口板を安定化させるための浅い溝が作られていた。この溝により、長側板を小口板で支える構造であることが知られる。溝底部の幅は約3cmを測ることから、側板及び小口板の厚さを示していると考えられる。この厚さは、後述する鉄刀の出土状態が、墓壙壁面と約3cmの距離を保っていることと合致する。

棺内遺物として、南側の長側辺に沿い、墓壙底より若干浮いた状態で鉄刀（第57図、11）

が検出された。切先を西にし、刃部を下方に向ける。また、墓壙上面において供献土器が見られた。供献土器は、墓壙上面の窪みに堆積した黒褐色土中より土師器高杯（第57図、1～5）がみられた。この高杯は、表面が著しく風化しており、かなりの長期間地表面に露呈していたことが窺われる。1・2は、脚部と受部が分離して出土したが、ほぼ正置状態であった。他の高杯も40～50cmの範囲で出土しており、本来の供献状態を示すものと思われる。

第2主体　第1主体の北側に位置する。南側の墓壙壁は、第1主体に切られている。墓壙掘り方は、長辺2.15m、短辺1.05m、深さ0.34mを測る隅丸長方形をなす。墓壙の主軸方位は、N－68°－Wを測る。この墓壙の中央に、内法長1.54m、幅0.39～0.51mの木棺を埋置し、頭位は西向きと思われる。木棺の長側板と小口板の周囲に、テラスを設けている。北側のテラスで10～21cm、南側では16～25cm、東側で16～21cm、西側では12～15cmを測り、南側のテラスが若干広く作られている。木棺は、長側板を小口板で挟み込んで固定している。墓壙底南側の両サイドに幅約3～4cmの溝が遺存しており、長側板を固定するためと思われる。小口板は、東側のそれは挟み込んだ長側板の外側にはみ出し、墓壙壁の両側に刳り込みを入れるが、西側では他方のみはみ出させている。小口板を填め込む溝は作られていないが、西側小口の壁面から底部にかけての一部に粘土塊が遺存していた。この粘土塊は小口板を固定化させる装置と思われる。墓壙内埋土の土層観察によれば、小口板の厚さは4～5cmと想定される。

4）出土遺物

本墳で出土した遺物は、第1主体墓壙内より鉄刀1、墓壙上面より土師器高杯5、周溝内から土師器甕1、須恵器瑳2、杯蓋2等が見られた。また墳丘基底部をなす旧表土中より石鏃・黒曜石片も検出された。

土師器高杯（第57図1～5）

1は、口径15.5cm、器高12.0cm、底部径10.6cmを測る。「ハ」字状に開く脚台部より、すぼまり気味に立ち上がる脚柱部に続く。受部は、平坦な底部より屈曲したのち大きく外傾する口縁部へ続く。口縁端部は丸くおさめる。受部内面はわずかにカーブを描き浅い椀状を呈する。脚柱部の外面はヘラ先で撫でつけるため、縦方向のヘラミガキ状の面を持ち多角形をなす。受部内面は、円盤充塡である。受部内外面と脚部外面はヨコナデ調整ののち赤彩を施す。脚部内面はヘラケズリを施し、内面の上半は絞り込みののちにケズリを行なう。2は、口径15.2cm、器高10.7cm、底部径9.4cmを測る。「ハ」字状に開く脚台部より、すぼまり気味に立ち上がる脚柱部に続く。受部は、平坦な底部より内湾気味に立ち上がり口縁部へと続く。口縁端部はやや面を付けるが丸くおさめる。脚部は、受部底部外面に塡め込む。口縁部内外面と脚部外面は、ヨコナデ調整ののち赤彩を施す。脚部内面の上半は

絞り込みが見られ、下半はヘラケズリののちナデを行ない赤彩を施す。3は、口径14.3cm、残存高5.9cmを測る受部である。丸みを帯びた底部より、内湾気味に開く口縁部へ続く。口縁端部は丸くおさめる。脚部を失うが、差し込み式で底部中央の孔は、粘土棒を回転を利用して押し込む。そののち脚部側より棒状の工具によりさらに下側から押し込んで仕上げる。内外面ヨコナデ調整ののち赤彩を施す。4は、口径14.8cm、残存高6.6cmを測る受部である。丸底気味の底部より僅かに内湾しながら立ち上がる口縁部へ続く。口縁端部を欠く。脚部を失うが、底部内面の中央を穿孔し、差し込んで接合する。孔の充塡は（3）と同様である。受部内外面ヨコナデ調整ののち赤彩を施す。5は、口径14.4cm、器高6.7cm、底部径6.0cmを測る低脚杯である。「ハ」字状に開く脚台部より外反気味の短い脚柱部へ続く。受部は、平坦な底部より内湾気味に立ち上がる口縁部に続き、端部は丸くおさめる。脚部外面は指押さえを残す。内面は工具で全周を段階的に撫でるため、ナデの単位が残る。受部内外面、脚部外面はヨコナデ調整ののち赤彩を施している。

土師器甕（第57図6）

周溝北側の外堤寄りの底部より出土した。口径13.5cm、残存高9.1cmを測る。丸みを帯びた肩部より「く」の字に屈曲して口縁部に続く。口縁部下端はやや肥厚し、複合口縁の名残を残す。口縁端部はやや尖り気味で内側に面を持つ。体部下半を欠くが、球形の胴部をなしていると思われる。土器表面の剝離が著しく調整は不明だが、口縁部内外面ヨコナデ、肩部外面は縦と横方向のハケメを施している。肩部内面はヘラケズリと思われる。

須恵器𤮔（第57図7・8）

墳丘北西部の周溝底部より出土した遺物である。7は、口径9.5cm、残存高10.7cmを測る。底部を欠くが丸底をなすと思われる。体部下半は内湾気味に立ち上がり、やや肩の張る肩部に続く。頸部は「く」の字に屈曲し外反して立ち上がり口縁部に続く。口縁部下端にシャープな稜を付け外傾気味に口縁端部へ続く。口縁端部は丸くおさめる。体部の張り出し部分は、器高の約1／2にあり全体にややバランスが悪い感を与える。この部分に穿孔されたものと思われるが欠失しているため不明である。口縁部、頸部内外面ロクロナデ調整。頸部外面はナデ調整ののち13条の櫛描波状文を施す。頸部内面の下端部分は工具による不整ナデを行なっている。体部内面はナデ調整を行ない、底部内面に指押さえを施している。体部外面ロクロナデ調整ののち、体部の張り出し部分の上下にヘラケズリを行ない、突帯状の凸部を造り出している。この凸部に10条の櫛描波状文を施す。この部分に穿孔したものと思われるが欠失している。底部外面には平行タタキメを残す。8は、肩部と頸部を欠くが大形の𤮔と思われる。口縁部は、口径15.2cm、残存高2.9cmを測り、体部最大径は23.9cm、残存高約16.5cmと思われる。体部は倒卵形をなす。口縁部は外反し、端部に面を付ける。端部の僅かに下方に1条の突帯をめぐらす。口縁部内外面ロクロナデ調整を行ない、

外面の突帯の下側に11～12条の櫛描波状文を施す。体部内外面ロクロナデ調整ののち、体部張り出し部のやや上方に２条の沈線を廻らし、その間に10条の櫛描波状文を施す。体部下半から底部にかけての外面は平行タタキメを施す。底部内面は、当て工具痕を残す。

須恵器壺蓋（第57図９・10）

９・10は、周溝検出面よりの出土である。９は、口縁端部を欠き残存高2.6cmを測る。平坦な天井部より「L」字状に屈曲して口縁部に続く。天井部外面は、ヘラ切り離しののち未調整である。天井部内面及び口縁部内外面はロクロナデ調整を施す。10は、口縁端部を欠き残存高2.0cmを測る。平坦な天井部より屈曲して口縁部に続く。天井部外面は、自然釉が付着し調整は不明である。天井部内面、口縁部内外面はロクロナデ調整を施す。

鉄刀（第57図11）

第１主体の木棺内出土遺物である。全長54.6cm、刀身長42.2cm、身元幅2.9cm、背幅0.9cm（関側）・0.5cm（鋒側）・0.8cm（中央）、茎長12.4cm、茎中央幅1.4cm、茎尻幅1.4cm、背関幅0.3cmを測る。関は、両関で鍔を装着していたものと考えられその厚さは９㎜を測る。刀身は、木質が遺存していることから鞘を装着していたものと考えられ、その外側には紐巻きが施されていた。茎には、目釘孔が２ヵ所認められる。茎には柄が装着され、紐による巻締めが施されている。全体に錆化が進んでいるが、比較的良好な状態で出土している。

以上の遺物の観察から、本墳の築造時期を考えてみたい。

土師器の特徴を見た場合、鳥取市岩吉遺跡における岩吉遺跡土器編年のⅧ期新段階に該当し、岩吉遺跡ＳＤ－０３併行時期に相当するものと思われる。須恵器瑳は、その特徴から陶邑編年第Ⅰ型式第５段階併行時期（田辺編年でいうＴＫ208）が考えられる。

遺物の所属する年代からみて、概ね古墳時代中期後半代には15号墳の造営が終了していたものと考えられる。

２．山ノ上16号墳（第50・51・58～64図、第27～34表、図版17・19～21・55）

１）位置と現状

Ｄ地区に位置し、15号墳の北側に立地する。本墳の北には32号墳が隣接する。墳丘の東側は、既に丘陵の開削により失っていた。墳丘の頂部は平坦面をなしており、後世になんらかの削平が行なわれたものと思われた。

２）墳　丘

地山整形

本墳は、丘陵頂部の平坦面に構築されている。このため15号墳と同様、墳丘の周囲を幅1.0～2.0m、深さ0.4mを測る緩やかな「U」字状の溝を掘り下げて周溝を作っている。溝の北側は、隣接する32号墳の周溝を切り、一段低く掘り下げている。墳丘基底面は、旧表

土をベースとし、周溝掘削に際し溝の内側を削平するのにとどまる。これは、本墳の位置が丘陵頂部のほぼ水平面に構築されたため、地山整形の必要性が余り無かったものと思われる。

墳　丘

本墳の墳丘は、古墳のマウンドとしての体裁を良好な状態で残していたが、墳丘盛土の上半は後世の削平によって失っていたことが知られた。この削平は、墳頂部の南側で顕著であり、ほぼ水平な平坦面を作っていた。本墳は、旧表土面より盛土が行なわれており、墳丘の縦横に設けた断割りトレンチによってその状況を窺い知ることが出来た。それによると墳丘は、旧表土面を基底と為し周溝掘削面ぎりぎりより盛土を行なう。

墳丘盛土は、周溝掘削時に生じた地山土を主にして盛り上げ構築している。このため層序の確認には不明瞭な部分も伴ったが、その築造過程は基本的に２段階に分けて行なわれたものと考えられる。第１段階は、墓壙掘り下げにかかわる面まで行ない、埋葬が終了したのち再度盛土を施して墳丘の体裁を整えたものと考えられる。この盛土は、墳丘の東側で見ると、墓壙検出面までの厚さが45cmあり、本来は墳頂部まで凡そ80～90cmの盛土が施されたものと思われる。

墳丘の裾線はやや南北に長い円形を為し、長径15.0m、短径は推定約14.0mを測る。

３）埋葬施設

本墳の埋葬施設は、墳丘のほぼ中央部に２基の木棺墓が作られていた。これらの木棺墓は、盛土面より掘り込まれ、二段掘りの隅丸長方形の墓壙を作り、その中央に木棺を埋置していた。

第１主体　墳頂部中央の北側に位置する埋葬施設である。墓壙掘り方は、長辺3.59m、短辺1.64m、深さ0.34mを測り、その主軸方位は、N－69°－Wである。この墓壙の中央に、内法長2.98m、幅0.47mのやや舟底状の箱形木棺を埋置し、頭位を西に向けたものと思われる。墓壙内には木棺の周囲にテラスが設けられている。北側のテラスは、幅32～45cm、南側で28～45cmを測る。小口側では、東側で22cm、西側では25～35cmを測る。木棺の両小口側には、小口板を設置するための溝が掘り込まれている。此れにより第１主体の木棺は、両側板を小口板で挟み込む所謂梯子型を為すことが知られた。両側板に挟まれた木棺底部は、判然としないがその断面は「U」字状を呈しており、所謂舟底型の木棺であると考えられる。

棺内出土の遺物として、墓壙底の西側において約200個余りのガラス小玉が検出された。このガラス小玉は、大きいもので径約４㎜程度で、その多くは２㎜前後であった。検出状態は、棺の中央部より西側小口板までの間に東西約45cm、南北約18cm、厚さ約10cmの範囲で散在していた。被葬者に装着したのではなく棺上に供献したものと思われる。この他に

は、土師器片が見られたが、細片であるため棺内への流入土に混在していたものと思われた。また、西側小口板の底部より刀子が検出された。この刀子は、小口板の方向に沿って出土し、刃部を北側に向けていた。出土した地点は小口溝であったが、本来、木棺内の西端部分に納められていたものが小口側に転落したものと思われる。

第２主体　第１主体の南側に位置する。墓壙掘り方は、長辺2.93m、短辺1.11m、深さ0.19mを測り、その主軸方位はN－80°－Wである。墓壙の中心には、内法長2.69m、幅0.33mの割竹形木棺もしくは舟底形木棺を埋置していた。墓壙内には、東端部に小口溝が穿たれている。西側には小口板の設置が認められないことから、東側のみ閉塞したものと思われる。木棺の南北と西側にテラスを作っている。北側のそれは、幅21～35cm、南側で30cm、西側においては５cmを測る。木棺の厚さは、土層断面の観察により約３～４cmと推定される。

第２主体よりの棺内遺物の出土は見られなかった。

４）出土遺物

本墳での出土遺物は、第１主体墓壙内より刀子１、ガラス小玉約200、周溝内から土師器椀１、須恵器瑳１、甕胴部片１等が見られた。

土師器椀（第61図２）

墳丘北側のやや東寄りの周溝外縁部より出土した。口径13.0cm、器高6.0cmを測り完形品である。丸底の底部より内湾気味に立ち上がり口縁部で僅かに内傾して直立する。口縁端部は内側にやや面を付ける。口縁部内外面ヨコナデ調整を施す。体部外面は不整なハケメを施している。底部内面には指押さえを残す。体部外面には赤色塗彩を行なっている。

須恵器瑳（第61図１）

墳丘西側の周溝埋土上層より出土した。口縁部片のみの出土であるが、瑳の口縁部と思われる。口径9.6cm、残存高2.0cmを測る。口縁部は、やや外反気味に端部につづき丸くおさめる。口縁部下端に稜をつける。口縁部内面では、頸部に連続する部分において僅かに屈曲している。口縁部内外面ロクロナデ調整である。

刀　子（第62図４）

第１主体墓壙内の西側小口溝より出土した。切先と茎尻を欠損する。残存長5.85cm、刀身部残存長3.1cm、刀身元幅1.0cm、背幅0.4cm、茎残存長2.75cm、茎中央幅1.0cmを測る。茎には木質が遺存しており、木柄を装着していたと考えられる。

ガラス小玉（第63・64図１～188）

第１主体の墓壙底部より出土した。小玉の長さは0.9～4.55mmで、平均値は1.41mmである。外径は、1.1～6.25mmで、平均値は2.27mmである。孔径は、0.5～1.45mmで、平均値は0.83mmである。重量は、２～83mgで、平均値は9.64mgを測る。ガラスの色調は、藍色、淡青色、

淡緑色、濃藍色等が主体で、濃赤灰色を呈するものも見られた。

以上の出土遺物の観察により、16号墳の築造年代について考えてみたい。

土師器椀の特徴は、岩吉遺跡土器編年に見るⅧ期古段階と併行する時期が考えられることと、須恵器瑳の所属する年代が陶邑編年第Ⅰ型式第4段階併行時期に比定出来ることで、概ね古墳時代中期中葉には造営が完了したものと思われる。

3．山ノ上25号墳（第50・51・65・66図、第24表、図版17・21）

1）位置と現状

D地区の南西部に位置する。遺跡内の工場建設に際しての丘陵部開削のため墳丘の大半が削平されていた。平成2年度の試掘調査において、周溝の一部が検出されその存在を知ることとなった古墳である。古墳は、丘陵が斜め方向に削平されているため、周溝の北側の一部が確認されたにすぎない。

2）墳　丘

本墳は、既に墳丘の大半を失っているため地山整形の有無は判然としない。周溝断面の層序確認において、僅かに遺存していた墳丘の一部に盛土が1層確認できた。それによると、地山面を基底としていることが判明した。周溝は、地山面に灰褐色粘質土の盛土を行なったのちに掘削したものと思われる。周溝は、全周の約1／3が遺存し、幅 1.9m、深さ0.8mを測る。墳形は円形をなし、墳丘裾線よりの径は9mと推定される。

遺存していた周溝の東側より、一旦北方向に延びたのち屈曲し北東に登る道状遺構が確認された。この遺構は、緩やかな浅い「U」字状を呈しており、全長12m、幅1～1.3m、深さ0.2mを測る。出土遺物は見られず性格も判然としないが、D地区における墓道としての可能性を考えておきたい。

3）出土遺物

本墳の出土遺物は、周溝底部より土師器甕が見られたが、磨滅が著しく図化できなかったが、概ね古墳時代中期後半から後期前半にかけての所産と思われる。

4．山ノ上32号墳（第50・51・67～72図、第35・36表、図版17・22・23・56・57）

1）位置と現状

D地区の最も北側に位置し、南側には16号墳が隣接する。本墳は、今回の調査中に新規発見した古墳である。前述した古墳を調査するにあたり、周辺の抜開作業を行なったところ古墳状の高まりを確認するに到ったものである。墳丘の大半は、既に削平を受けており殆ど平坦面をなしていたが、周溝の存在を示唆する浅い溝状の窪みが弧を描いて廻っていることが確認された。墳丘の西側には土塁状の高まりが見られる。この高まりは、16号墳

の西側辺りよりD地区の立地する丘陵の基部辺りまで連続している。この土塁状の高まりと、墳丘盛土の削平とに何等かの因果関係がある可能性が考えられる。ただ、この土塁状の高まりがいつの時代に構築されたかは不明である。

2）墳　丘

本墳は、丘陵頂部北側の平坦面に構築されている。東側は、丘陵の東斜面に連続している。墳丘の周囲を、幅2.2m、深さ0.3～0.6mの緩やかな傾斜で「U」字状の溝を掘り下げ周溝としている。周溝の南側は、隣接する16号墳造営に際し削りとられている。墳丘基底面は、旧表土面を基底とし盛土を行なうが、本墳では墳丘の大半が削平を受けているため、辛うじて1層のみ遺存していたにすぎない。此れにより、墳丘上に営まれていたと思われる埋葬施設は検出され得なかった。

検出した周溝は、その埋土の状況により本墳が二度以上にわたり造営が行なわれていたことが知られた。埋葬施設が検出されていない状況では確たることは論じ得ないが、一次造営が終了したのち二次造営を開始する際に、周溝を埋め戻して行なっていることが土層断面の観察により明らかとなった。

3）出土遺物

本墳より出土した遺物は、墳丘斜面部で検出されたものも見られたが、大半は周溝内より齎らされたものである。それによると須恵器樽型瑳1、瑳1、杯蓋2、杯2、高杯1、大形甕1などであった。

須恵器樽型瑳（第72図1）

この樽型瑳は、二次造営に伴う供献土器と思われ、墳丘北側の周溝内に破砕され散在した状態で検出された。検出状況は、墳丘の北西部の周溝内に集中していた。

口径11.5cm、器高20.1cmを測り、体部は比較的細長く中央部がやや太い。体部は、右側の粘土板を中心に粘土を巻き上げて成形し、左側は円盤で充塡する。口頸部は、体部中央に差し込み接合を行なう。頸部はやや外反し、1条の突帯を廻らし外傾する口縁部へと続く。口縁部の上端は、平坦な面をなす。口頸部は、ナデ調整ののち口縁部外面に櫛描波状文を施す。体部は、2条の突帯を5ヵ所に廻らし6区画に分けて施文している。右側と中央の3区画が櫛描山形文（鋸歯文）で、他の区画は櫛描波状文である。体部中央部分の3区画の上方に三角形のヘラ描き文を施している。体部の両端部分には、渦巻き状のカキメを施したのち、5～6本単位のカキメを放射状に入れる。色調は、外面が暗灰色～褐灰色、内面は青灰色を呈する。体部上半と口頸部内外面に自然釉が付着する。

須恵器瑳（第72図2）

墳丘北西部の端部で出土し、口径10.3cm、残存高2.5cmを測る瑳の口縁部である。口縁部下端に1条のシャープな突帯を廻らし、外面にやや脹らみをもつ口縁部は外傾気味に開く。

口縁端部は僅かに外方に摘み出し、内側は僅かに浅い沈線状の凹みをつける。口縁部内外面はナデ調整ののち、口縁部と頸部外面に櫛描波状文を施している。色調は、灰白色を呈し、堅緻な焼成である。

須恵器壺蓋（第71図６、第72図４）

４・６は、周溝埋土上層より検出された遺物である。４は、口径12.6cm、器高3.7cmを測る。平坦な天井部よりなだらかに口縁部へと続き、口縁部は垂下する。口縁端部は面をなし、外方に肥厚させる。天井部外面は、ヘラ切り離しののちナデ調整を行なう。繊維痕多数を残す。他は、内外面ロクロナデ調整である。６は、周溝埋土上層から出土し、口径10.2cm、残存高 2.9cmを測り天井部を欠損する。なだらかな天井部から僅かに外方に開く口縁部に続き、口縁端部は丸くおさめる。内外面ロクロナデ調整を施す。

須恵器杯（第71図５、第72図３）

３・５は、周溝埋土中より検出された。３は、口径13.8cm、受部径14.2cm、器高2.9cmを測る。平坦な底部より、緩やかに立ち上がり受部はほぼ水平をなし、端部は丸くおさめる。立上りは短く内傾し、端部はやや先細り気味に終わる。底部外面の１／３以下にヘラケズリを行なう。他は、ロクロナデ調整である。５は、口径12.4cm、受部径14.7cm、残存高 3.1cmを測る。平坦な底部より緩やかに立ち上がり受部は外方に摘み出す。立上りは、内傾気味に短く立ち上がり端部は丸くおさめる。立上りは３と同様貼り付けである。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面はヘラケズリを行なう。

須恵器高杯（第71図８）

周溝埋土上層より検出された。底部径10.7cm、残存高 4.5cmを測る。「ハ」字状に開く脚柱部より大きく外反する脚部へと続く。端部はさらに外反させ斜め上方に摘み出す。内外面ロクロナデ調整である。

須恵器甕（第71図７）

甕の口縁部片である。外反する口縁部で、外面には沈線を廻らしその間に櫛描波状文を施している。

以上の出土遺物の観察により、32号墳の築造時期について考えてみたい。

まず、樽型瑯・瑯口縁部と他の遺物との年代観の差が大きく感じられる。これは、前述の如く造営時期が二度以上にわたり行なわれた結果と思われる。樽型瑯と瑯は、その特徴から、陶邑編年第Ｉ型式第１段階（田辺編年でいうＴＫ73）に相当し、あるいはこれに先行する時期のものとの考えも指摘されている。概ね古墳時代中期前半（５世紀初頭～前半）以前には、本墳の築造が開始されたものと考えられる。その後、停滞時期を挟んで須恵器杯（３・５）の相当する時期すなわち、陶邑編年第II型式第５段階に最終造営が行なわれたと思われる。この最終造営は、概ね７世紀初頭が考えられる。

5．D地区、遺構外出土遺物（第52図１～４、第53図５、第23表、図版57）

D地区内に立地する古墳の周溝外縁部より外側で検出された遺物が該当する。検出した遺物は、その殆どが表土下の遺構面より出土したものである。ここでは図化していないが、25号墳の東方の丘陵斜面部において土師器甕と鉄滓の出土が認められたが、それに関連する遺構の確認は出来なかった。また、丘陵の基盤層の上部を覆っている火山灰層を地山として認識したが、この地山層中よりサヌカイト製の石鏃や剝片及び黒曜石片等の出土が確認された。

１・２は、須恵器杯蓋である。いずれも表土下層の遺構面より検出された。１は、口径13.5cm、残存高2.8cmを測り、内湾気味の口縁部である。端部は丸くおさめ、内外面ロクロナデ調整を施す。２は、口径10.9cm、残存高2.0cmを測り、なだらかな天井部より垂下する口縁部に続く。端部は僅かに外方に開き丸くおさめる。３・４は、高杯の脚部で同一個体と思われる。底部径11.2cm、残存高6.3cmを測る。３の残存高は4.0cmである。「ハ」字状に開く脚柱部より屈曲して端部へと続く。脚端部は、上方につまみ上げる。端部外面に２条の沈線をめぐらす。脚柱部には、三方に長方形の透かしを入れる。内外面ロクロナデ調整ののち、外面にカキメを廻らす。５は、16号墳西隣りの地山面より検出された石鏃である。これは、15号墳の墳丘基底をなす旧表土のベースとなる地山中で検出された石鏃片と同様のものである。所謂凹基無茎鏃の石鏃で残存長1.45cm、残存幅1.5cmを測り、サヌカイト製である。

6．山ノ上28号墳（第73～77図、第37表、図版24～27）

1）位置と現状

D地区の西側に位置する丘陵の尾根先端部に立地する。この尾根が分枝する丘陵頂部のピークより、やや急傾斜の斜面を下り標高約124.0mで平坦部を作り出し、本墳が構築されている。本墳よりさらに一段低い位置に29号墳が南隣りに位置する。また、本墳の東側の丘陵斜面部にL地区が隣接する。

2）墳　丘

地山整形

本墳は、やや急傾斜の尾根上に平坦部を作り出して構築している。この平坦部は、尾根の上方と両側の斜面部より土砂の採取を行ない構築したものと思われる。地山整形は特に行なわず、盛土のみで構築している。本墳に伴う周溝も見られず、丘陵尾根を断ち切る堀割り状の遺構も認められなかった。ただ、墳丘の北東部において、等高線が弧状を描く部分が認められることから、墳丘の裾線をなしていた可能性が指摘される。また、この部分

では黒褐色土を埋土とする浅い溝が南東に延びている。この溝は、墳丘下部で検出された須恵器窯が、廃棄されたのちに形成された窪みに腐葉土が堆積した結果とも考えられる。しかし、周溝の一部であった可能性も否定できない。

墳　丘

本墳の墳丘は、尾根をカットした平坦部を墳頂部としているため、墳丘としての高まりをなしていない。然し、表土を除去した段階で石棺が露呈したことから、墳丘盛土の上半は流失したものと考えられ、墳頂部は東西約７m、南北約６mの平坦面をなす。墳丘に設けた断割りトレンチの土層観察により、本墳では丘陵の基盤（岩盤層）より盛土が行なわれていたことが確認された。

墳丘盛土は、橙色砂質土、暗褐色砂質土を主とした風化土で構築しており、層序の確認には不明瞭な部分も伴った。墳丘の南西部より、基盤層に掘り込まれた溝状遺構が、弧状を描きながら北西部に延びたのち屈曲し、北側でさらに屈曲して丘陵上部に続くことが確認された。この溝は、墳丘盛土で覆われていることから本墳築造以前の遺構であることが知られた。

また、墳丘東側に設けた断割りトレンチ内で、墳丘盛土の下部に於いて須恵器窯が検出された。この須恵器窯は、その上面を28号墳の墳丘盛土が被覆した状態で検出された。

墳丘の裾線は、明瞭な墳丘基底部を確認することは出来なかったため不明である。しかし、東側斜面部において若干の傾斜変換点が見られることから、この部分が墳丘基底部をなすものと思われる。墳丘は、やや東西に長い径約15m、高さ約２mの円形墳をなしている。

３）埋葬施設

本墳の埋葬施設は、墳頂部平坦面の北側において箱式石棺１基が確認された。平坦部の南側において、土層断面観察により墓壙掘り方と思われる土色の変化が見られたが、遺構を確認することはできなかった。

第１主体　墳頂平坦面北側に位置する埋葬施設である。墓壙掘り方は、長軸0.74m、短軸0.45m、深さ0.2mを測る。この墓壙掘り方の内側に、長辺0.71m、短辺0.36m、高さ0.19mを測る小形の箱式石棺が埋置されていた。この石棺の内法は、長辺は推定約0.6m、短辺0.2mを測り主軸方位はN－74°－Wである。石棺の一部は地表面に露出しており表土下数cmで検出されたが、既に蓋石と東側の小口板を欠失していた。墓壙掘り方の北側は、丘陵基盤層である岩盤を掘り込んで作られていたが、他は盛土層より掘り込まれている。南北の長側板は、２枚の板石で構成される。石材の材質は角閃石安山岩で、山ノ上通山遺跡の所在する丘陵の基盤層中に岩脈として存在する。北側の長側板と掘り方の壁面との間には、側板を固定するための裏込め石が埋め込まれていた。南側は、墓壙掘り方の壁面に沿

って側板が立てかけられている。これは、西側の小口板でも同様であり、小口板上端の外側に小石を当て外方に倒壊する事を防いでいる。墓壙掘り方の遺存状況からみて、東側の小口板は、南北の長側板に挟み込まれた状態で組み合わされていたものと考えられる。石棺の床面は、淡黄灰色を呈する粘質土を敷いた粘土床であった。石棺内は既に攪乱を受けており、棺内遺物の検出は見られなかった。

4）出土遺物

本墳の出土遺物は、墳丘の北東側の墳裾部で遺物の出土が確認できたが、後述する4号窯の遺物と混在しており不確定な要素が強く感じられた。その中で、須恵器蓋杯、無蓋高杯、長頸壺の5点が墳裾あるいは墳丘の斜面部で検出されており、本墳の埋葬に関わる遺物として取り上げることとした。

須恵器蓋（第76図1）

口径13.2cm、器高2.3cmを測る。平坦な天井部より内湾気味に口縁部に続く。天井部外面はヘラ切り離しののちヘラケズリを行なう。天井部内面、口縁部内外面はロクロナデ調整を施す。口縁部外面に、杯身の破片が溶着する。

須恵器杯（第76図2・3）

2は、口径13.8cm、受部径15.6cm、残存高3.2cmを測り、底部を欠損する。なだらかに立ち上がり受部は丸くほぼ水平にのびる。立上りはやや短く垂直に立ち上げ、端部は丸くおさめる。立上りは貼り付けによる。口径の大きさに比して器高が低い感を与える。内外面ロクロナデ調整である。3は、口径12.2cm、受部径14.0cm、残存高3.1cmを測り、底部を欠く。やや外傾気味に立ち上がり、受部は水平に伸びやや先細り気味におさめる。立上りは僅かに内傾して立ち上がり尖り気味におさめる。内外面ロクロナデ調整を施す。

須恵器無蓋高杯（第77図5）

口径10.0cm、残存高9.5cmを測り、脚端部を欠損する。「ハ」字状に開く脚柱部で、上半は絞まり気味に立ち上がる。杯部は、やや丸底気味の底部より僅かに外傾する口縁部へ続き、口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面の中央は、ナデ調整による凹線が見られ、下端部分にはシャープな稜をつける。脚柱部には2条の沈線を挟み、二段2方向の長方形透かしを施す。内外面ロクロナデ調整を施し、脚柱部外面には自然釉が一部に残る。

須恵器長頸壺（第76図4）

口径10.1cm、胴部最大径20.5cm、器高21.5cmを測る。丸底気味の底部より胴部下端部分の外面に稜状の段を付け、内湾気味に立ち上がる体部に続く。この体部よりなだらかに肩部に続き、「く」の字に屈曲して口縁部へと続く。口縁部は、一旦外傾気味に立ち上がったのち僅かに内湾して垂直に立ちあがり先細り気味におさめる。口縁端部の内側に平坦な面を斜めに付ける。口縁部外面の中央部に2条の沈線を施したのちカキメを廻らす。肩部下

半から体部の中程までカキメを廻らしている。内外面ロクロナデ調整である。

以上の遺物の観察により本墳の築造時期について考えてみたい。

須恵器蓋杯は、口径に対して器高が低く扁平な印象を与える。無蓋高杯は、脚部を欠損するものの杯部の大きさに比して、脚部が若干大きく脚高もあると思われる。また、壺の全体のフォルムやその特徴からみて、陶邑編年第II型式第4～5段階に相当するものと考えられる。このことから、本墳は概ね7世紀初頭頃には造営が終了したものと思われる。

7．山ノ上29号墳（第78～80図、図版24・27・28）

1）位置と現状

E地区の尾根先端部に位置し、28号墳の南側に立地する。28号墳から本墳へは急傾斜の斜面で接続し、標高約111mの地点で平坦面を作り出している。本墳と28号墳との中間の斜面部において、角閃石安山岩の露頭が出現しているため斜面部に岩屑が散在している状況を呈していた。

2）墳　丘

本墳は、丘陵尾根の長軸方向をカットして平坦面を作り出し、地山整形のみで墳墓の体裁を整えたものと考えられる。表土下5cm程度で遺構面を検出したことで、盛土が施されていたとしてもその大半は流失したものと考えられる。この平坦面は、東西12m、南北4mを測り、その南側は後世の開削を受けている。調査後の等高線の状況をみても、断割りトレンチの土層観察でも墳丘の裾線と思われる部位は確認できなかった。そのため墳丘の規模は不明だが、概ね東西約19m、南北約10mを測るやや歪な円形墳として捉えておきたい。

3）埋葬施設

本墳の埋葬施設は、墳頂部平坦面の東西の両側において集石遺構が確認された。西側の集石遺構は、下部構造が認められたが、東側では遺物と混在した状況で確認されたのみである。

第1主体　墳頂部平坦面の西側で確認された集石遺構である。集石の規模は、東西1.50m、南北1.0m、高さ0.5mを測り、主軸はほぼ東西方位を示す。集石の上部は、石材の長辺を東西方向に向けて積み上げる傾向を示す。その中で中央よりやや東側では南北方向に置くものも見られることで、本来は「コ」状あるいは「□」状の構造をしていた可能性が考えられる。集石遺構は、地山層に淡黄褐色土を盛り、その上に構築されていた。この淡黄褐色土面に接した状態で、集石遺構の下部構造である石列が検出された。石列はほぼ東西方向に並び1.05mを確認した。石列の東端部は、石材の長辺を南北方向に屈曲させて並び換えている。この部位は、上部の集石に見られる如く、南北方向に積み上げた石材の位

置と合致する。この石列の下部構造物すなわち埋葬施設に相当する墓壙掘り方は検出されなかった。集石遺構の南側で、土師器片の出土を見たが細片であるため図化し得なかった。

4）出土遺物

本墳の出土遺物は、須恵器蓋杯、須恵器高台付長頸壺等が確認された。本書では図示しなかったが、高台付長頸壺（郡家町教育委員会発行「花原遺跡群・山ノ上古墳群発掘調査概要報告書」1992、29ページ第16図４参照）は、その特徴からみて、陶邑編年第IV型式第１～２段階に相当するものと思われる。

8．山ノ上30号墳（第81～83図、図版24・25・28）

1）位置と現状

山ノ上通山遺跡の中央を東南に延びる丘陵部の西端に位置し（Ｆ地区）、南側に分枝した尾根の先端部に立地している。北側の丘陵頂部には31号墳が位置する。31号墳の立地する丘陵頂部よりなだらかな傾斜で下り、標高 135m付近で平坦面を造り出している。

2）墳　丘

本墳は、なだらかな傾斜を保った尾根上に盛土を施し、平坦部を造り出し構築されていた。墳丘としての高まりは認められないことから、盛土の大半は流失したものと考えられる。丘陵の基盤層は、風化土を主体としているため墳丘盛土も砂質土を盛り上げ構築している。地山整形は行なわず盛土のみであった。本墳に伴う周溝は、基盤層に掘り込まれた浅い溝状の遺構が確認された。この溝は、墳丘の南側より東側に弧を描いて廻り、墳丘北側でやや向きを変え北方に延びている。現段階ではこの溝を墳裾と考えるのが妥当と思われる。墳丘盛土は４層が確認できたが、埋葬施設は検出し得なかった。盛土下層において須恵器杯片の出土を見たが細片であるため図化していない。所属する年代は、概ね陶邑編年第II型式第５段階に相当するものと思われる。検出した周溝からみて本墳は径約７m、高さ約１mの円墳であることが判明した。

9．山ノ上24号墳（第84～87図、図版29・30）

1）位置と現状

山ノ上通山遺跡の西側を南北に延びる丘陵より、北東方向に分枝した尾根（Ｈ地区）先端部に位置する。南東側丘陵斜面下部の谷部にＪ地区が隣接する。本墳の南西には26号墳が隣接している。本墳の立地する尾根は26号墳付近を基部とし、標高127.5mを測る小ピークをなし、北東に向かってやや高度を下げ（標高約126m）平坦面を造り出している。平成２年度に実施した試掘トレンチにより、溝状遺構と墓壙掘り方を想起させる落ち込みを確認したことで古墳と認知したものである。

2）墳　丘

本墳は、地山整形のみで造られた古墳である。26号墳が所在する尾根基部の小ピークより、北東に12mの地点に傾斜変換点が認められる。この傾斜変換点に、尾根の軸線に対して直交する溝が掘り込まれている。所謂、墳丘を区画するための「堀割」り状の周溝といえる。溝は、全長10m、幅約1.3mを測り、両端部をそれぞれ東側に向けて僅かに弧状を描くが、これに連続する溝は検出されなかった。墳丘南北の丘陵斜面は、急傾斜をなし墳裾部は確認できなかった。墳丘東側においては、標高 124.5m付近で等高線の幅が粗な部分が認められることから、一応墳裾部と考えられる。この墳丘東側の墳裾部と、西側に見る溝状遺構の両端部がやや傾斜を保って連続し墳丘基底部としている。従って、本墳は長径約12m、短径約10mを測るやや歪な円形墳であると考えられる。

3）埋葬施設

本墳の埋葬施設は、墳頂部平坦面の中央やや南寄りに木棺墓が検出された。

第1主体　墳頂部中央のやや南寄りに位置する。墓壙掘り方は、長辺3.70m、短辺1.17m、深さ0.73mを測り、その主軸方位はN－64°－Eである。この墓壙の中央に、内法長2.90m、幅0.38m、高さ約0.35mの箱形木棺を埋置し、頭位を南西に向けたものと思われる。墓壙は二段掘りで造られており、南北と東側にテラスが作り付けられている。北側のテラスは、幅6～14cm、南側で幅11～13cm、東側では幅13cmを測る。西側の小口部分は南側のテラスが連続するが壁面で消滅する。墓壙東西の両端部分には、小口板を嵌め込むための刳り込みが壁面に遺存していた。西側では、小口板と壁面との間に幅約10～20cm空隙がみられ、この部分の床面は棺底より若干高く作られている。小口板は、東側で長さ44cm、西側では45cmを測り、厚さは10cm前後と推定される。これにより本主体の木棺は、両側板を小口板で挟み込んで作る所謂「梯子型」の木棺であることが知られた。棺底部には、淡黄褐色を呈した粘土が敷かれ、粘土床であることが知られた。この粘土床直上の西側においては木棺材が黒く腐食した状態で遺存していた。

本墳においては、遺物の検出が見られなかったため築造時期が不明であるが、埋葬主体に遺物の供献が為されていないことから、概ね5世紀代前半の時期を考えておきたい。

10. 山ノ上26号墳（第84～86・88図、図版29・31）

1）位置と現状

本墳は、H地区に所属し24号墳の南西側に隣接する。尾根の基部となる丘陵上の小ピークを含めた範囲が本墳に該当するが、調査は工事施行範囲の関係上、上記小ピークより6mの地点から24号墳までが対象となった。小ピークより突出した尾根部分で、ピークも含めた範囲の形態は、前方後方形の古墳を思わせるが狭い範囲の調査であったため墳形は不

明である。

2）墳　丘

本墳の調査は、H地区の尾根基部より派生した尾根上の一部で、小ピークより6m地点から24号墳西側の溝状遺構までがその範囲である。調査した範囲では、盛土は見られないことから24号墳と同様、地山整形のみで造られたものと思われる。尾根の基部側が未調査であるため、墳裾および墳丘基底部の確認は出来なかった。小ピークよりやや標高を下げ（127m）て平坦部をなし、尾根軸線に直交して木棺墓が造られていた。

3）埋葬施設

本墳の埋葬施設は、調査を実施した範囲で木棺墓1基を検出した。

第1主体　尾根基部の小ピークより北東側に派生した尾根上約6mの地点において、尾根軸線に直交して造られた、二段掘りの墓壙掘り方を有した木棺墓である。墓壙掘り方は、長辺2.83m、短辺1.58m、深さ0.60mを測る。墓壙の主軸方位はN－33°－Wである。この墓壙の中央に、内法長2.22m、幅0.42m、高さ0.27mの箱形木棺を埋置していたものと思われる。木棺の両側の壁面にはテラスが造られていた。北側のテラスは幅5～10cmを測り、南側でもほぼ同じ幅で造られている。このテラスは、小口側壁面の中央部分まで回り込み消滅している。北側小口部の壁面下部において、長さ27cm、幅5cmの段が設けられているがその性格は不明である。墓壙底には、厚さ3cmを測る浅黄色粘土が敷かれた粘土床であることが確認できた。小口溝は検出されなかったが、本主体の頭位は北西に向けていたものと考えられる。

本墳に於いても、24号墳と同様遺物の検出は見られなかった。本墳の築造時期も、24号墳と余り時期差がないものと思われる。第1主体の位置からみて、本墳の中心主体とは考えられないが、尾根軸線に直交して埋葬施設が造られていることから、24号墳より若干先行するものと思われる。

第4節　平成5年度の調査

平成4年度に実施した28号墳の調査中に、須恵器窯の所在を確認したことで、改めて、山ノ上通山遺跡内の丘陵斜面に試掘トレンチをランダムに設定し、調査を行なった。その結果、E地区東側の丘陵斜面、H地区北西側の谷を挟んだ南向き斜面において窯跡の存在を示す灰原、須恵器片の散布等を確認するに到った。窯跡の調査は、平成5年度に実施する事となったが、発掘調査を行なうにあたって調査区を設定した。E地区東側の丘陵斜面部をL地区、H地区北西側の谷部を挟んで立地する南向きの丘陵斜面をM地区とした。

平成5年度の調査では、まず窯跡の所在位置の確認に努めた。その結果、L地区では須恵器窯1基、窯状遺構1基の窯跡を確認し、M地区においては須恵器窯1基、窯状遺構1

基の窯跡の存在を知ることとなった。

1．山ノ上4号窯（第89～106図、第38～63表、図版32～39・58～64）

4号窯は、L地区の丘陵斜面上部の北西部に在り、E地区の山ノ上28号墳の東側墳裾部に位置している。E地区の調査中に、丘陵斜面部において須恵器片の散布が確認されていたが、尾根上の古墳よりの転落遺物と考えていた。丘陵斜面は急傾斜をなし、その傾斜角は38度を測ることから窯跡の存在は予想できなかった。

4号窯は28号墳の断割りトレンチによる調査で確認され、窯体はこのトレンチを中心に北西方向に作られていることが判明した。地形観察によれば、このトレンチ付近より南東方向にやや下った地点から、急角度で丘陵斜面に移行することが認められる。この傾斜変換点より斜面下方に灰原が形成されていた。このため窯体は、28号墳が造られる際に丘陵の尾根をカットして傾斜が緩やかになった部分に、地下を刳り貫いて作られた地下式の窖窯であった。窯体の窯尻部は、尾根軸線の東側を掘り窪めて作られているが、その背後は尾根の西側斜面になるため排水溝は作られず自然の地形を巧く利用している。窯体の東側は、片流れの斜面となるため浅い窪みをつけることで、排水溝の用を担わしていたものと思われる。

窯体の規模は全長12.0m、床面最大幅1.6m、遺構検出面より床面までの最大深さ1.95mを測る。焚口部床面の標高119.3mに対し、窯尻部床面の標高は122.4mで、その比高差約3.1mを測り床面傾斜角は29度である。窯体の主軸方位はN－30°－Wを示す。

窯体の西側において、窯尻部に連続した溝状の遺構が確認された。この溝状遺構は、その規模からみて作業道とは考えられず所謂「送風溝」であった可能性が指摘される。

窯体は、その規模の拡張が認められることから、2回以上の操業が行なわれたものと思われる。

調査と平行して行った熱残留磁気測定の磁気年代は、640年±10年、680年±20年の結果が得られている。

焚口部、前庭部

焚口部から前庭部に向けて「ハ」字状に開く。焚口部の側壁は、28号墳の断割りトレンチによって一部削平したが、良好な状態で遺存していた。壁面は、やや脹らみを持ちながら立ち上がり天井基部で崩落する。その高さは左側壁が65cm、右側壁で75cmを測り、壁面には粘土張りが見られず素掘りのままである。良好な状態で検出された壁面は、拡張された窯体のもの（第2次窯体）であった。拡張前の壁面の一部が、床面の西側において検出（第1次窯体）されている。検出した壁面は、全長1.0m、高さ0.14mを測り、東側の第2次壁面直下に於いても、同規模で遺存していた。拡張された幅は、西側で12cm、東側では

6㎝を測る。第1次の床面の幅は1.06m、第2次の同幅は1.34mである。第1次床面の標高は119.15mである。

焚口部の前面に「ハ」の字に広がる前庭部が見られた。前庭部は、全長2.5m、幅3.85mを測り、焚口部床面よりなだらかに下り一段低く作られ、灰原へ移行する部分にやや窪みをつけている。この前庭部には、下部構造が認められた。下部構造は、前庭部の全体を遺構面より約45㎝深く掘り窪め、灰原に移行する部分に20～30㎝大の岩礫を配置する。こののち盛土を行なって前庭部を形成している。

燃焼部

燃焼部は、全長約3.5m、床面最大幅約1.5mを測る。第1次床面の中央には舟底状ピットが作られていた。この舟底状ピットは、全長2.15m、幅0.78m、深さ14㎝を測る。ピットは窯体床面を掘り込まれ、底部は2次焼成を受けておらず地山面が露出している。床面の一部に、補修がなされておりオリーブ灰色粘土が貼り付けられていることが確認された。第1次床面は、全体的に製品および炭・灰等の掻きだしにより削平を受けているため、舟底状ピットを中心に残存状態が非常に悪い。窯体の拡張は、床面の掘り下げは行なわず、壁面の削りだしによって規模を拡大している。拡張の規模は、焚口部に見られたものと同様と思われる。第2次の床面は、暗赤褐色を呈する焼土層をなし、窯壁滓と焼土・砂粒の堆積層である。砂粒は、他の多くの窯跡でも見られる如く、操業の都度床面に敷いたものである。床面は焚口部より緩やかに続き5度を測り、焼成部に向けて25度とその角度を増す。側壁は、焚口部側は良好に遺存していたが、焼成部側に向かって天井部の崩落に伴い壁面の上半部分を失っていた。東側の壁面には、スサ入り粘土で補修した痕跡が認められた。この補修は、窯体が崩落しやすい地山を素掘りで構築したために行なったものと考えられる。焚口側の側壁は、東側において約 1.2mの高さで確認でき、上半は天井部に続くアーチ状を呈していた。このことから、燃焼部における天井高は凡そ約1.4m前後の高さであったと思われる。

窯体内より検出した遺物は、その殆どが燃焼部に集中していたが、第1次の操業時に関わる遺物は、第2次床面の焼土層より僅かに甕・杯身等の細片が見られたのみである。第2次床面においては、大形甕を主体とし蓋杯・高杯等の雑器類も見られた。また、床面より浮いた状態で窯体埋土中より蓋杯・高杯・長頸壺・短頸壺・把手付椀・耳環等を検出したが、これらは埋土中に作られた埋葬施設の供献土器である。

焼成部

焼成部は、全長4.4m、床面最大幅1.55mを測る。検出面より床面までの最大深さは1.93mである。側壁は、燃焼部に見られた如く遺存状態は不良である。西側は特に崩落が顕著であ。東側の一部でやや良好な箇所が見られたが、約0.75mを残すのみである。床面の一

部にスサ入り粘土で補修を行なった部分が見られたが、壁面を含め大部分は素掘りのままである。床面は窯尻部に向かって32度の角度で傾斜し、上部では35度を測る。床面は比較的平滑に仕上げられており、所々に窪みが付けられている。この窪みは、製品を安定化させる用を為したものと考えられる。床面、側壁共によく焼成を受けており、青灰色を呈している。焼成部での天井高は、壁面の遺存状態からみて約1.1m前後であったと思われる。

焼成部における遺物の検出は、床面が急傾斜を為しているため甕片が遺存するのみであった。この甕片も、製品としての遺存ではなく、焼台として用いられていた可能性が充分に考えられる。

煙道部（窯尻部）

煙道部の全長は0.45m、幅1.5m、高さ1.27mを測る。煙道部は、焼成部上端より連続しており、その上端部分を堤状の高まりを付けたのちやや窪みをつけ煙道の壁面に続く。この窪みは、後述する送風溝に連続している。煙道部床面は、この送風溝と接続しているため溝状の浅い窪みを呈す。この窪みは、窯尻部の西側の壁面を抉り作られている。このため、焼成部上端で床面が幅をややすぼまらせたのち、窯尻部で左右に屈曲部をつけ横広がりの空間を設けることで、「T」字形の平面形態をなしている。煙道部は、酸化炎被熱を受けているため赤褐色を呈している。この酸化炎被熱の範囲は、煙道部全体と送風溝の一部に認められた。煙道部の壁面は、上方に向けてやや開き気味に立ち上がり、上半は逆「ハ」字状に開く。その上端は、丘陵尾根軸線にあたりその背後は尾根の西側斜面に連続する。この煙道部は、調査前の地形が、馬蹄形の窪みとして遺存していた箇所にあたる。煙道部の開口部（煙出し）は、後世の崩落や土砂の流失も考慮に入れなければならないが、概ね漏斗状を呈していたものと考えられる。

送風溝

送風溝は、窯体の窯尻部より連続する溝状遺構で、弧状を描いて窯体東側の斜面に続いている。全長4.2m、溝底部の幅0.25mを測る。溝は、埋没した状態で検出されたため天井の有無は不明である。窯尻部に接続する部分より約2.8mの地点までは、煙道部の壁面と連続した壁が続いている。その壁面は、上方に向けてアーチを描くことから、送風溝の一部には天井を架構していたものと思われる。この場合、天井高は0.5〜1.0mを測る。溝の埋土下層は粘質土の堆積が見られ、その上層には炭・焼土の細片が含まれていたが、窯壁滓は認められなかった。窯尻部より0.5mの地点において、30×30cm大の甕片３枚が置かれていることから、送風を調整する閉塞装置と思われる。この甕片は、本来送風溝を粘土で閉塞する際に、甕片を立てかけていたものが、転倒したものと考えられる。また、溝の末端部分に於いても岩礫が検出されているが、この部分の天井の有無が確認できない現段階ではその性格は不明である。

埋葬施設

窯体燃焼部付近の崩落土中において検出された遺構である。窯体内の埋土除去中に検出されたもので、西側の窯壁が埋土と共に崩落したため、埋葬施設の規模・墓壙掘り方等の詳細は確認することが出来なかった。窯体内埋土土層断面によると、長さ約2.5m、厚さ7cmを測る黒色炭化物層が標高120.0m付近に確認できる。黒色炭化物層は、木炭の細片を敷き詰めて形成されたもので、埋葬施設の木炭床を為したものと考えられ、確認できた幅は約1mを測る。木炭床の北端は、焼成部床面と接しており東側に蓋・長頸壺・短頸壺・把手付椀の供献が見られた。把手付椀は、短頸壺の口縁部内に挿入した状態で検出されている。木炭床の南西寄りには、把手付椀・蓋・銅製耳環が床面直上に置かれ、やや中央寄りの東側に高杯の供献が認められた。北側の長頸壺・短頸壺はやや傾き気味に、中央東側の高杯は横転状態で検出したが、他の蓋・把手付椀は正置状態であるため、これらの供献土器はほぼ元位置を保っているものと思われる。

この埋葬施設の帰属する年代は、供献された遺物の特徴から陶邑編年第II型式第5段階に相当するものと考えられる。埋葬施設の埋土の状況が不明なため確たることは言えないが、4号窯を廃棄した直後、あるいは操業最終段階に窯を破壊して造られたものと思われる。また、埋葬施設に供献された遺物は、4号窯で焼成されたものと思われる。

灰　原

灰原は、全長20m以上、幅約12mを測る。前庭部下端部分より急角度で丘陵斜面に移行しているが、灰原はその急斜面と下部の谷部に形成されていた。灰原の上端は、前庭部より扇形に拡がりを見せ、斜面下方部分ではかなりの拡散が認められる。

灰原より検出された遺物は、蓋杯・壺蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・甕・長頸壺・短頸壺・甕・当て工具・用途不明の土製品等が見られた。

2．山ノ上5号窯（第111～127図、第64～90表、図版43～47・65～71）

5号窯は、M地区の丘陵南斜面上部の北西に位置する。斜面や谷奥部に須恵器片や窯壁滓の散布が認められていたため、試掘トレンチを設定して調査を行なったところ、丘陵斜面の上部で検出されたものである。窯跡は、谷奥部より北側に展開する窪み状をなした浅い谷地形の上部の30度を測る傾斜地に作られていた。丘陵斜面部下方の東側には7号窯が位置している。

窯体の規模は、全長7.6m、床面最大幅1.1m、遺構検出面より床面までの最大深さ0.66mを測る半地下式の窖窯である。焚口部床面の標高126.65mに対し、窯尻部床面の標高は129.55mを測り、その比高差は約2.9mである。床面の最大傾斜角は32度を測り、窯体の主軸方位はN－37°－Wを示す。

窯体の西側では、煙道部の上方より断面「U」字状の浅い溝状を呈した窪みが作られていた。この窪みは、最大幅2.1m、深さ0.15mを測り、窯体に沿って連続し灰原に接続する。窯体の東側は、試掘トレンチの掘り下げに際し遺構面を削平したため、西側に見る窪みを検出し得ていない。しかし、窯体を高位に保たせる如く周囲を掘り窪ませていることから溝状遺構が作られていたものと思われる。また、東側の溝状遺構に連続して、窯尻部に接続していたであろう所謂「送風溝」の痕跡が認められた。この送風溝は、遺構としては検出していないが、窯尻部床面の酸化炎被熱された分布状況において、弧状を描いて窯体に沿って東側に広がりを見せることで判断される。

焚口部前面の前庭部に連続した灰原も確認された。灰原を形成する黒色土の堆積範囲は全長７m、幅８mを測る小規模なものであった。灰原の堆積状況からみて、本窯の操業は２～３回程度であったと思われる。

調査と平行して熱残留磁気測定のサンプリングを行なっており、本窯の地磁気年代は635年±10年の測定結果を得ている。

焚口部、前庭部

焚口部から前庭部に向けてやや「ハ」字状に開くが、窯体が高位に作られているため、明確な前庭部は無く灰原上端部に連続する。

焚口部は全長1.5m、幅1.15mを測り、側壁の遺存状況は余り良好ではない。壁面は、粘土の貼りつけがみられず素掘りのまま作られたものと思われる。遺存していた側壁は、高さ40cmが確認できた。側壁は青灰色被熱されており、床面は堅く叩き締められた黒色焼土層をなす。側壁が素掘りで作られるのに対し、床面は炭片を含む粘質土の盛土を行ない焚口部床面を形成する。この盛土によって焚口部を水平にし、窯体を高位に保つための工夫が為されていた。

燃焼部

燃焼部は、全長2.0m、床面最大幅1.06mを測る。床面傾斜角は24度である。燃焼部床面の下端部分に、舟底状ピットをなすと思われる浅い窪みが確認できた。この浅い窪みは、長さ0.35m、幅0.66m、深さ５cmを確認したが、南側は崩壊している。燃焼部の床面および側壁は、還元炎被熱を受け青灰色を呈している。側壁は、外側にやや脹らみを持って立ち上がり内湾気味に天井部の基部に続く。天井部は全て崩落しており不明だが、側壁の遺存状態より推定して約 0.9mの高さを保っていたものと思われる。側壁の一部に、粘土を貼りつけて補修した痕跡が見られるものの、窯体は素掘りのままである。

窯体内で検出された遺物は、その殆どが燃焼部床面に集中していた。床面直上に遺存していた遺物は、蓋杯・壺・甕・横瓶等が確認できた。

焼成部

焼成部は、全長3.25m、床面最大幅0.95mを測り、床面傾斜角は32～37度である。床面・側壁共に遺存状態は良好であり、青灰色を呈した還元炎被熱を受けている。床面は、燃焼部のそれに比較してややフラットである。側壁は、やや脹らみを持って外方に立ち上がった後、内湾気味に天井部に続く。天井部は崩落により失っているが、西側の側壁の一部は、アーチを描いて天井部の下半部分を残していた。これによれば床面より天井までの高さは約0.75mであったと思われる。燃焼部の上端は、床面の傾斜を強め約65度を測り、比高差0.4mの段を付けて窯尻部に続く。

焼成部床面においては、遺物の出土は少なく、杯・甕片・壺片等と共に岩礫の遺存が見られた。これらの遺物は、その遺存状態から焼台であった可能性を指摘しておきたい。

煙道部（窯尻部）

煙道部は、全長0.9m、幅1.0m、高さ0.55mを測る。煙道部は、焼成部上端よりすぼまり一段高い位置に続いており、床面は東側に拡がりをつけている。床面の北側には、焼成部上端部分より連続した弧状を描く浅い溝が東側に延び、窯体の東側に沿って斜面下方に続いていたものと思われる。煙道部は、試掘調査でその上半を削平してしまったためその詳細は明らかでないが、この溝は4号窯に見られた「送風溝」と同様な性格を持っていたと考えられる。煙道部床面の北側には、4号窯でも確認された「抉り込み」が壁面の西側に見られた。抉り込みは、4号窯とは若干位置が違うもののその性格は同一のものと思われる。この「抉り込み」の性格は不明であるが、送風溝と関連した遺構と思われる。煙道部床面と壁面は、酸化炎被熱を受けており全面が赤色を呈していた。

灰　原

灰原は、前庭部より連続して続き、全長7.5m、最大幅約8mを測る。灰原は全体に浅い窪み状を呈しており、窯体の両側に作られている溝状の窪みと連続している。灰原は黒褐色土を主体としているが、東側では遺物を包含した褐色粘質土の盛土が見られた。黒褐色を呈した灰原は、前庭部付近の土層断面観察により3層の堆積が認められていたが、全体的に見れば多くの遺物は混在した状態で検出された。

5号窯より検出された遺物の大半は、この灰原より出土したものである。器種として、蓋杯・壺蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・長頸壺・短頸壺・広口長頸壺・甕・甑・提瓶・横瓶等が確認できた。

3．山ノ上6号窯（第107～109図、図版40～42）

L地区に所在する窯状遺構で、4号窯の東側に隣接している。調査前の地形観察ではその存在を知ることはなかったが、作業面付近の地表面はテラス状のやや平坦面をなしていた。窯体は、丘陵谷部の南東側斜面に築かれ、焚口を南西に煙道部を北東にして、等高線

に斜行して築造されている。窯は、明赤褐色粘質土の地山層を刳り貫いて作られた地下式の横口付窖窯である。窯体主軸の方向はN－27°－Eを測る。

窯体の一部は、遺構検出時のトレンチにより掘削したが、遺存状態は良好でほぼ完存状態で検出された。遺構は、前庭部から煙道部までの窯体と、窯体側面の作業面の遺存が確認された。窯体の側面には横口を有する「八ツ目窯」で、７口を数える。

調査と平行して、熱残留磁気測定のサンプリングも実施しており、640年±20年、680年±25年の地磁気年代の測定結果を得た。

窯　体

窯体の規模は、全長約8.3m、床面最大幅約1.1m、天井高約0.5mを測る。焼成部は、全て地下を刳り貫いて作られている。窯体東側の側面には７個の横口が備わっている。横口は、長方形をなすもの、楕円形を呈するもの等が見られ、開口部の規模は概ね30cm大に揃えている。窯体内には、本来その天井部を形成していたと考えられる焼土塊が充満していた。焼成部床面と側壁は、オリーブ褐色を呈しやや還元焼成気味に被熱されている。これは煙道部でも同様であったが、焚口部周辺と天井部では赤褐色を呈しており、酸化炎被熱されているようである。焼成部床面は、山側に若干傾斜をつけその角度は10度を測る。また、横口に対応する部分のみに弧状の抉りが認められる。主軸方向の床面傾斜角は、焚口部で15度、焼成部では20度を測る。窯尻部から煙道部の開口部までは50度である。煙道部の開口部は楕円形をなし、長径70cm、短径50cmを測る。

前庭部

窯体の南側には、焚口に連続した前庭部が作られている。前庭部は、焚口よりやや南東方向に屈曲させ丘陵斜面を掘り込んで作られている。前庭部と第１横口の間には、K地区の１号窯でも見られた土堤状の障壁が作られている。前庭部の底部は、極暗褐色を呈する炭・焼土を含む砂質土の堆積が見られ、その上部は黒褐色土を主体とした多量の炭片・焼土塊を含んだ埋土が確認された。これらの６号窯から排出された灰層の覆土中より、４号窯で生産されたものと思われる須恵器片が検出されている。このことは、６号窯が４号窯より先行する遺構であることを証明するものと考えられる。

作業面

横口の側面には、やや窪地状をなす作業面が検出された。作業面は、南側に向けて傾斜を付けており、横口の側面側はやや一段低く溝状に掘られている。作業面の北西隅に柱穴状のピットが設けられている。第４・５・６横口の側面に於いても同様なピットが認められたが、K地区の１号窯で確認できた構造物に類するものか俄には断定しがたい。

埋　土

窯体内の堆積状況の特徴として、焼成部と煙道部は天井の焼土塊およびそれが土壌化し

たものが充満していた。これに対し、焼成部下半から焚口部と前庭部では炭化物と灰および砂粒を多量に含む黒色土の堆積が顕著であった。この黒色土の堆積は、作業面に於いても同様であった。

作業面の堆積状況としては、横口より排出された炭化物・灰・砂粒を含む黒色土が作業面全体を覆っていた。その中でも特に、横口側面の溝状の窪み部分に赤黒色を呈した灰が集中して層をなしている。

4．山ノ上7号窯（第128～130図、図版48～50）

M地区に所在する窯状遺構で、丘陵斜面の下方に立地し、5号窯の東側に位置する。窯体は、東向きの丘陵斜面の下部に築かれ焚口を北東に煙道部を南西にして、等高線に対してやや斜行して築造されている。試掘調査により、その所在を確認したものであるが、煙道部付近を中心として若干のテラス状の平坦部が認められた。窯は、黄褐色粘質土の地山層を刳り貫いて作られた地下式の横口付窖窯である。窯体主軸の方向は、N－62°－Eを測る。

前庭部の一部と作業面は、既に果樹園造成に際し破壊を受けていた。また、試掘調査において天井部の一部を削平しているが、ほぼ良好な状態で検出できた。遺構は、前庭部から煙道部までの窯体と、窯体側面の作業面の一部の遺存が確認された。窯体の側面には、8個の横口を有する所謂「八ツ目窯」である。

調査と平行して行った熱残留磁気測定の結果は、600年±15年の地磁気年代が得られた。

窯　体

窯体の規模は、全長約9.7m、床面最大幅約0.6m、天井高約0.6mを測る。窯体は、全て地下を刳り貫いて作られている。窯体南側の側面には、8個の横口が備わっている。横口の開口部は、概ね円形を呈している。開口部の規模は、35～40cm前後を測る。焼成部床面と側壁は、オリーブ褐色を呈しやや還元炎被熱を受けている。これは、煙道部でも同様である。焚口部周辺と天井部および横口は酸化炎被熱により赤褐色を呈している。焼成部床面は、横口に対応する部分に弧状の抉りをつけ、山側にやや傾斜をつけその角度は15度を測る。窯体の主軸方向の床面傾斜角は、焚口部で約10度、焼成部では約15度を測る。窯尻から煙道部の開口部に向けて65度の角度を付けている。

煙道部の開口部（煙出し）には、扁平な石材（閉塞石）が置かれた状態で検出された。また、この開口部を中心にラッパ状に開く掘り方が確認された。掘り方の上端部の規模は、長径2.1m、短径約1.35mを測る。検出面から開口部までの深さは1.45mである。開口部から作業面に向けて樋状の窪みが連続している。

前庭部

窯体の北東側には、焚口に連続した前庭部が作られている。前庭部は、焚口部床面より一段低く作られ窪み状をなす。前庭部には、炭・焼土塊の細片を多く含んだ極暗赤褐色土の灰層が確認された。

作業面

横口の側面に作業面が作られていた。この作業面は、長方形の窪地をなしていたと思われるが、後世の削平により大部分を失っているため詳細は不明である。作業面の床面は、前庭部方向にやや傾斜を付けている。中央部のやや西寄りでは、横口の側面に溝状の窪みが作られ、丘陵斜面の下方に向けて屈曲させている。この「コ」字状の溝は、横口より排出される灰・焼土等を作業面から除去させる用を為していたものと考えられる。

埋　土

窯体内の埋土の堆積状況は、焼成部と煙道部は天井を形成していた焼土塊およびそれが土壌化したものが堆積していた。焚口部から前庭部にかけては、炭化物と灰およびそれが土壌化した焼土塊の細片を含む黒色土が充満していた。この黒色土の堆積は、作業面でも同様で、床面全体を覆っていたものと思われる。

第4章　総　　括

山ノ上通山遺跡の発掘調査において検出した遺構は、古墳13基、掘立柱建物跡10棟、竪穴住居跡1棟、柵列7基、溝状遺構10、土坑状遺構5基、須恵器窯2基、窯状遺構5基等であった。また、J・K地区の両地区では、柱穴を為したと思われるピット約600個を確認している。

以下に、検出した遺構について所見を述べまとめとしたい。

1）古墳群

発掘調査で確認した古墳は、県道を挟んで東西の丘陵にそれぞれ群を為して所在する山ノ上古墳群に所属するものである。しかしながら、それぞれの丘陵上に位置する各古墳の在り方には相違点が見られる。従って、山ノ上通山遺跡内のものについては「山ノ上古墳群（西群）」、もしくは「山ノ上通山古墳群」と呼称するのが妥当と考えられる。

調査した古墳は、木棺墓もしくは箱形石棺等を埋葬主体とし、概ね古墳時代中期前半から古墳時代終末期にかけて築造されていたことが知られた。

古墳の調査を実施した結果を整理すると以下の表の通りである。

古　墳　名 （規模）m	墳形	埋葬施設 形態、（頭位）	供献土器	墳丘・周溝 出土遺物	築造年代
15号墳 11－1.3	円墳	第1主体 木棺墓（西）	土師器高杯 鉄刀	周溝…須恵器䤈 土師器甕	5世紀後半
		第2主体 木棺墓（西）	土師器高杯		
16号墳 15－1.8	円墳	第1主体 木棺墓（西）	ガラス小玉 刀子	周溝…須恵器䤈 土師器椀	5世紀後半 15号墳に先行
		第2主体 木棺墓（東）			
24号墳 10－0.5	円墳	第1主体 木棺墓（南西）			5世紀前半～ 中頃
25号墳 9－0.5	円墳	消　失		周溝…土師器甕	5世紀代
26号墳 不明	不明	第1主体 木棺墓（北西）			5世紀前半～ 中頃
27号墳 9－0.5	円墳	第1主体 木棺墓（北）		土坑…土師器壺	5世紀前半～ 中頃
		第2主体 木棺墓（北）			
28号墳 15－2	円墳	第1主体 箱形石棺（西）		墳丘…須恵器壺 杯・甕	7世紀初頭
29号墳 19×10－1	円形	第1主体 集石墓		墳丘…須恵器広 口長頸壺	7世紀後半以 降
30号墳 7－1	円墳	消　失		墳丘盛土…須恵 器杯蓋	7世紀初頭
32号墳 11－1	円墳	消　失		周溝…須恵器樽 形䤈・蓋 杯・壺蓋	5世紀中頃～ 6世紀代
33号墳 12－0.5	円墳	消　失		周溝…須恵器鉢 短頸壺	7世紀中頃
34号墳 15－0.5	円墳	消　失		周溝…土師器低 脚杯	7世紀前半

以上の結果を得た。

この中で気づくことは、供献土器や墳丘斜面等で遺物の出土が見られなかった古墳の存在（24・26号墳）が知られた。24・26号墳の築造時期は、遺物の検出が見られなかったため判然としないが、27号墳に於いても僅かに土師器壺の出土が知られるのみであり、ほぼ同時期に営まれていたものと思われる。また、鳥取県東部地域に見る５世紀前半代の古墳に於いても、供献土器又は遺物を伴わない確認例もあることから、この時期における葬送儀礼の特徴の一端を示すものと思われる。

本古墳群の各古墳間における供献土器の有無は、当該地を墓域とした氏族集団のなかでの被葬者の階層の差を示しているものと考えられる。また、Ｈ地区（24・26号墳）の古墳は、Ｄ地区（15・16・25・32号墳）より若干先行する時期に築造されたと考えられる。前者では遺物を全く伴わないのに比べ、後者では須恵器出現時期の所産と考えられる樽形瓹他バラエティーに富む供献遺物が見られた。これは、墓域を共有する集団のなかにおける、出自の差を示すものと思われる。

山ノ上32号墳において、初期須恵器に該当する樽形瓹の出土を見たが、これについて若干触れておきたい。

鳥取県東部において、陶邑Ｉ期に比定し得る資料は、既に16箇所が知られている（註１）。資料の出土地を概観すると、鳥取平野北西部に位置する湖山池周辺と、同平野南東部に集中している。鳥取平野南東部とその背後の丘陵は、古墳時代における一大中心地で、多くの群集墳が密集している。今回調査を行った山ノ上通山遺跡は、この丘陵の後背地に位置する。

鳥取県東部における陶邑Ｉ期に比定される須恵器は、概ねＴＫ208～47型式にに該当する（註２）。この時期における窯跡の存在は現在のところ知られていないが、鳥取平野南東部に位置する七谷窯跡からはＴＫ47型式併行の須恵器が採集されている（註３）。また、七谷窯跡の北東約３㎞に位置する杉崎18号墳から出土した須恵器は、在地産との指摘がなされている（註４）。６世紀代に入ると七谷窯跡の南方に位置する越路窯跡（註５）や山ノ上通山遺跡周辺部に展開する私都古窯跡群が出現してくる。私都古窯跡群において須恵器の生産が開始される時期は、まだ未解明な部分が多いが、福地地区の窯跡で６世紀中頃の資料が採取されている（註６）。このように、鳥取県東部においてＴＫ47型式に所属するであろう窯跡が確認されたことで、当地方でも５世紀後半代には須恵器の生産が開始されていたことを示唆するものであろう。

鳥取県東部において、５世紀後半代の窯跡が確認されたことで、当地方にも畿内地域より移動してきた須恵器の工人集団の存在が確かなものとなってきた。この須恵器の工人集団やその子孫が、周辺部へ移動し七谷窯跡・越路窯跡・私都古窯跡群で須恵器の生産に携

わったものと思われる。私都古窯跡群中に位置する山ノ上古墳群(西群)で、ＴＫ73～ 208型式の樽形瓶や瓶を供献した山ノ上32・16・15号墳の被葬者は、工人集団と密接な関わりがあったものと思われる。私都古窯跡群における、須恵器生産の盛期は６世紀代に下るが、当地方に工人集団が現れ須恵器の生産が１世紀を経ずして開始されることは充分に示唆に富む事実であろう。また、山ノ上通山遺跡の西方約２kmに位置する稲荷古墳群において、ＴＫ47型式に該当する資料の出土が知られており(註７)、山ノ上古墳群の被葬者の系譜に繋がるものと思われる。

２）掘立柱建物跡、柵列ほか

丘陵裾部に位置するＪ地区・Ｋ地区の両地区の調査においては、多数の掘立柱建物跡・柵列・溝状遺構・窯状遺構等および古墳が検出された。これらの遺構は、それぞれが単独で存在したものではなく、各遺構間に密接な関係があったと考えられる。この掘立柱建物跡は、規格性を保って作られており、その配置も数次にわたっていることが確認された。丘陵裾部に所在した掘立柱建物跡は、その存続期間中において窯状遺構や須恵器窯の操業に何等かの役割を果たしていたものと思われる。また、丘陵裾部の調査では、転用硯の出土を見たことは、掘立柱建物跡群の性格を考える上で重要な資料といえよう。

以下に、各遺構間の年代観を整理してみた。

Ｊ地区

時期	暦年代	掘立柱建物跡	溝状遺構	柵列・土坑	陶邑編年
Ⅰ期	６世紀後半 ～７世紀前半	ＳＢ－０８ ＳＢ－０１ ＳＢ－０２ ＳＢ－１０	ＳＤ－０３ ＳＤ－０４	ＳＡ－０２ ＳＡ－０３ ＳＡ－０４ ＳＫ－０３	Ⅱ－４ Ⅱ－５
Ⅱ期	７世紀中頃 ～７世紀後半	ＳＢ－０３	ＳＤ－０９	焼土坑 ３号窯	Ⅱ－６ Ⅲ－１
Ⅲ期	８世紀初頭 ～８世紀前半	ＳＢ－０４	ＳＤ－０１ ＳＤ－０５ ＳＤ－０６ ＳＤ－０７ ＳＤ－０８	ＳＡ－０１	Ⅳ－１ Ⅳ－２
Ⅳ期	８世紀後半 ～９世紀初頭	ＳＢ－０７ ＳＢ－０９	ＳＤ－０２		Ⅳ－３ Ⅳ－４
Ⅴ期	10世紀後半	ＳＢ－０５			
Ⅵ期	11世紀後半	ＳＢ－０６	ＳＤ－１１		

上記の時期区分のうち、III期の古段階は、下坂須恵器編年のII～III期に併行し、新段階は同IV期に該当するものと考える。また、IV期は、古段階を下坂須恵器編年のV期に考えている。同様にV期は、山田12号窯に、VI期は山田10号窯と併行する時期と考えられる。

このように、J地区における掘立柱建物跡の盛期は、I期後半からII期にかけてと、III期後半からIV期の二時期に集中していることが判明した。この内中心となるのは、I期からII期にかけての時期であることは明らかである。掘立柱建物跡は、谷部斜面の傾斜に平行して建てられ、斜面の中程より下方にかけて規格性を保って整然と営まれていたことが知られる。このほぼ同時期には、前面の谷部を挟んだ対面の丘陵斜面や、J地区の北西隣りの谷部斜面において窯状遺構と須恵器窯の操業が行なわれていることが知られた。このことは、J地区の掘立柱建物跡群の性格を物語っているものと思われる。すなわち、当地区で生産していたであろう須恵器他の製品の管理・保管を管掌し、供給地へ搬出する機能を担っていたものと思われる。

K地区

K地区では、遺構面が後世の削平によって大きく改変されているため、J地区のような整然とした遺構は検出されなかった。しかし、ほぼ良好な状態で検出されたＳＢ－０１・０２は、丘陵斜面に平行して建てられていることが判明し、他の遺構も同様な方向性を保っていた。当地区においては、須恵器転用硯の出土が確認されており、建物の規模や方向性（他の遺構とも関連して）からみて、一般集落ではなく何等かの行政機関であった可能性が指摘される。J地区で見る第二の盛期と併行する時期に、K地区のＳＢ－０１が建てられており、掘立柱建物跡群の中心となる機能が移動してきたとも考えられる。このＳＢ－０１と１号窯は、ほぼ同時期に存在していたことが確認できることから、窯の操業および生産品の管理・保管・搬出等を管掌する機能を担っていたものと考えられる。

3）窯状遺構

窯状遺構を丘陵裾部と丘陵斜面部において５基検出した。その性格として、従来、「炭窯」としての認識が支配的であるが、本遺跡で確認した窯状遺構については疑問符を付けざるをえない。この窯状遺構は、本遺跡の北西約2.5kmに位置する生山大池遺跡・水堤地区（註８）に於いても同様な遺構が検出されている。両遺跡の共通する特徴として、窯状遺構は単独で所在しており、周辺部に製鉄関連の遺構が存在しないことが挙げられる。また、両遺跡内に於いても製鉄遺跡に通有な鉄滓（スラッグ）の出土が全く見られていない。窯状遺構を炭窯として認識する考えには、鉄滓を多量に排出する製鉄炉の検出が不可欠な要素であるといえる。しかし本遺跡および生山大池遺跡・水堤地区においては、窯跡の近辺および広範囲な周辺部に於いても製鉄炉や鉄滓の検出は皆無であった(註８)。木炭のみを生

産して、近在の製鉄コンビナートに供給したと考えられなくもないが、両遺跡については窯状遺構イコール炭窯という認識には該当しないものといえる。

この窯状遺構の性格として、鉄分を含んだ鉱石の破砕炉との考え方も提起されている。これは、検出された多くの窯状遺構では、窯体床面や側壁および煙道部の壁面が還元炎被熱され、破砕された鉱石が窯体内、作業面に堆積していることが論拠となっている。破砕された鉱石は砂粒となり、作業面を覆う状況を呈する。山ノ上１・２・６・７号窯でも確認された。特に１号窯では、窯体内下半と作業面の全体に、砂粒を主体とした灰層の堆積が顕著であった。他の遺跡で確認された窯状遺構では、鉱石を煙道部との仕切りや閉塞時に使用する如く、何等かの形で遺存状況を見せている。これに対し、本遺跡で確認した窯跡においては、鉱石の岩塊は見られず砂粒（大きいもので３～５㎜）の堆積が認められたのみである。今回の調査では、砂粒と排出されていた木炭片の化学分析を行ない得ていない。しかし、多量な砂粒の堆積が何故生じたのかと考えた場合、「鉱石破砕炉」（註９）だとする説に整合性を強く感じる。また、操業中に天井部が崩落し、廃棄された窯の存在も確認されている。しかしながら、「炭窯」を証明するであろう生産されていたはずの木炭の出土例が無い現段階においては、今一度その性格について検討する必要が有るのではなかろうか。

４）須恵器窯

丘陵斜面部において須恵器窯２基が検出されたが、いずれも７世紀前半頃に生産活動が為されていた事が判明した。本窯跡は、山ノ上窯跡群として呼称しておく。山ノ上窯跡群は、従来私都古窯跡群において、空白部分であった７世紀前半から後半にかけての、須恵器の様相を示す重要な資料を提供するものといえよう。また、須恵器窯の窯体は、崩落した天井部を除きほぼ完存状態で検出された。従来、私都窯跡群での発掘調査は部分的であったため、これにより不明であった窯体構造の詳細を知ることとなった。山ノ上窯跡群で確認された窯跡は、規模の大小と地下式窖窯および半地下式窖窯との差は有るが、いずれも窯尻に連結した「送風溝」を備わった特徴を有している。この送風溝を有した須恵器窯は、北部九州、山陽、関西、北陸、関東等でその分布が確認されているが、山陰側では初見である。鳥取県中部の、関金町鳥越山３号窯で類似例があるが、同例では溝底が酸化炎被熱を受けているため、送風溝とは別の用途が考えられる。

５）４号窯出土遺物

４号窯より出土した遺物は、蓋杯・壺蓋・つまみ付き蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・壺・広口壺・甕・把手付椀・長頸壺・大形甕・無文当て具・用途不明土製品等が見られた。

出土した個々の遺物については観察表に委ねることとし、ここでは蓋杯の特徴についてのみ触れておきたい。

蓋は、形態の特徴として、A：丸い天井部を呈するもの、B：平坦な天井部を呈するもの、C：天井部中央につまみを付すもの、に区分した。また、基部径の大小により、I・II・IIIに細分できた。

蓋　A：基部径11.4～13.6cm、器高 3.5～ 4.0cm

蓋BI：基部径13.8～16.0cm、器高 2.8～ 4.2cm

蓋BII：基部径11.2～14.4cm、器高 2.1～ 4.2cm

蓋BIII：基部径 8.6～10.2cm、器高 2.1～ 3.3cm

蓋　C：基部径15.5～17.0cm、器高 4.4～ 5.1cm

4号窯で出土した蓋はその殆どが蓋Bで、図化した全体量の85%を占め、蓋Aは7%、蓋Cは8%であった。口縁端部に平坦な面を付ける壺蓋と思われる蓋が見られたが、全て蓋Bである。またヘラ記号・板目圧痕を残すものも見られたが、全て蓋Bであった。口縁端部は、丸くおさめており内傾する段は見られない。

蓋Aの天井部外面は、ヘラ切り離しの後回転ヘラケズリを天井部の1／2程度行なう。内外面はロクロナデ調整である。

蓋Bの天井部外面は、ヘラ切り離しの後回転ヘラケズリを天井部の1／2程度行なうもの、屈曲部のみに施すものが見られた。また、天井部外面に回転ヘラケズリを施した後、ケズリの方向にカキメを行なうものも見られた。壺蓋は、回転ヘラケズリを施すものも見られたが、全体に器壁の厚いもの程、切り離しの後未調整のものが多い傾向にある。

蓋Cは、天井部切り離しの後回転ヘラケズリを行ない、中央部を窪ませた扁平なつまみを付けている。天井部からなだらかに基部に続き、やや逆椀形をなす。

杯は、「立上り」を有するもので、底部の形態の特徴から、A：丸底気味のもの、B：平底を呈するもの、に区分した。また、口径の大小により、I・IIに細分した。

杯AI：口径10.8～13.7cm、器高 3.2～ 4.2cm

杯AII：口径 8.4～ 9.7cm、器高 2.5cm 前後

杯BI：口径14.0～15.6cm、器高 3.2～ 4.5cm

杯BII：口径10.3～13.8cm、器高 2.0～ 3.6cm

4号窯において出土した杯で、図化したもののうち杯Aは38%、杯Bは62%の割合を示し、杯Bが全体の2／3を占める。

杯Aの底部は、やや丸底気味を呈するもので、底部切り離しの後回転ヘラケズリを施すものが多い傾向を示すが、若干未調整のものも確認された。内外面ロクロナデ調整を施し、立上りは殆どが「貼付け」で作られており、「折返し」で作られるものも見られた。また、

数点であるが受部を「貼付け」で作られているものも見受けられた。

杯Bの底部は、平底を呈するものである。底部切り離しの後、底部外面の平坦部のみに回転ヘラケズリを施す。若干、板目圧痕を残すものと静止ヘラケズリを施すものも見受けられるが、殆どは回転を利用した回転ヘラケズリを行なう傾向にある。内外面はロクロナデ調整を施す。立上りは、殆どが「貼付け」で作られており、若干「折返し」のものと、受部を「貼付け」で作るものが見られる。「折返し」で作るものは、内面の屈曲部に粘土を補塡して内面を滑らかにする傾向にある。

6） 4号窯埋土中、埋葬施設出土遺物（第95図、図版58）

4号窯崩落土中で検出された埋葬施設内より、須恵器杯蓋・高杯・把手付椀・長頸壺・広口壺および銅製耳環の出土を見た。

蓋（1～3）

蓋は、丸みを帯びた天井部をなし、前述分類の蓋Aに該当する。蓋1は、基部径16.0cm、器高4.1cmを測る。平坦な天井部よりなだらかに口縁部に続き、端部は外方に開き気味である。口縁端部は丸くおさめる。天井部外面は、ヘラ切り離しの後未調整である。内外面ロクロナデ調整を行ない、天井部外面に「ー」状のヘラ記号を施す。蓋2は、基部径推定12.0cm、器高3.7cmを測る。歪な焼成で楕円形を呈している。丸みを帯びた天井部よりなだらかに口縁部に続き、やや屈曲した口縁端部をなしている。口縁端部は丸くおさめる。天井部は、ヘラ切り離しの後未調整である。内外面ロクロナデ調整を施し、天井部内面に不整ナデを行なう。3は、基部径11.2cm、器高3.8cmを測り壺蓋と思われる。丸みを帯びた天井部よりなだらかに続き、口縁部は屈曲して垂下する。口縁端部は外反し、端部は丸くおさめる。天井部は、ヘラ切り離しの後回転ヘラケズリを1／2行なう。内外面ロクロナデ調整を施す。

把手付椀（4・5）

4は、口径8.1cm、器高9.6cmを測る。丸底を呈する底部よりやや内湾気味に立ち上がり、内傾気味の口縁部に続く。口縁端部は丸くおさめる。体部の中程に2条の沈線を施している。底部外面は、静止ヘラケズリを施し、他の内外面はロクロナデ調整を行なう。体部の最大径部分に、「L」字形をなす棒状の把手を貼り付けている。把手は、体部への接着を兼ねてヘラ状工具により細かい単位でナデ付けている。5は、口径11.0cm、器高8.7cm、体部最大径13.6cmを測る。やや平底気味の底部より、やや内湾気味に外方に開く体部から内傾する口縁部に続く。口縁端部は、若干直立気味で丸くおさめる。口縁部下端部分に2条の沈線を施す。体部最大径のやや下方に把手を付けている。把手は、断面長方形を呈し、体部に沿って湾曲している。底部外面は回転ヘラケズリを施し体部・口縁部の内外面はロク

ロナデ調整を行なう。底部内面は不整ナデを行なう。把手は、ナデ調整の後貼り付けている。

高杯（6）

口径15.1cm、器高12.4cmを測る無蓋高杯である。「ハ」字状に開く脚柱部より大きく外反する裾部に続く。脚端部はやや屈曲して外方に広がる。受部は、やや丸底気味で、なだらかに立ち上がる体部より外傾気味の口縁部へ続く。口縁端部は丸くおさめる。口縁部下端部に1条、脚柱部の中程に2条の沈線を施す。内外面ロクロナデ調整を施し、受部の底部外面は回転ヘラケズリを行なった後、脚部の接着によりナデつけられている。

広口壺（7）

口径11.8cm、器高10.4cm、胴部最大径15.0cmを測る。やや丸底気味の底部より、やや直立気味に立ち上がりやや肩の張る肩部に屈曲して続く。肩部より外反する口縁部に続き、端部は丸くおさめる。底部外面は不定方向の静止ヘラケズリを施した後、回転ヘラズリを行なう。底部は、制作中の作り替えに伴い、粘土板を充塡して行なったものと思われる。肩部下端部に1条の沈線を施す。内外面はロクロナデ調整を施している。

長頸壺（8）

口径8.5cm、器高18.0cm、胴部最大径13.6cmを測る。丸底気味の底部より、内湾気味に立ち上がる体部に続き、やや肩の張る肩部からやや外傾気味の口縁部に続く。口縁端部はやや直立気味で、端部は丸くおさめる。口縁部の中程に2条、肩部下端部に1条の沈線を施す。底部外面に、杯口縁部片の溶着が見られる。底部外面は回転ヘラケズリを行ない、他の内外面はロクロナデ調整を施す。

銅製耳環（9・10）

耳環9は、長径2.9cm、短径2.5cm、断面円形を呈し径0.6cmを測る。遺存状態は不良で、腐食化が進行している。耳環10は、長径2.7cm、短径2.5cm、断面円形を呈し径0.5cmを測る。遺存状態は不良で腐食化が進行している。耳環9・10は、銅地金無垢のままであり、鍍金の痕跡は見られなかった。

埋葬施設より出土したこれらの遺物の特徴から、概ね陶邑編年第II型式第5～6段階に相当するものと思われる。

7） 5号窯出土遺物

5号窯より出土した遺物は、蓋杯・壺蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・大形高杯・大形高杯蓋・壺・鉢・甕・甕・提瓶・横瓶等が見られた。

出土した個々の遺物については観察表に委ねることとし、ここでは蓋杯の特徴と傾向についてのみ触れておきたい。

蓋は、形態の特徴から、A：丸みを帯びた天井部、B：平坦な天井部、C：天井部につまみを付すもの、に区分した。また基部径の大小により、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに細分した。

蓋AⅠ：基部径15.8～16.5cm、器高 3.3～ 4.5cm

蓋AⅡ：基部径11.6～14.8cm、器高 3.0～ 4.6cm

蓋AⅢ：基部径10.0～11.5cm、器高 3.6～ 4.9cm

蓋BⅠ：基部径15.2～18.4cm、器高 2.8～ 4.5cm

蓋BⅡ：基部径12.2～14.8cm、器高 2.9～ 4.9cm

蓋BⅢ：基部径10.8～11.4cm、器高 2.9～ 3.5cm

蓋CⅠ：基部径15.6～17.3cm、器高 3.8～ 4.5cm

蓋CⅡ：基部径10.6～11.0cm、器高 1.3～ 4.8cm

5号窯で出土した蓋のうち図化した割合は、蓋A：34%、蓋B：56%、蓋C：10%であった。口縁端部に平坦な面を有する壺蓋は蓋Bが多いが、蓋A・蓋C共に混在する傾向を示す。天井部外面に板目圧痕を残すものが見られたが、蓋A・蓋B共に確認できた。

蓋A・蓋B共に、天井部外面はヘラ切り離しの後回転ヘラケズリを1／2程度行なう。若干の割合で切り離しの後未調整のもの、屈曲部のみに行なうものも見受けられた。内外面ロクロナデ調整を施し、端部は丸くおさめる。一部に口縁端部内面に、段を意識したと思われる平坦な面を付けるものが見られたが、その数は少ない。また、口縁部上端に稜を意識した沈線を施すものも見られる。壺蓋は、4号窯に見られる焼台を思わせる器壁の厚いものは、本窯では出土していない。

蓋CⅠは、天井部切り離しの後回転ヘラケズリを行なうもの、カキメを施すものが見られる。天井部外面の中心に、中央部を窪ませた扁平なつまみを付けている。天井部内面、口縁部内外面はロクロナデ調整を施している。口縁部上端に、稜を意識したものと思われる沈線を施すものが多く見られる傾向にある。

蓋CⅡは、壺蓋をなしたと思われる。中央部を窪ませた扁平なつまみを付すものは、天井部切り離しの後回転ヘラケズリを施す。内外面はロクロナデ調整である。全体に扁平で、口縁部の内面に所謂「かえり」を有する。天井部外面の中央に棒状のつまみを付すものは、内外面ロクロナデ調整である。口縁端部は丸くおさめ、内面に「かえり」を付けている。

杯は、「立上り」を有するもので、形態の特徴から、A：丸底を呈するもの、B：平底を呈するもの、に区分した。また口径の大小により、Ⅰ・Ⅱに細分した。

杯AⅠ：口径18.3cm、　　器高 不明

杯AⅡ：口径 8.0～14.6cm、器高 2.2～ 4.1cm

杯BⅠ：口径14.2～15.4cm、器高 2.2～ 4.0cm

杯BⅡ：口径11.1～13.2cm、器高 2.5～ 3.8cm

5号窯において出土した杯で、図化したもののうち杯Aは44%、杯Bは56%の割合を示し、ほぼ半々であった。

杯A・B共に、底部切り離しの後回転ヘラケズリを行なうものが大半を占める傾向にある。切り離しの後未調整のものが若干見られたが、その数は少ない、内外面はロクロナデ調整を施している。立上りは、4号窯出土のものより若干長めであるが、差は余りないものと思われる。立上りの形態は、「折返し」と「貼付け」の割合は半々で、器種の差は見られない。若干数で、受部を摘み出して作られているものが見られた。

この他に、大形の高杯とそれに対をなすものと考えられる蓋が確認された。

蓋は、基部径20.0〜22.4cm、器高7.5〜8.0cmを測る。丸みを帯びた天井部よりなだらかに続き、口縁部は屈曲して垂下し、口縁端部の内面に段を付ける。口縁部の上端部分には、浅い凹線を廻らすことで稜を表現している。天井部外面は、平行タタキを施した後回転カキメを行なう。このカキメは、口縁部外面にも施される。天井部内面は、同心円文タタキメを施した後ロクロナデ調整を行なっている。

大形高杯は、口径18.2〜20.3cm、器高10.6cm前後を測る。「ハ」字状に開く脚部で、器高の1／2を占める。受部は、丸底気味の底部より、やや内湾気味になだらかに立ち上がり受部に続く。立上りは「折返し」による。内外面ロクロナデ調整である。底部内面は、同心円タタキメを施す。受部外面は、綾杉文状に平行タタキを施した後回転カキメを行なっている。

8）4・5号窯出土蓋杯について

以上、4・5号窯出土の蓋杯の特徴と傾向について見てきた。ここで再度、蓋杯の特徴と傾向を簡単に触れ、山ノ上窯跡群の編年観を考えてみたい。

4号窯出土の蓋は、天井部切り離しの後、天井部外面に回転ヘラケズリを施すが、未調整もしくは一部に回転ヘラケズリを行なうものが多く見られる傾向にある。これに対して5号窯出土の蓋は、未調整のものが若干見られるものの、回転ヘラケズリを施すものが大半を占める。また明瞭な稜ではないが、それを意識したものと考えられる凹線を廻らすものが、5号窯出土の蓋には確認できた。

器種構成を見ると、4号窯では、蓋杯が主で他には高杯・壺・甕等が見られたのに対し、5号窯ではこの他に瓻・提瓶・横瓶・鉢・大形高杯等、器種に富む傾向にある。また、高杯の脚部も5号窯のものが口径に比して若干高い傾向を示している。

このようなことから、4号窯出土の須恵器は、陶邑編年第II型式第5段階でも新しい段階に相当するものと考えられるが、まだ矮小化傾向は示していない。5号窯出土の須恵器は、陶邑編年第II型式第4段階の後半と、同第5段階に相当するものと考えられる。5号

窯出土の須恵器は、古い要素と新しい要素を合わせ持っていることから、操業時期の差を示すものと思われる。また、この須恵器の編年観と、熱残留磁気の測定結果とは概ね整合性を保っていることが知られた。

第5章　熱残留磁気測定の結果

島根大学総合理工学部　時枝克安

第1節　山ノ上通山遺跡の窯跡の地磁気年代

1　地磁気年代法の仕組み

地磁気は一定ではなく不規則に変動している。この地磁気変動には周期が短いものから長いものまで様々な成分が含まれているが、とくに、10年以上経過してはじめて顕著になるような満緩な変動を地磁気永年変化と称している。地磁気年代測定法で時計の機能をはたすのは、この地磁気永年変化であり、過去の地磁気の方向の時間的変化を示す曲線に年代を目盛って、地磁気の方向から逆に年代を読みとる。しかし、ある焼土が何時焼けたかを知ろうとするとき、焼土が焼けた時の地磁気の方向がどこかに記録されており、それを測定できなくては目的を果たせない。焼けたときの地磁気の方向は焼土の熱残留磁気として記録されている。地磁気年代を求める手順を述べると、まず、焼土の定方位資料を採取し、それらの熱残留磁気を測定して、焼土が最終加熱されたときの地磁気の方向を求める。そして、標準となる地磁気永年変化曲線上にこの方向に近い点をもとめて年代目盛りを読みとる。

地磁気中で粘土が焼けると、粘土に含まれる磁性鉱物（磁鉄鉱、赤鉄鋼等）が担い手となって、焼土は熱残留磁気を帯びる。この熱残留磁気の方向は焼けたときの地磁気の方向に一致し、しかも非常に安定であり、磁性鉱物のキュリー温度(磁鉄鉱で578°C、赤鉄鋼で675°C)以上に再加熱されないかぎり数万年以上年代が経過しても変化しない。もし、焼土がキュリー温度以上に再加熱された場合は、それまで保持していた残留磁気が消滅し、新たに、再加熱時の地磁気の方向を向いた熱残留磁気が獲得される。つまり、焼土は最終焼成時の地磁気を熱残留磁気として正確に記憶する。それゆえ、あらかじめ、年代既知の焼土の熱残留磁気を測定して、地磁気の方向の時間的変化をグラフにしておけば、このグラフを時計として、年代未知の焼土がいつ焼けたかを逆に推定できる。この時計では地磁気の方向が針に相当し、焼土の熱残留磁気が熱成時の針の位置を記憶していることになる。日本では、広岡によって西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線がかなり詳しく測定されているので[1)]、この方法が焼土の簡便な年代測定法として実用化されている。地磁気

年代測定法の詳細については中島による解説が参考になる[1)]。

2　地磁気年代測定法の問題点

地磁気の方向は時間だけでなく場所によっても変化するので、地域によっては、その場所での標準曲線の形が西南日本のものからかなり相違していることが問題となる。厳密に言えば、ある焼土の地磁気年代を求めるには、焼土の熱残留磁気をその場所の標準曲線と比較しなければならない。相違が小さいときには西南日本の標準曲線を代用できるが、相違が大きいときにはその地域特有の標準曲線を決定し、この曲線と焼土の残留磁気の方向を比較する必要がある。しかし、近畿、中国地域の過去の調査例では、広岡による西南日本の標準曲線から求められた地磁気年代と土器年代はうまく整合しているので、これらの地域においてこの標準曲線を代用しても問題はない。

次に指摘すべきことは、地磁気変動から推定される地磁気年代は土器偏年に依存しないと理解されているむきがあるが、これは誤解であり、両者には密接な関係があるという事実である。すなわち、少数の年代定点をのぞくと、標準曲線上の年代目盛りのほとんどは考古学の土器偏年体系を参照して決められている。それゆえ、年代定点に近い地磁気年代には問題がないが、年代定点から遠くなるほど地磁気年代は土器偏年の影響をより強く受けることになり、もし、土器偏年に改訂があれば、地磁気年代もそれに伴って訂正しなければならない。年代定点が増加すると、地磁気年代と土器偏年の相互依存は解消するが、現状ではやむをえない。しかし、地磁気を媒介とする地磁気年代測定法は、無遺物の場合でも有効である点、また、遠隔地の土器偏年を地磁気変動を通じて対比できる点で独自の性格をもつ。

3　遺構と資料

山ノ上通山遺跡（鳥取県八頭郡郡家町山ノ上）から出土した横口付窯跡４基（１、２、６、７号窯跡)、炭窯１基（３号窯跡)、須恵器窯２基（４、５号窯跡）から地磁気年代測定用の定方位資料を採取した。横口付窯跡は、細長い窯体、片側の等間隔横穴、緩斜面床面という特徴的な構造をもっており、各地で多数の発掘例が報告されているが、いずれも遺物が伴わず、考古学年代は不明である。また、この窯を炭窯とする説があるが、まだ公認されるに至っていない。出土土器から推定される須恵器窯の年代は、４号窯跡が７世紀第２四半期、５号窯跡が７世紀第２四半期の初期である。炭窯、横口付窯跡は遺物がないので年代は不明であるが、２号窯の作業面からは８世紀第２四半期の須恵器横瓶が出土している。ただし、遺構の切り合い関係から、１号窯よりも２号窯が新しいことが分かっている。各窯跡の特徴、資料採取場所、資料数、考古学年代を表１にまとめる。

表１　山ノ上通山遺跡の窯跡の特徴と採取試料数

遺　構	窯跡の特徴、試料採取場所（試料数）	考古学年代
１号窯跡	横口付窯跡（９）＊　弱焼成度　　床面(20)	不明
２号窯跡	横口付窯跡(12)＊　弱焼成度　　床面(25)	不明
３号窯跡	炭窯　　低焼成度　床面(15)、東壁面（５）	不明
４号窯跡	須恵器窯　　床面(22)	７Ｃ第２四半期
５号窯跡	須恵器窯　　床面(20)	同上初期
６号窯跡	横口付窯跡（７）＊　　床面(22)	不明
７号窯跡	横口付窯跡（８）＊　　床面(25)	不明

＊括弧内は横口の数を示す

４　測定結果

試料の残留磁気の方向をスピナー磁力計で測定した。測定結果を図１～７に示す。１、２号窯は残留磁気の方向が分散するので地磁気年代を推定できない。他の窯については、一部の乱れたデータを省略すると図の円内によく揃ったデータを選択できるので、これらを元にして地磁気年代を推定する。４号窯では、円内データの右斜め上にも集中データが認められるが、後者が窯の１カ所のものであるのに対して、前者は窯の広い範囲のものであり、広範囲にわたる熱残留磁気が局部的撹乱を受けた後にも分散しないで揃っている確率は非常に少ないので、円内データは撹乱されていないと判断できる。円内データの平均方向と誤差の目安となる数値を表２に示す。なお、ｋの値が大きく、θ_{95}の値が小さいほど、残留磁気の方向がよく揃っていることを意味する。

表２　山ノ上通山遺跡の窯跡の残留磁気の平均方向

窯	Ｉｍ(度)	Ｄｍ(度Ｅ)	ｋ	θ_{95}(度)	Ｎ
１号窯跡	残留磁気の方向が分散するため有意の平均なし				
２号窯跡	残留磁気の方向が分散するため有意の平均なし				
３号窯跡	58.70	−16.55	1230	1.30	11/20
４号窯跡	57.50	−13.25	3885	0.78	10/22
５号窯跡	58.63	−17.89	1666	0.97	14/20
６号窯跡	57.61	−13.00	2586	1.09	8/22
７号窯跡	55.03	−15.52	1000	1.09	18/25

Ｉｍ：平均伏角、　Ｄｍ：平均偏角、　ｋ：Fisherの信頼度係数

θ_{95}：95％誤差角、　Ｎ：利用試料数／採取試料数

5　地磁気年代と考察

図８は広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線[2)]上に、山ノ上通山遺跡の窯跡の残留磁気の平均方向（＋印）と誤差の範囲（点線の楕円）を記入したものである。地磁気年代を求めるには、残留磁気の平均方向から近い点を永年変化曲線上に求めて、その点の年代を読みとればよい。年代誤差も点線の楕円から同様にして推定できる。４、６号窯跡では、残留磁気の平均方向が標準曲線のループの内側に位置するので、ループの両側線に対応する２つの地磁気年代候補値が可能になる。しかし、３、５、７号窯跡については唯一の値が決まる。このようにして求めた地磁気年代を表３に示す。４、６号窯跡では、考古学年代に近い年代値を先頭に記してある。

表３　山ノ上通山遺跡の窯跡跡の地磁気年代

遺　構	地磁気年代	考古学年代
１号窯跡	測定不能	不明
２号窯跡	測定不能	不明
３号窯跡	640±15	不明
４号窯跡	640±10、680±20	７Ｃ第２四半期
５号窯跡	635±10	同上初期
６号窯跡	640±20、680±25	不明
７号窯跡	600±15	不明

図８から分かるように、各窯跡の残留磁気の平均方向の分布はかなり狭い範囲に集中している。地磁気年代の立場から言えば、一連の窯跡は同じ時期のものである可能性が大きいので、この判断に沿って地磁気年代を決める。５号窯の地磁気年代（640±10）は考古学年代（7C第２四半期初）に整合している。４号窯の地磁気年代として640±10を選ぶと、考古学年代（7C第２四半期）とうまく整合する。６号窯も他と同時期のものと考えて640±20の年代を選ぶ。最後に試料採取時にお世話になった中野知照氏と郡家町教育委員会の皆様に厚く感謝します。

［註釈］

１）　中島正志、夏原信義　「考古地磁気年代推定法」考古学ライブラリー９
ニューサイエンス社

２）　広岡公夫（1978）　考古地磁気および第四紀古地磁気の最近の動向
第４紀研究　15，200-203

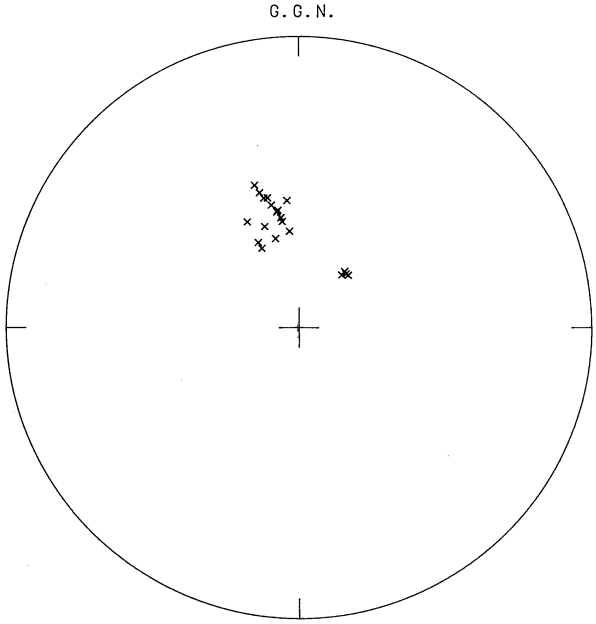


図１　山ノ上通山遺跡１号窯跡の残留磁気の方向

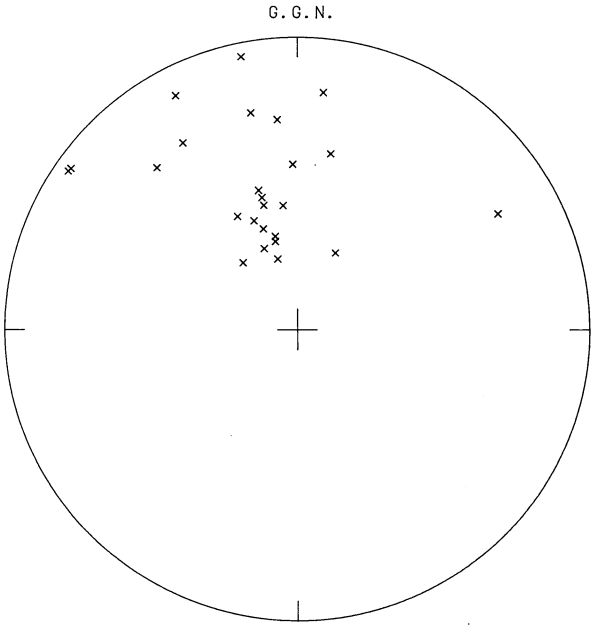


図２　山ノ上通山遺跡２号窯跡の残留磁気の方向

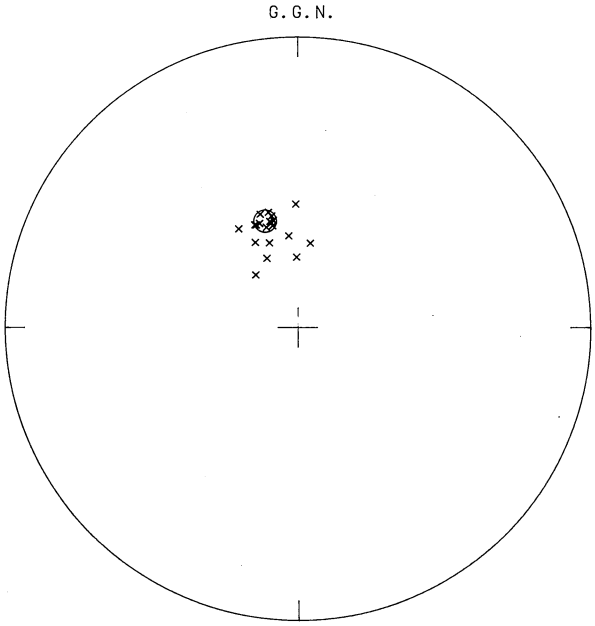


図 3　山ノ上通山遺跡 3 号窯跡の残留磁気の方向

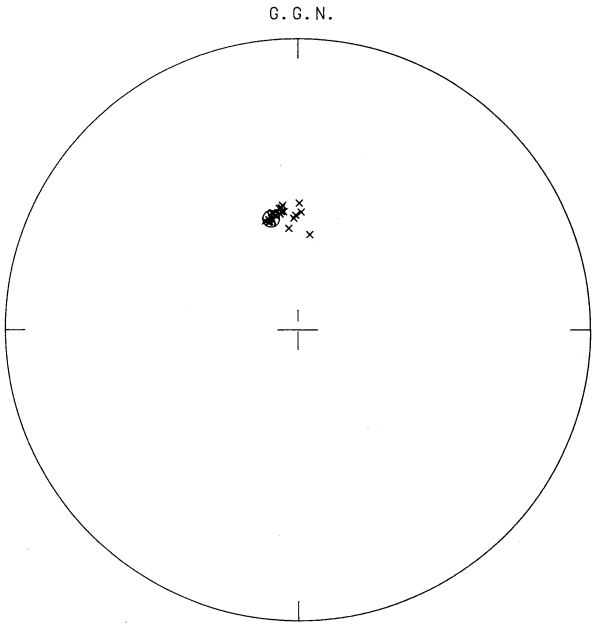


図 4　山ノ上通山遺跡 4 号窯跡の残留磁気の方向

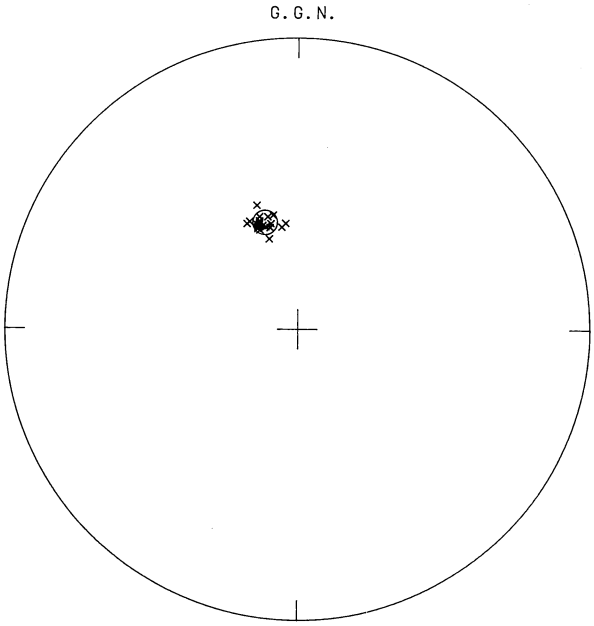


図5　山ノ上通山遺跡5号窯跡の残留磁気の方向

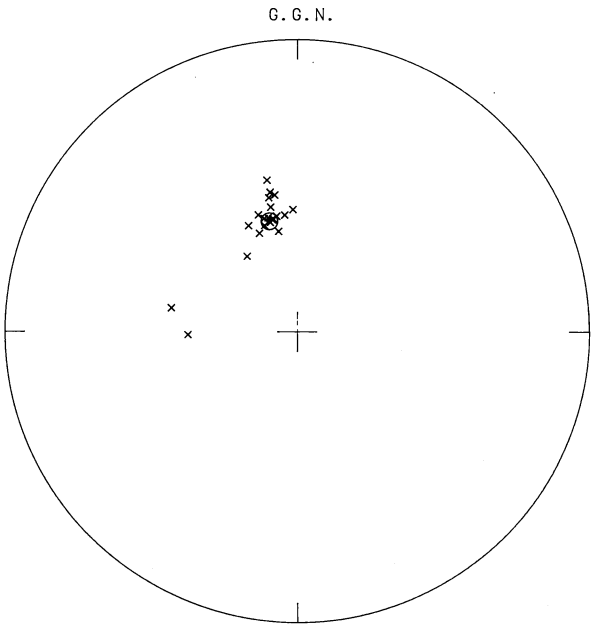


図6　山ノ上通山遺跡6号窯跡の残留磁気の方向

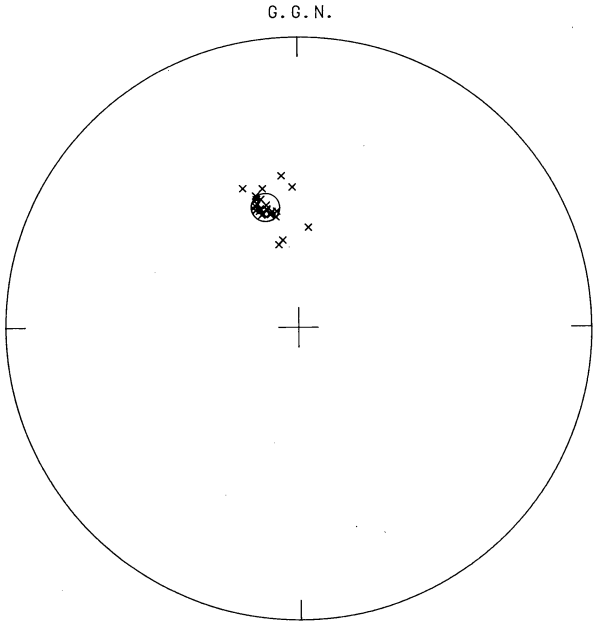


図７　山ノ上通山遺跡７号窯跡の残留磁気の方向

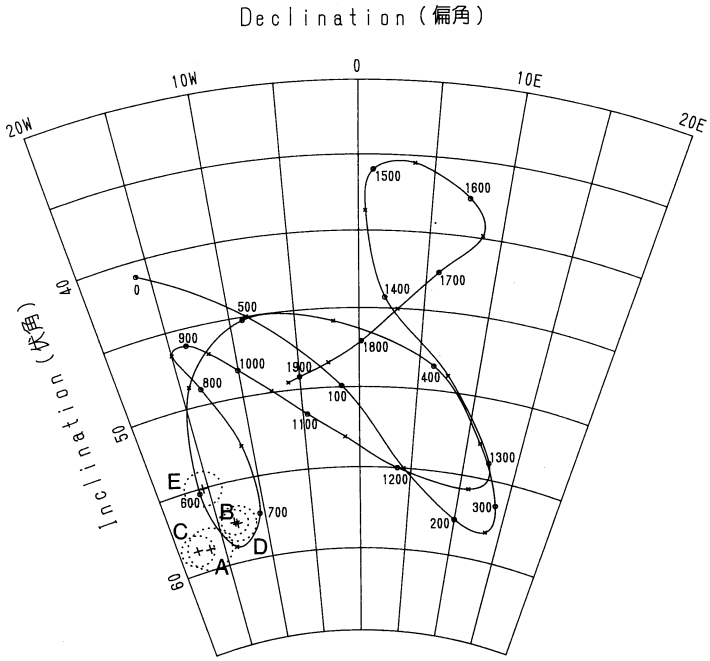


図８　山ノ上通山遺跡の窯跡の残留磁気の方向（＋印）と誤差の範囲（点線の楕円）および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線
Ａ：３号窯跡、　Ｂ：４号窯跡、　Ｃ：５号窯跡　Ｄ：６号窯跡
Ｅ：７号窯跡

第２節　花原窯跡群の３基の窯跡の地磁気年代

島根大学総合理工学部　時枝克安

地磁気は年代とともに変化し、焼土は焼けたときの地磁気を熱残留磁気として記録し保持する。これを基礎として、窯跡の熱残留磁気を西南日本の地磁気標準曲線と比較することにより、花原窯跡群の３基の窯跡の最終焼成年代を推定した。

１　遺構と資料

花原窯跡遺跡（鳥取県八頭郡郡家町花原）から出土した３基の須恵器窯（３、10、27窯跡）から地磁気年代測定用の定方位資料を採取した。窯と道路の交差部分のみが発掘されたので、３、27号窯跡では窯尻の狭い範囲しか露出しておらず試料は10ヶしか採取できなかった。なお、27号窯の床面焼土には撹乱を思わせる形跡が認められた。10号窯では焚口のみが発掘されよく焼けた床面から22ヶの試料を採取した。３号窯と27号窯は約７ｍ離れてほぼ平行に並び、北側約200ｍ離れた所に10号窯がある。多数の土器が出土しているが、この地域の土器偏年が未完成であるために須恵器窯の考古学年代を特定できない。各窯跡の特徴、試料採取場所、試料数、考古学年代を表１にまとめる。

表１　花原窯跡群の窯跡の特徴と採取試料数

遺　構	窯跡の特徴、試料採取場所（試料数）		考古学年代
３号窯跡	須恵器窯　高焼成度	焚口床面(10)	不明
10号窯跡	須恵器窯	窯尻床面(22)	不明
27号窯跡	須恵器窯　落下した焼土？	窯尻床面(10)	不明

２　測定結果

試料の残留磁気の方向をスピナー磁力計で測定した。測定結果を図１～３に示す。３号窯（図１）については、一部の乱れたデータを省略すると図の円内によく揃ったデータを選択できる。また、10号窯（図２）では３つの部分的な収束群が認められるが、このうち、円内のみが床面の３ヶ所のデータを含むのに対して、他の群は１ヶ所のみのデータからなる。広範囲のデータが全く同じ撹乱を受けることはないので、円内データは撹乱されておらず最終焼成時の地磁気の方向を示していると判断できる。27号窯（図３）は残留磁気の方向が分散するので地磁気年代を推定できない。結局、円内データを元にして地磁気年代を推定する。円内データの平均方向と誤差の目安となる数値を計算すると表２のようにな

る。なお、kの値が大きく、θ_{95}の値が小さいほど、残留磁気の方向がよく揃っていることを示す。

表2　花原窯跡遺跡の窯跡の残留磁気の平均方向

窯	Im(度)	Dm(度E)	k	θ_{95}(度)	N
3号窯跡	52.32	−0.48	1217	1.55	8/10
10号窯跡	49.36	−1.37	3333	0.96	8/22
27号窯跡	残留磁気の方向分散するため有意の平均なし				0/10

Im：平均伏角、　Dm：平均偏角、　k：Fisherの信頼度係数

θ_{95}：95%誤差角、　N：利用試料数／採取試料数

3　地磁気年代

図4は広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線[1]上に、花原窯跡遺跡の窯跡の残留磁気の平均方向（＋印）と誤差の範囲（点線の楕円）を記入したものである。地磁気年代を求めるには、残留磁気の平均方向から近い点を永年変化曲線上に求めて、その点の年代を読みとればよい。年代誤差も点線の楕円から同様にして推定できる。標準曲線が狭い範囲で交差するので、地磁気年代として、～100年、～1100年の2つの候補値が可能になる。しかし、弥生時代の年代は考古学的に考えにくいので前者を省略する。このようにして求めた地磁気年代を表3に示す。

表3　花原窯跡遺跡の窯跡跡の地磁気年代

遺　構	地磁気年代	考古学年代
3号窯跡	1150±25	不明
10号窯跡	1120±20	不明
27号窯跡	測定不能	不明

花原窯跡群の近くに山田窯跡群があるが、その10号窯の熱残留磁気の平均方向はここで得られた花原窯跡群の3、10号窯跡の平均方向に極めて近く、地磁気年代は1090±15であった[2]。地磁気年代の立場から見ると、花原窯跡群の3、10号窯跡と山田窯跡群の10号窯はほぼ同じ時期に操業されていたと考えられる。最後に試料採取時にお世話になった中野知照氏と郡家町教育委員会の皆様に厚く感謝します。

［註釈］

1）　広岡公夫（1978）　考古地磁気および第四紀古地磁気の最近の動向
第４紀研究　15，200-203

2）　時枝克安（1987）　山田10号窯の熱残留磁気による年代測定
「山田窯跡群」郡家町文化財報告書、
郡家町教育委員会　42-44

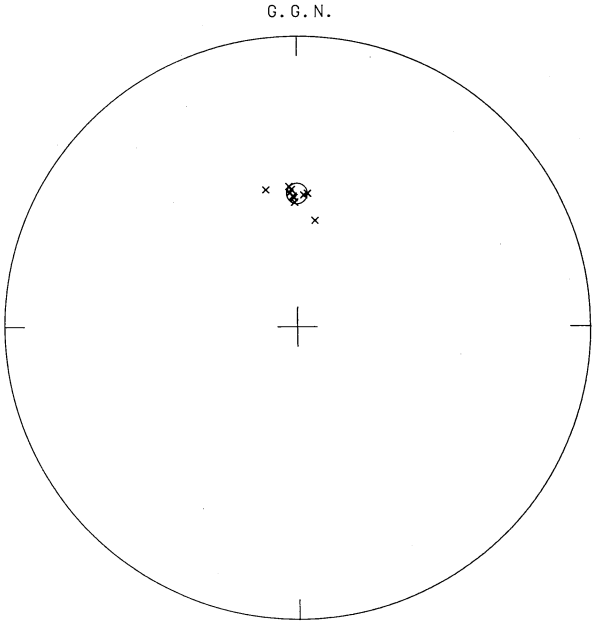


図１　花原窯跡群３号窯跡の残留磁気の方向

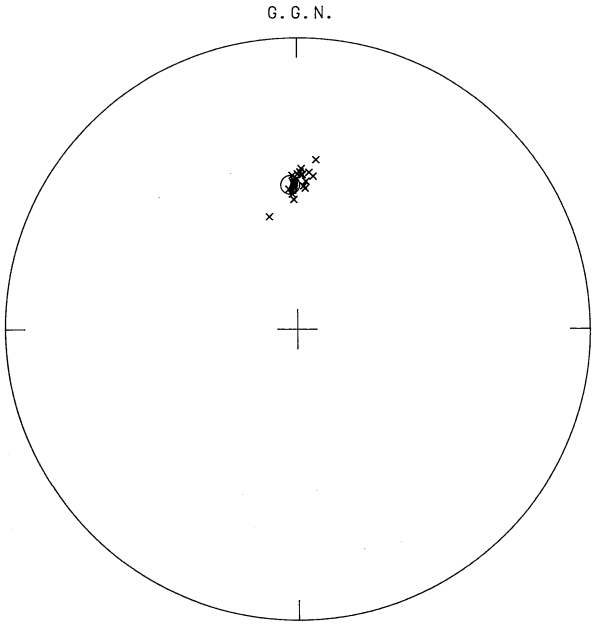


図２　花原窯跡群10号窯跡の残留磁気の方向

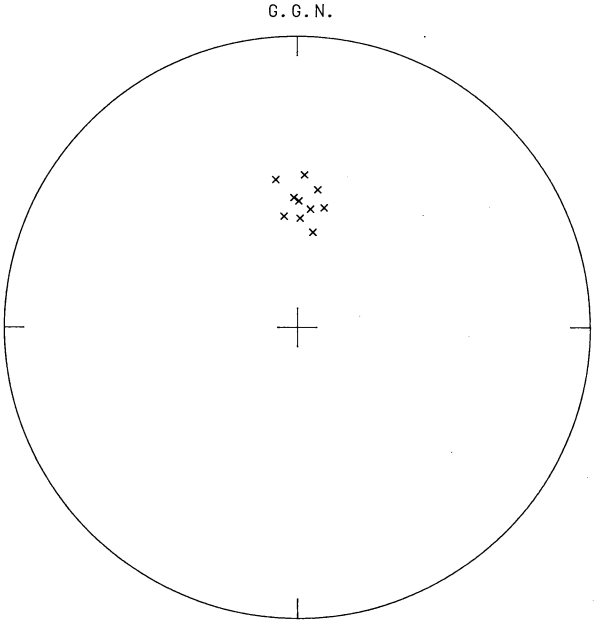


図３　花原窯跡群27号窯跡の残留磁気の方向

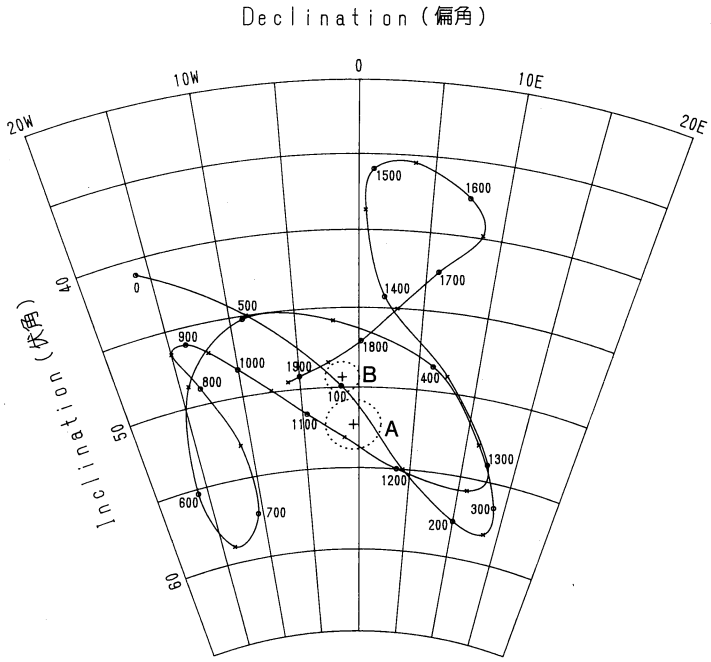


図４　花原窯跡群の窯跡の残留磁気の方向（＋印）と誤差の範囲（点線の楕円）および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線
　Ａ：３号窯跡、　Ｂ：10号窯跡

後　　記

山ノ上通山遺跡の発掘調査は、平成２年度に開始し同５年度には現地調査を終了し、その後報告書作成を行なってきた。山ノ上通山遺跡が位置する私都川中流域において、広範囲で各種の遺構を調査対象としたのは初めてであった。調査方法に戸惑いも感じたが、各種の調査成果が得られたことで、初期の目的は果たせたものと思われる。

山ノ上通山遺跡は、大きく分けて古墳群、掘立柱建物跡群、窯跡群であった。これらの遺構群は、それぞれが独立して存在していたのではなく、共に密接な関係を保って営まれていたことが知られた。

山ノ上古墳群の被葬者は、直接的な関係でないにしても、須恵器工人集団の系譜に繋がる在地の首長層であったものと思われる。古墳が営まれている時期には、丘陵裾部において生活の痕跡が出現していた。この後、私都川流域で須恵器の生産が始まり、当地区に於いても７世紀前半には須恵器窯の操業が開始されてくる。また７世紀中頃からは、窯状遺構の操業が開始される。これらの窯の操業時期と相い前後して丘陵裾部に掘立柱建物跡群が出現している。この掘立柱建物跡群は、その規模と規格性を保っていることから、窯で生産された製品の保管・搬出等を管掌する機能を持った役所的機構の一翼を担っていたものと思われる。山ノ上通山遺跡に見る掘立柱建物跡群は、本遺跡で生産されたもののみでなく、私都川流域の窯跡群より搬出された製品をも管掌していたものと考えられる。

註

（１）谷口恭子「鳥取県東部出土の須恵器－陶邑Ｉ期を中心として－」『水曜考古』12号 1987

（２）谷口恭子氏教示。従来、鳥取県東部ではＴＫ23型式以降のものが確認されていたが、最近の調査でこれに先行するものとして、秋里遺跡の土器溜りよりＴＫ208型式の資料が確認されている。また、遺構外ではあるが、鳥取市西大路土居遺跡や紙子谷24号墳より同時期のものも確認されている。

（３）註１参照

（４）寺西健一「鳥取県杉崎18号墳出土の須恵器」『古文化談叢』第15集　1985

（５）『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』鳥取県教育委員会　1984

（６）註５参照

（７）『稲荷古墳群調査報告書』郡家町教育委員会　1980

（８）前田　均氏教示

参 考 文 献

『陶邑』III、財団法人大阪文化財センター　1978

田辺昭三『須恵器大成』　1981

中村　浩『和泉陶邑窯の研究』　1981

『岩吉遺跡III』鳥取市教育委員会　1991

望月精司「須恵器窯構造から見た7世紀の画期－特に南加賀古窯跡群の様相を中心として－　『北陸古代土器研究』第3号　1993

『下坂窯跡群』郡家町教育委員会　1988

『山田窯跡群』郡家町教育委員会　1987

『花原遺跡群・山ノ上古墳群発掘調査概要報告書』郡家町教育委員会　1992

山ノ上通山遺跡、遺物観察表

記　載　事　項　凡　例

第００表　　地区・遺構名

※1 挿図番号	※2 器　種	※3 法　量	※4 形態の特徴	※5 調整手法の特徴	※6 備　考	※7 遺物番号

※１　挿図番号は、各調査区及び各遺構ごとの通し番号を示している。また写真図版の番号とも合致する。下段には出土地点を示している。

※２　本書で示した類別は、須恵器蓋杯の特徴から分類したものである。所謂歴史時代の土器に示される類別法とは、趣を異にすることを留意されたい。

※３　法量は、以下のものについてのみ記載することとした。単位はcmで、残存値の場合は、数字の後に（残）を記載している。

①口　径・基部径　　④最大胴径
②受部径　　⑤底部径（高台径）
③器　高　　⑥立上り高

※４　須恵器は形態の特徴により、以下の類別を行なった。

杯蓋　蓋Ａ：丸みを帯びた天井部を呈するもの。
　　蓋Ｂ：平坦な天井部を呈するもの。
　　蓋Ｃ：天井部中央につまみを付すもの。（扁平・宝珠形）
杯身　杯Ａ：口縁部内側に立上りを有するもの。（丸底・平底）
　　杯Ｂ：底部屈曲部の内側に高台を有するもの。
　　杯Ｃ：平底を呈するもの。（底部未調整・回転糸切り）

※５　須恵器は調整手法の特徴により概ね以下の分類が出来たが、記号は未記入である。

ａ：ヘラ切り離しの後、未調整。
ｂ：器高の１／２程度、ヘラケズリを行なう。
ｃ：屈曲部のみヘラケズリを行なう。
ｄ：中央部と屈曲部のみヘラケズリを行なう。
ｅ：静止ヘラケズリを行なう。
ｆ：全面にロクロナデを行なう。

※６　備考欄には、以下の項目を記載している。

①：胎　土
　精良な胎土……砂粒を含まず、精練された滑らかな胎土
　精緻な胎土……１㎜以下の砂粒を含む胎土
　細砂を含む……１～２㎜の砂粒を含む胎土
　砂粒を含む……２～３㎜の砂粒を含む胎土
　砂礫を含む……４㎜以下の砂粒を含む胎土

②：焼　成
　堅　緻……堅くて緻密な焼成　　軟　質……やや不良な焼成
　やや軟……良好な焼成　　甘　い……不良な焼成（生焼け）

③：色　調……主として外面の色調を示すが、内外面が異なる場合、（外）・（内）で表示した。色名は、基本的には「農林水産省農林水産技術会議事務局監修」の新版標準土色帖に従っている。

※７　取り上げ番号を表示し、破片が多数となる場合は主となるものを示している。

第２表　Ｊ地区出土遺物（第２４図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１１ ＳＫ－ ０３	須恵器 無蓋高杯	①１０．６ ③１１．８ ⑤９．８	杯部は丸底の底部より内湾気味に立ち上がる口縁部に続き、端部は丸く納める。口縁部外面に二段の沈線状の凹線を廻らす。脚部は、細い基部よりハ字状に広がり端部は屈曲し丸くおわる。脚部中程に５条の沈線を施す。脚部には二段二方向の長方形透かしを有する。上段の透かしは、貫通しない。	杯部底部外面はヘラ削りの後ナデ調整。杯部内外面ロクロナデ。脚部外面はロクロナデ調整。内面はヘラ削りの後ナデ調整を行ない、端部内面は丁寧なナデを施す。	①細砂を含む ②堅緻 ③青灰色	１００ １０１
１２ ＳＫ－ ０３	須恵器 無蓋高杯	①１３．２ ③１１．０ ⑤１０．５	杯部は、やや丸底気味の底部より口縁部下端で屈曲し外反気味に直立する口縁部に続く。脚部はハ字状に開き、脚端部は屈曲しておわる。	内外面ロクロナデ調整を施す。杯底部の内面は不整ナデを行なう。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③青灰色	０９３ １００ １０１ ３５９ ２８６
１３ ＳＫ－ ０３	須恵器 高杯脚部	③８．７残	ハ字状に開く脚部。脚部外面の中央部に２条の沈線を廻らす。	脚部内面の上部に絞り込みの痕跡が認められる。内外面ロクロナデ調整を施す。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③青灰色	１００ １０１
１４ ＳＫ－ ０３	須恵器 高杯脚部	③６．０残	ハ字状に開く脚部を呈する。外面に２条の沈線を施す。	内外面ロクロナデ調整を施す。	①細粒を含む。 ②堅緻 ③青灰色	１０１
１５ ＳＫ－ ０３	須恵器 脚付椀	①９．４ ③１１．５ ⑤１０．０	脚部はハ字状に大きく開き、端部は玉縁状をなす。杯部は、平坦な底部よりやや内湾気味に直立して口縁部に続き、口縁端部は丸く納める。	杯底部内面は不整ナデを行ない。内外面ロクロナデ調整の後、杯部と脚部外面にカキ目を施す。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③暗青灰色	１０１
１６ ＳＫ－ ０３	須恵器 脚付把手付椀	①１１．０ ③１９．２ ④１６．８ ⑤１４．６	受部は球形の底部より内湾気味に斜め上方に立ち上がったのち、中央部で更に内湾して口縁部へと続き、端部は丸く納める。口縁部・最大胴径部分に２条の凹線を廻らす。脚部は大きくハ字状に開き端部は屈曲し接地面は丸く納める。脚部に二段四方向の長方形透かしを有する。最大胴径部分に剥離痕が認められることにより、把手を付していたものと考えられる。	受部・脚部外面にカキ目を施したのち、受部下半１／４はナデにより消す。受部上半は、カキ目を消すことによって２条の凹線を二段に作り、その間隙に上段に櫛描波状文、下段には板状工具による刺突文を廻らす。脚端部および内面はロクロナデ調整。	①細粒を含む。 ②堅緻 ③暗青灰色	１００ １０１ １０２ １７８ ３１７ ３７８

第１表　Ｊ地区出土遺物（第２４図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１ ＳＫ－ ０３	須恵器 蓋Ｂ	①１４．６ ③３．９	平坦な天井部よりやや内湾気味に垂下して口縁部に続く。	天井部外面、回転ヘラケズリ。	①精良 ②堅緻 ③明緑灰色	１００ ３７６ ３５９
２ ＳＫ－ ０３	須恵器 蓋Ａ	①１２．１ ③４．２	丸みを帯びた天井部より緩やかに口縁部に続く。	表面剥離が著しく、調整は不明。	①精良 ②堅緻 ③明青灰色	１０１
３ ＳＫ－ ０３	須恵器 蓋Ｂ	①１３．０ ③５．６	やや平坦な天井部より内湾気味に口縁部へと続き、口縁端部は丸くおさめる。	天井部外面は、ヘラ切り離しの後未調整。口縁部内外面は雑なロクロナデ。天井部外面に板目圧痕を残す。	①砂粒を含む ②堅緻 ③灰白色	１００ １０１
４ ＳＫ－ ０３	須恵器 蓋Ｂ	①１４．０ ③４．８残	天井部を欠く。内湾気味の口縁部をなし、端部は丸くおさめる。	天井部は摩滅が著しく調整は不明。口縁部内外面ロクロナデ。	①細粒を含む ②やや軟 ③灰白色 淡橙色	１０１
５ ＳＫ－ ０３	須恵器 蓋Ｂ	①１４．０ ③２．４残	天井部を欠く。口縁部はやや内湾し、端部は丸く納める。	内外面ロクロナデ。	①細粒を含む ②堅緻 ③青灰色	３５９
６ ＳＫ－ ０３	須恵器 杯Ａ	①１３．２ ②１５．６ ③２．３残 ⑥０．６	底部を欠く。なだらかに外反気味の受部に続く。立上りは短く内傾する。受部端部はやや上方に向ける。	器高の約１／３ヘラケズリを行なう。内外面ロクロナデ調整。	①細粒を含む ②堅緻 ③青灰色	１０２
７ ＳＫ－ ０３	須恵器 杯Ａ	①１３．０ ②１５．３ ③２．６残 ⑥０．８	底部を欠く。外傾気味の体部よりわずかに上方に突出する受部に続く。立上りは短く内傾する。	内外面ロクロナデ。	①細粒を含む ②軟質 ③灰白色	１００
８ ＳＫ－ ０３	須恵器 杯Ａ	①１１．４ ②１４．０ ③４．０ ⑥０．５	丸底気味の底部よりなだらかに受部に続く。受部は斜め上方に突出する。立上りは内傾した後上方に摘み出す。	底部外面はヘラ切り離しの後未調整。内外面ロクロナデ。底部内面不整ナデ。	①砂礫を含む ②堅緻 ③青灰色 灰白色	１００
９ ＳＫ－ ０３	須恵器 高杯	①１１．６ ②１３．９ ③９．４ ⑤１１．０ ⑥０．５	ハ字状に開く脚部は端部で屈曲し尖り気味におわる。体部は外傾し受部端部は丸く納め、立上りは内傾する。	体部下半はヘラケズリの後ロクロナデ。内外面ロクロナデ。杯部の底部内面には不整ナデがみられる。	①砂粒を含む ②堅緻 ③灰白色	１００ １０１ ２８６
１０ ＳＫ－ ０３	須恵器 高杯	①１３．０ ②１５．０ ③８．９ ⑤１２．３ ⑥０．７	脚部はハ字状に開く。平坦な杯底部より外傾する体部に続く。受部端部は外反し上方に摘む。立上りは短い。	体部下半の屈曲部のみにヘラケズリを施す。内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	３１５

第４表　Ｊ地区出土遺物（第２５図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
２６ ＳＤ－ ０９	須恵器 杯	①－－－ ③１．１残	やや上げ底気味の底部より内湾気味の体部に続く。口縁部を欠く。	底部切り離しは回転糸切りによる。内外面ロクロナデ。	①細粒を含む。 ②やや軟 ③灰色	３１９
２７ 遺構外	須恵器 杯	①－－－ ③１．４残	平坦な底部より外傾気味の体部に続く。		①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	４７０
２８ Ｐ－２７	須恵器 蓋	①１５．２ ③４．６	平坦な天井部より内湾しながら口縁部へと続き、端部はやや肥厚する。天井部中央につまみを有していたと思われる。	内外面ロクロナデ調整と思われるが、外面は摩滅が著しく不明。	①砂粒を含む。 ②軟質 ③灰白色	４９８
２９ 遺構面	須恵器 蓋	①１３．２ ③４．２	平坦な天井部より内湾気味に垂下して口縁部へと続き、口縁端部は丸く納める。	天井部外面は不明瞭だが、切り離しの後未調整と思われる。内外面ロクロナデ。	①砂粒を含む。 ②軟質 ③灰白色	２５７
３０ 遺構面	須恵器 蓋	①１４．２ ③２．７残	天井部欠損。天井部よりなだらかに続き、口縁部で屈曲して垂下する。口縁端部は丸く納める。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１７８
３１ ＳＤ－ ０９	須恵器 蓋	①１３．０ ③３．０残	天井部欠損。天井部よりなだらかに垂下しハ字状をなす。口縁端部は丸く納める。		①精緻 ②やや軟 ③灰白色	３５２
３２ ＳＫ－ ０３	須恵器 蓋	①１３．２ ③２．９残	天井部欠損。内湾気味に続き、口縁部は垂下し端部は丸く納める。		①精緻 ②やや軟 ③灰色	０８２ １０２
３３ 遺構面	須恵器 杯Ａ	①１２．８ ②１４．６ ③２．１残 ⑥０．６	底部欠損。立上りは短く直立し、端部は先細り気味に納める。受部はやや斜め上方に伸び丸くおわる。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	０８３
３４ 遺構面	須恵器 杯Ａ	①１２．４ ②１４．２ ③２．９残 ⑥０．８	底部欠損。立上りは直立し、端部は先細り気味に納める。受部はほぼ水平に摘み出す。		①砂粒を含む。 ②軟質 ③灰白色	１７８
３５ Ｐ－２４	須恵器 杯Ａ	①１１．７ ②１３．６ ③２．９残 ⑥０．９	底部欠損。立上りはやや内傾し、端部は丸く納める。受部は斜め上方に摘み出し丸くおわる。	体部は２／３までヘラ削りを施す。内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	３１７
３６ Ｐ－９３	須恵器 杯Ａ	①－－－ ②１５．２ ③３．０残 ⑥－－－	平坦な底部より斜め上方に立ち上がる。受部は横方向に摘み出す。立上りは先端部欠損。	摩滅が著しく調整は不明。	①砂粒を含む。 ②軟質 ③灰白色	３６５

第３表　Ｊ地区出土遺物（第２４・２５図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１７ ＳＫ－ ０３ Ｐ－４５	須恵器 甕	①１１．７ ③１４．４ ④１０．７	丸底の底部より内湾気味に立ち上がりやや肩の張る肩部へと続く。頚部は、逆ハ字状に外反したのち屈曲し、斜め上方に伸びる口縁部へと続く。口縁端部は丸く納める。口縁部下端はややシャープな稜をつける。頚部中央部に２条、肩部下端に１条の沈線を施す。肩部下端部分に円孔１を穿つ。	内外面ロクロナデ。口縁部外面は、工具による調整と思われる。底部外面は、不整方向の静止ヘラ削りを施す。	①細粒を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１００ ２８６
１８ ＳＫ－ ０３ Ｐ－４５	須恵器 短頚壺	①４．７ ③７．３ ④８．１	やや平坦な底部より内湾気味に立ち上がり、張り気味の肩部へと続く。口縁部は直立し、端部は丸く納める。	底部はヘラ切り離しの後ナデ調整を行なう。体部下半は、ヘラ削りの後ナデ。内外面ロクロナデ調整。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③青灰色	１００ １０１ ２８６ ０９８ ３６６
１９ ＳＫ－ ０３	須恵器 壺	①２０．７ ③７．０残	張り気味の肩部より屈曲し、外反した頚部に続く。口縁部は肥厚し１条の凹線をつける。口縁端部は平坦な面をなす。	摩滅が著しく調整は不明だが、ロクロナデと思われる。	①砂粒を含む。 ②軟質 ③灰白色	１００
２０ Ｐ－ １５９	須恵器 杯	①９．７ ③３．５	平坦な底部よりわずかに内湾気味に立ち上がり口縁部へと続き、端部は凹面をなす。壺蓋か？	底部切り離しは回転糸切りによる。口縁部内外面ロクロナデ調整を施し、底部内面は不整ナデ。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	２６７
２１ Ｐ－ １４３	須恵器 杯	①１１．６ ③５．７	平坦な底部より内湾気味に立ち上がり、外反する口縁部に続く。端部は丸く納める。	底部切り離しは回転糸切り、内外面ロクロナデ調整を施したものと思われるが、摩滅が著しく不明。	①細粒を含む。 ②軟質 ③灰白色	３３９
２２ 遺構面	須恵器 杯	①－－－ ③１．４残	やや上げ底の底部をなし、内湾気味に立ち上がり口縁部に続くが、口縁部を欠く。	底部切り離しは回転糸切りによる。底部内面は不整ナデ。口縁部内外面ロクロナデ。	①細粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	０９８
２３ ＳＤ－ ０１	須恵器 皿	①１２．２ ③２．０	平坦な底部より大きくハ字状に開き、口縁端部は更に外方に伸ばし丸く納める。	底部切り離しは回転糸切りによる。内外面ロクロナデ。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	２５６
２４ 遺構面	須恵器 杯	①１５．６ ③３．９残	底部を欠く。体部は内湾気味に斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸く納める。	内外面ロクロナデ調整を施す。	①精緻 ②やや軟 ③灰色	０９１
２５ Ｐ－ １９８	須恵器 杯	①－－－ ③０．８残	平底を呈する底部。体部は外反して開くと思われる。	底部外面はヘラ削りの後ロクロナデ。内外面ロクロナデ。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	３５１

第６表　Ｊ地区出土遺物（第２６図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
４７ 遺構面	須恵器 蓋Ｃ	①１５．２ ③１．３残	天井部欠損。口縁端部で屈曲し、端部を折り込んでいる。接地面は丸く納める。	内外面ロクロナデ。	①精良 ②堅緻 ③灰色	０９５
４８ 遺構面	須恵器 蓋Ｃ	①１４．０ ③１．３残	天井部欠損。天井部よりなだらかに口縁部に続き、端部を内方に屈曲させる。接地面をやや外方に摘み出し、先細らせる。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	２５７
４９ 遺構面	須恵器 蓋Ｃ	①１３．７ ③１．７残	平坦な天井部より屈曲して口縁部に続き、更に屈曲させて端部にいたる。接地面はわずかに下方に垂下させる。天井部中央のつまみを欠く。	天井部外面は回転糸切り痕を残す。天井部内面は不整ナデ。他は内外面ロクロナデ。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰白色	０９９
５０ ＳＫ－０３	須恵器 蓋Ｃ	①１５．０ ③１．４残	天井部欠損。ほぼ平坦な天井部よりなだらかに口縁部へと続く。端部は屈曲して下方に垂下し、接地面は丸く納める。	内外面ロクロナデ。天井部内面は不整ナデと思われる。	①細砂を含む。 ②やや軟 ③灰白色	１０２
５１ 遺構面	須恵器 蓋Ｃ	①１５．２ ③１．２残	天井部欠損。口縁端部をくの字に屈曲させるもので、接地面はやや外方に垂下する。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	０９８
５２ Ｐ－５５	須恵器 蓋Ｃ	①１３．４ ③１．６残	天井部欠損。ほぼ平坦な天井部よりやや屈曲して口縁部へと続き、端部は更に屈曲して外方に垂下する。接地面は先細り気味。	天井部外面はヘラ削りを施す。他は内外面ロクロナデ。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	２９７
５３ Ｐ－１０６	須恵器 蓋Ｃ	①１３．６ ③２．９	扁平な天井部を呈し、中央に擬宝珠様のつまみを有する。天井部端で屈曲し、なだらかに口縁端部に続く。端部は屈曲して垂下する。接地部分は断面三角形を呈する。	天井部の切り離しは、回転糸切りによる。つまみ部とその周辺はナデ調整。他は内外面ロクロナデ。	①精緻 ②軟質 ③灰白色	２４８
５４ Ｐ－１７７	須恵器 蓋Ｃ	つまみ部 ①２．２ ③０．８	天井部のみの遺存。扁平なつまみを有する。	切り離しは回転糸切りによる。つまみとその周辺はロクロナデ。天井部内面は不整ナデ。	①精緻 ②甘い ③灰白色	２７５
５５ 遺構面	須恵器 蓋Ｃ	つまみ部 ①２．０ ③１．１	天井部のみの遺存で、擬宝珠様つまみを有する。	内外面ロクロナデ。	①精良 ②堅緻 ③灰白色	０９５

第５表　Ｊ地区出土遺物（第２５・２６図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
３７ Ｐ－９５	須恵器 杯Ａ	①１３．５ ②１５．７ ③２．８残 ⑥０．７	底部欠損。立上りはやや内傾し、端部は先細り気味におわる。受部は斜め上方に伸び丸くおわる。体部は内湾する。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	２８６
３８ 遺構面	須恵器 高杯	③５．２残	杯部・脚端部欠損。脚部はハ字状に開く。		①精緻 ②堅緻 ③灰橙色	０９５
３９ 焼土面	須恵器 蓋	①１４．７ ③３．３	平坦な天井部より内湾気味に垂下して口縁部に続く。端部は丸く納める。	天井部外面は、ヘラ切り離しの後ヘラ削りを施す。内外面ロクロナデ。天井部内面に当て具痕を残す。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰色	４４６ ４９９
４０ ＳＤ－０９	須恵器 杯Ａ	①１１．６ ②１３．８ ③３．６残 ⑥１．０	底部欠損。立上りは内傾した後直立し、先細り気味におわる。受部は、斜め上方に摘み上げ丸く納める。体部は底部よりなだらかに続く。	体部の１／３にヘラ削りを施す。内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	３１２
４１ 焼土埋土	須恵器 杯Ａ	①１３．４ ②１５．４ ③２．８残 ⑥０．６	底部欠損。立上りは内傾した後直立し、端部はやや先細り丸く納める。受部は斜め上方に伸び丸く納める。体部はやや内湾気味。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	４９９
４２ ３号窯 埋土	須恵器 甕	①１４．２ ③２．８残	逆ハ字状に開く口縁部で、口縁部下端に浅い沈線を施す。甕の口縁部と思われる。		①精緻 ②軟質 ③淡黄色	１５５
４３ ３号窯 埋土	須恵器 甕	①１４．６ ③２．２残	逆ハ字状に開く口縁部で、下端部分に１条の沈線を施す。口縁端部は丸く納める。		①細砂を含む。 ②軟質 ③灰黄色	１５５
４４ ３号窯 埋土	須恵器 甕	①１２．８ ③２．３残	逆ハ字状に開く口縁部で、下端部に１条の沈線を施し、屈曲して頸部に続く。		①精緻 ②やや軟 ③灰黄色	１４７
４５ 遺構面	須恵器 蓋Ｃ	①１３．２ ③１．４残	天井部欠損。天井部よりなだらかに口縁部へと続き、端部で屈曲させる。接地面は外方に摘み出し先細る。		①精緻 ②堅緻 ③青灰色	２６４
４６ Ｐ－１１０	須恵器 蓋Ｃ	①１５．２ ③１．２残	天井部欠損。天井部よりなだらかに口縁部へと続き、端部で屈曲する。接地面は外方にやや摘み出し先細る。		①精緻 ②堅緻 ③暗青灰色	２８８

第７表　Ｊ地区出土遺物（第２６図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
５６ ＳＫ－ ０３	須恵器 杯Ｂ	①１２．７ ③３．６ ⑤８．０	やや上げ底気味の平坦な底部より、外傾する口縁部に続く。口縁端部は丸く納める。底部外面の屈曲部に高台を貼りつける。	高台および口縁部外面はロクロナデ。他は剥離が著しく不明。	①砂粒を含む。 ②軟質 ③灰白色	１０１
５７ ＳＫ－ ０３	須恵器 杯Ｂ	①１３．３ ③３．５ ⑤９．２	底部欠損。ほぼ平坦な底部より外傾する口縁部に続く。口縁端部は先細り気味に丸く納める。底部端の屈曲部のやや内側に高台を貼りつける。	底部切り離しは、回転糸切りによる。底部内面は不整ナデ。他は内外面ロクロナデ。	①細粒を含む。 ②堅緻 ③青灰色	１０１
５８ 遺構面	須恵器 杯Ｂ	①１３．４ ③３．７ ⑤９．０	底部欠損。ほぼ平坦な底部よりやや外反気味の口縁部に続く。口縁端部は丸く納める。底部屈曲部の内側に高台を貼りつける。	内外面ロクロナデ。底部内面は不整ナデ。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	２５７
５９ ＳＤ－ １４	須恵器 杯Ｂ	①１１．０ ③４．１ ⑤７．２	平坦な底部よりわずかに内湾気味に斜め上方に外傾する口縁部に続く。口縁端部は丸く納める。	底部切り離しは、回転糸切りによる。屈曲部のみにヘラ削りを行ない、その後高台を貼りつける。底部内面は不整ナデ。他はロクロナデ。	①砂粒を含む。 ②やや軟 ③灰白色	４４５
６０ Ｐ－３７	須恵器 杯Ｂ	①１３．３ ③２．５残	底部欠損。逆ハ字状に開く口縁部。	内外面ロクロナデ。	①精良 ②堅緻 ③灰白色	３２２
６１ Ｐ－ ２０７	須恵器 杯Ｂ	①１３．６ ③５．０残	底部欠損。底部より内湾気味に立ち上がった後外反して口縁部に続く。口縁端部は丸く納める。		①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰色	２８１
６２ ＳＤ－ ０１	須恵器 杯Ｂ	①１６．０ ③４．７残	底部欠損。僅かに内湾しながら、逆ハ字状に大きく開き口縁部に続く。		①細粒を含む。 ②やや軟 ③青灰色	２５６
６３ 遺構面	須恵器 杯Ｂ	①１６．６ ③４．２残	底部欠損。底部より外傾気味に伸びたのち僅かに外反する口縁部に続く。端部はやや先細り気味。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	０８２ ０９３
６４ 遺構面	須恵器 杯Ｂ	①１６．７ ③５．４ ⑤１１．５	扁平な底部より、逆ハ字状に開く口縁部に続く。底部の屈曲部に高台を貼りつける。	底部切り離しは、回転糸切りによる。底部内面は不整ナデ。他は、内外面ロクロナデ。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	０９４ ０９５ ２５６ ２５８
６５ 遺構面	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③２．０残 ⑤７．７	口縁部欠損。底部の屈曲部に高台を貼りつける。	底部切り離しは、回転糸切りによる。内外面ロクロナデ。	①精緻 ②軟質 ③灰白色	０９７

第８表　Ｊ地区出土遺物（第２６図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
６６ Ｐ－ １０	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③１．４残 ⑤７．３	口縁部欠損。底部の屈曲部に低い高台を貼りつける。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②軟質 ③灰白色	２７３
６７ 遺構面	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③２．４残 ⑤６．２	口縁部欠損。ほぼ平坦な底部より内湾気味に立ち上がり口縁部に続く。底部屈曲部のやや内側に高台を貼りつける。	底部外面はヘラ削りの後ナデを施し、他はロクロナデを行なう。	①細粒を含む。 ②軟質 ③灰白色	０９３
６８ 遺構面	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③２．６残 ⑤１０．８	口縁部欠損。平坦な底部より外反気味に立ち上がる口縁部に続く。底部屈曲部のやや内側に高台を貼りつける。	底部外面ヘラ削り。内面不整ナデ。他は、内外面ロクロナデ。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	０９３
６９ 遺構面	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③４．１残 ⑤１０．０	口縁部・底部欠損。底部屈曲部の内側に、逆台形の高台を貼りつける。口縁部はハ字状をなす。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	０９５
７０ ＳＫ－ ０３	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③２．５残 ⑤１１．４	口縁部欠損。平坦な底部より内湾気味に口縁部に続く。底部屈曲部の僅かに内側に高台を貼りつける。	底部切り離しは、回転糸切りによる。その後不整方向のナデを行なう。内面不整ナデ。他は、ロクロナデ。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③青灰色	１０１
７１ 遺構面	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③２．６残 ⑤９．６	口縁部欠損。平坦な底部よりやや内湾気味に立ち上がる口縁部に続く。底部屈曲部の内側に高台を貼りつける。	底部内面は横ナデ。他は、ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	０９５
７２ 遺構面	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③１．２残 ⑤９．２	口縁部欠損。平坦な底部より外傾する口縁部に続く。底部の屈曲部に高台を貼りつける。	内外面ロクロナデ。	①精良 ②軟質 ③灰白色	０９３
７３ Ｐ－２５	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③１．６残 ⑤９．８	口縁部欠損。平坦な底部より僅かに内湾気味に口縁部に続く。底部屈曲部に高台を貼りつける。	底部外面ヘラ削り。内面は不整ナデ。他は、ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	３７０
７４ ＳＫ－ ０３	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③１．５残 ⑤９．４	口縁部欠損。平坦な底部で、屈曲部の僅かに内側に高台を貼りつける。	底部外面ヘラ削り。内面不整ナデ。高台はロクロナデを行なう。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③青灰色	１０１
７５ ＳＫ－ ０３	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③１．３残 ⑤１１．８	口縁部・底部欠損。底部屈曲部の僅かに外側に高台を貼りつける。	内外面ロクロナデ。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③青灰色	１０２
７６ 遺構面	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③１．０残 ⑤９．１	口縁部欠損。底部屈曲部の内側に高台を貼りつける。転用硯か？	底部外面回転糸切り痕を残す。内面は非常に滑らか。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	０９５

第10表　Ｊ地区出土遺物（第２７・２８図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
８８ Ｐ－９６	土師器 甕	①１２．８ ③８．５残	球形の胴部で、頚部より大きく逆ハ字状に外傾して口縁部に続く。端部は丸く納める。底部欠損。	表面剥離が著しく調整は不明だが、口縁部内外面はロクロナデ。胴部内面はヘラ削りを施していると思われる。	①砂粒を含む。 ②やや軟 ③黄橙色	３３０
８９ ＳＤ－ ０１	土師器 鉢	①１８．９ ③４．５残	底部欠損。内湾気味に口縁部へと続き、口縁端部は内面肥厚する。製塩土器と思われる。	外面はナデ調整。内面は摩滅しているため不明だが、布目圧痕の残っていた可能性が考えられる。	①精良 ②軟質 ③橙色	２６９
９０ 遺構面	土師器 鉢	①１５．５ ③４．６残	底部欠損。内湾気味の体部をなし、口縁端部は先細る。製塩土器と考えられる。	内外面摩滅が著しく調整は不明。内面には布目圧痕が施されていたと思われる。	①精良 ②甘い ③橙色	０９０
９１ Ｐ－ １９６	土師器 鉢	①１６．９ ③５．４残	底部欠損。内湾気味の体部より口縁部へと続く浅めの鉢で、口縁端部は面をなす。製塩土器と考えられる。	内外面不整方向のナデ調整。内面には、非常に目の細かい布目圧痕がみられる。	①精良 ②軟質 ③黄橙色	３５２
９２ Ｐ－７２	土師器 鉢	①１６．６ ③４．０残	底部欠損。やや内湾気味に口縁部に続き、端部は丸く納める。製塩土器と考えられる。	内外面ナデ調整。外面に指頭圧痕が多数みられ、凹凸が激しい。内面には布目圧痕が施されていたものと思われる。	①精良 ②軟質 ③橙色	２９１
９３ 遺構面	須恵器 無蓋高杯	①１４．７ ③３．８残	受部のみ残存。受部底部よりやや内湾気味に立ち上がり口縁部上半は外反する。端部は丸く納める。口縁部外面の中央部に１条の沈線を施す。	内外面ロクロナデ。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③青灰色	０８２
９４ 遺構面	須恵器 脚部	③２．４残 ⑤９．８	ハ字状に開く脚部。端部は屈曲し面をなす。壷口縁部か？		①精緻 ②堅緻 ③灰色	０９７
９５ 遺構面	須恵器 脚部	③２．２残 ⑤１０．４	ハ字状に開く脚部で、脚上半を欠く。端部は屈曲し、接地面に向け垂下し先細り気味におわる。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	０９５
９６ 遺構面	須恵器 脚部	③１．６残 ⑤１０．６	大きくハ字状に開く脚部で、端部は僅かに屈曲し面をなす。長方形透かしを有する。		①精緻 ②軟質 ③灰白色	０８２
９７ Ｐ－４７	須恵器 脚部	③６．１残 ⑤１１．７	ハ字状に開く脚部で、端部内面で面をなし外縁部で接地する。やや下膨らみの印象を与える。無蓋高杯の脚部と思われる。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	３２９

第９表　Ｊ地区出土遺物（第２６・２７図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
７７ ＳＫ－ ０４	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③２．０残 ⑤１０．４	口縁部欠損。平坦な底部より内湾気味の口縁部に続く。底部屈曲部に高台を貼りつける。	底部外面に回転糸切り痕を残す。底部内面はヨコナデ。他は、内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	２７２
７８ Ｐ－ ２２９	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③２．７残 ⑤１０．０	口縁端部欠損。ほぼ平坦な底部より内湾気味に口縁部に続く。底部屈曲部の内側に高台を貼りつける。	底部外面に回転糸切り痕を残す。底部内面は不整ナデ。他は、内外面ロクロナデ。	①精緻 ②軟質 ③灰白色	３２４
７９ Ｐ－２６	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③１．８残 ⑤１０．２	口縁部欠損。ほぼ平坦な底部で、屈曲部に高台を貼りつける。	底部外面回転糸切り。底部内面ヨコナデ後、不整ナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	３０６
８０ 遺構面	土師器 甕	①２９．２ ③６．２残	直立気味の胴部より、大きく外反する口縁部へと続く。端部は丸く納める。	口縁部内外面ヨコナデを施し、頚部外面ハケメを行なう。胴部内面ヘラ削り。	①砂粒を含む。 ②軟質 ③黄橙色	２５７
８１ Ｐ－ １６９	土師器 甕	①１４．４ ③２．５残	胴部欠損。大きく外反する口縁部で端部はやや肥厚し丸く納める。	口縁部内外面はナデ調整。頚部内面はヘラ削りを施していると思われる。	①精緻 ②軟質 ③黄橙色	２７６
８２ Ｐ－７０	土師器 甕	①２１．６ ③６．１残	胴部下半欠損。やや張り気味の肩部より屈曲し大きく外反する口縁部で、端部はやや肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ調整。頚部外面は縦方向のハケメ。胴部内面は斜め上方へのヘラ削り。	①砂粒を含む。 ②軟質 ③黄橙色	２８７
８３ Ｐ－ ２７４	土師器 甕	①２２．２ ③６．０残	胴部欠損。外反する口縁部で、端部は丸く納める。端部下端に１条の細い沈線を施す。	口縁部内外面ヨコナデを施し、外面下半に斜め方向のハケメを行なう。胴部内面ケズリ。	①砂礫を含む。 ②やや軟 ③黄橙色	３５８
８４ 遺構面	土師器 甕	①２６．０ ③５．０残	胴部欠損。大きく外反する口縁部で、端部は丸く納める。胴部はやや膨らみをもち胴長を呈すると思われる。	口縁部内外面ヨコナデ調整。頚部外面はハケメ。内面はヘラ削りを施す。	①砂粒を含む。 ②甘い ③黄橙色	２５６
８５ 遺構面	土師器 甕	①２１．４ ③４．２残	胴部欠損。直立気味の胴部より屈曲し、大きく外反する口縁部に続き端部は丸く納める。	口縁部内外面ヨコナデ調整。頚部外面はハケメを残す。内面はヘラ削りと思われる。	①砂粒を含む。 ②甘い ③黄橙色	２５７
８６ 遺構面	土師器 甕	①２１．０ ③３．２残	胴部欠損。張り気味の肩部より、屈曲して外反する口縁部に続く、端部は丸く納める。	内外面ヨコナデ調整。	①砂粒を含む。 ②やや軟 ③灰黄橙色	０９８
８７ Ｐ－５５	土師器 甕	①１５．６ ③３．８残	胴部下半欠損。肩の張る胴部より屈曲する頚部に続き、大きく外反する口縁部に至る。口縁端部は丸く納める。	口縁部内外面・胴部外面はヨコナデ調整を施し、胴部内面はヘラ削りを行なう。	①砂粒を含む。 ②軟質 ③黄橙色	２９７

第12表　Ｊ地区出土遺物（第２８・２９・３０図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１０７ Ｐ－ ２６９	須恵器 甕	①３６．２ ③１５．６ 残	球形の体部に大きく外反する口縁部が続く。口縁端部は上下に摘み出す。体部下半を欠損する。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面は平行タタキ。体部内面は同心円タタキ目を残す。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	０９４ ３３２
１０８ Ｐ－３１	石製品 叩き石	全長：７．１ 全幅：６．８ 厚さ：４．４ 重量：２３０mg	やや扁平で、側面と上面に敲打痕がみられる。上面には磨面が認められる。		粗粒玄武岩	３５４
１０９ ＳＤ－ ０９	石製品 磨石	全長：７．７ 全幅：６．９ 厚さ：３．３ 重量：３２０mg	扁平な石材で、全面が滑らかである。		角閃石石英 安山岩	３５２
１１０ ＳＫ－ ０６	石製品 紡錘車	最大径：４．２ 最大厚：１．１ 穿孔径：０．６ 重　量：３５mg	上面の外縁部は、全体に丸みを付ける。裏面は平滑に仕上げられ、穿孔部の周りに二重圏、外縁部の内側に円圏が陰刻で描かれる。外円と内円の間隙には、６個の二等辺三角形を配し、その周囲には格子状の陰刻が描かれる。円圏は正円に描かれ、二等辺三角形は頂点・底辺共に正確に位置決めされ、正六角形をなす。格子紋は、５～７本の直線で描かれるが統一性はみられない。		滑石	３６２
１１１ Ｐ－ １７８	土製品 土錘	残存長：２．９ 最大径：１．２ 孔　径：０．５ 重　量：――	両端部欠損。断面はやや歪な長円形を呈する。		①精良 ②軟質 ③黄橙色	２７０
１１２ Ｐ－ ２９４	石製品 砥石	全長：９．８ 全幅：２．１ 厚さ：１．７ 重量：４９mg	再利用品もしくは携帯用と思われる。断面長方形を呈し、両側面に磨面がみられる。長軸の一端は楔形をなし、上面には縦方向に磨痕もしくは加工痕がみられる。		泥岩 （鳥取 層群）	２６０
１１３ 遺構面	石製品 叩き石	全長：９．１ 全幅：４．０ 厚さ：３．２ 重量：１６６mg	長軸の一端面に敲打痕がみられる。他面は僅かに平坦な平滑面を呈する。		角閃石石英 安山岩	２５７
１１４ Ｐ－ １２７	石製品 磨石	全長：９．１ 全幅：５．１ 厚さ：１．８ 重量：１１４mg	扁平な磨石である。全面が磨面をなす。		角閃石石英 安山岩	２７４
１１５ ＳＫ－ ０１	石製品 石斧	全長：８．３ 全幅：６．６ 厚さ：４．０ 重量：３０６mg	茎部欠損。磨製蛤刃石斧である。破断面を除き磨面をなす。刃部は比較的シャープである。		閃緑岩	２８０
１１６ Ｐ－８９	鉄製品 鉄斧	全長：１４．１ 袋部径：４．１ 刃部幅：５．６ 刃部厚：１．５ 重量：３９６mg	折り曲げて作られる袋部を持つ無肩の鉄斧である。刃部に向かってわずかに撥形に開く。袋部には錆化した木部が遺存し、断面不整な台形を呈する。			３０２

第11表　Ｊ地区出土遺物（第２８図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
９８ 遺構面	須恵器 横瓶	①１６．６ ③３．４残	横瓶の口縁部と思われる。ハ字状に開き、口縁端部は浅い凹をもつ面をなす。	内外面ロクロナデ。	①精良 ②堅緻 ③灰色	０９５
９９ ＳＤ－ ０９	須恵器 短頸壺	①１５．４ ③２．７残	ハ字状に開く口縁部。端部は浅い凹状の平坦面をなす。屈曲する頸部よりやや肩の張る体部に続く。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	３１２
１００ ＳＫ－ ０１	須恵器 甕	①２０．１ ③５．０残	胴部欠損。やや外反する口縁部で、端部は丸く納めるが、端部内面に段を有する。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	２８０
１０１ 遺構面	須恵器 直口壺	①２８．６ ③８．３残	やや外傾気味に直立する口縁部。口縁端部は内面に段を有し、上面は面をなす。外面の下端部に２条の浅い沈線を施す。		①精緻 ②堅緻 ③灰白色	０９９
１０２ 遺構外 表面採取	須恵器 広口壺	①１４．４ ③８．８残	体部欠損。頸部は大きく外反し、口縁部で屈曲して端部を上方に摘み上げる。端部の外方には浅い凹をめぐらせる。頸部下端よりなだらかに肩部に続く。		①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	４２７
１０４ 遺構面	須恵器 台付壺	③９．３残 ⑤１１．０	平坦な底部より、ハ字状に外傾する体部に続く。底部外面の屈曲部にハ字状に開く高台を貼りつける。接地面は両側に肥厚する。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	０８４ ４９７
１０５ 遺構面	須恵器 壺底部	③１．８残 ⑤１９．２	平坦な底部よりやや外傾気味の胴部に続く。	底部内外面不整ナデ。他はロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	０８２
１０６ 遺構面	須恵器 壺底部	③３．８残 ⑤９．０	平坦な底部で、体部は逆ハ字状に緩やかに開く。体部下端はナデにより凹を廻らす。	底部外面は未調整。他はロクロナデ。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	２６４
１０３ ＳＤ－ ０１ Ｐ－ ２２８	須恵器 台付 広口壺	①２６．０ ③３１．６ ④２８．６ ⑤１５．４	平坦な底部より、やや内湾気味に立ち上がる体部下半に続く。体部上端で丸みを持って屈曲し張り気味の肩部へと続く。頸部は直立気味に立ち上がり口縁部は大きく外反する。口縁端部は、下方と外方に突出し先細る。最大胴径部分に５条の沈線を施す。	底部の屈曲部に断面三角形の高台を貼りつける。底部外面は雑な調整を施し、籾痕がみられる。内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③淡褐灰色	０９１ ０９４ ２５６ ２６５ ２７１

第14表　K地区出土遺物（第４２図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１０ Ｐ－６３	土師器 器台	①－－－ ③４．４残 ⑤１７．０	受部欠損。大きくハ字状に開く脚部で、脚端部は水平方向に伸ばし丸く納める。	外面・脚端部内外面ヨコナデ。脚内面は右下がりのヘラ削り。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③淡黄橙色	１２３
１１ ＳＫ－ ０６	土師器 椀	①１６．８ ③５．５	ほぼ平坦な底部より内湾気味に立ち上がり、口縁端部は僅かに外反し丸く納める。	体部外面の下半は、静止ヘラ削りの後ナデ調整を行ない、底面は丁寧なナデを施す。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面は、不整ナデ。	①精緻 ②やや軟 ③浅黄橙色	４２３
１２ １号窯 被覆土内	土師器 高杯	①－－－ ③９．６ ⑤１４．２	受部欠損。ハ字状を呈する脚部で、下半は大きく開く。受部底面は円盤充填による。	内外面ヨコナデ調整。脚端部内面は、ハケメの後ナデ調整を施し、若干ハケメを残す。	①砂粒を含む。 ②軟質 ③浅黄橙色	１４５
１３ Ｐ－７８	土師器 壷	①８．４ ③７．３	平底の底部よりほぼ直立気味に立ち上がり、口縁端部で外反する。端部は丸く納める。	体部内面・口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半は縦方向のハケメを施し、下半は不整方向のナデ。	①細粒を含む。 ②堅緻 ③明橙褐色	４７４
１４ Ｐ－７８	土師器 壷	①８．１ ③８．０	球形の体部をなす。口縁部は外傾し、端部は丸く納める。	口縁部内外面ヨコナデ調整。体部外面は縦方向のハケメ。体部内面は、逆時計回りのヘラ削りの後ナデ。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③明黄褐色	４７３
１５ ＳＫ－ ０５	手捏ね 土器 小壷	①４．４ ③３．９	丸底気味の底部より内湾気味に立ち上げる。	内面は、底部より回しながらナデ上げる。外面は上方に向かってのナデを施す。	①精緻 ②堅緻 ③灰黄色	４４４
１６ １号窯前 庭部覆土	土師器 甕	①１９．４ ③１０．８ 残	体部下半欠損。くの字形の口縁部で、端部は丸く納める。	口縁部内外面ヨコナデ調整。体部外面は縦・横方向のハケメ。内面は、右上がりのヘラ削りを施す。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③淡黄橙色	０７０
１７ 遺構面	土師器 甕	①２５．２ ③１１．３ 残	体部下半欠損。丸みを帯びた体部より、くの字に屈曲して口縁部に続く。端部は更に外反し丸く納める。	内面・口縁端部外面はロクロナデ調整。頸部・体部外面はタタキメを施す。	①砂粒を含む。 ②軟質 ③淡黄灰色	４０３
１８ Ｐ－６１	土師器 甕	①２９．０ ③７．３残	胴部欠損。頸部はくの字に屈曲し口縁部へと続く。口縁部は外反し端部は尖り気味に丸く納める。	口縁部内面は、斜め方向にハケメを施した後ナデを行なう。外面ヨコナデ。体部外面縦方向のハケメ。内面は右上がりのヘラ削りを施した後、頸部内面を右方向にヘラ削りする。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③淡黄褐色	４４０
１９ Ｐ－５４	土師器 甕	①２２．６ ③９．０残	胴部欠損。屈曲した頸部より、外反する口縁部に続く。端部で僅かに屈曲し丸く終る。	口縁部内面斜め方向のハケメ。体部外面タテハケ。内面は右上がりのヘラ削り。	①細粒を含む。 ②堅緻 ③淡橙色	１４２

第13表　K地区出土遺物（第４２図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１ ＳＤ－ ０１	土師器 甕	①１５．８ ③４．７残	複合口縁の甕である。屈曲した頸部より、口縁部下端にシャープな稜を付け外傾した口縁部である。端部は外方に肥厚させ、僅かに面を持つ。	口縁部・体部外面はヨコナデ。体部内面はヘラ削りを施す。	①精緻 ②甘い ③淡橙色	２０４
２ ＳＤ－ ０１	土師器 甕	①１３．８ ③２．２残	複合口縁の甕。外傾する複合口縁部で、下端は垂れ気味のややシャープな稜を持つ。端部は外方に摘み出し、上面に平坦部を付ける。	内外面ヨコナデ調整。	①精緻 ②軟質 ③褐灰色	２０４
３ ＳＤ－ ０１	土師器 甕	①１５．６ ③５．１	複合口縁の甕。屈曲する頸部より口縁部下端に鈍い稜を付け、外傾気味に口縁部に続く。口縁端部は平坦な面を持つ。	口縁部内外面ヨコナデ調整。体部内面はヘラ削りを施す。	①精緻 ②軟質 ③淡黄色	２０４
４ ＳＤ－ ０１	土師器 甕	①１４．３ ③４．０残	複合口縁の甕。頸部は屈曲し、外傾する口縁部に続く。口縁部下端にはシャープな稜を付け、端部は外方に摘み出し上端に面を持つ。	口縁部内外面ヨコナデ調整。	①精緻 ②軟質 ③淡黄橙色	２０４
５ Ｐ－５４	土師器 甕	①１４．０ ③５．４残	複合口縁の甕。やや外傾気味の口縁部で、下端にややシャープな稜を持つ。口縁端部の上端には面を付ける。	口縁部内外面ヨコナデ調整。体部内面は摩滅が著しく不明だが、ヘラ削りを施していたものと考えられる。	①細粒を含む。 ②軟質 ③淡黄橙色	１４２
６ Ｐ－４１	土師器 甕	①１３．０ ③３．１残	複合口縁の甕。逆ハ字状に開く口縁部で、端部に平坦面を持つ。	内外面ヨコナデ調整。	①精緻 ②やや軟 ③淡橙色	２０２
７ １号窯前 庭部内	土師器 甕	①２９．８ ③６．３残	複合口縁の大形の甕。直立気味に外傾する口縁部で、端部上面には明瞭な平坦面を持つ。	口縁部内外面ヨコナデ調整。頸部内面以下はケズリと思われる。	①精緻 ②軟質 ③淡黄色	０５４
８ ＳＫ－ ０４	土師器 壷	①１７．２ ③９．２残	胴部欠損。倒卵形の胴部を有していたと思われる。首長の頸部より外反したのち、屈曲して内傾気味の口縁部に続く。端部は外方に摘み出す。	内外面剥離が著しく調整は不明。	①細砂を含む。 ②軟質 ③灰白色	４１７ ４１９
９ ＳＤ－ ０１	土師器 器台	①１９．０ ③７．７残	鼓形器台である。筒部は短く、大きく逆ハ字状に開く受部である。口縁端部は外反する。脚部欠損。	内外面ヨコナデ調整。	①精緻 ②軟質 ③黄橙色	２０４

第16表　K地区出土遺物（第４３図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
２８ ＳＤ－ ０３	須恵器 鉢	①１２．１ ③７．７	やや丸底気味の底部より内湾しながら立ち上がる体部で、口縁部は屈曲して外傾し、端部は丸く納める。	内外面ロクロナデ。	①砂礫を含む。 ②軟質 ③浅黄色	０６５
２９ ＳＤ－ ０３	須恵器 短頸壷	①５．８ ③８．８ ④１１．８	ほぼ平坦な底部より、内湾気味に立ち上がる体部から肩の張る肩部へと続く。口縁部は、肩部上端よりやや屈曲して内傾気味に短く立ち上がり先細る。	内外面風化が著しく調整は不明。底部外面はヘラ切り離しの後、屈曲部のみにヘラ削りを行なう。	①精緻 ②軟質 ③灰白色	０５９
３１ ＳＤ－ ０４	土師器 脚付椀	①１２．０ ③８．５ ⑤７．７	脚部はハ字状に開く低い脚である。杯部は全体に椀状を呈する。ほぼ平坦な底部より内湾して立ち上がり口縁部に続く。端部は僅かに内傾した後直立し、先細り気味に納める。	内外面ヨコナデ調整の後、外面のみに赤彩を施す。	①精良 ②軟質 ③淡黄灰色	４２０
３２ Ｐ－ １４９	須恵器 蓋Ａ	①１２．９ ③４．４残	天井部欠損。丸い天井部から、内湾気味に口縁部へと続く。端部は丸く納める。	天井部外面は、ヘラ切り離しの後未調整。内外面ロクロナデ。天井部内面は不整ナデ。	①砂粒を含む。 ②軟質 ③灰白色	２０９
３３ Ｐ－ １８８	須恵器 蓋Ａ	①１１．８ ③３．０残	天井部欠損。内湾気味に口縁部へと続く。端部は丸く納める。	内外面ロクロナデ。	①細粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	２２７
３４ Ｐ－ ２００	須恵器 蓋Ａ	①１３．４ ③２．８残			①細粒を含む。 ②やや軟 ③灰色	５１４
３５ Ｐ－２６	須恵器 蓋Ｃ	①１３．０ ③２．２ つまみ径 ２．６ つまみ高 ０．７	天井部中央に扁平な擬宝珠様のつまみを有する。ほぼ平坦な天井部をなし、屈曲して口縁部に続き更に屈曲して端部を垂下させる。接地面は断面三角形を呈する。	天井部外面は、回転糸切り後ロクロナデを行なう。内外面ロクロナデ。天井部内面はヨコナデ。	①砂粒を含む。 ②やや軟 ③灰白色	４３９
３６ ＳＫ－ ０５	須恵器 蓋Ｃ	③１．７残 つまみ径 ４．１ つまみ高 ０．５	口縁部欠損。扁平なつまみで中央部が窪む。	外面ロクロナデ。内面不整ナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	２０７
３７ Ｐ－ ２３７	須恵器 蓋Ｃ	①１６．８ ③２．２残	天井部欠損。天井部よりなだらかに口縁部へと続き、Ｌ字状に屈曲して端部を垂下させ、丸く納める。	内外面ロクロナデ。天井部内面は不整ナデを行なっている。	①細粒を含む。 ②堅緻 ③黄灰色	１５３

第15表　K地区出土遺物（第４３図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
２０ Ｐ－ ２０３	土師器 甕	①２１．０ ③３．４残	胴部欠損。外反する口縁部で、端部は丸く納める。	内外面ヨコナデ調整を施す。	①砂粒を含む。 ②軟質 ③淡黄橙色	５０４
２１ Ｐ２０３	土師器 甕	①１８．６ ③２．９残	胴部欠損。頚部で屈曲し外反する口縁部である。口縁端部は丸く納める。	口縁部内外面ヨコナデ調整。頚部内面以下はヘラ削りと思われる。	①精緻 ②甘い ③淡黄橙色	５０３
２２ Ｐ－ ２１９	土師器 鉢	①１５．８ ③１０．０	平底の底部より、僅かに丸みを持つ体部に続く。頚部はやや屈曲し外反気味の口縁部に続く。端部は丸く終る。	口縁部外面は縦方向のナデ。体部外面上半は縦方向のハケメ。下半はヨコハケ。底部外面は雑なハケメ。	①細粒を含む。 ②軟質 ③淡橙色	０３８
２３ Ｐ－８１	土師器 鉢	①１６．７ ③４．９残	底部欠損。内湾気味に立ち上がり口縁部に続く。口縁端部は平坦面をなす。全体に鉢状を呈する。製塩土器と思われる。	体部内面は、非常に目の細かい布目痕が施される。外面はナデ調整が行なわれ、指頭圧痕がみられる。	①精良 ②堅緻 ③淡橙色	４７２
２４ ＳＩ－ ０１	須恵器 杯	①１１．１ ③３．４	平坦な底部より、逆ハ字状に開く体部から、Ｚ字形に屈曲する口縁部へと続く。口縁端部は尖り気味に終る。蓋杯が逆転する時期の杯と思われる。	底部外面ヘラ切り離しの後板目圧痕を残す。全体に風化が著しく調整は不明。	①細砂を含む。 ②軟質 ③灰白色	４３２
２５ 遺構面	須恵器 小壷	③７．１残 ④８．５	丸底の底部より、内湾して立ち上がり屈曲して張り気味の肩部に続く。口縁部を欠くが、屈曲した頚部より外傾気味に続く。	内外面ロクロナデ。	①細粒を含む。 ②堅緻 ③青灰色	０５０
２６ ＳＤ－０ ３遺構面	須恵器 無蓋高杯	①１５．１ ③９．２残	脚部下半を欠く。脚部は比較的細身の基部よりハ字状に開き、脚端部に続くと思われる。受部は、やや丸みを帯びた底部よりなだらかに続き、外傾気味の口縁部へと続く。端部は丸く納める。口縁部外面の下端に１条の沈線・脚部外面にも２条の沈線がみられる。	内外面ロクロナデ。底部内面不整ナデ。口縁部外面に沈線の上からカキメを施す。	①精良 ②やや軟 ③暗赤灰色	０４７ ０５０ ０５９
２７ ＳＤ－ ０３	須恵器 鉢	①１３．３ ③５．２	僅かに丸みを帯びた底部より、内湾気味に立ち上がる体部に続き屈曲して外反する口縁部へと至る。口縁端部は丸く納める。体部上端に１条の沈線を施す。	内外面ロクロナデ。体部内面は不整ナデ。底部外面は、ヘラ切り離しの後指押さえを行なう。	①砂礫を含む。 ②やや軟 ③灰白色	０５９

第18表　K地区出土遺物（第４４・４５図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
４９ １号窯前庭部覆土	須恵器 脚部	③２．６残 ⑤７．２	ハ字状に開く脚部で、端部は屈曲して垂下する。接地面は逆三角形をなす。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	０７０
５０ 遺構面	須恵器 杯Ｂ	①１７．４ ③６．９ ⑤９．４	ほぼ平坦な底部よりハ字状に開く口縁部に続く。端部内面に面を持ち、丸く納める。底部外面屈曲部のやや内側に高台を貼りつける。	口縁部内外面ロクロナデ。底部内面は不整ナデ。底部外面切り離しは回転糸切りによる。	①細砂を含む。 ②やや軟 ③灰白色	１２６ ４００
５１ １号窯 覆土	須恵器 蓋Ｃ	①１７．２ ③２．３残	天井部欠損。天井部よりなだらかに口縁部に続く。端部は屈曲して垂下し、僅かに外方に摘み出す。端部は丸く納める。	天井部外面はヘラ削りを施す。他は、内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１６０
５２ ２号窯作業面Ｐ－００１内	須恵器 横瓶	①１３．８ ③３４．３ ④４８．０ 筒部径 ２９．３	胴部は長円形をなし、一方の端部を円板で充填する。胴部の中心部分に穿孔した後、口縁部を接合する。口縁部は逆ハ字状に開き、端部上面にやや凹を持つ平坦面を有している。	口縁部内外面ロクロナデ。胴部外面は平行タタキメを施した後、全体にナデで仕上げる。内面は、青海波文タタキメを全面に残す。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	０８５ ４３０ ４３８
５３ 遺構面	須恵器 蓋	①１５．４ ③２．９残	天井部欠損。内湾気味に口縁部へと続き、端部は丸く納める。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	０４４
５４ 遺構面	須恵器 蓋	①１３．４ ③３．０残	天井部欠損。内湾気味に垂下する口縁部で、端部で僅かに屈曲しやや外方に向ける。口縁端部は丸く納める。		①精緻 ②やや軟 ③灰白色	０５７
５５ 遺構面	須恵器 蓋	①１１．６ ③４．０残	天井部欠損。丸い天井部より内湾気味に口縁部へと続き、端部は丸く納める。	口縁部内外面ロクロナデ。天井部外面ヘラ切り離し後未調整。内面は、不整ナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	０５６
５６ 遺構面	須恵器 杯Ａ	①１３．８ ②１６．０ ③３．２残 ⑥０．９	底部欠損。逆ハ字状の体部より受部に続き、立上りは内傾した後直立し先細る。	内外面ロクロナデ。体部外面下半部は、ヘラ削りを行なう。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	１１１
５７ 遺構面	須恵器 杯Ａ	①１１．４ ②１３．２ ③１．６残 ⑥０．６	底部・体部欠損。受部の端部は、斜め上方へ内湾気味につまみ上げる。立上りは、直立し丸く納める。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	００８
５８ 遺構面	須恵器 杯	①１４．２ ③３．３残	平坦な底部より、やや内湾気味に口縁部へと続き端部をやや内側に摘み出す。端部は丸く納める。	口縁部内外面ロクロナデ。底部内面は不整ナデ。外面は雑なナデ。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	０５７

第17表　K地区出土遺物（第４３・４４図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
３８ Ｐ－ １９２	須恵器 蓋Ｃ	①１５．０ ③１．８残	天井部欠損。天井部よりなだらかに口縁部へと続く。端部は屈曲して垂下し、僅かに外方に摘み出し丸くおさめる。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	４５６
３９ 遺構面	須恵器 蓋Ｃ	①１３．６ ③１．４残	天井部欠損。天井部より、ほぼ水平気味に口縁部へと続く。端部は屈曲し垂下し、丸く納める。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	１２６
４０ Ｐ－ ２３３	須恵器 杯Ｂ	①１６．８ ③３．８ ⑤１２．２	平坦な底部より、ハ字状に開く口縁部へと続き、口縁端部は丸く納める。高台は、底部屈曲部の外面に貼りつける。	口縁部内外面ロクロナデ。底部内面は不整ナデ。底部外面は時計回りのヘラ削りを施す。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	１４９
４１ Ｐ－ ２３３	須恵器 杯Ｂ	①１４．０ ③３．０残	底部欠損。ハ字状に開く口縁部で、端部は丸く納める。	内外面ロクロナデ。	①細砂を含む。 ②やや軟 ③灰黄色	２２０
４２ Ｐ－ ２１８	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③１．４残 ⑤１０．０	口縁部欠損。平坦な底部よりなだらかに口縁部へと続く。底部屈曲部外面に高台を貼りつける。	底部内面は不整ナデ。底部外面は反時計回りのヘラ削りの後、ロクロナデ調整。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	５０１
４３ Ｐ－ ２１８	須恵器 杯Ｂ	③１．０残 ⑤９．８	口縁部欠損。ほぼ平坦な底部をなす。底部外面の屈曲部に高台を貼りつける。	底部内面不整ナデ。底部外面はヘラ削りの後ロクロナデ調整を行なう。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	５０１
４４ Ｐ－ ２１６	須恵器 杯Ｂ	③０．９残 ⑤１１．４	口縁部欠損。平坦な底部をなす。底部外面の屈曲部の内側に高台を貼りつける。	底部内面不整ナデ。底部外面ヘラ削り後ロクロナデ調整を行なう。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	４５７
４５ Ｐ－ ２３４	須恵器 無蓋高杯	①１４．２ ③３．６残	脚部欠損。平坦な底部より、僅かに外反する口縁部へと続き端部は丸く納める。	口縁部内外面ロクロナデ調整。受部底面はヘラ削り後ロクロナデを行なう。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	２１８
４６ Ｐ－３９	須恵器 杯	①１４．０ ③３．６残	底部欠損。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部の内側に面を持ち先細る。椀か？	内外面ロクロナデ。	①砂粒を含む。 ②やや軟 ③灰白色	４５０
４７	須恵器 小壷	①５．８ ③２．６残	口縁部のみ残存。逆ハ字状を呈し、端部は丸く納める。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	４４３
４８ 遺構面	須恵器 甕	①２２．０ ③１６．４ ④３６．６	丸い肩部より屈曲して口縁部に続き、端部は外反気味に屈曲し上下に摘み出す。	口縁部内外面ロクロナデ。肩部外面平行タタキ。内面は車輪文タタキを残す。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③明青灰色	０６９ １２６ ４００

第20表　K地区出土遺物（第４５図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
７０ 遺構面	須恵器 杯	①１４．４ ③２．７残	底部欠損。逆ハ字状に開く口縁部で、端部は丸く納める。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１７２
７１ 遺構面	須恵器 杯	①１４．１ ③３．５残	底部欠損。直立気味に立ち上がる口縁部で、端部を僅かに外反させ丸く納める。		①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰白色	２３０
７２ 遺構面	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③１．６残 ⑤１０．２	口縁部欠損。平坦な底部より内湾気味に口縁部へと続く。底部外面の屈曲部に高台を貼りつける。	底部内面不整ナデ。外面は、ヘラ削りを行なう。他はロクロナデ。	①精緻 ②やや軟 ③灰黄色	１１０
７３ 遺構面	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③１．７残 ⑤１１．４			①精緻 ②堅緻 ③灰色	０５６
７４ 遺構面	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③１．１残 ⑤１０．２	口縁部欠損。ほぼ平坦な底部で、外面の屈曲部付近に高台を貼りつける。	底部内面不整ナデ。他はロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	０５７
７５ 遺構面	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③１．１残 ⑤９．６	口縁部欠損。歪みを帯びたほぼ平坦な底部である。底部外面の屈曲部の内側に高台を貼りつける。	底部内面不整ナデ。外面はヘラ削りの後若干のナデを行なう。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	０５６
７６ 遺構面	須恵器 杯Ｂ	①－－－ ③１．６残 ⑤１０．６	口縁部欠損。中央部がやや窪む底部である。底部屈曲部の内側に高台を貼りつける。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②甘い ③橙色	０４８
７７ 遺構面	須恵器 横瓶	①１２．６ ③３．２残	横瓶の口縁部と考えられる。逆ハ字状に外反し、上端に平坦面を持つ。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	０５６
７８ 遺構面	須恵器 壷	頚部径 ８．４ ③５．８残	胴部・口縁部欠損。やや外反気味に口縁部へと続く。外面に１条の櫛描波状文を施す。		①精良 ②堅緻 ③灰色	０５６
７９ Ｐ－ １３７	須恵器 壷	①１１．４ ③３．０残	逆ハ字状に開く口縁部である。端部は丸く納める。		①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１６３ ２１５
８０ Ｐ－ １３７	須恵器 高杯脚部	③１．０残 ⑤１０．６	大きくハ字状に開く脚部で、端部は上下に摘み出す。		①精緻 ②堅緻 ③灰白色	２１５
８１ 遺構面	土師器 鉢	①１９．２ ③４．７残	底部欠損。直立気味に立ち上がる体部で、口縁端部を外方に摘み出し丸く納める。全体に鉢状をなし、製塩土器とも考えられる。	口縁部内外面ヨコナデ調整。体部外面は縦方向のハケメを施す。煤付着。体部内面は、上方に向けてヘラ削りを行なう。	①精緻 ②堅緻 ③灰黄褐色 内面は 黒褐色	０４８

第19表　K地区出土遺物（第４５図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
５９ 遺構面	須恵器 高杯 脚端部	③２．２残 ⑤１６．０	大きくハ字状に開く。端部を上下に僅かに摘み出し、平坦面を作り出す。	内外面ロクロナデ。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰色	２３０
６０ 遺構面	須恵器 高杯脚部	③４．０残 ⑤１１．８	ハ字状に開く脚部で、端部は垂下させて段をなす。脚柱部に長方形透かしを有する。		①精緻 ②やや軟 ③灰色	１１０
６１ 遺構面	須恵器 蓋Ｃ	①１６．０ ③１．７残	天井部欠損。なだらかに口縁部に続く。端部は屈曲して垂下させ丸く納める。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	０７２
６２ 遺構面	須恵器 蓋Ｃ	①１７．４ ③２．５ つまみ径 ３．４ つまみ高 ０．６	やや丸みを持つ平坦な天井部より口縁部へと続く。口縁部は屈曲し端部で更に垂下する。天井部の中央に扁平なつまみを有する。	天井部外面はヘラ削りの後ロクロナデ調整を行なう。内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③淡黄色	０５６
６３ 遺構面	須恵器 蓋Ｃ	①１３．０ ③３．５ つまみ径 ２．３ つまみ高 ０．９	丸みを帯びた天井部でなだらかに口縁部へと続く。端部は屈曲して垂下させやや外方に摘み出す。天井部外面の中央につまみを付す。	天井部外面の１／３程度ヘラ削りを行なう。口縁部内外面・つまみ部はロクロナデ。天井部内面は、不整ナデ。	①砂粒を含む。 ②やや軟 ③淡橙色	４０９
６４ 遺構面	須恵器 蓋Ｃ	つまみ径 ２．２ つまみ高 ０．７	つまみ部のみの遺存。中央部がやや窪む扁平なつまみである。	外面ロクロナデ。内面は、不整ナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	２３０
６５ 遺構面	須恵器 蓋Ｃ	③２．１残 つまみ径 ２．３ つまみ高 ０．７	口縁端部欠損。丸みを帯びたほぼ平坦な天井部よりなだらかに口縁部へと続く。扁平なつまみを付す。	天井部外面はヘラ削りを行なう。口縁部内外面ロクロナデ。天井部内面不整ナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰黄色	２３０
６６ 遺構面	須恵器 蓋Ｃ	①１８．０ ③１．８残	天井部欠損。ほぼ扁平な天井部より水平気味に口縁部へと続く。端部は屈曲して垂下し、断面逆三角形を呈す。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１７４
６７ 遺構面	須恵器 蓋Ｃ	①１３．２ ③１．６残	天井部欠損。口縁端部は屈曲し、垂下させて外方に摘み出す。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０８
６８ 遺構面	須恵器 杯	①１２．８ ③５．４残	底部欠損。内湾気味に逆ハ字状に開く口縁部で、端部は先細る。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	５００
６９ 遺構面	須恵器 杯	①１６．５ ③２．４残	内湾気味に立ち上がり口縁部に続く。端部は丸く納める。口径に比して浅く、皿か？。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰色	００９

第22表　Ｋ地区出土遺物（第４６図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
９２ 表土中	須恵器 杯Ｂ	①１３．４ ③４．２ ⑤１０．０	ほぼ平坦な底部より外傾気味に開く口縁部に続き、端部を丸く納める。底部外面の屈曲部の内側に高台を貼りつける。	口縁部内外面・底部外面ロクロナデ調整。底部内面不整ナデ。	①細粒を含む。 ②やや軟 ③灰白色	０３９
９３ 表土中	須恵器 杯Ｂ	③１．９残 ⑤１０．８	ほぼ平坦な底部より屈曲して立ち上がる口縁部へと続く。底部外面の屈曲部の内側に高台を貼りつける。	内外面ロクロナデ。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	０６４
９４ 遺構面	須恵器 脚部	③１．８残 ⑤９．６	高台付壷の脚部と思われる。平坦な底部より斜め上方に立ち上がり体部に続く。底部外面の屈曲部に逆台形の比較的高い高台を貼りつける。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	０７９
９５ 表土中	須恵器 横瓶	①１０．４ ③４．９残	横瓶の口縁部と思われる。ほぼ直立する口縁部で、端部はやや凹を持った面をなす。		①細粒を含む。 ②堅緻 ③灰黄色	０１３
９６ 表土中	須恵器 脚部	③３．６残 ⑤１３．２	高台付壷の脚部と思われる。直立気味の体部をなす。底部外面の屈曲部に低い高台を貼りつける。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	０１３
９７ 遺構面	須恵器 甕	①１８．５ ③５．３残	張り気味の肩部より屈曲して口縁部に続く。口縁部上半を僅かに内湾させる。端部は丸く納める。	口縁部内外面ロクロナデ。肩部外面にカキメを廻らせる。内面は青海波文タタキを施す。	①細粒を含む。 ②堅緻 ③灰白色	０４７
９８ 表土中	須恵器 横瓶	①１１．０ ③５．３残	屈曲する頚部より外傾した後、外方に肥厚させ端部を直立させる。端部は丸く納める。	口縁部内外面ロクロナデ。胴部外面は平行タタキ。内面は同心円文タタキを残す。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	０８５
９９ 表面採取	須恵器 脚部	③９．０残 ⑤１１．０	壷の底部と思われる。やや外傾する体部をなす。底部外面の屈曲部にハ字状に開く高台を貼りつける。	内外面ロクロナデ。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	０２３
１００ 遺構面	須恵器 把手付鉢	③１１．８残 ④２１．４	平坦な底部より丸い体部へと続き、肩部で内方に屈曲する。更に頚部で屈曲し、外反する口縁部に続く。体部上端部に把手を有していたと思われる。	体部下半・底部外面はヘラ削りを施していたと考えられる。底部内面不整ナデ。他は、ロクロナデ調整である。	①砂粒を含む。 ②軟質 ③明褐灰色	０４４ ０５６ １３５

第21表　Ｋ地区出土遺物（第４５・４６図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
８２ 遺構面	土師器 甕	①３５．６ ③４．０残	ほぼ直立する頚部より大きく外反する口縁部で端部は丸く納める。	口縁部内面ヨコナデ。頚部内面以下はヘラ削り。外面は斜方向のハケメを施す。	①精緻 ②軟質 ③淡黄橙色	０４３
８３ 遺構面	須恵器 横瓶	①１１．０ ③８．２残	胴部に穿孔した後、屈曲した頚部より外反し玉縁状の端部を有する口縁部を接合する。	口縁部・径部内外面ロクロナデ。胴部外面平行タタキメの後、口頚部の周辺にカキメを施す。内面は、青海波文タタキを行なう。	①精緻 ②堅緻 ③灰黄色	１１０
８４ ＳＤ－０１	土師器 甕	①１３．８ ③４．２残	複合口縁の甕。屈曲した頚部より、僅かに外傾する口縁部で端部は丸く納める。下端の稜は鈍い。	内外面ヨコナデ。	①精緻 ②軟質 ③橙色	２５２
８５ 表土中	土師器 壷	①２５．２ ③５．３残	大形の複合口縁の壷。頚部以下欠損。外傾気味の口縁部で、端部に平坦面を付ける。下端の稜は、下方に摘み出しシャープ。		①精緻 ②堅緻 ③淡黄橙色	０６４
８６ 遺構面	土師器 甕	①３３．２ ③５．２残	胴部欠損。やや膨らみ気味の胴部より、大きく外反する口縁部へと続く。口縁端部は丸く納める。	端部外面ヨコナデ。口縁部内面はヨコハケ。頚部内面以下は反時計回りのヘラ削り。頚部外面斜方向のハケメ。	①細粒を含む。 ②軟質 ③明黄褐色	０４２
８７ 表土中	須恵器 蓋Ｂ	①１３．２ ③３．５	平坦な天井部より内湾気味に垂下して口縁部へと続く。端部は丸く納める。	天井部外面は、剥離が著しく調整不明。他は内外面ロクロナデ。	①精緻 ②軟質 ③灰白色	０３９
８８ 遺構面	須恵器 蓋	①１１．７ ③３．０	平坦な天井部よりなだらかに続き、端部を垂下させる。端部は丸く納める。	内外面ロクロナデ。天井部外面に板目圧痕を残す。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	０７５ ０７６
８９ 表土中	須恵器 蓋Ｃ	①１６．０ ③１．７残	天井部欠損。天井部よりなだらかに口縁部へと続き、屈曲したのち端部を垂下させる。接地面は断面三角形を呈す。	天井部外面ヘラ削り後ロクロナデを行なう。他は、内外面ロクロナデ。	①精緻 ②軟質 ③灰白色	０１６
９０ 表土中	須恵器 杯Ｃ	①１４．０ ③４．２	平坦な底部よりなだらかに口縁部へと続き、端部を僅かに外反させる。口縁端部は丸く納める。	底部外面はナデ調整。内面は不整ナデ。口縁部内外面ロクロナデ。	①細粒を含む。 ②やや軟 ③灰黄色	０１１
９１ 表土中	須恵器 杯Ｃ	①１４．４ ③４．０	天井部欠損。平坦な底部より僅かに外傾する口縁部へと続く。口縁端部は丸く納める。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②軟質 ③灰白色	０５６

第24表　D地区出土遺物（第５２・５３図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
1 遺構面	須恵器 蓋	①１３．５ ③２．８残	天井部欠損。内湾気味に垂下する口縁部で、端部は丸く納める。	内外面ロクロナデ。	①細砂を含む。 ②やや軟 ③灰白色	
2 ２５号墳 東側遺構面	須恵器 蓋	①１０．９ ③２．０残	天井部欠損。天井部より屈曲して垂下する口縁部である。端部を僅かに外方に向け、丸く納める。		①精良 ②堅緻 ③灰白色	３９１
３・４ ２５号墳 東側遺構面	須恵器 高杯脚部	③上段 ４．０残 下段 ６．３残 ⑤１１．２	受部欠損。二段三方向透かしを有する脚部。脚部下半はハ字状に開いた後、脚端部に向かって更に屈曲して端部へと続く。端部は上方に摘み上げシャープな稜を作る。端部外面に２条の沈線を施す。脚部上半は、やや直立気味に立ち上がり基部に続く。	内外面ロクロナデ調整の後、外面にカキメを施す。透かしは長方形である。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	３９２ ４２６
5 １６号墳 西側地山層	石製品 石鏃	残存長：１．４５ 残存幅：１．５０ 厚さ：０．２５ 重量：４０７mg	凹基無茎鏃である。上端部と下端部を欠く。		サヌカイト	８２７

第23表　K地区出土遺物（第４６～４９図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１０１ 表土中	陶磁器 椀	①１０．２ ③５．３ ⑤４．０	平坦な底部より内湾気味に立ち上がり、口縁部を僅かに外傾させ、端部は丸く納める。高台は削りだし、外面に面取りを行なう。	高台部を除いた全面にオリーブ灰色を呈する釉薬をかける。	①精良 ②堅緻 ③淡黄褐色	００５
１０２ 黒褐色遺物包含層	土師器 甕	①１２．８ ③３．８残	複合口縁。外傾気味の口縁部で、端部を僅かに外方に摘み出し丸く納める。下端の稜はやや鈍い。	口縁部内外面ヨコナデ調整。頸部内面以下はヘラ削りと思われる。	①精緻 ②やや軟 ③淡黄色	４６８
１０３ 黒褐色遺物包含層	土師器 甕	①１３．５ ③４．４残	複合口縁。やや外反気味の口縁部で、端部は平坦面を持つ。下端の稜は鈍い。	口縁部内外面ヨコナデ調整。体部内面はヘラ削りを行なう。	①精緻 ②甘い ③明黄褐色	４６８
１０４ 黒褐色遺物包含層	土師器 甕	①１３．０ ③３．７残	複合口縁。やや外反気味の口縁部で、端部に明瞭な面を持つ。下端の稜は鈍い。		①精良 ②甘い ③淡黄色	４６８
１０５ 黒褐色遺物包含層	土師器 甕	①１２．６ ③４．４残	複合口縁。やや外傾気味の口縁部で、端部に面を持つ。下端の稜は鈍い。		①精緻 ②堅緻 ③淡黄橙色	４６８
１０６ 黒褐色遺物包含層	土師器 甕	①１９．７ ③４．３残	複合口縁。外傾する口縁部で、端部に面を持つ。下端の稜は鈍い。	口縁部内面はヨコナデ調整。他は、剥離が著しく不明。	①砂粒を含む。 ②軟質 ③橙色	２３０
１０７ 黒褐色遺物包含層	土師器 壷	①２０．６ ③１３．７ 残	複合口縁。丸みを帯びた肩部より屈曲した頸部に続き、外反したのち大きく外傾する口縁部へと続く。口縁端部は面を持つ。下端の稜はやや下方に摘み出しシャープである。	口縁部・頸部内外面ヨコナデ調整を行なう。肩部外面に櫛描波状文を施す。内面は、時計回りのヘラ削りを行なう。	①精緻 ②やや軟 ③淡黄褐色	４６８ ４７６
１０８ 黒褐色遺物包含層	石製品 石匙	全長：４．３ 全幅：６．８ 厚さ：０．９ 重量：――	刃先角５０°を測る鈍角な刃である。		サヌカイト	５１６
１０９ 調査区外 表面採取	石製品 不明	全長：１２．７ 全幅：１２．０ 厚さ：１．８ 重量：――	用途不明の石製品である。端部は水平な平坦面をなし、湾曲する。平坦面のやや下方に径０．９～１．１cmの穴を穿つ。全体に淡橙褐色を呈する。		砂岩	０２３

第26表　１５号墳出土遺物（第５７図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
7	須恵器 𤮈	①９．５ ③１０．７ 残	底部欠損。丸い体部で肩の張る肩部に続く。肩部上端で屈曲し短い頸部へと続く。口縁部は外傾氏、端部は丸く納める。口縁部下端にややシャープな稜を有する。体部は、圧し潰された倒卵形をなし安定感にかける。	内外面ロクロナデ調整を行なった後、頸部外面に１３条の櫛描波状文を施す。体部の最大径部分には、上下に工具を押圧する事で２条の凹帯に挟まれた凸帯を作り出す。この凸帯に１０条の櫛描波状文を施す。底部外面は、平行タタキメを残す。頸部内面に絞り痕、底部内面には指押えを行なう。	①精良 ②堅緻 ③灰白色	５２８ ５２９ ５３０ ５３２ ８０９
8	須恵器 𤮈	①１５．２ ③口縁部 ２．９残 体部推定 １６．２	大形の𤮈と思われる。肩部・頸部を欠く。体部は倒卵形をなす。肩部下端に２条の沈線を持ち、その間隙に１０条の櫛描波状文を施している。口縁部は逆ハ字状に開き、端部に面を持つ。公演部上端部に１条の凸帯を有し、その下側に１１～１２条の櫛描波状文を施している。	内外面ロクロナデ調整を行なう。体部下半の外面は、平行タタキメを施している。体部内面は、無文および若干の青海波紋タタキがみられる。	①精緻 ②やや軟 ③淡黄橙色	３８９ ５３２
9	須恵器 蓋	①－－－ ③２．６残	壺蓋と思われる。ほぼ平坦な天井部より、屈曲して垂下する口縁部へと続く。口縁部を欠く。	天井部外面は、ヘラ切り離しの後未調整。他は、内外面ロクロナデ調整を行なう。	①精緻 ②甘い ③黄褐色	３８７
１０	須恵器 蓋	①－－－ ③２．０残	壺蓋と思われる。天井部・口縁部欠損。平坦な天井部より屈曲して口縁部へと続く。	天井部外面は、自然釉が付着しており調整は不明。他は、内外面ロクロナデ。	①精良 ②甘い ③暗灰色	５３５ ５３６
１１	鉄製品 鉄刀	全　長：５４．６、茎　長：１２．４ 刀身長：４２．２、茎中央幅：１．４ 刀身元幅：２．９、茎尻幅：１．４ 鋒　幅：２．１、背関幅：０．３ 関側背幅：０．９、重量：３０８ｇ 中央背幅：０．８ 鋒側背幅：０．５	錆化が見られるが、保存状態は概ね良好である。刀身は、鞘を装着していたものと見られ、木質部の遺存が認められる。関は、両関で厚さ約０．９㎝を測る鍔を装着していたと考えられる。鞘外面の一部に紐巻きの痕跡が見られる。茎部には、目釘孔が２箇所に認められる。茎には、木質痕とその外側に巻締めの痕跡が認められることから、紐巻きの施された木柄が装着されていたものと考えられる。		

第25表　１５号墳出土遺物（第５７図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
1	土師器 高杯	①１５．５ ③１２．０ ⑤１０．６	ハ字状に大きく開く脚部よりすぼまり気味に立ち上がり脚部基部に続く。脚柱部外面は、ヘラ先で上方に撫で付けるため、断面多角形を呈する。杯部は、平坦な底部より屈曲して外傾する口縁部へと続く。端部は丸い杯部底部は、円板充填。	杯部内外面・脚部外面は、ヨコナデ調整を施す。杯部内面の一部にハケメを残す。脚部内面は、右向きのヘラ削りを行ない、上方は絞り込みの後ヘラ削りを施す。杯部内面の一部と、杯部・脚部外面に赤彩を施す。	①精緻 ②やや軟 ③浅黄橙色	８０１ ８０３ ８０４ ８０５ ８０７
2	土師器 高杯	①１５．２ ③１１．３ ⑤９．４	脚部は、ハ字状に開く脚端部と窄まり気味の脚柱部からなる。脚端部外面に面を持つ。杯部は、ほぼ平坦な底部より内湾気味に立ち上がり口縁部に続く。端部にやや面を作る。椀状の杯部である。杯部底部外面に脚柱部を差し込み接合を行なう。	内外面ヨコナデ調整を行なう。脚柱部内面には、絞り込みが認められる。脚部内面の一部と、脚部外面・杯部内外面に赤彩を施す。	①細砂を含む。 ②やや軟 ③浅黄橙色	８０１ ８０３
3	土師器 高杯	①１４．３ ③５．９残	脚部を欠く。丸みを帯びた底部より、内湾気味に立ち上がり口縁部へと続く。端部はほぼ丸く納める。脚部との接合は、底部に穿孔し中空の脚部を差し込んだ後、中空部分に棒状の粘土を脚部下面より挿入して充填する。底部内面側は、回転を利用して押圧して仕上げる。	内外面ヨコナデ調整を行なった後、全面に赤彩を施す。	①精緻 ②やや軟 ③浅黄橙色	８０２ ８０３ ８０４
4	土師器 高杯	①１４．８ ③６．６残	脚部を欠く。丸みを帯びた底部より、内湾気味に立ち上がり口縁部へと続く。口縁端部は欠損する。脚部との接合は、３と同様の手法である。		①細砂を含む。 ②軟質 ③浅黄橙色	８０１ ８０３ ８０４
5	土師器 低脚杯	①１４．４ ③６．７ ⑤６．０	ハ字状に開く低い脚部を有する。杯部は、平坦な底部より内湾気味に立ち上がる口縁部に続き、端部は丸く納める。	杯部内外面ヨコナデ調整。脚部外面は、指押えを行なう。脚端部の接地面はナデ。内面は工具によるナデを行なう。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰赤褐色	５３６
6	土師器 甕	①１３．５ ③９．１残	複合口縁から「く」字状口縁へと変換する過渡期の口縁である。口縁部下端の稜が退化している。体部は球形の胴部と考えられる。	口縁部内外面ヨコナデ調整。体部外面は、縦・横方向にハケメを施す。内面は、ヘラ削りを施していたと考えられる。	①砂粒を含む。 ②甘い ③淡褐灰色	５３３ ５３４ ５６３

第28表　１６号墳第１主体出土ガラス小玉（第６３図）計測表

挿図番号	計測値　単位（mm・mg）					色調	材質	取上番号
	長さ	外径	孔径		重量			
			最大	最小				
1	2．8	4．9	1．45		83	淡青色	ガラス	699
2	1．6	2．9	1．3		17	淡青色		698
3	1．1	2．3	0．9		7	淡青色		697
4	1．6	2．9	1．25	0．8	16	淡青色		696
5	1．15	2．15	0．9		4	淡緑色		695
6	1．6	2．4	0．85		13	淡青色		694
7	1．4	2．2	0．9		7	淡緑色		694
8	1．8	2．6	0．75		15	淡緑色		692
9	1．1	2．15	0．75		6	淡緑色		691
10	1．8	2．4	0．95		12	淡緑色		690
11	1．6	1．8	0．9		8	藍色		710
12	1．2	2．35	0．95		7	淡青色		711
13	1．3	2．7	0．9		8	藍色		713
14	1．4	2．55	0．8		8	黄緑色		714
15	2．1	2．6	1．0		12	藍色		715
16	1．75	2．9	1．1		18	淡青色		716
17	1．8	3．1	1．3		18	淡青色		717
18	1．75	2．7	0．7		11	淡藍色		718a
19	1．8	2．8	0．85		16	淡緑色		718b
20	2．7	3．2	1．1		29	淡青色		680
21	1．65	1．9	0．7		5	藍色		681
22	1．75	2．4	0．9		8	淡緑色		683
23	1．25	2．65	1．05		9	淡緑色		684
24	1．35	2．75	1．0		12	藍色		685
25	1．4	2．35	0．95	0．65	5	淡青色		687
26	1．5	2．2	1．0		6	藍色		688
27	1．8	3．4	1．2		22	淡青色		689
28	1．6	2．4	1．0	0．7	6	藍色		670A
29	1．0	2．2	0．8		4	淡緑色		673

第27表　１６号墳出土遺物（第６１・６２図）観察表

挿図番号	器種	法量	形態の特徴	調整手法の特徴	備考	遺物番号
1	須恵器 瓶	①9．6 ③2．0残	逆ハ字状に開く口縁部である。頸部上端よりやや外方に突き出した後、僅かに外反気味の口縁部へと続く。端部は丸く納める。口縁部下端に１条の沈線を施し、その下側に台形の稜を付ける。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③黒褐色	813
2	土師器 椀	①13．0 ③6．0	丸底の底部より内湾気味に立ち上がり、口縁部で直立する。端部は内側に面を付ける。	口縁部内外面ヨコナデ調整。体部外面はハケメを施す。底部内面に指押えが見られる。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③橙色	643
3	須恵器 甕片		胴部の破片。	外面平行タタキメ。内面は、青海波文タタキメを残す。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	517 537
4	鉄製品 刀子	残存長：5．9、背幅：0．3 刀身残存長：3．1、茎残存長：2．8 刀身部元幅：1．0、茎中央幅：1．0 刀身部先幅：0．5 重量：4．956g		鋒部と茎尻部を欠損する。茎部は、ほぼ全面に木質痕が認められる。刀身身元部に縦方向に、木質と思われる繊維痕が見られる。		648

第30表　１６号墳第１主体出土ガラス小玉（第６３図）計測表

挿図番号	計測値　単位（mm・mg）					色調	材質	取上番号
	長さ	外径	孔径		重量			
			最大	最小				
59	1.9	3.05	1.1		21	淡青色	ガラス	659
60	1.15	2.4	0.9		7	淡緑色		660
61	2.0	――	――		15	淡緑色		662
62	1.95	――	――		12	淡緑色		662
63	1.6	2.9	0.9		15	淡緑色		664
64	1.7	2.4	0.8		11	淡緑色		665
65	1.45	2.35	0.85		8	淡緑色		666
66	1.4	2.35	0.8		8	淡緑色		669
67	1.25	2.45	0.9		7	淡青色		670B
68	1.3	2.4	0.9		8	淡緑色		671
69	1.3	2.7	0.95		7	淡青色		796
70	1.3	2.15	0.75		6	淡青色		796
71	1.2	2.35	0.8		7	淡緑色		796
72	1.85	2.25	0.9		10	淡青色		799
73	1.45	2.6	1.2		9	藍色		799
74	――	――	――		12	淡緑色		――――
75	――	――	――			淡緑色		――――
76	1.3	2.45	0.9		9	淡緑色		800－30
77	1.3	2.5	0.9		10	淡緑色		800－31
78	1.4	2.3	0.9		8	淡緑色		800－32
79	1.6	2.3	0.8		8	淡緑色		800－33
80	1.7	2.4	1.0		11	淡緑色		800－34
81	1.2	2.35	0.8		8	淡緑色		800－35
82	1.45	2.2	0.9		9	淡緑色		800－36
83	1.45	2.4	0.9		10	淡緑色		800－37
84	1.55	2.25	0.7		9	淡緑色		800－38
85	2.0	2.3	0.9		15	淡緑色		800－39
86	1.3	2.4	0.9		13	淡緑色		800－40
87	1.35	2.3	0.85		8	淡緑色		800－41

第29表　１６号墳第１主体出土ガラス小玉（第６３図）計測表

挿図番号	計測値　単位（mm・mg）					色調	材質	取上番号
	長さ	外径	孔径		重量			
			最大	最小				
30	1.4	2.5	0.9		8	淡青色	ガラス	674
31	1.7	2.8	1.05		14	淡青色		676
32	1.2	2.15	0.8		5	藍色		677
33	1.15	2.8	0.9		9	淡青色		678
34	1.75	1.95	0.85		5	青色		679
35	1.2	2.25	1.0		5	淡緑青色		792
36	1.85	3.0	0.95		18	淡緑青色		793
37	1.05	2.3	1.15		7	淡青色		794
38	1.1	2.1	0.9		5	淡緑色		797
39	1.4	2.4	1.0		9	淡緑色		798
40	1.8	2.8	1.1		16	緑色		795
41	1.45	2.4	0.9		10	淡緑色		795
42	1.15	2.2	0.75		7	淡緑色		795
43	1.3	2.4	0.8		8	淡青色		795
44	1.7	2.0	0.75		8	藍色		795
45	2.2	1.75	0.8		7	淡藍色		795
46	1.8	2.9	1.2		17	淡青色		783
47	1.35	2.5	1.0		9	藍色		784
48	1.35	2.1	0.7		7	濃藍色		785
49	1.05	2.0	0.85		4	藍色		786
50	1.2	2.4	0.85		10	淡緑色		787
51	1.4	2.0	0.9		5	藍色		789
52	1.3	2.35	0.9		7	淡緑色		650
53	1.6	1.95	0.85		5	藍色		652
54	1.4	2.45	1.0		8	淡緑色		653
55	1.35	2.35	0.9		7	淡青色		655
56	4.55	6.25	1.45		20.2	緑色		656
57	1.2	3.1	1.1		12	淡緑色		657
58	1.4	2.5	0.95		8	淡緑色		658

第32表　１６号墳第１主体出土ガラス小玉（第６４図）計測表

挿図番号	計測値　単位（mm・mg）					色調	材質	取上番号
	長さ	外径	孔径		重量			
			最大	最小				
１１７	１．８	２．６	１．２		６	濃藍色	ガラス	７２９
１１８	２．２	２．５	１．０		２０	濃藍色		７３０
１１９	２．０	１．９	０．８		９	赤灰色		７３１
１２０	１．１	２．２	０．９		９	淡緑色		７３２
１２１	１．１	２．１	０．７		６	淡緑色		７３３
１２２	１．４	２．２	０．６	０．５	１１	淡緑色		７３４
１２３	２．１	２．１	０．５		１３	濃赤灰色		７３５
１２４	１．２	１．９	０．８		５	濃藍色		７３６
１２５	１．１	１．１	――――		測定不能	緑青色		７３７
１２６	――――	――――	――――		測定不能	淡緑青色		７３９ａ
１２６	――――	――――	――――		測定不能	淡緑青色		７３９ｂ
１２７	１．５	２．０	０．６		６	赤灰色		７４０
１２８	――――	――――	――――		測定不能	淡黄緑色		７４１ａ
１２８	――――	――――	――――		測定不能	淡黄緑色		７４１ｂ
１２９	０．９	２．２	０．８		３	濃赤灰色		７４２
１３０	１．２	２．２	０．７		７	淡緑色		７４３
１３１	１．３	１．２	――――		１	淡緑色		７４５
１３２	１．１	２．２	１．０		９	赤灰色		７４７
１３３	１．４	１．９	０．７		７	濃藍色		７４８
１３４	１．２	２．１	０．８		７	濃藍色		７４９
１３５	１．０	２．０	１．０		６	淡緑青色		７５０
１３６	１．０	２．１	１．０		５	暗赤灰色		７５１
１３７	１．８	１．９	１．１	１．０	９	濃藍色		７５２
１３８	１．９	３．１	１．２		１９	淡青色		７５３
１３９	１．３	２．１	０．７		７	淡緑色		７５４
１４０	１．７	２．４	０．６		１２	濃赤灰色		７５５
１４１	――――	――――	――――		測定不能	淡青色		７５６
１４２	――――	――――	――――		測定不能	淡青色		７５６
１４３	１．５	２．２	０．７		９	濃藍色		７５７

第31表　１６号墳第１主体出土ガラス小玉（第６３・６４図）計測表

挿図番号	計測値　単位（mm・mg）					色調	材質	取上番号
	長さ	外径	孔径		重量			
			最大	最小				
８８	１．１５	２．１５	０．８		４	淡青色	ガラス	８００－４３
８９	１．４５	２．４５	０．９		９	青色		８００－４４
９０	１．３	２．３	０．９５		８	淡緑色		８００－４５
９１	１．７５	２．９	１．０		８	淡緑色		８００－４２①
９２	１．８５	２．１５	１．０		３	淡緑色		８００－４２②
９３	１．１	２．０	０．９		２	淡青色		８００－４２③
９４	１．０	――――	――――		３	淡青色		６８６
９５	１．１５	――――	――――		６	淡赤灰色		７１２
９６	――――	――――	――――					同一個体
９７	１．３	２．１５	０．９５		４	淡青色		７８１
９８	１．７	２．４５	０．８		１２	淡緑色		８００－２５
９９	１．２	２．２５	０．９		６	淡緑色		８００－２６
１００	１．３	２．１５	０．８		６	淡緑色		８００－２７
１０１	１．２	２．２	０．８	０．７	７	淡黄緑色		７０１
１０２	１．２	２．０	１．０	０．７	７	赤灰色		７０２
１０３	３．０	４．２	１．５		７９	淡緑青色		７０２
１０４	１．８	１．８	１．２５		１６	淡青色		７０３
１０５	１．４	１．４	１．０	０．８	７	淡青色		７０５
１０６	１．５	１．５	１．２		１０	濃藍色		７０６
１０７	０．９	０．９	１．０		５	淡藍色		７０７
１０８	１．２	２．１	０．８		８	濃藍色		７０８
１０９	１．２	２．２	１．４		８	灰緑色		７０９
１１０	１．１	２．０	０．９		５	淡藍色		７２０
１１１	１．０	２．２	０．７		６	淡緑青色		７２１
１１２	１．２	２．３	０．７		９	淡緑色		７２２
１１３	１．１	２．２	０．７		７	淡緑青色		７２５
１１４	１．１	２．１	０．６	０．５	７	淡緑色		７２６
１１５	１．１	２．２	０．７	０．６	８	淡緑色		７２７
１１６	１．２	２．１	１．０	０．８	９	淡緑色		７２８

第34表　１６号墳第１主体出土ガラス小玉（第６４図）計測表

挿図番号	計測値　単位（mm・mg）					色調	材質	取上番号
	長さ	外径	孔径		重量			
			最大	最小				
１７３	１．４	１．８	０．７		６	濃藍色	ガラス	８００－１１
１７４	１．４	１．９	０．９	０．８	７	濃藍色		８００－１２
１７５	１．４	２．１	１．２	０．８	８	緑青色		８００－１３
１７６	１．０	２．６	１．２		７	淡青色		８００－１４
１７７	１．５	２．３	１．１	０．８	７	淡灰緑色		８００－１５
１７８	１．１	２．２	０．７		６	淡緑色		８００－１６
１７９	２．３	２．４	０．９	０．８	１７	淡緑色		８００－１７
１８０	１．２	２．４	１．０	０．７	８	淡緑色		８００－１８
１８１	１．３	２．２	０．７		８	淡緑色		８００－１９
１８２	１．１	２．２	０．６		６	淡緑色		８００－２０
１８３	１．２	２．４	１．０		７	淡緑色		８００－２１
１８４	１．３	２．４	０．７	０．６	８	淡緑色		８００－２２
１８５	１．３	２．２	０．６		６	淡緑色		８００－２３
１８６	１．１	２．２	０．８		６	淡緑色		８００－２４
１８７	１．２	２．４	０．９		８	淡緑色		８００－２８
１８８	１．２	２．１	０．８		８	淡緑色		８００－２９

第33表　１６号墳第１主体出土ガラス小玉（第６４図）計測表

挿図番号	計測値　単位（mm・mg）					色調	材質	取上番号
	長さ	外径	孔径		重量			
			最大	最小				
１４４	１．６	２．７	０．９		１３	淡緑色	ガラス	７５８
１４５	１．３	２．４	１．２		６	淡青色		７５９
１４６	１．２	２．３	０．７		８	淡緑色		７６０
１４７	１．７	２．７	１．０		１７	淡青色		７６１
１４８	１．３	２．３	０．７		８	淡緑色		７６２
１４９	１．１	２．１	１．０		６	暗赤灰色		７６３
１５０	１．６	２．８	０．８		１６	濃藍色		７６４
１５１	１．５	２．０	１．２	０．８	６	青　色		７６５
１５２	１．０	２．０	０．８	０．６	５	暗赤灰色		７６６
１５３	１．６	２．３	０．６		６	赤灰色		７６７
１５４	１．２	２．２	０．９		５	赤灰色		７６８
１５５	１．５	２．８	０．７		１１	淡緑色		７７０
１５６	１．１	２．３	０．８	０．７	７	藍　色		７７１
１５７	１．５	２．６	０．７		９	暗赤灰色		７７２
１５８	１．１	２．３	０．８		７	淡緑色		７７３
１５９	１．６	２．１	０．７		８	淡緑色		７７５
１６０	１．６	２．８	１．２	１．１	１０	暗緑色		７７６
１６１	１．０	２．４	１．０		６	淡青色		７７７
１６２	１．４	２．６	０．９		８	淡青色		７７９
１６３	１．６	３．２	１．０		２０	淡緑色		８００－１
１６４	１．７	３．２	０．７	０．６	２０	緑青色		８００－２
１６５	１．７	３．３	０．５		２１	淡緑色		８００－３
１６６	２．２	２．８	０．９	０．７	１５	濃藍色		８００－４
１６７	２．５	３．９	０．８	０．７	４１	緑青色		８００－５
１６８	２．３	２．２	１．２	０．８	１１	赤黒色		８００－６
１６９	１．１	２．５	１．６	１．５	８	暗赤灰色		８００－７
１７０	１．６	２．０	０．７		７	暗赤灰色		８００－８
１７１	１．２	２．４	０．７	０．６	７	暗赤灰色		８００－９
１７２	１．１	１．９	０．７		４	暗赤灰色		８００－１０

第36表　３２号墳出土遺物（第７１図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
7	須恵器 甕	③５．７残	甕の口縁部片である。外反する口縁部の下半部分と思われる。２条の沈線を上下に配し、その間隙に２２条の櫛描波状文を施す。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③暗青灰色 断面セピア	５６５ ６１５
8	須恵器 高杯	①－－－ ③４．５残 ⑤１０．７	高杯の脚部である。ハ字状に開いた後、大きく外反して口縁端部へと続く。端部は先細り気味におわる。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	５４８

第37表　２８号墳出土遺物（第７６・７７図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
1	須恵器 蓋	①１３．２ ③２．３	天井部欠損。平坦な天井部より内湾気味に口縁部へと続き、端部はやや先細る。口縁部外面に杯Ａが溶着する。	内外面ロクロナデ。天井部外面はヘラケズリを施す。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色 内面 暗赤灰色	８８０
2	須恵器 杯Ａ	①１３．８ ②１５．６ ③３．２残 ⑥０．７	底部欠損。底部よりなだらかに立ち上がり、受部は丸く斜め上方に伸びる。立上りは、受部の内側に貼りつけて直立し端部は丸く納める。	内外面ロクロナデ。底部外面の１／３に反時計回りのヘラケズリを施す。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰色	８５４
3	須恵器 杯Ａ	①１２．２ ②１４．０ ③３．１残 ⑥０．７	底部欠損。斜め上方に開く体部より、水平気味の受部に続く。立上りは、やや内傾して受部の内側に貼りつけ端部はやや先細り気味である。	内外面ロクロナデ。底部外面の１／３にヘラケズリを施す。ヘラケズリ部分の上端に１条の凹線が認められる。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	８８０
4	須恵器 長頸壺	①１０．１ ③２１．５ ④２０．５	やや丸底の底部より内湾気味に立ち上がり、なだらかな肩部へと続く。肩部より、屈曲してやや外傾気味の頸部に続き、僅かに内湾する口縁部に至る。端部の内側に面を付ける。底部と体部との境目に段を有し、二重底部の様相を呈する。	内外面ロクロナデ。口縁部外面に２条の沈線を施す。口縁部・頸部外面にカキメを施す。肩部下端に１条の沈線を施し、体部上半にカキメを廻らす。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	８７９ ８８１
5	須恵器 無蓋高杯	①１０．０ ③９．５残	脚端部欠損。ハ字状に開く脚部で、二段二方向の長方形透かしを有する。杯部は平坦な底部よりやや直立気味の口縁部に続く。	口縁部外面にシャープな稜を有する。脚部に２条の沈線を施す。内外面ロクロナデ。脚部の一部に自然釉が認められる。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	８４８

第35表　３２号墳出土遺物（第７１・７２図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
1	須恵器 樽形瓶	①１１．５ ③２０．１ ④１５．４	体部は比較的細長く、中央部がやや太い。体部は、右側の粘土板を中心に、粘土紐で巻き上げ成形し、左側は円板で充填する。口頸部は、体部中央に差し込み接合を行なう。頸部はやや外反し、１条の突帯を廻らし外傾する口縁部へと続く。口縁部の上端は平坦な面をなす。	口頸部はナデ調整の後口縁部外面に１１条の櫛描波状文を施す。体部は２条の突帯を５箇所に廻らし６区画に分けている。右側と中央の３区画が櫛描山形文で、他の区画は櫛描波状文である。体部中央部の３区画の上方に、三角形のヘラ描き文を施している。体部の両端部分には渦巻き状のカキメを施したのち、５～６本のカキメを放射状に入れる。体部上半と口頸部内外面に自然釉が付着する。	①精緻 ②堅緻 ③内面 青灰色 外面 褐灰色 断面 セピア	５８３ ５８４ ５８５ ５８６ ５８７ ５８８ ５８９ ５９０ ５９１ ５９２ ５９３ ５９４ ５９５ ５９６ ６１２ ６１３ ６１７ ６１８ ６１９
2	須恵器 瓶	①１０．３ ③２．４残	瓶の口縁部である。外傾気味の頸部より僅かに屈曲し、外側にやや膨らみを持たせた口縁部に続き、口縁端部を外反させる。口縁部外面の下端に１条の沈線と突帯を有する。	内外面ロクロナデ。口縁部外面には５条の櫛描波状文を施し、頸部外面にも櫛描波状文が見られる。	①精緻 ②堅緻 ③緑灰色	８１１
3	須恵器 杯Ａ	①１３．８ ②１４．２ ③２．９ ⑥０．５	平坦な底部より緩やかに立ち上がり受部はほぼ水平をなす。端部は丸く納める。立上りは受部の内側に貼りつけて作り、短く内傾し端部はやや先細る。	体部外面は、底部１／３以下にヘラケズリを行なう。他はロクロナデ調整を施す。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	５６９ ５７１ ５９９ ６００
4	須恵器 蓋	①１２．６ ③３．７	壷蓋と思われる。平坦な天井部よりハ字状に開いて口縁部へと続き口縁部は垂下する。端部は接地面に平坦面を有し、外方に肥厚させる。	天井部外面ナデ調整を施し、繊維痕多数が認められる。他はロクロナデ調整。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	５４５ ５４６ ５５９ ５６０ ５７３
5	須恵器 杯Ａ	①１２．４ ②１４．７ ③３．１残 ⑥０．６	底部欠損。内湾気味に立ち上がる体部より、やや水平に伸びる受部に続く。受部の内側に内傾する立上りを貼りつけて作る。	内外面ロクロナデ。体部下半１／３にヘラケズリを施す。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	８２２
6	須恵器 蓋	①１１．６ ③２．９残	天井部欠損。壷蓋と思われる。天井部よりハ字状に開きやや屈曲して口縁部に続く。口縁端部は丸く納める。全体に厚ぼったい印象を与える。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	５４６ ８２２

第39表　４号窯、窯体内埋葬施設出土遺物（第９５図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
8	須恵器 長頸壷	①８．５ ③１８．０ ④１３．６	丸底の底部より内湾気味に立ち上がり、肩の張る肩部へと続く。頸部はやや直立気味に外傾させて口縁部へと続き、端部を僅かに直立させる。端部は丸く納める。底部外面に杯Ａの口縁部が溶着する。頸部外面に２条・肩部下端に１条の沈線を施す。	内外面ロクロナデ。底部外面は回転ヘラケズリを施す。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③青灰色	１１８９
9	銅製品 耳環	長径：２．９、短径：２．５ 断面：０．５５×０．６ 重量：１３．６３ｇ		銅地金を「Ｃ」字形に曲げて作られており、鍍金は為されず腐食が進んでいる。		１１６７
１０	銅製品 耳環	長径：２．７、短径：２．５ 断面：０．５５ 重量：７．９４ｇ				１１６８

第40表　４号窯、窯体内出土遺物（第９６図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１ 前庭部	須恵器 蓋	①１６．２ ③４．３残	蓋Ｂ。平坦な天井部よりなだらかに続き、やや屈曲して口縁部に至る。	天井部ヘラ切り離しの後、未調整。他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③明緑灰色	１１７３
２ 前庭部	須恵器 蓋	①１５．２ ③３．４	蓋Ｂ。平坦な天井部よりハ字状に開き口縁部に続く。端部は丸い。	天井部外面ヘラ削り。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰色	１１４８
３ 燃焼部	須恵器 蓋	①１２．４ ③３．５	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より、内湾気味に口縁部に続き、端部は丸い。	天井部外面は、器高の１／２程度、ヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	１１８５
４ 燃焼部床面	須恵器 蓋	①１３．６ ③２．９残	蓋Ｂ。なだらかな傾斜で口縁部に続く。口縁部上方に１条の沈線を施す。	全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③黒褐色	１２６４
５ 燃焼部床面	須恵器 蓋	①１３．８ ③４．９	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より内湾気味に口縁部へと続く。端部は丸い。	ヘラ切り離しの後、未調整。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②軟質 ③黄灰色	１２４２
６ 燃焼部床面	須恵器 蓋	①１３．２ ③３．０残	蓋Ａ。内湾気味に口縁部へと続き、端部は丸い。	器高の１／２程度、ヘラケズリを行う。他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③赤黒色	１２１８

第38表　４号窯、窯体内埋葬施設出土遺物（第９５図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１	須恵器 蓋Ｂ	①１６．０ ③４．２	やや平坦な天井部より内湾気味になだらかに口縁部へと続く。端部は丸く納める。天井部外面にヘラ記号を有する。	天井部外面は、ヘラ切り離し後未調整。他は内外面ロクロナデ。外面に自然釉がかかる。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③暗青灰色 内面 灰白色	１１９２
２	須恵器 蓋Ａ	①１３．４ １０．６ ③３．７	全体に湾曲して歪である。丸い天井部より、内湾気味に口縁部へと続き、端部でやや屈曲する。端部は丸い。	天井部外面ヘラ切り離しの後未調整。内面は不整ナデ。他は、内外面ロクロナデ調整を施す。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③暗青灰色	１１８８
３	須恵器 蓋Ａ	①１１．２ ③３．８	蓋杯の逆転する過渡期のものと思われる。丸い天井部より内湾気味に口縁部へと続き、垂下した後外方に摘み出し端部を丸く納める。	天井部外面は、器高の１／３にヘラケズリを行なう。他は、内外面ロクロナデ。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１１８７
４	須恵器 把手付椀	①８．４ ７．８ ③９．６	口径部がやや歪。丸底の底部より内湾気味に立ち上がり口縁部へと続く。体部外面のやや下方に逆「Ｌ」字状を呈する棒状の把手を有する。体部中央部に２条の沈線を施す。	内外面ロクロナデ。底部外面は、静止ヘラケズリを施す。把手は、ヘラ先で撫で付けて仕上げている。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③緑灰色	１１９０
５	須恵器 把手付椀	①１１．０ ③８．７	丸底気味の底部よりなだらかに立ち上がり、内傾気味の口縁部へと続く。口縁端部は、若干直立気味で丸く納める。体部外面の下方に「Ｌ」字状を呈する角張った把手を付す。口縁部外面の下方に２条の凹線を施す。	口縁部内外面ロクロナデ。底部内面は、不整ナデ。底部外面は、右回りのヘラケズリを施す。把手は、ヘラで角棒状に整え先端部は面取りを行なう。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	１１９３
６	須恵器 無蓋高杯	①１５．１ ③１２．５ ⑤１２．８	脚部は、比較的細い基部よりハ字状に開き脚端部は大きく外反し、僅かに屈曲して外方に面を付ける。脚柱部に２条の沈線を施す。杯部は、丸底気味の底部よりなだらかに立ち上がり僅かに外傾する口縁部へと続く。口縁部下端に１条の沈線を施す。	内外面ロクロナデ。杯部の底部外面の一部にヘラケズリが認められる。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	１１９４
７	須恵器 鉢	①１１．８ ③１０．４ ④１５．０	やや丸底の底部より内湾気味に立ち上がり屈曲して肩部に続き、外反する口縁部に至る。肩部下端に１条の沈線を施す。	内外面ロクロナデ。底部は作り直しが為されており、粘土板を充填した後不定方向の静止ヘラケズリの上から回転ヘラケズリを行う。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	１１９１

第41表　４号窯、窯体内出土遺物（第９６・９７図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
７ 焚口部埋土下層	須恵器 蓋	①１３．０ ③３．４残	蓋Ａ。天井部よりやや内湾気味に口縁部へと続き、端部は僅かに外向し先細る。	天井部、器高の１／３程度、ヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	１２１３
８ 焚口部埋土下層	須恵器 蓋	①１２．４ ③３．４	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部よりなだらかに口縁部へと続く。端部は丸い。		①精緻 ②堅緻 ③緑灰色	１１８４
９ 前庭部埋土	須恵器 蓋	①１１．４ ③３．８残	蓋Ａ。天井部よりなだらかに口縁部に続き、口縁部上端に１条の沈線を施す。	天井部、器高の１／２程度、ヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③赤灰色	１１４８
１０ 焚口部	須恵器 蓋	①１４．４ ③２．１	蓋Ｂ。扁平な天井部である。平坦な天井部より内湾気味に口縁部へと続き、端部は丸い。		①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１３０
１１ 焚口部	須恵器 蓋	①１３．８ ③３．０	蓋Ｂ。平坦な天井部より僅かに屈曲して口縁部へと続く。口縁部上端は、凹をめぐらす。	天井部外面は、ヘラ切り離し後、渦巻状のカキメを行う。他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１１３０
１２ 前庭部	須恵器 蓋	①１３．２ ③３．１	蓋Ｂ。平坦な天井部より外方に垂下する口縁部に続く。口縁部上端に１条の沈線を施す。		①細砂を含む。 ②やや軟 ③灰白色	１１７３
１３ 前庭部	須恵器 蓋	①－－－－ ③３．５残	蓋Ｂ。口縁部欠損。平坦な天井部より内湾気味に口縁部へと続く。ヘラ記号を有する。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③暗灰色	１１０１ １１２４ １１７３
１４ 燃焼部床面	須恵器 蓋	①１４．８ ③３．７	蓋Ｂ。平坦な天井部より内湾気味に垂下して口縁部へと続く。端部はやや先細り気味。	天井部外面ヘラ切り離しの後、未調整。他は全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③暗灰色	１２１２
１５ 燃焼部床面	須恵器 蓋	①－－－－ ③５．２残	蓋Ｂ。口縁部欠損。平坦な天井部より、ハ字状に開き口縁部へと続く。壷底部の可能性も考えられる。	天井部外面ヘラ削り。内面不整ナデ。他はロクロナデ。口縁部外面に２条の沈線とカキメを施す。	①細砂を含む。 ②やや軟 ③暗青灰色	１０８６ １１８１
１６ 燃焼部床面舟底状ピット	須恵器 壷蓋	①１１．５ ③３．２残	蓋Ａ。天井部欠損。天井部よりなだらかに続き、口縁部は屈曲して垂下し端部を外方に曲げる。端部は丸い。体部に工具痕が見られ、焼台とも考えられる。	全面にロクロナデを行う。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１２６４
１７ 前庭部	須恵器 壷蓋	①１０．２ ③３．０	蓋Ｂ。平坦な天井部より内湾気味に垂下する口縁部に続き、端部を外方に摘み出す。端部内面に面を付ける。	天井部、器高の１／３程度、ヘラケズリを行う。他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１７３

第42表　４号窯、窯体内出土遺物（第９７図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１８ 燃焼部舟底状ピット	須恵器 壷蓋	①１１．０ ③３．７残	蓋Ａ。丸みを帯びた天井部より垂下する口縁部に続き、端部を外方に向ける。端部は丸く納める。	天井部外面、器高の１／３程度、ヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１２６４
１９ 燃焼部舟底状ピット	須恵器 壷蓋	①１１．１ ③１．９残	天井部欠損。垂下する口縁部で、端部外方に屈曲させ下面に面を付ける。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１２６４
２０ 燃焼部	須恵器 壷蓋	①９．１ ③１．４残				１２４９
２１ 前庭部	須恵器 杯	①１５．２ ②１７．２ ③２．４残 ⑥１．０	杯Ａ。底部欠損。逆ハ字状の体部より受部に続き、端部は水平気味に外方に摘み出し丸く納める。立上りは直立気味にやや内傾する。		①精緻 ②堅緻 ③暗青灰色	１１４８
２２ 焚口部	須恵器 杯	①１３．１ ②１５．６ ③３．６ ⑥０．７	杯Ａ。平坦な底部より内湾気味に立ち上がり受部は斜め上方に摘み出す。立上りは内傾し端部は丸い。	底部外面、器高の１／３程度、ヘラケズリを行う。底部内面不整ナデ。他は、全面にロクロナデを行う。	①精良 ②堅緻 ③灰白色	１２１３
２３ 燃焼部舟底状ピット	須恵器 杯	①１３．７ ②１６．０ ③２．３残 ⑥０．７	杯Ａ。底部欠損。受部は斜め上方に伸びる。立上りは内傾した後、端部を摘み上げる。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③淡黄橙色	１２６４
２４ 焚口部	須恵器 杯	①１２．６ ②１４．８ ③３．５ ⑥０．８	杯Ａ。丸底気味の底部よりやや内湾して受部に続き、端部は斜め上方に伸びる。立上りは内傾する。	底部外面、静止ヘラケズリを行う。他は全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②やや軟 ③灰白色	１１３３
２５ 燃焼部	須恵器 杯	①１１．６ ②１４．１ ③４．２残 ⑥０．８	杯Ａ。底部欠損。丸底気味の底部より斜め上方に伸び受部に続く。立上りは、内傾した後上方に摘み上げる。	底部外面ヘラケズリ。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②軟質 ③灰白色	１１８５
２６ 焼成部	須恵器 杯	①１２．４ ②１５．０ ③３．１残 ⑥０．８５	杯Ａ。底部欠損。底部より内湾気味に立ち上がり、口縁部で屈曲させ内傾した後、上方に摘み上げて立上りを作る。受部は、口縁部の屈曲部の外側に水平気味に貼り付けて作る。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１１３７
２７ 前庭部	須恵器 杯	①１２．４ ②１４．４ ③２．７残 ⑥０．９	杯Ａ。底部欠損。やや外傾気味の体部より受部に続き、僅かに内傾する立上りは折り返して作られる。	全面にロクロナデを行う。外面にオリーブ黒色を呈する自然釉が掛かっている。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰黄色	１１４９

第44表　４号窯、窯体内出土遺物（第９７図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
３６ 燃焼部舟底状ピット	須恵器 無蓋高杯	①１３．０ ③４．０残	脚部欠損。平坦な底部より内湾気味に立ち上がり、やや外傾する口縁部に続く。端部は丸く納め、外面に二段のややシャープな稜を付ける。	底部外面はヘラケズリの後ナデ調整を施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１２６４
３７ 焚口部	須恵器 脚部	①－－－－ ③２．５残 ⑤９．４	高杯の脚部である。ハ字状の脚柱部より屈曲して垂下し接地部を外方に摘み出す。透かしを有する。	屈曲部外面に１条の沈線を施す。内外面ロクロナデ。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③緑灰色	１１８４ １２６６
３８ 燃焼部	須恵器 甕	①１２．１ ③３．６残	頚部・胴部欠損。逆ハ字状に開く頚部より屈曲し外傾気味の口縁部へと続く。端部の内側にやや窪みを付ける。	口縁部下端に１条の沈線を施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１１７４
３９ 焚口部	須恵器 脚部	①－－－－ ③４．１残 ⑤９．０	ハ字状に開く高杯の脚部である。端部は面を付け上下に摘み出す。	全面にロクロナデを行う。内面に炭化物の付着が見られる。	①精緻 ②堅緻 ③淡赤褐色	１１２９
４０ 焚口部埋	土師器 杯	①１２．５ ③２．７残	底部欠損。逆ハ字状に大きく開く口縁部。端部やや面を付ける。	全面にロクロナデを行う。外面にナデによる凹線を廻らせる。	①精緻 ②やや軟 ③淡黄橙色	１１２９
４１ 燃焼部舟底状ピット	須恵器 鉢	①１２．８ ③７．０残	摺鉢と思われる。丸底の底部より内湾気味に立ち上がり口縁部を僅かに外傾させる。端部にやや面を付けるものの概ね丸く納める。底部に、径４㎜前後の穿孔が３ヶ所に認められる。	全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②軟質 ③淡黄色	１２６４

第43表　４号窯、窯体内出土遺物（第９７図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
２８ 焼成部床面	須恵器 杯	①１３．４ ②１５．０ ③２．７残 ⑥０．６	杯Ａ。底部欠損。内湾気味に立ち上がり、直立する立上りに続く。受部は水平に伸びる。受部上端に、立上りを貼り付ける。	全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰黄褐色	８８５ １１７７
２９ 燃焼部床面	須恵器 杯	①１０．６ ②１３．０ ③３．４ ⑥０．５	杯Ａ。丸底気味の底部より、やや内湾気味に立ち上がり受部へと続く。端部は斜め上方に伸び、内側に内方に突き出させた後直立する立上りを貼り付ける。	底部外面ヘラ切り離しの後ナデ調整を行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③暗青灰色	１２０６
３０ 前庭部	須恵器 杯	①１２．０ ②１３．８ ③２．９ ⑥０．７	杯Ａ。平坦な底部よりやや内湾気味に立ち上がり、僅かに外反する受部へと続く。立上りは、直立し端部は先細る。	底部外面、器高の１／２程度、ヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③暗青灰色	１１４９
３１ 前庭部	須恵器 杯	①１１．０ ②１２．８ ③２．４残 ⑥０．６	杯Ａ。底部欠損。外傾気味の底部より立ち上がり、屈曲して内傾する立上りを作り出したのち、屈曲部に受部を貼り付ける。	全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰黄色	１１４８
３２ ５号窯出土遺物	須恵器 杯	①１１．３ ②１３．８ ③２．８残 ⑥１．０	杯Ａ。底部欠損。逆ハ字状の体部より端部を丸く納める受部へと続き、立上りは内傾した後直立気味に立ち上がり先細る。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１１２３
３３ 燃焼部	須恵器 杯	①１１．４ ②１３．６ ③２．８残 ⑥０．６	杯Ａ。底部欠損。内湾気味に立ち上がる体部よりやや水平気味の受部へと続く。立上りは僅かに湾曲させ内傾する。		①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１８５
３４ 前庭部	須恵器 杯	①１１．０ ②１３．４ ③２．８残 ⑥０．７	杯Ａ。底部欠損。底部より外傾気味に立ち上がり屈曲して内傾する立上りを作ったのち、屈曲部に受部を貼り付けて外方に摘み出す。	底部外面ヘラケズリ。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１４９
３５ 前庭部	須恵器 杯	①８．４ ②１１．２ ③２．５残 ⑥０．８	杯Ａ。底部欠損。底部よりやや内湾気味に立ち上がりほぼ水平に伸びる受部に続く。受部上面に内傾する立上りを貼り付ける。端部は丸く納める。天井部中央に棒状のつまみを付す壷蓋か？	底部外面、器高の１／２程度、ヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１７３

第46表　４号窯、窯体内出土遺物（第９８・９９図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
４８ 前庭部	須恵器 甕	①－－－－ ③５．４残	張り気味の肩部より、屈曲して口縁部へと続く。	口頸部内外面ロクロナデ。肩部外面平行タタキメ。内面は同心円文タタキを残す。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１２６６
４９ 燃焼部 灰原	須恵器 甕	①４５．８ ③１１．２ 残	大形甕の口縁部。やや外傾気味の口縁部で、端部を僅かに上方に持ち上げる。口縁端部に面を付ける。端部外面に１条の沈線と凸帯を廻らす。口縁部外面に２条の沈線を２ヶ所に廻らせる。沈線で区画された間隙に、櫛描波状文を施す。	内外面ロクロナデ。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	１０９８ １１１７ １２１１
５０ 燃焼部	須恵器 甕	①－－－－ ③１０．７ 残	大形甕の頸部。やや肩の張る肩部より屈曲して直立気味にやや外傾して立ち上がる口縁部へと続く。	口頸部内外面ロクロナデ。肩部外面は平行タタキメ。内面は青海波文タタタキメを残す。	①精緻 ②堅緻 ③明青灰色	１１７６ １２１２
５１ 焼成部	須恵器 甕		胴部片。	外面平行タタキメ。内面同心円文・青海波文タタキ。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１１７７
５２ 燃焼部	須恵器 甕				①精緻 ②堅緻 ③灰色	１１３５
５３ 焼成部	須恵器 横瓶				①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１２２５
５４ 燃焼部	須恵器 甕			外面平行タタキの後カキメを施す。内面青海波文タタキの後ナデ調整を行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１２２９
５５ 焼成部	須恵器 甕				①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１２４６
５６ 燃焼部	須恵器 甕				①精緻 ②堅緻 ③灰白色	
５７ 前庭部	須恵器 甕			外面平行タタキ。内面同心円文タタキ。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１７３
５８ 燃焼部	須恵器 甕				①精緻 ②堅緻 ③灰色	１２１１ １２１２ １２４２
５９ 煙道部 送風溝	須恵器 甕		肩部片。口頸部の剥離痕が見られる。	外面平行タタキ。内面の上部は同心円文タタキ、下半は青海波文タタキメを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１２１５

第45表　４号窯、窯体内出土遺物（第９６・９８図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
４２ 燃焼部床面	須恵器 甕	①３０．８ ③７２．８ ④５６．３	大形の甕である。胴部は、倒卵形をなす。丸底の底部より内湾気味に立ち上がり、丸みを帯びた肩部へと続く。頸部は外傾気味に口縁部に続く。端部は僅かに直立気味に延び、上端部にやや丸まった面を付ける。口縁部外面は、２条の沈線を２ヶ所に配し、上端側に鈍い稜を廻らす。口縁部外面の上端に刺突文、沈線に挟まれた間隙に２条の櫛描波状文を施す。	口縁部内外面ロクロナデ。胴部外面は、平行タタキメの後カキメを施す。胴部内面は、同心円文タタキメの後ナデ調整を行う。	①精緻 ②軟質 ③灰白色	１２５０ １２５３
４３ 燃焼部 床面	須恵器 甕	①２１．４ ③３．０残	外反する甕の口縁部である。端部を上下に肥厚させる。	全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②やや軟 ③黄橙色	１２４１
４４ 燃焼部 床面	須恵器 甕	①１８．６ ③３．５残	外反する口縁部で、端部を上下に肥厚させ、端面に２条の浅い沈線を廻らせる。口縁部外面に２条以上の沈線を施す。	口縁部外面の上半に、ヘラ記号を施す。内外面ロクロナデ。	①砂粒を含む。 ②やや軟 ③黄橙色	１２４１
４５ 焚口部	須恵器 提瓶	①７．４ ③４．８残	体部欠損。提瓶の口縁部と思われる。逆ハ字状に開き、端部はやや先細り気味に納める。口縁部外面に２条の沈線を施す。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１１３０
４６ 燃焼部 焚口部 灰原	須恵器 甕	①３１．６ ③１３．９ 残	胴部欠損。屈曲した頸部より外傾して立ち上がり、口縁部は外反した後更に屈曲して斜め上方に立ち上げる。端部上端にやや面を付ける。口頸部外面には、１～２条の沈線を３ヶ所に廻らせる。外面の中央部に簾状のカキメを全周に施す。口縁端部外面には１条の波状文を施している。		①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０９６ １０９７ １１０５ １１０７ １１０８ １１１２ １１１７ １１４７ １１４８
４７ 焚口部	須恵器 四耳壺	③１２．５ 残 ④３３．６ 以上	肩部上半に、扁平なつまみを４ヶ所に有する四耳壺と思われる。肩部は丸みを持ち、屈曲して頸部へと続く。	外面は、垂直方向に平行タタキを行った後頸部を中心にカキメを廻らしている。内面は、同心円タタキメの後ナデ調整を施す。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	１１３１

第48表　４号窯、灰原出土遺物（第１００図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
６９	須恵器 蓋	①１４．０ ③２．６残	蓋Ｂ。天井部欠損。天井部下端に稜を意識したと思われる段と凹線を有し、外方に開く口縁部に続く。端部は丸く納める。	天井部外面にカキメを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③黒褐色	１１２４ １１８０
７０	須恵器 蓋	①１２．８ ③３．１残	蓋Ａ。内湾気味の口縁部で、端部を垂下させ先細り気味に終わる。	天井部外面ヘラケズリを施し、他は全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③暗赤灰色	１０８６
７１	須恵器 蓋	①１３．０ ③３．１	蓋Ｂ。平坦な天井部より内湾気味の口縁部に続く。端部は丸く納める。		①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０８６
７２	須恵器 蓋	①１２．０ ③２．５		天井部外面ヘラケズリを施し、口縁部外面にカキメを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１１９
７３	須恵器 蓋	①１３．０ ③３．０	蓋Ｂ。平坦な天井部より内湾気味の口縁部に続く。天井部端部に凹線を施す。口縁端部は先細り気味に納める。	天井部外面ヘラ切り離しの後、未調整。他は全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰黄色	１１２４
７４	須恵器 蓋	①１２．６ ③３．４	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より開き気味の口縁部へなだらかに続く。口縁端部は先細る。	天井部外面はヘラケズリ。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１１５２
７５	須恵器 蓋	①１１．２ ③４．２	蓋Ｂ。やや平坦な天井部よりなだらかに垂下し口縁部に至る。端部はやや先細る。		①精緻 ②堅緻 ③緑灰色	１２７８
７６	須恵器 蓋	①１３．４ ③３．９	蓋Ｂ。中央部がやや窪む天井部よりハ字状に開く口縁部に続く。端部は丸く納める。	天井部外面はヘラ切り離しの後、未調整。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰黄褐色	１０８６
７７	須恵器 蓋	①１３．２ ③４．１			①細砂を含む。 ②堅緻 ③暗青灰色	１０８６
７８	須恵器 蓋	外側 ①１３．８ ③３．８ 内側 ①１４．２ ③４．４	蓋Ｂ。中央部がやや窪む天井部よりハ字状に開く口縁部に続く。端部はやや外反し、薄作りである。同形態の蓋が溶着する。	外面は器高の１／２程度ヘラケズリを行う。他は。全面にロクロナデを行う。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③明青灰色	１０８６
７９	須恵器 蓋	①１５．８ ③３．２	蓋Ｂ。平坦な天井部より屈曲しハ字状に開く口縁部に続く。	口縁部上端に１条の沈線を施す。全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③明青灰色	８８６ １１１７

第47表　４号窯、灰原出土遺物（第１００図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
６０	須恵器 蓋	①１７．０ ③４．４	蓋Ｃ。天井部外面に扁平なつまみを有し、中央を窪ませる。平坦な天井部より内湾気味にやや外方に開く口縁部へと続く。端部は丸く納める。	天井部外面はヘラケズリの後、つまみを付しその周辺部にナデ調整を行う。天井部内面は不整ナデ。当具痕を残す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１７８ １１８０
６１	須恵器 蓋	①１５．５ ③４．５			①精緻 ②堅緻 ③暗青灰色	１１３６
６２	須恵器 蓋	①１６．４ ③５．１			①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１７８ １１８０
６３	須恵器 蓋	①１５．６ ③４．５	蓋Ｃ。天井部外面に扁平なつまみを有する。平坦な天井部よりなだらかに垂下し口縁部へと続く。天井部下端に１条の沈線を施す。端部は丸く納め、内面に沈線を施している。	天井部外面はヘラケズリを行い、他は全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③黒褐色	１１８０
６４	須恵器 蓋	①１６．０ ③５．０	蓋Ｃ。天井部外面に扁平なつまみを有する。平坦な天井部より内湾気味に垂下して口縁部に続く。天井部下端に１条の沈線を施す。口縁端部はやや外方に摘み出す。	天井部外面はヘラケズリを行った後つまみを付し、その周辺部にナデ調整を施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③明青灰色	１０８５
６５	須恵器 蓋	①－－－－ ③４．０残	蓋Ｃ。天井部外面に扁平なつまみを有する。丸みを帯びた天井部より、なだらかに口縁部へと続く。口縁部を欠く。	天井部外面はヘラケズリを行った後つまみを付け、つまみ部とその周囲にナデを施す。他は、全面にロクロナデを行う。天井部内面に当て具痕を残す。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１１７９
６６	須恵器 蓋	①１５．０ ③３．９	蓋Ｂ。平坦な天井部より、内湾気味の口縁部に続く。端部は垂下し丸く納める。	天井部ヘラ切り離しの後、未調整。屈曲部のみヘラケズリを行う。内外面ロクロナデ。	①細砂を含む。 ②やや軟 ③灰色	
６７	須恵器 蓋	①１３．４ ③２．９	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部よりなだらかに続きやや開き気味の口縁部へ至る。端部は丸い。	天井部外面ヘラケズリの後カキメを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③褐灰色	８８６
６８	須恵器 蓋	①１３．０ ③４．０	蓋Ａ。丸みを帯びた天井部より、内湾気味に口縁部へと続き、端部はやや垂下し丸く納める。乾燥時の割れ目に粘土を充填して補修した痕跡が認められる。	天井部外面ヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。天井部内面にヘラ記号を有する。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０８６

第50表　４号窯、灰原出土遺物（第１０１図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
９１	須恵器 蓋	①１６．０ ③３．５	蓋B。蓋蓋である。平坦な天井部よりハ字状に開く口縁部に続き、端部を外方に向ける。端部は丸く全体に厚ぼったい。９２～９５は天井部がやや窪む。	天井部外面はヘラ切り離しの後、未調整。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③淡黄色	１１２４
９２	須恵器 蓋	①１２．０ ③４．０			①精緻 ②やや軟 ③淡黄色	１１１８
９３	須恵器 蓋	①１１．８ ③３．６			①精緻 ②堅緻 ③暗青灰色	１０８８
９４	須恵器 蓋	①１２．０ ③３．４			①精緻 ②堅緻 ③灰色	１１２２
９５	須恵器 蓋	①１２．４ ③３．５			①細砂を含む。 ②堅緻 ③淡黄橙色	１０８８
９６	須恵器 蓋	①１１．０ ③３．３残	壷蓋。天井部欠損。屈曲して垂下する口縁部に続き、端部を外反させる。端部は丸い。	全面にロクロナデを行う。端部内面に１条の沈線を付ける。	①精緻 ②堅緻 ③暗灰色	１０９２
９７	須恵器 蓋	①１０．８ ③４．５残	壷蓋。天井部欠損。やや盛り上がり気味の天井部より屈曲しハ字状に開く口縁部に続く。端部は丸く若干外反させる。	天井部外面はヘラ切り離しの後、未調整。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０８９
９８	須恵器 蓋	①１０．８ ③３．０残	壷蓋。天井部欠損。屈曲してハ字状に開く口縁部に続き、端部をやや外反させる。端部は丸くやや面を付ける。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１１７
９９	須恵器 蓋	①１２．０ ③３．９	壷蓋。丸みを帯びた天井部より内湾気味の口縁部に続く。天井部と口縁部の境界に段を有する。口縁端部に窪みを持つ面を付ける。	天井部外面には器高の１／３程度、ヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１１６
１００	須恵器 蓋	①１１．４ ③３．４残	壷蓋。天井部欠損。屈曲してややハ字状に開く口縁部に続く。端部には面を付ける。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③浅黄色	１１１２
１０１	須恵器 蓋	①９．８ ③３．３	壷蓋。平坦な天井部より内湾する口縁部に続く。端部は角張った面を付ける。		①精緻 ②堅緻 ③灰黄色	１０９２

第49表　４号窯、灰原出土遺物（第１００・１０１図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
８０	須恵器 蓋	①１４．２ ③３．７残	蓋A。天井部よりなだらかにハ字状に開く口縁部へと続く。端部は丸く納める。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③褐灰色	１１２４ １１５８
８１	須恵器 蓋	①１４．６ ③３．４	蓋B。平坦な天井部よりやや外方に開く口縁部に続く。口縁部上端に２条の沈線を施す。端部は丸く納める。	天井部外面ヘラケズリの後カキメを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③明青灰色	８５３ １１３６
８２	須恵器 蓋	①１３．６ ③３．６	蓋A。やや丸みを帯びた天井部よりわずかに屈曲して垂下し口縁部へと続く。口縁部上端に凹線を施し段を付ける。端部は丸い。	天井部外面はヘラケズリ。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③緑灰色	８５３
８３	須恵器 蓋	①１４．６ ③３．７	蓋B。平坦な天井部よりなだらかに口縁部へと続き、端部を丸く納める。口縁部上端に段を付ける。	天井部外面ヘラ切り離しの後、屈曲部のみヘラケズリを施す。他は全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③黒褐色	
８４	須恵器 蓋	①１３．６ ③３．２残	天井部欠損。天井部下端に段を付け、やや外反する口縁部に続く。端部は丸く納める。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	８５２ ８５４
８５	須恵器 蓋	①１３．２ ③３．２	蓋B。平坦な天井部より屈曲してハ字状に開く口縁部に続く。端部は丸く納める。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰黄色	８４８
８６	須恵器 蓋	①１３．８ ③２．４残	天井部欠損。口縁部は屈曲し、端部はやや尖り気味に納める。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③黄灰色	１０８９
８７	須恵器 蓋	①１３．６ ③３．１残	天井部欠損。屈曲して垂下する口縁部で、端部は丸く納める。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③淡黄橙色	１１２５
８８	須恵器 蓋	①１４．８ ③２．８	蓋B。ほぼ平坦な天井部より屈曲してハ字状に開く口縁部に続く。端部は丸い。	天井部外面はヘラケズリの後ナデ調整。内面は不整ナデ。他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１２０ １１７４
８９	須恵器 蓋	①１２．２ ③４．２	天井部欠損。ハ字状に垂下する口縁部で端部をやや外反させる。端部は丸く納める。	全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③暗青灰色	１１５１
９０	須恵器 蓋	①１４．６ ③５．３	天井部欠損するが蓋Bと思われる。ほぼ平坦な天井部より、屈曲して垂下する口縁部に続く。端部は薄作りで内側に面を着ける。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰赤色 内面 暗青灰色	１１８２

第52表　４号窯、灰原出土遺物（第１０１・１０２図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１１２	須恵器 蓋	①－－－－ ③０．７残	平坦な天井部で、外面にヘラ記号を有する。	天井部外面はヘラケズリを施す。天井部内面は不整ナデ。	①精緻 ②堅緻 ③灰赤色	１１４１
１１３	須恵器 蓋	①－－－－ ③１．５残	平坦な天井部よりなだらかに口縁部に続く。外面にヘラ記号を有する。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	１１３３
１１４	須恵器 杯	①１５．６ ②１７．４ ③３．４ ⑥０．６	杯Ａ。平坦な底部より内湾気味に立ち上がりやや外反する受部へと続き、立上りは折り返して作られる。立上り端部は先細る。	底部外面はヘラケズリを施し、他は全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③暗灰色	１０８６
１１５	須恵器 杯	①１５．０ ②１７．６ ③３．２残 ⑥０．６	杯Ａ。底部欠損。内湾気味に立ち上がり、受部端部を外方に摘み出す。受部内側の平坦面に内傾する立上りを貼り付ける。１１６は、高杯の受部である。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１８０
１１６	須恵器 杯	①１４．３ ②１７．０ ③４．７ ⑥１．２		底部外面ヘラケズリの後ロクロナデ調整。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１１２３
１１７	須恵器 杯	①１５．２ ②１７．０ ③３．４残 ⑥０．７	杯Ａ。底部欠損。外傾気味に立ち上がり、やや内湾させて立上りを作る。その後、受部を貼り付けている。	底部外面ヘラケズリ。他は、全面にロクロナデを行う。体部外面に１～２条の沈線を廻らす。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰黄色	１０８６
１１８	須恵器 杯	①１４．２ ②１６．６ ③２．９残 ⑥１．１	杯Ａ。底部欠損。内湾気味の体部より外反する受部へと続き、立上りは折り返して作られる。その後折り返し部分の内側に粘土を充填して補強を行う。	全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０８６
１１９	須恵器 杯	①１４．６ ②１６．６ ③４．４ ⑥１．１	杯Ａ。平坦な底部より外傾して受部に続く。受部はやや外反し、内側の平坦面に直立気味の立上りを貼り付け、端部は先細る。	底部外面ヘラケズリ。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	１１２５
１２０	須恵器 杯	①１３．４ ②１５．６ ③３．６ ⑥１．０	杯Ａ。ほぼ平坦な底部より内湾気味に立ち上がり、外反する受部へと続き折り返したのち直立する立上りを作り出している。折り返し部分の内側に粘土を充填して厚みを付けている。	底部外面はヘラケズリ調整を行う。他は全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②やや軟 ③灰黄色	１０８５

第51表　４号窯、灰原出土遺物（第１０１図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１０２	須恵器 蓋	①１２．０ ③３．６残	壷蓋。天井部欠損。屈曲してやや八字状に開く口縁部に続く。口縁部上端に１条の沈線を廻らし稜を意識させている。口縁端部に窪みを持つ面を付ける。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０９１
１０３	須恵器 蓋	①１１．４ ③２．６	壷蓋。ほぼ平坦な天井部よりわずかに屈曲して垂下する口縁部に続き、端部を外方に摘み出す。端部の内側に面を着ける。		①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１２０
１０４	須恵器 蓋	①１３．６ ③３．４	壷蓋。平坦な天井部よりなだらかに口縁部に続き、端部は屈曲して外方に摘み出す。	天井部外面はヘラ切り離しの後、未調整。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	８６０
１０５	須恵器 蓋	①９．０ ③２．１残	壷蓋。天井部欠損。屈曲してハ字状に開く口縁部に続き、端部は外方に摘み出す。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③淡黄橙色	１０９８
１０６	須恵器 蓋	①８．６ ③２．０残			①精緻 ②堅緻 ③淡黄橙色	１０９２
１０７	須恵器 蓋	①９．２ ③２．６	平坦な天井部より内湾気味に垂下して口縁部へと続き、端部は外方に摘み出す。	天井部外面はヘラ切り離しの後、未調整。屈曲部にヘラケズリを施した後、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③浅黄色	１１２４
１０８	須恵器 蓋	①－－－－ ③３．０残	ハ字状に開く蓋と思われる。外面に１条の沈線を施し、「人」字形のヘラ記号が認められる。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③淡黄橙色	１０９７
１０９	須恵器 蓋	①１２．４ ③２．２	平坦な天井部よりなだらかに口縁部へと続き端部は外向する。端部はやや丸く納める。天井部外面に「一」字形のヘラ記号を施す。	天井部外面はヘラケズリ。内面は不整ナデ。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③赤灰色	１０８５
１１０	須恵器 蓋	①－－－－ ③１．０残	平坦な天井部で口縁部を欠損する。	天井部外面はヘラケズリを行い板目圧痕を残す。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③黄灰色	１１２１
１１１	須恵器 蓋	①－－－－ ③０．９残	ほぼ平坦な天井部である。天井部外面にヘラ記号を施す。	全面にロクロナデを行う。天井部内面は不整ナデ。	①精緻 ②堅緻 ③褐灰色	１１１５

第54表　４号窯、灰原出土遺物（第１０２図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１２９	須恵器 杯	①１１．０ ②１２．８ ③３．０ ⑥０．６	杯Ａ。平坦な底部より外傾して伸びる体部に続き、屈曲させ内傾する立上りを作り出す。屈曲部の外面に受部を貼り付けて摘み出す。	底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③淡黄色	１１２５
１３０	須恵器 杯	①１１．４ ②１３．４ ③２．１残 ⑥０．５５	杯Ａ。底部欠損。外傾気味の体部より外反して受部に続き、折り返したのち直立させる立上りを作り出す。端部は先細る。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	８４７
１３１	須恵器 杯	①１０．２ ②１２．２ ③２．５残 ⑥０．８	杯Ａ。底部欠損。内湾気味に立ち上がり、ほぼ水平に伸びる受部に続く。受部の内側にやや内傾する立上りを貼り付ける。		①精緻 ②堅緻 ③淡黄色	１０８６
１３２	須恵器 杯	①１２．４ ②１３．８ ③３．９ ⑥０．６	杯Ａ。丸底気味の底部より、内湾気味に立ち上がり受部を外反させた後折り返して直立する立上りを作り出している。端部は先細る。	底部外面はヘラ切り離しの後、未調整。他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰黄色	１０８５
１３３	須恵器 杯	①１３．０ ②１４．４ ③２．６ ⑥０．６	杯Ａ。やや丸底気味の底部より外傾して立ち上がり、屈曲させた後直立する立上りを作り出す。端部は先細り、外面に細い沈線を廻らす。受部は、屈曲部外面に貼り付けて作る。	底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰褐色	１１４１
１３４	須恵器 杯	①１１．０ ②１３．２ ③２．０残 ⑥０．５	杯Ａ。底部欠損。内湾気味に斜め上方に伸びる受部に続く。受部の内側に内傾する立上りを貼り付ける。		①精緻 ②やや軟 ③褐灰色	１１８０
１３５	須恵器 杯	①１１．８ ②１４．０ ③３．３ ⑥０．５	杯Ａ。ほぼ平坦な底部より外傾して立ち上がり、やや外反する受部に続く。立上りは、受部の内側に貼り付けて作られ内傾する。	底部外面はヘラ切り離しの後、未調整。周辺部にヘラケズリ。他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	８８６ １１１４
１３６	須恵器 杯	①１０．３ ②１２．２ ③２．８ ⑥０．８	杯Ａ。ほぼ平坦な底部より僅かに内湾して立ち上がり、やや斜め上方に伸びる受部へと続く。受部上端のやや内側に内傾して直立気味に摘み上げる立上りを貼り付けて作る。	底部外面はヘラケズリを施し、内面には不整ナデを行う。他は全面にロクロナデを行う。外面に自然釉が見られる。	①精緻 ②堅緻 ③明緑灰色	１１２４

第53表　４号窯、灰原出土遺物（第１０２図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１２１	須恵器 杯	①１２．４ ②１４．４ ③３．３残 ⑥０．８	杯Ａ。やや丸みを帯びた底部よりなだらかに立ち上がり受部へと続き、立上りは直立気味にやや内傾する。立上りの基部に沈線を廻らす。	底部外面器高の１／２程度、ヘラケズリを行う。受部上面にヘラケズリを施す。他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③浅黄色	８５３
１２２	須恵器 杯	①１３．８ ②１５．３ ③２．９残 ⑥０．７	杯Ａ。底部欠損。内湾気味に立ち上がり僅かに外反する受部へと続き、折り返して直立する立上りを作り出す。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１１４２
１２３	須恵器 杯	①１２．９ ②１５．４ ③２．９残 ⑥０．８	杯Ａ。底部欠損。内湾気味の体部よりやや外反気味の受部に続く。立上りは内傾気味に貼り付けられる。	底部外面器高の１／２程度、ヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１５１
１２４	須恵器 杯	①１２．８ ②１５．０ ③１．９残 ⑥０．６	杯Ａ。底部欠損。外傾気味の体部より水平に摘み出す受部に続く。受部上端の平坦面に強く内傾する立上りを貼り付ける。端部は先細る。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１１０６
１２５	須恵器 杯	①１２．２ ②１４．０ ③３．８残 ⑥０．８	杯Ａ。丸みを帯びた底部より内湾気味に立ち上がり、受部をやや外反させた後、折り返して直立気味の立上りを作り出している。	底部外面の中央部はヘラ切り離しの後、未調整。周辺部にヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②軟質 ③黄灰色	１１４２ １１８１
１２６	須恵器 杯	①１２．２ ②１４．０ ③３．２ ⑥０．８	杯Ａ。平坦な底部より外傾して立ち上がり水平気味に斜め上方に伸びる受部に続く。立上りは受部の内側に直立気味に貼り付けて作り出す。端部は先細る。	底部外面は器高の１／３程度、ヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②軟質 ③明緑灰色	１１２３ １１４２ １１７８
１２７	須恵器 杯	①１０．４ ②１２．２ ③３．４ ⑥０．７	杯Ａ。ほぼ平坦な底部より外傾して立ち上がり、斜め上方に伸びる受部へと続く。受部の内側に直立する立上りを貼り付け、端部は先細る。	底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰黄褐色	１１４１
１２８	須恵器 杯	①１１．８ ②１３．６ ③３．１残 ⑥０．７	杯Ａ。底部欠損。内湾気味に立ち上がり、水平気味に斜め上方に伸びる受部へと続く。受部上端の平坦面に内傾させたのち直立する立上りを貼り付ける。端部はやや先細る。	全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②やや軟 ③明青灰色	１１８２

第55表　４号窯、灰原出土遺物（第１０２・１０３図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１３７	須恵器 杯	①１１．８ ②１３．９ ③３．０ ⑥０．６	杯Ａ。平坦な底部より内湾した後、外反する受部へと続き折り返して立上りを作り出す。立上りは内傾した後直立する。	底部外面はヘラケズリを施し、板目圧痕が見られる。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	８６０ １０９２ １１０１ １１１５ １１８１
１３８	須恵器 杯	①１１．２ ②１３．２ ③２．８ ⑥０．９	杯Ａ。ほぼ平坦な底部より外傾して立ち上がり、屈曲した後内傾する立上りを作り出す。端部はやや先細る。屈曲部外面に受部を貼り付け摘み出す。	底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０８９
１３９	須恵器 杯	①１１．６ ②１３．８ ③３．２残 ⑥０．９	杯Ａ。底部欠損。内湾気味の体部の上端部を外方に摘み出して受部となす。受部上端の平坦面の内側に立上りを貼り付ける。立上りは内傾し、端部を摘み上げる。	全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	１１１７
１４０	須恵器 杯	①１１．０ ②１３．４ ③３．２残 ⑥１．０	杯Ａ。底部欠損。僅かに内湾する体部より外反気味の受部に続く。立上りは受部の内側に貼り付けて作られ、内傾する。	底部内面は不整ナデを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１２０
１４１	須恵器 杯	①９．７ ②１２．４ ③２．６残 ⑥０．９	杯Ａ。底部欠損。外傾する体部より屈曲した後、内傾する立上りを作り出す。屈曲部外面に受部を貼り付けて作り出している。	体部下半にヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③暗赤灰色	１１１４
１４２	須恵器 杯	①１０．８ ②１２．７ ③３．２ ⑥０．５	杯Ａ。丸みを帯びた底部より内湾気味に立ち上がり外反する受部へと続く。立上りは、受部の内側を内方に摘み上げて作られている。	底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１１４１
１４３	須恵器 杯	①１１．６ ②１３．８ ③２．３残 ⑥０．７	杯Ａ。底部欠損。外傾する体部より僅かに外反する受部に続き、その内側に内傾する立上りを貼り付ける。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１２３
１４４	須恵器 高杯	①１９．６ ②２０．９ ③３．４残 ⑤－－－－ ⑥１．１	脚部欠損。杯部は、ほぼ平坦な底部より内湾気味に立ち上がり受部を外方に摘み出す。立上りは外反気味に直立する。	底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③暗灰色	１０８５ １１８０

第56表　４号窯、灰原出土遺物（第１０３図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１４５	須恵器 高杯	①１４．６ ②１６．８ ③１３．５残 ⑥０．７	有蓋高杯。ハ字状に開く脚部で端部を欠損する。杯部は、平坦な底部より外傾して立ち上がり、受部は斜め上方に摘み上げる。受部の内側にやや内傾する立上りを貼り付ける。	全面にロクロナデを行う。杯部底部内面は、不整ナデの後工具痕が見られる。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１１０７ １１２４ １１７８
１４６	須恵器 高杯	①１４．０ ②１６．３ ③４．０残 ⑥０．９	有蓋高杯。脚部欠損。ほぼ平坦な底部より内湾気味に立ち上がり、受部はやや外反する。立上りは内傾した後直立し、先細り気味に納める。	底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③暗青灰色	１１７９ １１８１
１４７	須恵器 高杯	①１４．８ ②１７．２ ③１１．６残 ⑥０．８	有蓋高杯。脚部下半欠損。脚部はハ字状に開く。杯部は、丸底気味の底部より内湾して立ち上がり僅かに外反する受部へと続く。立上りは内傾気味に貼り付けて作られる。	全面にロクロナデを行う。杯部の底部内面に工具痕（当て具）が見られる。脚部内面の上半に絞り痕が認められる。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰黄褐色	１１５１ １１７９
１４８	須恵器 高杯	③１０．９残 ⑤１２．０	杯部欠損。ハ字状に開く脚部である。二段二方向の長方形透かしを有する。脚柱部のほぼ中央部に２条の沈線を施す。脚端部の外面に面を付ける。	全面にロクロナデを行う。自然釉が掛かっている。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	１００４ １０９１ １１０５ １１４１ １１２４
１４９	須恵器 高杯	③１２．０残	口縁部・脚端部欠損。大きくハ字状に開く脚部と、ほぼ平坦な杯部の底部をなすが歪である。脚柱部に２条の沈線を施す。	杯底部内面は不整ナデを行い、他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③緑黒色	１１１０ １１２５
１５０	須恵器 高杯	③１０．７残 ⑤１４．３	杯部欠損。直立気味の脚柱部より大きくハ字状に開く端部に続く。端部は僅かに垂下し外方に面を付ける。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１８２
１５１	須恵器 高杯	③１０．６残 ⑤１４．０			①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１１１
１５２	須恵器 高杯	③５．９残 ⑤１４．４	脚端部のみ遺存。大きくハ字状に開く脚端部で、端部を上下に摘み出し面を付ける。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０８９
１５３	須恵器 高杯	③３．１残 ⑤９．８	杯部欠損。ハ字状に開く脚部で、端部に面を付け先細る。		①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１７９

第58表　４号窯、灰原出土遺物（第１０４図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１６２	須恵器 椀	①１１．６ ③５．６残	把手付椀と思われる。やや直立気味に立ち上がる口縁部で、端部は丸く納める。	全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②やや軟 ③灰白色	１１８０
１６３	須恵器 椀	①１０．０ ③４．４残	把手付椀と思われる。僅かに外傾気味に立ち上がった後、直立する口縁部をなす。口縁端部の内側にやや面を付ける。		①砂礫を含む。 ②堅緻 ③暗灰黄色	１１８０
１６４	須恵器 甕	①９．６ ③３．２残	やや外傾気味の口縁部である。外面に２条の稜を廻らし、その間隙に櫛描波状文を施す。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	８６３
１６５	須恵器 甕	①９．６ ③５．０残	やや外反気味の頸部より屈曲して内湾気味に立ち上がる口縁部へと続く。口縁端部の内面に窪みを持つ面を付ける。屈曲部外面に、１条の突帯と沈線を廻らす。口縁部外面に櫛描波状文、頸部外面には櫛描簾文を施す。		①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０８５
１６６	須恵器 甕	①１０．２ ③３．２残	頸部より僅かに屈曲し外傾気味の口縁部へと続く。口縁部外面に２条の沈線を施しその間隙と頸部外面に刺突文を施す。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	８８５
１６７	須恵器 甕	③３．９残 ④１６．４	甕の体部と思われる。底部より内湾気味に立ち上がり屈曲した後内傾する肩部へと続く。最大胴径部分に２条の沈線を施しその上下に刺突文を施す。		①精緻 ②堅緻 ③淡黄橙色	１２７２
１６８	須恵器 壷	③４．９残 ④１２．５	長頸壷の体部と思われる。やや肩の張る肩部より屈曲し外傾気味の頸部へと続く。最大胴径部分に２条の沈線を廻らし、その間隙に刺突文を施す。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰黄褐色	１０９０
１６９	須恵器 壷	③２．３残 ④１５．６	長頸壷の肩部と思われる。体部下半より緩やかに屈曲して張り気味の肩部へと続く。肩部下端に２条の沈線を廻らし、その上方に刺突文を施す。		①精緻 ②堅緻 ③灰黄褐色	１１０５

第57表　４号窯、灰原出土遺物（第１０３図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１５４	須恵器 高杯	③３．７残 ⑤１１．１	脚部下半のみ遺存。ハ字状に開く脚部で、端部を上下に摘み出し窪みを持つ面を作る。	全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１１２１
１５５	須恵器 高杯	①１０．０ ③２．３残	無蓋高杯の杯部。やや外傾気味の口縁部で、外面に２段の稜を付ける。	底部外面の屈曲部にヘラケズリを施し、他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③暗緑褐色	１１２４
１５６	須恵器 高杯	①１２．２ ③７．０残	無蓋高杯。杯部は、平坦な底部より外傾する口縁部へと続く。口縁部外面に二段の稜を付ける。脚柱部は直立気味である。脚部には二段二方向の長方形透かしを有する。	杯底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰黄褐色	１１２５
１５７	須恵器 高杯	①１５．２ ③３．４残	無蓋高杯。脚部欠損。やや丸みを帯びた底部より外傾気味の口縁部に続く。口縁部下端に１条の沈線を施す。	杯底部外面はヘラ切り離しの後ナデ調整。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	９００
１５８	須恵器 高杯	①１１．４ ③５．４残	無蓋高杯。脚部欠損。内湾気味の体部より直立する口縁部に続く。口縁部外面に１条の沈線を施し、下端に稜状の段を付ける。	体部外面はヘラケズリを施し、他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③黒褐色	１１４１
１５９	須恵器 高杯	③７．７残 ⑤１１．８	脚部下半のみ遺存。直立気味の脚柱部より大きく外反気味に開く脚端部に続く。端部は水平気味に突き出し、下側に面を着ける。二方向の長方形透しを有する。	全面にロクロナデを行う。脚柱部の外面にカキメを施す。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１１１９
１６０	須恵器 高杯	③１０．９残 ⑤１２．０	杯部欠損。ハ字状に開く脚部で、下半は外反気味に広がる。脚柱部の中央部に２条の沈線を施す。二段二方向の長方形透しを有する。	全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	１００４ １０９１ １１０５ １１２４ １１４１
１６１	須恵器 高杯	③３．９残	杯部・脚端部欠損。絞り込まれた脚柱部より大きく外反し、屈曲した後ハ字状に開く脚端部へと続く。屈曲部の上面に１条の稜を廻らす。稜の外周には段を有する。脚柱部に二段二方向の長方形透しを有する。		①精緻 ②堅緻 ③明青灰色	１１４０ １１４９

第60表　４号窯、灰原出土遺物（第１０４・１０５図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１８０	須恵器 壷	③８．２残 ④１１．７	球形の体部をなす。肩部上半に２条の沈線を施す。	底部外面はヘラケズリを施し、他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	８４８ １１１９ １１４２
１８１	須恵器 壷	①１１．８ ③５．５残	口縁部。やや内傾した後外反する口縁部で、端部を玉縁状に肥厚させる。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１１１１
１８２	須恵器 壷	①１０．２ ③３．９残	短頸壷。屈曲した頸部より外反する口縁部へと続き、端部はやや玉縁状に肥厚させる。		①精緻 ②堅緻 ③浅黄色	１１１６
１８３	須恵器 壷	①６．６ ③４．９残	短頸壷に壺蓋が融着している。体部欠損。撫で肩の肩部より直立気味に内傾する口縁部へと続く。端部は丸く納める。肩部下端に１条の沈線を施す。蓋は天井部よりハ字状に開く口縁部に続き、端部は外方に摘み出す。		①精緻 ②堅緻 ③淡黄橙色	８５１
１８４	須恵器 壷	③８．０残 ④１９．８	体部上半のみ遺存。僅かに内湾気味に立ち上がる体部より屈曲して肩部へと続く。	体部外面の下半は、平行タタキの後カキメを施す。内面は青海波文タタキを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰色	１１１１
１８５	須恵器 壷	③９．５残 ④２０．５	体部のみ遺存。底部は歪。内湾気味に立ち上がり、やや屈曲して肩部へと続く。		①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰色	１１７８
１８６	須恵器 壷	①１１．４ ③３．５残	短頸壷の口縁部。外反気味の口縁部で端部を玉縁状に肥厚させる。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③淡黄色	１１１４
１８７	須恵器 壷	①９．４ ③２．０残	短頸壷もしくは横瓶の口縁部。外傾する口縁部で、端部を玉縁状に肥厚させる。		①精緻 ②堅緻 ③灰緑色	１０９２
１８８	須恵器 壷	①１１．０ ③３．４残	短頸壷の口縁部。頸部より外反して口縁部へと続き、端部を屈曲させて上方に伸ばす。		①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１２３ １１５２
１８９	須恵器 提瓶	①７．６ ③４．５残	口縁部。外傾する口縁部で、端部はやや先細る。		①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰緑色	１０８９
１９０	須恵器 提瓶	①５．４ ③３．７残	口縁部。やや外反気味で端部は先細る。外面に２条の沈線を施す。		①精緻 ②堅緻 ③淡黄橙色	１０８９

第59表　４号窯、灰原出土遺物（第１０４図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１７０	須恵器 壷	①８．７ ③３．９残	広口壷。張り気味の肩部よりやや内方に直立する口縁部へと続く。端部は丸く納める。	全面にロクロナデを行う。胴部上端にカキメを施す。	①砂礫を含む。 ②やや軟 ③灰白色	１１２３
１７１	須恵器 壷	①６．４ ③３．７残	広口壷。張り気味の肩部より直立する口縁部へと続く。端部は丸く納める。	全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②やや軟 ③灰白色	１０８８ １１０８
１７２	須恵器 壷	①７．４ ③２．８残	広口壷。張り気味の肩部よりほぼ直立する口縁部へと続く。肩部下端に１条の沈線を廻らす。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１１０７
１７３	須恵器 壷	①９．４ ③３．７残	広口壷。胴部より屈曲して張り気味の肩部へと続き、口縁部は内傾する。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	１１１６ １１２３
１７４	須恵器 壷	①１１．４ ③３．４残	広口壷。丸みを帯びた胴部より緩やかに屈曲し、内傾気味の肩部へと続く。口縁部はほぼ直立し、端部は丸く納める。		①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	１１７８
１７５	須恵器 壷	③５．７残 ④１３．２	長頸壷の胴部。底部より内湾しながら立ち上がり張り気味の肩部へと続く。肩部下端に２条の沈線を施す。	全面にロクロナデを行う。体部外面の下半にカキメを施す。	①砂礫を含む。 ②やや軟 ③灰白色	１１２２
１７６	須恵器 壷		長頸壷の胴部。最大胴径部分で丸く屈曲し、張り気味の肩部へと続く。肩部下端に２条の沈線を施す。	全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③淡黄橙色	９００
１７７	須恵器 壷	③４．９残 ④１２．６	長頸壷の胴部。底部より内湾気味に立ち上がりやや直立する肩部へと続く。	底部外面はヘラケズリを施し、他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０９７
１７８	須恵器 壷	③８．２残 ④１２．６	脚付長頸壷。脚部はハ字状に開く。体部は平坦な底部より内湾して立ち上がり、丸みをもって肩部へと続く。肩部下端に１条の沈線が見られる。	体部の底部外面はヘラケズリを施し、内面は不整ナデの後当て具痕を残す。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③浅黄色	１０９６ １１０５ １１０６
１７９	須恵器 壷	①８．４ ③５．７残	長頸壷の口縁部。やや外傾気味で端部は丸く納める。端部内面に僅かではあるが面を付ける。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰黄色	１１７９

第62表　４号窯、灰原出土遺物（第１０５・１０６図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
２０３	須恵器 甕	①３０．３ ③３．９残	体部欠損。大きく外反する口縁部で、端部を玉縁状に肥厚させる。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０８９
２０４	須恵器 甕		胴部片。	外面は、平行タタキの後カキメを施す。内面は青海波文タタキメを残す。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰褐色	１０８８ １０９２ １０９６ １１０５
２０５	須恵器 甕	①４０．６ ③４．７残	口縁部片。外反する口縁部で、端部を僅かに屈曲させて斜め上方に伸ばす。端部上端に平坦な面を付ける。端部外面を僅かに肥厚させる。端部外面の下端部に１条のシャープな稜を廻らす。	全面にロクロナデを行った後、端部外面と稜の下方に１条のヘラ描き波状文を施す。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０９１
２０６	須恵器 甕	③８．８残	頚部片。２０５の頚部を為すと思われる。屈曲する頚部より外反気味に立ち上がる。外面に沈線を廻らし、その上方にヘラ描き波状文を施す。	全面にロクロナデを行う。肩部内面には青海波文タタキメを残す。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１４２
２０７	須恵器 甕	①２６．９ ③６．８残	口縁部片。外傾する口縁部で、端部を若干肥厚させ上端は平坦な面を付ける。端部の肥厚させた部分には、１条のヘラ描き波状文を施す。口縁部外面にはヘラ描き簾文を施したのち、沈線を廻らす。	全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②やや軟 ③灰白色	１１１２
２０８	須恵器 壷	①２７．８ ③３．７残	口縁端部片。外反気味の口縁部より、端部を僅かに屈曲させて斜め上方に伸ばす。端部上端部は平坦な面を付ける。端部外面の下端部に突帯を廻らす。端部外面に１条のヘラ描き波状文を施す。		①砂粒を含む。 ②軟質 ③褐灰色	１０９６
２０９	須恵器 壷	①３１．０ ③３．８残	口縁端部片。やや外反気味の口縁部で、端部を僅かに屈曲させそのまま伸ばす。端部上端部には平坦な面を付ける。端部外面は、ヘラ工具の一端を押し当てる刺突文を施す。口縁部外面にはヘラ描き簾文を施している。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③褐灰色	１１８０

第61表　４号窯、灰原出土遺物（第１０５図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１９１	須恵器 提瓶	①７．８ ③２．９残	口縁部。直立気味に立ち上がり、外面に櫛描波状文を施す。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰緑色	１１４１
１９２	須恵器 提瓶	①９．１ ③２．７残	口縁部。外傾して立ち上がり、外面に櫛描波状文を施す。		①精緻 ②堅緻 ③灰緑色	１１１２
１９３	須恵器 壷	③３．７残	底部。ほぼ平坦な底部より内湾気味に立ち上がる。	底部外面へラケズリ。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③明青灰色	１１４２
１９４	須恵器 壷	③８．３残 ④１５．２	底部・口頚部欠損。やや扁平な球形の体部をなす。肩部はやや直線的に続く。肩部下端に２条の沈線を施す。	全面にロクロナデを行う。体部外面には全面にカキメを施す。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	８５３
１９５	須恵器 壷	③３．６残	体部・口頚部欠損。内湾気味に立ち上がる。	全面にロクロナデを行う。体部・底部外面にカキメを施す。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０８８ １１０５ １１０８
１９６	須恵器 壷	①１７．０ ③４．２残	直口壷。外傾気味に立ち上がる口縁部で、端部にやや面を付ける。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③淡黄色	１１１８
１９７	須恵器 壷	①１７．８ ③３．５残	口縁部。外反気味に立ち上がる口縁部で、端部を外方に肥厚させ玉縁状をなす。		①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１１５２
１９８	須恵器 壷	①２０．０ ③７．０残	体部欠損。張り気味の肩部よりやや外傾する頚部に続き、口縁部は僅かに外反する。口縁端部を肥厚させる。端部上端は面をなす。	全面にロクロナデを行う。肩部内面はタタキメを残す。	①精緻 ②やや軟 ③淡黄色	１０８８
１９９	須恵器 壷	①１７．６ ③４．１残	頚部以下欠損。外反気味に立ち上がる口縁部で、端部外面に凹線と鈍い稜を施す。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	８８６ １０９９ １１１２
２００	須恵器 壷	①１９．５ ③５．７残	体部欠損。外反気味に立ち上がり口縁部へと続く。口縁端部外面を面的に肥厚させる。		①精緻 ②やや軟 ③灰黄褐色	１０９１ １０９２
２０１	須恵器 壷	①１７．７ ③７．２残	体部欠損。形態は２００と同様である。端部下端部分にカキメを施す。		①精緻 ②堅緻 ③緑黒色	１０９０ １１２１
２０２	須恵器 甕	①１９．０ ③６．７残	体部欠損。張り気味の肩部より屈曲し、外反する口縁部へと続く。端部はやや玉縁状に肥厚させる。	肩部上端・口縁部は、全面にロクロナデを行う。肩部外面は平行タタキメ。内面は青海波文タタキメを残す。	①精緻 ②堅緻 ③灰黄色	１０８８

第64表　５号窯、窯体内出土遺物（第１１５図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１ 燃焼部 床面	須恵器 蓋	①１１．５ ③３．６	蓋Ａ。丸みを帯びた天井部よりなだらかに続き、口縁部は僅かに屈曲した後垂下する。口縁部上端部に段を有するもの５も見られる。口縁端部は丸く納めるが、端部内面に僅かな面を付けるもの１～３・５も見られる。	天井部外面は、ヘラ切り離しの後未調整。他は、全面にロクロナデを行う。天井部外面に板目圧痕を残すもの４も認められる。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③暗青灰色	１１４６ １１５６
２ 焼成部 床面	須恵器 蓋	①１２．２ ③４．２			①砂礫を含む。 ②堅緻 ③暗緑灰色	１０６６ １１６１
３ 燃焼部 床面	須恵器 蓋	①１２．１ ③４．１			①砂礫を含む。 ②堅緻 ③青灰色	１０３６ １１５７
４ 燃焼部 床面	須恵器 蓋	①１２．３ ③３．７			①砂礫を含む。 ②堅緻 ③青灰色	１１６３
５ 燃焼部 床面	須恵器 蓋	①１２．２ ③３．３			①細砂を含む。 ②堅緻 ③暗灰色	１０７９
６ 焼成部 床面	須恵器 蓋	①１２．２ ③３．５			①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１１６０
７ 焚口部	須恵器 蓋	①１４．６ ③３．２	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部を為す。口縁部は、内椀気味にハ字状に開くもの７・１０・１１・１２、やや屈曲して垂下するもの８、垂下したのち端部を外方に向けるもの９が見られる。	天井部外面をヘラ切り離しの後未調整のもの７・１１・１２、ヘラケズリを施すもの10、静止ヘラケズリを行うもの８・９が見られる。天井部内面に不整ナデを行うもの９、他は全て、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０１８ １１５３
８ 窯体内	須恵器 蓋	①１３．４ ③３．６			①精緻 ②堅緻 ③暗青灰色	１１５５
９ 窯体床面	須恵器 蓋	①１４．６ ③２．９			①精緻 ②堅緻 ③暗青灰色	１１４６
１０ 燃焼部	須恵器 蓋	①１３．４ ③３．８			①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１１５５
１１ 窯体床面	須恵器 蓋	①１２．２ ③３．８			①精緻 ②堅緻 ③暗青灰色	１１４６
１２ 窯体床面	須恵器 蓋	①１３．８ ③３．１			①細砂を含む。 ②堅緻 ③褐灰色	１１４６
１３ 窯体床面	須恵器 蓋	①１２．８ ③４．１	蓋Ａ。丸い天井部よりなだらかに口縁部へと続く。端部は丸く納める。	天井部外面ヘラ切り離しの後未調整。板目圧痕を残す。内面に当て具痕を残す。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１１５５

第63表　４号窯、灰原出土遺物（第９４・１０６図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
２１０	須恵器 甕	①４２．８ ③１２．８ 残	体部欠損。鋭角に屈曲する頚部より大きく外反する口縁部に続く。口縁端部はやや下垂させ、口縁部外面には、１～２条の沈線を３箇所に廻らしその間隙に櫛描波状文を施す。	全面にロクロナデを行う。肩部内面には青海波文タタキメを残す。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０９８ １０９９
２１１	須恵器 壷	①２９．８ ③３．７残	口縁端部片。やや外反気味の口縁部より、端部を僅かに屈曲させ更に斜め上方に伸ばす。端部上端部には、平坦な面を付け内方に摘み出す。口縁部外面には櫛描波状文を施す。	全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③暗灰色	１１０１
２１２	須恵器 土製品	①５．３ ③１．１残	円形の当て工具と思われる。底部外面は平坦で、窄まりながら上方に伸びる。		①精緻 ②堅緻 ③褐灰色	１０９９
２１３	土師質 土製品	①５．１ ③４．２残	無文当て工具と思われる。ほぼ円形で卵形を呈する。最大径部分のやや上方より窄まり気味に伸びるが、上端部を欠く。上面には、棒状の物を挿入したと考えられる窪みが付けられている。	ナデ調整を施す。	①精緻 ②やや軟 ③黄橙色	８８４
２１４	須恵器 土製品	①８．４ ③０．９	用途不明。甕の胴部を刳り貫いたものと思われる。外面側の縁辺部には、１～４条の沈線を廻らす。	外面は平行タタキメ、内面は青海波文タタキメが見られる。周縁部はナデを施している。	①精良 ②やや軟 ③灰黄褐色	１２７４
２１５	須恵器 土製品	①８．７ ③０．９			①精良 ②やや軟 ③明褐灰色	１０９７
２１６	石製品 石斧	全長：６．４ 全幅：４．３ 厚さ：１．３	本来は、扁平片刃石斧であると思われる。刃部は全体に欠損し、多面は全て磨面をなす。砥石として再利用されたものであろう。重量は６８．９３ｇを測る。		暗灰黄色 材質 細粒砂岩	１１１７

第65表　５号窯、窯体内出土遺物（第１１５図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１４ 燃焼部	須恵器 蓋	①１２．７ ③４．０	蓋Ｂ。やや平坦な天井部より内湾気味に口縁部へと続く。端部を僅かに外方に向け丸く納める。	全面にロクロナデを行う。天井部外面は板目圧痕を残し、内面には圧痕に伴う工具痕が見られる。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③明褐灰色	１１５５
１５ 焚口部	須恵器 蓋	①１１．２ ③４．２残	壷蓋。ほぼ平坦な天井部より内湾し垂下して口縁部へと続く。	天井部外面はヘラ切り離しの後未調整で、板目圧痕を残す。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０３１
１６ 燃焼部 床面	須恵器 蓋	①１０．６ ③３．８	壷蓋。丸い天井部よりなだらかに垂下して口縁部へと続く。口縁端部の下面に平坦な面を付ける。	天井部外面は、静止ヘラケズリを行う。他は全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③青灰色	１１５５
１７ 燃焼部 床面	須恵器 杯	①１１．７ ②１３．８ ③３．４ ⑥０．５	杯Ａ。丸底を呈する底部より、なだらかに立ち上がり受部は屈曲して外方に摘み出す。立上りは内傾する。	底部外面は、ヘラ切り離しの後未調整で、板目圧痕が見られる。底部内面は不整ナデ。他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１１５７
１８ 燃焼部 焼成部 床面	須恵器 杯	①１１．２ ②１３．７ ③３．８ ⑥１．０	杯Ａ。やや丸底の底部より内湾気味に立ち上がり、僅かに外反する受部へと続く。立上りは直立気味に貼り付けられる。	底部外面は、ヘラ切り離しの後未調整。他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１１５５ １１５７
１９	須恵器 杯	①１１．３ ②１３．６ ③３．９ ⑥０．７	杯Ａ。底部は丸底を為す。内湾気味に立ち上がり受部へと続く。端部は丸く納め、内面に内傾する立上りを貼り付ける。	全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０７８ １１６１
２０	須恵器 壷	①－－－－ ③１６．８ 残 ④２１．５	広口壷。口縁部欠損。やや丸底を呈する底部より内湾気味に立ち上がり、体部上端で屈曲しやや肩の張る肩部へと続く。	体部下半の外面は、平行タタキの後カキメを施す。カキメは体部外面の全面に行う。体部内面の下半部は青海波文タタキを施す。他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰黄色	１０１０ １０１４ １０１７ １０３２ １０４０ １０４３ １０５５ １０５７
２１	須恵器 提瓶	①７．０ ③５．３残	口縁部。やや外傾気味の口縁部で端部は丸く納める。	全面にロクロナデを行う。口縁部外面にカキメを施す。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１００８ １０１８ １０３９
２２	須恵器 壷	①１４．４ ③４．９残	体部欠損。外傾気味に開く口縁部で、端部外面を面的に肥厚させ、上端部に面を付ける。	全面にロクロナデを行った後、口縁端部の上端部と外面にヘラケズリを施す。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③褐灰色	１１６０

第66表　５号窯、窯体内出土遺物（第１１６図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
２３ 焚口部	須恵器 壷	①１６．０ ③３１．７ ④２８．０	短頸壷。底部は丸底気味で、倒卵形を為す体部に続く。頸部は屈曲し外反する口縁部に続く。口縁端部は肥厚しやや垂れ気味である。	体部外面は平行タタキを行った後、全面にカキメを施す。内面は青海波文タタキを行った後ロクロナデを施している。口縁部内外面はロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１０２８ １０３１ １０３７ １０５６ １０６６ １０７９ １０８０
２４ 窯体内 灰原	須恵器 壷	①１４．４ ③２５．１ ④２２．４	直口壷。丸底気味の底部よりほぼ球形の体部に続く。頸部は屈曲し僅かに外傾気味の口縁部へと続く。口縁端部の内面に斜行する面を付ける。口縁部外面に１条の沈線を施す。	体部外面は平行タタキを行った後、全面にカキメを施す。内面は、頸部と底部に同心円文タタキ、他は青海波文タタキを行う。口縁部内外面はロクロナデ調整である。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１００８ １０１４ １０１５ １０４１ １０４２ １０４８ １０６３ １０６５
２５	須恵器 横瓶	④長径 ４５．０ 内外 短径 ２７．０ 以上	胴部中央部と口縁部を欠損する。中央部がやや膨らむ長円形の体部を為す。体部の一端は粘土円板で充填する。	外面は平行タタキの後カキメを施す。体部内面は、同心円文・青海波文タタキを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０１０ １０１３ １０１６ １０２１ １０２２ １０８４

第68表　５号窯、灰原出土遺物（第１１７図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
３５	須恵器 蓋	①１４．０ ③３．７	蓋Ａ。天井部欠損。なだらかに開き気味の口縁部へと続く。端部は丸く納める。口縁部上端部にナデによる凹線を施している。	天井部外面はヘラケズリを行い、他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰色	１０５４ １０６７
３６	須恵器 蓋	①１４．２ ③３．３	蓋Ａ。天井部欠損。内湾気味に垂下する口縁部に続く。端部は丸く納める。	全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②やや軟 ③明赤灰色	１０１８ １０１９
３７	須恵器 蓋	①１４．４ ③４．５	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より開き気味の口縁部へなだらかに続く。口縁部外面のやや上方に１条の沈線を施す。端部は丸く納める。	天井部外面はヘラケズリを行い、他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③明青灰色	１０７２
３８	須恵器 蓋	①１２．３ ③３．０残	天井部欠損。やや内湾気味に垂下して口縁部へ続く。天井部下端で僅かに屈曲し、外面に段を付ける。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③褐灰色	１０４３ １０４４
３９	須恵器 蓋	①１２．６ ③４．４	蓋Ｂ。平坦な天井部より内湾気味に口縁部へと続く。端部は丸く納める。	天井部外面は、ヘラ切り離しの後未調整で板目圧痕を残す。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③浅黄色	１０１５ １０７１
４０	須恵器 蓋	①１３．６ ③４．２	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より内湾気味に垂下し、やや開く口縁部へと続く。	天井部外面は、ヘラ切り離しの後未調整。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②やや軟 ③淡黄色	１０７１
４１	須恵器 蓋	①１５．８ ③３．３残	天井部欠損。開き気味の口縁部である。端部は薄く丸く納める。口縁部外面の上方に１条の沈線を施す。	全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③黄灰色	１０１８ １０５５
４２	須恵器 蓋	①１２．９ ③３．９	蓋Ｂ。平坦な天井部よりなだらかに口縁部へと続き、垂下して端部に至る。口縁端部は、先細り気味に丸く納める。	天井部外面はヘラ切り離しの後、未調整。天井部外縁部にヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③浅黄色	１０２１ １０４１ １０４３ １０５８ １０６３ １０６５
４３	須恵器 蓋	①１３．４ ③３．８	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部よりなだらかに口縁部へと続き、端部は屈曲して垂下する。	天井部外面はヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰緑色	１０７１
４４	須恵器 蓋	①１６．２ ③４．１	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より開き気味の口縁部へなだらかに続く。口縁部外面の上端に１条の沈線を施す。	天井部外面はヘラケズリを行い、他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	１０６９

第67表　５号窯、灰原出土遺物（第１１７図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
２６	須恵器 蓋	①１３．２ ③３．４	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部よりなだらかに口縁部へと続く。端部は丸く納める。	天井部外面はヘラケズリを施し、他は全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０３２
２７	須恵器 杯	①１８．３ ②２０．３ ③３．３残 ⑥１．１	杯Ａ。底部欠損。内湾気味に立ち上がり受部へと続き、上端に面を付ける。受部上端より直立気味の立上りを貼り付ける。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０３１
２８	須恵器 壷	①－－－－ ③１０．１ 残 ④１４．２	広口壷。丸底を呈する底部より内湾気味に立ち上がり、屈曲して肩部に続く。肩部は上方にかけてやや外反気味に続き、屈曲する頚部に至る。	底部外面はヘラケズリを施す。体部外面の上半はカキメを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③浅黄色	１０２１ １０３２ １０４０ １０４３ １０４５ １０７０ １０７２
２９	須恵器 提瓶	①８．８ ③６．７残	口縁部。外傾気味に開く口縁部で、端部を僅かに内方に傾ける。端部は先細り気味に丸く納める。外面に２条の沈線を施す。	全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③青灰色	１０３１
３０	須恵器 蓋	①１３．５ ③４．４	蓋Ａ。丸みを帯びた天井部よりなだらかに続きやや屈曲し垂下する口縁部に至る。天井部と口縁部の境目に１条の沈線を施す。	天井部外面はヘラケズリを施し、中央部に板目圧痕を残す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③青灰色	１０６３
３１	須恵器 蓋	①１１．８ ③４．１	蓋Ａ。丸い天井部よりなだらかに口縁部へと続く。口縁部上端部には、ナデによる凹線が見られる。端部は丸く納める。	天井部外面はヘラ切り離しの後ヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③明緑灰色	１０６５
３２	須恵器 蓋	①１３．７ ③４．６	蓋Ａ。やや丸みを帯びた天井部よりなだらかに垂下して口縁部へと続く。	天井部外面はヘラケズリを行い、他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③明青灰色	１０５７ １０６４ １０６５ １０８４
３３	須恵器 蓋	①１３．４ ③３．４	蓋Ａ。丸みを帯びた天井部よりやや開き気味の口縁部へと続く。端部はやや先細り気味に丸く納める。	天井部外面はヘラ切り離しの後、未調整。屈曲部のみヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③浅黄色	１０１７ １０２３ １０５５ １０６９ １０７２
３４	須恵器 蓋	①１４．２ ③４．９	蓋Ａ。やや丸みを帯びた天井部より内湾気味に垂下して口縁部へと続く。端部は丸く納める。	天井部外面はヘラ切り離しの後、未調整。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②やや軟 ③明褐灰色	１０１０ １０６９

第70表　５号窯、灰原出土遺物（第１１８図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
５４ ４号窯 出土遺物	須恵器 蓋	①１６．４ ③３．５	蓋Ｂ。平坦な天井部より内湾気味に垂下して口縁部へと続く。端部は薄手に作られ丸く納める。	天井部外面の中央部はヘラ切り離しの後、未調整。周辺部にヘラケズリを行い、他は全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	８４８
５５	須恵器 蓋	①１５．６ ③３．５残	蓋Ｂ。天井部欠損。ほぼ平坦な天井部よりやや開き気味の口縁部へと続く。端部は丸く納める。	天井部外面はヘラケズリを行い、他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１０２８
５６	須恵器 蓋	①１６．４ ③３．８	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より口縁部へと内湾気味に垂下した後、端部をやや外反させる。口縁部外面の上端部に沈線と稜を付ける。		①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１０１３
５７	須恵器 蓋	①１５．６ ③３．９	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より屈曲し、口縁部上端部で更に屈曲して垂下し口縁端部へと続く。口縁部外面の上端部は段をなす。	天井部外面の中央部はヘラ切り離しの後、未調整。周辺部のみヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂礫を含む。 ②やや軟 ③淡黄橙色	１０６７
５８	須恵器 蓋	①１６．８ ③３．９	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より内湾気味に垂下しやや開き気味の口縁部に至る。口縁端部の内側に面を着ける。口縁部外面に１条の沈線を施す。	天井部外面はヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰黄褐色	１０３１ １０３７ １０５７
５９	須恵器 蓋	①１５．８ ③３．５	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より内湾気味に垂下する口縁部に至る。口縁部上端は薄手に作られ、外見上段をなす。	天井部外面の中央部はヘラ切り離しの後、未調整。周辺部のみヘラケズリを行い、他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③黒色	１０１７ １０３６ １０６９
６０	須恵器 蓋	①１６．２ ③３．９	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より内湾気味に垂下し、やや開き気味の口縁部に至る。口縁部外面のやや上方に１条の沈線を施す。	天井部外面はヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０７１
６１	須恵器 蓋	①１８．４ ③２．８	蓋Ｂ。平坦な天井部より大きく開く口縁部へと続く。端部は丸く納める。口縁部外面に１条の沈線を施す。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０６４
６２	須恵器 蓋	①１６．５ ③３．６	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より、やや屈曲してハ字状に開き外反気味の口縁部へと続く。端部は丸く納める。		①細砂を含む。 ②やや軟 ③淡黄色	不明

第69表　５号窯、灰原出土遺物（第１１７図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
４５	須恵器 蓋	①１３．４ ③３．８	蓋Ｂ。やや中央部が膨らむがほぼ平坦な天井部より屈曲した後、外反気味に垂下する口縁部へと続く。	天井部外面の中央部はヘラ切り離しの後、未調整。外縁部のみヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③淡黄色	１０１８ １０１９ １０２１
４６	須恵器 蓋	①１６．３ ③３．７	蓋Ｂ。平坦な天井部よりやや屈曲して外反気味の口縁部へと続く。口縁部外面と上端部に沈線を施す。	天井部外面はヘラケズリを行い、他は全面にロクロナデを行う。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③褐灰色	１０１８ １０３８
４７	須恵器 蓋	①１４．１ ③４．１	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より僅かに屈曲させやや外反気味の口縁部へと続く。口縁部外面の上端部はナデによる凹帯が見られる。	天井部外面はヘラケズリを行い、板目圧痕を残す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１０１７ １０４３
４８	須恵器 蓋	①１３．８ ③４．１	蓋Ａ。丸みを帯びた天井部より内湾気味に垂下し口縁部へと続く。口縁端部の内面にやや膨らみを持たせる。	天井部外面はヘラ切り離しの後、未調整。天井部外縁のみヘラケズリを行い、他は全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０１３ １０４１ １０４７ １０５７ １０６５
４９	須恵器 蓋	①１２．６ ③４．０	蓋Ａ。丸みを帯びた天井部より内湾気味に垂下し口縁部へと続く。口縁部外面の上端部に段を有する。	天井部外面はヘラケズリを行い、他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０６３ １０７１ １０７２ １０４３
５０	須恵器 蓋	①１２．８ ③３．８	蓋Ｂ。やや丸みを帯びるが平坦な天井部を為す。口縁部は天井部より内湾気味に続き、口縁部上端部で屈曲させ外面に段を付ける。		①精緻 ②堅緻 ③暗赤褐色	１１４４
５１	須恵器 蓋	①１１．４ ③３．５		天井部中央部はヘラ切り離しの後、未調整。周辺部はヘラケズリを行い、他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０１３
５２	須恵器 蓋	①１３．８ ③４．３	蓋Ａ。丸みを帯びた天井部より内湾気味に垂下し、屈曲して更に垂下させて口縁部へと続く。屈曲部外面は段をなす。	天井部外面はヘラケズリを行い、他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０１６ １０１７ １０３８
５３	須恵器 蓋	①１３．４ ③３．９	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より内湾気味に垂下して口縁部へと続く。端部は丸く納める。口縁部外面の上端部はナデによる凹帯が見られる。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０４１

第72表　５号窯、灰原出土遺物（第１１８図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
７３	須恵器 蓋	①１４．２ ③３．４	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より屈曲して口縁部に至る。端部は丸く納める。口縁部外面の上端に段を付ける。	天井部外面はヘラケズリを行い、他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０７２
７４	須恵器 蓋	①１５．０ ③３．９			①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０６９ １０７２
７５	須恵器 蓋	①１３．０ ③３．２	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より屈曲してハ字状に開く口縁部に続き、端部を垂下させる。端部は先細り気味に丸く納める。口縁部外面に段を有する。		①精緻 ②堅緻 ③青灰色	１０１７ １０５７
７６	須恵器 蓋	①１３．９ ③３．９		板目圧痕を有する。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０１７ １０４４ １０７０
７７	須恵器 蓋	①１３．８ ③３．７	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より内湾気味に口縁部へと続く。口縁部外面に段を有する。端部は丸く納める。	天井部外面の中央部に板目圧痕を残し、周辺部のみヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③褐灰色	１０２１
７８	須恵器 蓋	①１３．７ ③３．３	蓋Ｂ。平坦な天井部より内湾気味に口縁部へと続く。端部は先細り気味に丸く納める。	天井部外面はヘラ切り離しの後、未調整。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②やや軟 ③青灰色	１０７１ １０４２
７９	須恵器 蓋	①１５．２ ③４．２	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より屈曲してハ字状に開く口縁部に続く。口縁部外面に段を有する。端部はやや先細り気味に丸く納める。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰緑色	１０６９
８０	須恵器 蓋	①１３．４ ③３．９	蓋Ａ。やや丸みを帯びた天井部より内湾気味に口縁部へと続き、端部を僅かに内方に向け垂下させる。端部内面にやや膨らみを持たせる。	天井部外面の中央部に板目圧痕を残し、周辺部のみヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０６３
８１	須恵器 蓋	①１５．４ ③４．２	蓋Ｂ。壷蓋。平坦な天井部より屈曲して垂下し口縁部に至る。口縁端部は面をなす。	天井部外面はヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０５９
８２	須恵器 蓋	①１５．２ ③３．９			①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０５９

第71表　５号窯、灰原出土遺物（第１１８図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
６３	須恵器 蓋	①１４．８ ③４．２残	蓋Ａ。丸みを帯びた天井部より内湾気味に垂下した後、外反する口縁部に至る。端部は丸く納める。無蓋高杯の杯部か？。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③暗青灰色	１０６３
６４	須恵器 蓋	①１５．６ ③３．３残	天井部欠損。ハ字状に開く口縁部で、端部を僅かに外反させる。端部は先細り気味に丸く納める。	全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③褐灰色	１０６５ １０６９
６５	須恵器 蓋	①１４．８ ③３．６	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部よりハ字状に開く口縁部へと続く。端部は先細り気味に丸く納める。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③黄灰色	１０３６ １０１７
６６	須恵器 蓋	①１２．８ ③３．８残	蓋Ａ。丸みを帯びた天井部よりなだらかに続いた後、屈曲して垂下する口縁部に至る。端部は丸く納める。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③赤灰色	１０７１
６７	須恵器 蓋	①１３．７ ③３．９	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より内湾気味に垂下し口縁部に至る。端部は丸く納める。	天井部外面の中央部はヘラ切り離しの後、未調整。周辺部にヘラケズリを施し、他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０１９ １０３２
６８	須恵器 蓋	①１２．８ ③３．８	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より内湾気味に垂下して口縁部に至る。口縁部外面の上端部に段を有する。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③褐灰色	１０６３ １０６５ １０６９
６９	須恵器 蓋	①１３．４ ③３．３			①細砂を含む。 ②やや軟 ③灰白色	１０３６ １０４４
７０	須恵器 蓋	①１３．２ ③３．６	蓋Ｂ。平坦な天井部より内湾気味にややハ字状に開く口縁部へと続く。	天井部外面はヘラ切り離しの後、未調整。周辺部のみヘラケズリを行い、中央部に板目圧痕を残す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③緑灰色	１０１８ １０２２ １０６７ １０６８
７１	須恵器 蓋	①１４．２ ③３．７	蓋Ｂ。平坦な天井部よりやや屈曲してハ字状に開く口縁部に至る。端部は丸く納める。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②やや軟 ③緑灰色	１０３６ １０３７ １０４４ １０８４
７２	須恵器 蓋	①１３．９ ③３．３	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より内湾気味に垂下し口縁部へと続く。口縁部外面に凹線を付ける。	天井部外面はヘラケズリを施し、板目圧痕を残す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０６４ １０６５ １０７２

第74表　５号窯、灰原出土遺物（第１１９図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
９２	須恵器 蓋	①１０．０ ③３．２残	壷蓋。天井部欠損。内湾気味に垂下する口縁部へと続く。口縁端部はやや膨らみを持ち、面を付ける。	天井部外面は静止ヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０３６
９３	須恵器 蓋	①１７．３ ③３．８残	天井部欠損。ハ字状に開く口縁部である。口縁部外面に１条の沈線を施し、端部は丸く納める。	全面にロクロナデを行う。口縁部内面にヘラ記号を有する。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０６５ １０７０
９４	須恵器 蓋	①１８．２ ③３．６残	天井部欠損。天井部よりやや屈曲してハ字状に開く口縁部に至る。端部は丸く納め、やや外反させる。口縁部外面の上方に１条の沈線を施す。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。口縁部内面にヘラ記号を有する。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０４１ １０４５
９５	須恵器 蓋	①１５．８ ③２．３残	天井部欠損。ハ字状に開く口縁部である。口縁部外面に１条の沈線を施し、端部は丸く納める。	全面にロクロナデを行う。口縁部内面にヘラ記号を有する。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０６９
９６	須恵器 蓋	①１６．５ ③４．４	蓋Ａ。やや丸みを帯びた天井部より内湾気味にハ字状に開く口縁部へと続く。口縁部外面に１条の沈線を施し、端部は丸く納める。	天井部外面はヘラ切り離しの後、未調整。縁辺部のみヘラケズリを施し、他は全面にロクロナデを行う。口縁部内面にヘラ記号を有する。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③浅黄色	１０６４ １０６５ １０７１ １０７２
９７	須恵器 蓋	①１５．２ ③４．１残	天井部欠損。天井部より内湾気味に続き、僅かに屈曲しハ字状に開く口縁端部に至る。屈曲部外面に１条の沈線を施す。	全面にロクロナデを行う。口縁部内面にヘラ記号を有する。	①精緻 ②やや軟 ③灰色	１０１９
９８	須恵器 蓋	①１３．６ ③４．２	蓋Ａ。やや丸みを帯びた天井部より内湾気味に続き、ハ字状に開く口縁部へと至る。端部は丸く納め、僅かに外反気味である。	天井部外面はヘラ切り離しの後、ヘラケズリを行い、中央部に板目圧痕を残す。他は全面にロクロナデを行う。口縁部外面にヘラ記号を有する。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③淡黄灰色	１０４１
９９	須恵器 蓋	①１４．２ ③３．４	蓋Ａ。丸みを帯びた天井部より僅かに屈曲して口縁部へと続く。天井部下端と口縁部外面に沈線を施す。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。天井部外面の縁辺部にヘラ記号を有する。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③暗青灰色	１０４１ １０８４
１００	須恵器 蓋	①１３．３ ③４．０	蓋Ａ。丸い天井部より内湾気味に口縁部へと続き、端部は先細り気味に丸く納める。	天井部外面は、周辺部にヘラケズリを施す。中央部に板目圧痕を残し、他はロクロナデ。	①砂礫を含む。 ②軟質 ③淡浅黄色	１０３６

第73表　５号窯、灰原出土遺物（第１１８・１１９図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
８３	須恵器 蓋	①１５．４ ③４．３	壷蓋。ほぼ平坦な天井部よりハ字状に開く口縁部に続く。口縁端部はやや垂下し、下端部は面をなす。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。天井部内面に工具痕を残す。	①精緻 ②やや軟 ③灰緑色	１０６５ １０６９
８４	須恵器 蓋	①１４．５ ③３．４	壷蓋。天井部欠損。ハ字状に開く口縁部である。口縁端部は面をなす。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１０４３
８５	須恵器 蓋	①１３．２ ③４．４	壷蓋。平坦な天井部より屈曲して垂下する口縁部に至る。口縁端部は面をなす。		①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１０５７
８６	須恵器 蓋	①１０．０ ③４．９	壷蓋。やや丸みを帯びた天井部より内湾気味に垂下する口縁部へと続き、端部は更に内方に向ける。口縁端部は面をなす。		①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０１４ １０１７
８７	須恵器 蓋	①１２．２ ③３．６	壷蓋。丸い天井部より内湾気味の口縁部に至り、口縁端部は外反させる。下端部は面をなす。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０１８
８８	須恵器 蓋	①１３．０ ③３．１	壷蓋。平坦な天井部より屈曲して垂下する口縁部に至る。口縁端部は面をなし、やや外反させる。	天井部外面はヘラ切り離しの後、中央部に板目圧痕を残す。周辺部にヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０３１
８９	須恵器 蓋	①１１．４ ③２．９	壷蓋。ほぼ平坦な天井部より屈曲して垂下する口縁部に至る。口縁端部は面を付けやや外方に摘み出す。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０３１ １０３２ １０６３
９０	須恵器 蓋	①９．９ ③３．５	壷蓋。やや平坦な天井部より屈曲して垂下する口縁部に続く。口縁端部は斜方向に面を付ける。	天井部外面の中央部はヘラ切り離しの後、未調整で周辺部のみヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。天井部内面は不整ナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０４３ １０６４ １０７２
９１	須恵器 蓋	①１０．８ ③３．１	壷蓋。やや平坦な天井部より内湾気味に口縁部へと続き、端部を外反させる。口縁端部にはやや窪みを持つ面を付ける。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０６３

第76表　５号窯、灰原出土遺物（第１２０図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１１１	須恵器 蓋	①－－－－ ③１．３残	蓋Ｂ。口縁部欠損。	天井部外面はヘラケズリを行い、中央部に板目圧痕を残す。天井部内面はロクロナデ調整である。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０６７
１１２	須恵器 蓋	①－－－－ ③１．９残			①砂粒を含む。 ②軟質 ③明緑灰色	１０６９
１１３	須恵器 蓋	①－－－－ ③２．０残			①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０２９
１１４	須恵器 蓋	①－－－－ ③１．１残			①精良 ②軟質 ③淡橙色	１０６９ １０７１
１１５	須恵器 蓋	①－－－－ ③１．２残			①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０３９
１１６	須恵器 蓋	①－－－－ ③０．９残			①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０５０ １０７４ １１４６
１１７	須恵器 蓋	①－－－－ ③１．０残			①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０４０
１１８	須恵器 蓋	①－－－－ ③２．７残	蓋Ａ。やや丸みを帯びた天井部より内湾気味に口縁部へと続く。		①細砂を含む。 ②やや軟 ③淡黄橙色	１０６２ １０６９
１１９	須恵器 蓋	①－－－－ ③０．９残	蓋Ｂ。口縁部欠損。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	１１４３
１２０	須恵器 蓋	①－－－－ ③１．１残			①精緻 ②堅緻 ③淡黄橙色	１０５１
１２１	須恵器 蓋	①－－－－ ③１．４残			①砂粒を含む。 ②やや軟 ③灰白色	１０３７ １０６０
１２２	須恵器 蓋	①－－－－ ③０．７残			①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０６９

第75表　５号窯、灰原出土遺物（第１１９・１２０図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１０１	須恵器 蓋	①１１．８ ③３．８	蓋Ｂ。平坦な天井部よりハ字状に開く口縁部へと続く。口縁部はやや屈曲させて垂下し、端部は丸く納める。	天井部外面はヘラ切り離しの後未調整で、板目圧痕を残す。内面は工具痕が見られる。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０４０ １０５５
１０２	須恵器 蓋	①１４．２ ③３．４	蓋Ｂ。平坦な天井部より屈曲しハ字状に開く口縁部へと続く。口縁部上端部を僅かに屈曲させている。端部は丸く納める。	天井部外面はヘラケズリを施し、中央部に板目圧痕を残す。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②軟質 ③明青灰色	１０３８ １０６３ １０６９
１０３	須恵器 蓋	①１３．９ ③３．８	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部より屈曲して口縁部へと続く。端部は丸く納める。		①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０１８ １０２１ １０２４ １０４３
１０４	須恵器 蓋	①１４．１ ③３．０	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部よりやや屈曲し内湾気味の口縁部に続く。端部は丸く納める。		①精緻 ②堅緻 ③浅黄色	１０４１
１０５	須恵器 蓋	①－－－－ ③２．０残	蓋Ｂ。口縁部欠損。平坦な天井部よりなだらかに口縁部へと続く。	天井部外面ヘラ切り離しの後未調整で、板目圧痕を残す。他は全面にロクロナデを行う。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０７０
１０６	須恵器 蓋	①－－－－ ③１．５残		天井部外面ヘラ切り離しの後未調整で、板目圧痕を残す。他は全面にロクロナデを行う。天井部内面に工具痕が見られる。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③黒色	１０８４
１０７	須恵器 蓋	①－－－－ ③１．５残			①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０３１ １０４２
１０８	須恵器 蓋	①－－－－ ③１．４残			①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０４７
１０９	須恵器 蓋	①－－－－ ③０．６残	天井部のみ遺存。	天井部外面はヘラケズリの後、中央部に板目圧痕を残す。内面はロクロナデの後、中央部に当具痕が見られる。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０１２
１１０	須恵器 蓋	①－－－－ ③１．５残	蓋Ｂ。ほぼ平坦な天井部よりハ字状に開く口縁部へと続くと思われる。	天井部外面はヘラ切り離しの後、板目圧痕を施す。他は、全面にロクロナデを行う。内面の中央部にタタキ工具痕が見られる。	①精緻 ②堅緻 ③淡黄橙色	１０４２

第78表　５号窯、灰原出土遺物（第１２１図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１３０	須恵器 杯	①１５．４ ②１７．２ ③４．０ ⑥１．２	杯Ａ。平坦な底部より内湾気味に立ち上がり直立し先細り気味の立上りに続く。受部は立上りの基部より摘み出して作る。	底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。体部外面に２条の沈線を施す。	①精緻 ②堅緻 ③青灰色	１０１５ １０４９ １０７１ １０７２
１３１	須恵器 杯	①１４．８ ②１６．９ ③２．２ ⑥０．９	杯Ａ。底部欠損。内湾気味の体部より斜め上方に伸びる受部へと続く。受部の内方に直立気味の立上りを貼り付ける。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０２６
１３２	須恵器 杯	①１４．２ ②１６．２ ③３．６ ⑥１．１	杯Ａ。底部欠損。外傾する体部より受部へと続く。受部の上端面にやや直立気味の立上りを貼り付ける。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０７２
１３３	須恵器 杯	①１４．６ ②１７．０ ③３．７残 ⑥１．０	杯Ａ。底部欠損。逆ハ字状の体部よりくの字に屈曲して外方に伸びる受部へと続く。受部の内方に内傾する立上りを貼り付ける。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③青灰色	１０２０
１３４	須恵器 杯	①１３．７ ②１６．０ ③３．９残 ⑥１．０	杯Ａ。底部欠損。内湾気味の体部より屈曲して内傾気味の立上りに続く。屈曲部外面に受部を貼り付ける。		①精緻 ②堅緻 ③青灰色	１０２０
１３５	須恵器 杯	①１４．６ ②１７．０ ③３．７残 ⑥０．９	杯Ａ。底部欠損。内湾気味の体部より受部へと続き、屈曲し折り返して直立気味の立上りに至る。		①細砂を含む。 ②やや軟 ③青灰色	１０５５
１３６	須恵器 杯	①１２．８ ②１５．０ ③３．１残 ⑥０．５	杯Ａ。底部欠損。ほぼ平坦な底部より逆ハ字状の体部に続き、斜め上方に伸びる受部に至る。受部内面に内傾する立上りを貼付ける。	底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０７４
１３７	須恵器 杯	①１３．２ ②１５．２ ③３．１ ⑥０．７	杯Ａ。平坦な底部より内湾気味に立ち上がり外方に突き出る受部へと続く。受部より屈曲し折り返して直立気味の立上りに至る。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０４４ １０６８
１３８	須恵器 杯	①１３．１ ②１５．１ ③３．５残 ⑥０．７	杯Ａ。底部欠損。内湾気味の体部より受部へと続く。受部の上端面に直立し先細り気味の立上りを貼り付ける。	全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②やや軟 ③灰白色	１０１９

第77表　５号窯、灰原出土遺物（第１２１図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１２３	須恵器 蓋	①７．２ ②１０．６ ③４．８ ⑥０．５	壷蓋。丸い天井部よりなだらかに下り、やや水平気味に張り出す端部へと続く。端部の内面に先細り気味のかえりを付ける。天井部外面の中央部に棒状のつまみを付す。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③黄灰色	１０２４ １０３２ １０６４ １０６５
１２４	須恵器 蓋	①９．５ ②１１．０ ③１．３ ⑥０．２	壷蓋。全体に歪で湾曲しているが、平坦な天井部をなす。受部は水平に伸びる。端部の内方に形骸化したかえりを付ける。天井部外面の中央部に中央を窪ませた扁平なつまみを付す。	天井部外面の内側はヘラケズリを施す。他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③淡黄色	１０１８ １０３５ １０４０ １０６３
１２５	須恵器 蓋	③１．５残 つまみ径 ２．６	蓋Ｃ。つまみ部のみ。中央に窪みを持つ扁平なつまみである。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０６２
１２６	須恵器 蓋	①１５．６ ③４．５	蓋Ｃ。平坦な天井部よりハ字状に開く口縁部へと続く。端部は丸く納める。口縁部外面の上端に１条の沈線を施す。天井部外面の中央部に、中央に窪みを持たせた扁平なつまみを付す。	天井部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０４３ １０７１
１２７	須恵器 蓋	①１４．８ ③４．７残	蓋Ｃ。つまみ部欠損。やや平坦な天井部より内湾気味に口縁部へと続き、屈曲して垂下し端部に至る。口縁端部はやや外反させ丸く納める。天井部外面の中央部につまみを付す。	天井部外面はカキメを施す。他は、全面にロクロナデを行う。天井部内面にシダの葉脈を残す。	①精緻 ②堅緻 ③淡黄色	１０１４ １０８４
１２８	須恵器 蓋	①１３．０ ③４．４残	蓋Ｃ。つまみ部欠損。やや平坦な天井部より内湾気味にハ字状に開く口縁部へと続く。口縁部外面に１条の沈線を施す。天井部外面の中央部につまみを付したと思われる。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０７１
１２９	須恵器 杯	①１５．６ ②１７．８ ③３．６残 ⑥０．９	杯Ａ。底部欠損。底部より内湾気味に立ち上がり受部へと続く。受部は斜め上方に伸び、端部内面に立上りを貼り付ける。立上りは内傾した後直立し、先細り気味に丸く納める。	底部外面はヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③褐灰色	１０６８

第80表　５号窯、灰原出土遺物（第１２１・１２２図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１４８	須恵器 杯	①１１．４ ②１３．５ ③３．６残 ⑥０．７	杯Ａ。底部欠損。丸底気味の底部より内湾して立ち上り受部へと続く。受部内方にやや直立気味の立上りを貼り付ける。	底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０１９ １０３７ １０４３ １０６５ １０６８ １０７４
１４９	須恵器 杯	①１１．２ ②１３．４ ③３．９ ⑥０．６	杯Ａ。丸底の底部をなす。椀形の体部よりやや外反気味の受部へと続く。受部内面にやや直立気味の立上りを貼り付ける。		①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１０１８ １０６５ １０７５
１５０	須恵器 杯	①１２．２ ②１４．４ ③２．９残 ⑥０．４	杯Ａ。底部欠損。丸底気味の底部より内湾して立ち上り受部へと続く。受部内方にやや内傾気味の立上りを貼り付ける。体部内面に１条の沈線を施す。		①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０６７
１５１	須恵器 杯	①１０．７ ②１３．１ ③２．９残 ⑥０．６	杯Ａ。底部欠損。内湾する体部より斜め上方に伸びる受部に続き、屈曲して折り返し内傾する立上りに至る。		①精緻 ②堅緻 ③黒色	１０２９ １０４１
１５２	須恵器 杯	①１１．１ ②１３．０ ③３．４ ⑥０．５	杯Ａ。平坦な底部より内湾気味に立ち上り受部へと続く。立上りは受部より屈曲した後、折り返して内傾気味に作られる。		①砂粒を含む。 ②堅緻 ③黄灰色	１０１１ １０１８ １０４１ １０４７
１５３	須恵器 杯	①１０．５ ②１２．４ ③３．４ ⑥０．７	杯Ａ。やや丸底気味の底部より内湾して立ち上りややや外反する受部へと続く。立上りは、受部より屈曲して折り返し直立気味に作られる。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③黒色	１０１５
１５４	須恵器 杯	①１１．５ ②１４．０ ③３．３残 ⑥０．６	杯Ａ。底部欠損。やや丸底気味の底部より内湾して立ち上りやや外反する受部へと続く。立上りは、受部より屈曲して折り返し直立気味に作られる。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０４１
１５５	須恵器 杯	①１０．５ ②１２．７ ③４．１ ⑥０．７	杯Ａ。平坦な底部より内湾気味に立ち上り、やや屈曲して内傾する立上りに至る。屈曲部の外面を摘み出して受部を作る。	底部外面はヘラ切り離しの後、未調整。他は全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③浅黄色	１０４３

第79表　５号窯、灰原出土遺物（第１２１図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１３９	須恵器 杯	①１２．４ ②１４．６ ③?．８残 ⑥０．７	杯Ａ。底部欠損。外傾する体部より受部へと続く。受部の内側にやや内傾気味の立上りを貼り付ける。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０３９ １０６０
１４０	須恵器 杯	①１３．２ ②１５．２ ③２．７残 ⑥０．６	杯Ａ。底部欠損。やや内湾気味の体部より受部へと続く。受部の内側に内傾した後、直立する立上りを貼り付ける。		①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０４５
１４１	須恵器 杯	①１２．６ ②１４．６ ③３．２ ⑥０．６	杯Ａ。平坦な底部より内湾気味に立ち上り斜め上方に伸びる受部へと続く。受部の内側に直立気味の立上りを貼り付ける。	底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１０６３
１４２	須恵器 杯	①１２．０ ②１４．０ ③３．３ ⑥０．６	杯Ａ。ほぼ平坦な底部より内湾気味に立ち上り斜め上方に伸びる受部へと続く。受部の内側に直立気味の立上りを貼り付ける。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０４７
１４３	須恵器 杯	①１１．８ ②１３．６ ③３．１残 ⑥０．６	杯Ａ。底部欠損。内湾気味の体部より斜め上方に伸びる受部へと続く。受部の上端面に直立する立上りを貼り付ける。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③黄灰色	１０１３ １０３７ １０４９
１４４	須恵器 杯	①１２．２ ②１４．３ ③３．１ ⑥０．６	杯Ａ。平坦な底部より内湾気味に立ち上り斜め上方に伸びる受部へと続く。受部の内側に直立する立上りを貼り付ける。	底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③青灰色	１０６２
１４５	須恵器 杯	①１２．２ ②１４．４ ③３．１残 ⑥０．６	杯Ａ。底部欠損。外傾する体部より外反気味の受部へと続く。受部の内面に、内傾した後直立する立上りを貼り付ける。		①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０６０
１４６	須恵器 杯	①１２．０ ②１４．０ ③３．１残 ⑥０．６			①精緻 ②堅緻 ③褐灰色	１０４６
１４７	須恵器 杯	①１２．６ ②１４．６ ③３．４残 ⑥０．８	杯Ａ。底部欠損。外傾する体部より外反気味の受部へと続く。受部上端面にやや直立し、先細り気味の立上りを貼り付ける。	全面にロクロナデを行う。外面は自然釉がかかる。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０１８

第82表　５号窯、灰原出土遺物（第１２２図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１６４	須恵器 杯	①８．０ ②１０．８ ③２．５残 ⑥０．９	杯Ａ。底部欠損。外傾気味の体部より斜め上方に伸びる受部へと続く。受部内面に内傾する立上りを貼り付け、端部を丸く納める。	全面にロクロナデを行う。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰黄褐色	１０４４
１６５	須恵器 杯	①１２．２ ②１３．８ ③３．８ ⑥１．１	杯Ａ。平坦な底部より外傾して立ち上り、やや垂れ気味の受部へと続く。立上りは受部の上端部に貼り付けて厚手に作られる。	底部外面はヘラ切り離しの後未調整で、板目圧痕を残す。他は全面にロクロナデを行う。	①砂礫を含む。 ②やや軟 ③淡黄橙色	１０２１ １０４９ １０６１
１６６	須恵器 杯	①１３．０ ②１４．８ ③３．４ ⑥０．７	杯Ａ。ほぼ平坦な底部より内湾気味に立ち上り斜め上方に伸びる受部へと続く。受部の内面に直立気味の立上りを貼り付ける。立上りは厚みがあり、先細り気味に納める。	底部外面はヘラ切り離しの後未調整で、板目圧痕を残し周辺部のみヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０４３ １０７１
１６７	須恵器 杯	①１２．０ ②１４．２ ③３．３ ⑥０．７			①精緻 ②堅緻 ③暗青灰色	１００８ １０５７ １０６４ １０６５
１６８	須恵器 高杯	①１６．０ ③１３．０ ⑤１４．３	無蓋高杯。杯部はほぼ平坦な底部より外傾気味の口縁部へと続く。口縁部外面に１条の沈線を施す。口縁端部は丸く納める。脚部はハ字状に開き、端部を僅かに上下に摘み出す。	杯部底部外面はヘラケズリを行う。杯部・脚部内外面は、全面にロクロナデを行う。脚部外面はナデ調整の後、カキメを施す。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０６８ １０６９ １０７０
１６９	須恵器 高杯	①１６．０ ③４．８残 ⑤－－－－	無蓋高杯の杯部。平坦な底部よりやや内湾気味に立ち上り口縁部へと続く。口縁端部は丸く納める。口縁部外面に１条の浅い沈線を施す。脚部を欠く。	杯底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②やや軟 ③黄灰色	１０４７ １０８４
１７０	須恵器 高杯	①１４．６ ③７．２残 ⑤－－－－	無蓋高杯。脚部欠損。やや丸底の底部より内湾気味に立ち上る口縁部に続き、端部は丸く納める。口縁部外面に浅い沈線を施す。脚部の基部は垂下する。		①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０５１ １０１７ １０３８

第81表　５号窯、灰原出土遺物（第１２２図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１５６	須恵器 杯	①１１．８ ②１４．５ ③２．６ ⑥０．５	杯Ａ。ほぼ平坦な底部より直立気味に立ち上ったのち外反する受部へと続く。受部の内面に内傾する立上りを貼り付ける。	底部外面はヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０５９
１５７	須恵器 杯	①１２．６ ②１４．５ ③２．９ ⑥０．４	杯Ａ。平坦な底部よりやや内湾気味に立ち上り、僅かに外反する受部へと続く。受部の上端部は平坦面をなし、立上りを貼り付ける。立上りは直立気味で先細る。		①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０１５ １０２０ １０４５ １０４９ １０６４
１５８	須恵器 杯	①１２．４ ②１４．４ ③２．２残 ⑥０．７	杯Ａ。外傾する体部よりやや屈曲して直立気味の立上りに続く。屈曲部外面に水平に伸びる受部を貼り付ける。	全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰褐色	１０４３
１５９	須恵器 杯	①１１．２ ②１３．６ ③３．３ ⑥０．６	杯Ａ。ほぼ平坦な底部より内湾気味に立ち上り屈曲して外反する受部へと続く。立上りは受部より屈曲して折り返して作られ、先細り気味に直立する。		①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１０６３
１６０	須恵器 杯	①１１．２ ②１３．２ ③２．７ ⑥０．６	杯Ａ。底部欠損。外傾する体部より外反気味の受部へと続き、折り返して直立する立上りを作る。	底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０７４
１６１	須恵器 杯	①１０．６ ②１３．０ ③２．８残 ⑥０．６	杯Ａ。底部欠損。内湾気味の体部より外反して斜め上方に伸びる受部に続き、折り返した後やや内傾して直立する立上りに至る。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰緑色	１０６０ １０７２
１６２	須恵器 杯	①１１．２ ②１３．４ ③２．９ ⑥０．９	杯Ａ。底部欠損。外傾気味の体部より受部へと続く。立上りは、受部より折り返して作られやや先細り気味に直立する。	底部外面はヘラケズリを行い、他は全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②やや軟 ③浅黄色	１０６７
１６３	須恵器 杯	①１０．２ ②１２．０ ③２．５残 ⑥１．０	杯Ａ。底部欠損。外傾する体部より水平に伸びる受部へと続く。受部の上端部に内傾した後直立する立上りを貼り付ける。	全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③黒褐色	１０７０

第84表　５号窯、灰原出土遺物（第１２３図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１７７	須恵器 高杯	①１３．０ ②１５．１ ③１５．３ ⑤１３．６ ⑥０．６	有蓋高杯。杯部は、丸底を呈する底部より斜め上方に伸びる受部へと続く。受部内面に内傾する立上りを貼り付ける。脚部は垂下する脚柱部よりハ字状に開く脚端部に至る。端部は面を付ける。脚柱部の中程に２条の沈線を施す。二段三方向の長方形透しを有する。	杯部・脚部ともに全面にロクロナデを行う。脚柱部外面の上半にカキメを施す。	①精緻 ②堅緻 ③明褐灰色	１０１０ １０１６ １０１９ １０４０ １０４６ １０６７ １０７４ １０７６
１７８	須恵器 高杯	①１２．７ ②１４．９ ③１５．５ ⑤１５．０ ⑥０．８	有蓋高杯。杯底部は平坦でやや外傾気味の体部より水平に伸びる受部に至る。受部の上端部にやや内傾する立上りを貼り付ける。脚部は、垂下する脚柱部より大きく外反する端部に続く。端部は上下に摘み面を付ける。脚部の中程に２条の沈線を施し二段三方向の長方形透しを有する。上段の透しは貫通しない。	杯底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。脚柱部外面の上半は強いカキメを施し、下半は軽く行う。	①精緻 ②堅緻 ③暗赤灰色	１０２８ １０３０ １０３９ １０４２ １０６０ １０６８
１７９	須恵器 高杯	①１３．３ ②１５．６ ③１４．３ ⑤１４．４ ⑥０．７	有蓋高杯。全体に歪である。杯部は、平坦な底部より斜め上方に伸びる受部へと続く。受部内面にやや内傾する立上りを貼り付ける。脚部は大きくハ字状に開く。端部は上下に摘み凹を持つ面となる。脚柱部外面の中程と下半に１～２条の沈線を施す。二段三方向の長方形透しを有する。	全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０１２ １０１７ １０２８ １０３６ １０４７ １０５１ １０６５ １０６８ １０６９ １０７０ １０７２ １１４４
１８０	須恵器 高杯	①１２．６ ②１４．６ ③１２．３ 残 ⑤－－－－ ⑥０．６	有蓋高杯。杯部は、平坦な底部より外傾し受部へと続く。受部内面に直立気味の立上りを貼り付ける。脚部はハ字状に開き、脚端部を欠く。脚柱部外面の中程に２条の浅い沈線を施す。二段三方向の長方形透しを有する。	杯底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。脚柱部外面はカキメを施す。	①精緻 ②やや軟 ③緑灰色	１０１８ １０２１ １０４４ １０６４ １０６５ １０６８
１８１	須恵器 高杯	③７．５残 ⑤１１．４	脚部。細い脚基部よりハ字状に開いた後大きく外反する脚端部に続く。端部は斜方向の面を持つ。脚部下段に二方向台形透しを持つ。	全面にロクロナデを行う。脚柱部外面の中程に２条の沈線を施す。	①精緻 ②堅緻 ③黒褐色	１０３６ １０４２ １０４３

第83表　５号窯、灰原出土遺物（第１２２・１２３図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１７１	須恵器 高杯	①１１．４ ②１３．８ ③１１．２ ⑤１１．８ ⑥０．６	有蓋高杯。杯部は、丸みを帯びた底部より外傾気味に立ち上り外反する受部へと続く。受部内方にやや直立気味で端部を先細らせる立上りを貼り付ける。脚部はハ字状に開き、端部は僅かに垂下する。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１０１９ １０３９ １０４０ １０６８
１７２	須恵器 高杯	①１２．１ ②１４．０ ③２．９残 ⑤－－－－ ⑥０．７	有蓋高杯。脚部欠損。ほぼ平坦な底部より屈曲し外傾する体部に続き、外反する受部へ至る。受部の上端面に外反気味に直立する立上りを貼り付ける。脚部は三方向の透しを有する。	杯底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。底部内面に不整ナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③青灰色	１０４７
１７３	須恵器 高杯	③１４．０ 残 ⑤１６．２	脚部。杯部欠損。ハ字状に開く長めの脚部である。脚端部刃やや水平方向に伸びる。端部は僅かに上下に摘み出し面を付ける。脚柱部に１条の浅い沈線を施す。杯底部は丸底を呈する。	杯底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。脚部外面はナデ調整の後、カキメを行う。	①精緻 ②堅緻 ③暗青灰色	１０１５ １０１７ １０１９ １０３１ １０３２ １０３６ １０３８ １０４３ １０５０
１７４	須恵器 高杯	③７．６残 ⑤１２．５	脚部。杯部欠損。ハ字状に大きく開く脚部である。脚端部は上下に摘み出し面を付ける。杯底部はやや丸底気味である。	杯底部外面はヘラケズリを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０４４ １０４７ １０６３
１７５	須恵器 高杯	①１１．１ ②１３．５ ③１４．３ ⑤１２．８ ⑥０．７	有蓋高杯。杯部は平坦な底部より斜め上方に伸びる受部へと続く。立上りは受部の内面にやや内傾して貼り付ける。脚部は、中程でやや窄まりハ字状に開く脚端部へと続く。端部の外面に面を付ける。脚柱部には二段三方向の長方形透しを有し、上段の透しは貫通していない。	全面にロクロナデを行う。脚柱部外面の中程に２条の沈線を施した後、全体にカキメを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０２８ １０４１ １０６７ １０６８ １０７６ １０８４
１７６	須恵器 高杯	① ② ③ ⑤ ⑥	有蓋高杯。杯部は底部より内湾気味に立ち上り受部に至る。受部内面に内傾する立上りを貼り付ける。脚部は垂下した後ハ字状に開く脚端部に続く。端部は垂れ気味で面を持つ。	底部外面はヘラケズリを行う。他は、全面にロクロナデを行う。脚部外面はカキメを施したのち、二段三方向の長方形透しを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０４２ １０４３ １０４４ １０４７ １０５２ １０６４ １０６８ １０８４

第86表　５号窯、灰原出土遺物（第１２４図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１８９	須恵器 鉢	①１４．０ ②１７．２ ③１１．８ 残 ⑥０．４	有蓋鉢と思われる。底部欠損。底部より内湾気味に立ち上り口縁部へと続く。体部はやや膨らむ。口縁端部はやや外反気味に摘み出して丸く納める。端部の内側に寝かせ気味の立上りを貼り付ける。体部外面には、５条の沈線をほぼ等間隔に廻らし、波状文と刺突文を沈線の間隙に施す。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③赤灰色	１００４ １００５ １００８ １０６０ １０７５
１９０	須恵器 長頸壷	①８．２ ③１８．８ ④１４．８	ほぼ平坦な底部より内湾気味に立ち上り、屈曲した後やや肩の張る肩部へと続く。頸部で更に屈曲し、外傾気味の口縁部へと続く。端部は丸く納める。口縁部外面に２条の沈線を施す。肩部下端に１条の沈線を施し、その上下に刺突文を廻らす。	体部下半はヘラケズリを施し、上半はカキメを行う。口縁部外面はカキメを施す。肩部・頸部・口縁端部外面および内面は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰色	０９９９ １００１ １００８ １０１０ １０４９ １０５１ １１５５
１９１	須恵器 長頸壷	①５．８ ③８．５残	体部欠損。屈曲する頸部より外傾して立ち上る口縁部に至る。口縁端部は先細り気味に丸く納める。口縁部外面に２条の沈線を施す。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③明青灰色	１０２０ １０７１
１９２	須恵器 短頸壷	①７．２ ③１０．４ ④１５．３	やや丸みを帯びた底部より内湾して立ち上る体部をなし、屈曲して上反り気味に内傾する肩部に続く。口縁部は肩部上端より僅かに屈曲させて直立する。端部は丸く納める。	底部外面はヘラケズリを施す。体部外面の最大径部分より下半はカキメを行う。他は全面にロクロナデを行う。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③浅黄色	１０３２ １０５５ １０６２ １０６３ １０６８
１９３	須恵器 短頸壷	①７．２ ③１０．０ 残 ④１３．９	底部欠損。		①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０３２ １０４１ １０４３ １０５８ １０６８
１９４	須恵器 短頸壷	①－－－－ ③８．０残 ④１５．２	口頸部欠損。やや丸みを帯びた底部より内湾して立ち上る体部をなし、屈曲して上反り気味に内傾する肩部に続く。肩部下端に浅い沈線を廻らす。		①砂粒を含む。 ②堅緻 ③明赤灰色	１０２０ １０６２ １０６５ １０７０ １０８４

第85表　５号窯、灰原出土遺物（第１２３・１２４図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１８２	須恵器 蓋	①１９．６ ③７．５	大形有蓋高杯の蓋。丸い天井部よりなだらかに下り、垂下する口縁部へと続く。口縁端部内面に窪みを付ける。口縁部上端部に浅い２条の沈線を廻らし、鈍い稜を付ける。	天井部外面は平行タタキを施した後、口縁部外面と同様カキメを廻らす。天井部内面のみ同心円文タタキを施した後、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０３２ １０５３ １０６８ １０７３ １０７５
１８３	須恵器 蓋	①２２．４ ③５．３残	大形有蓋高杯の蓋。丸い天井部よりなだらかに下り、内湾気味に垂下する口縁部に至る。端部は外方に摘み出し内側に面を付ける。口縁部上端部に浅い２条の沈線を廻らし、鈍い稜を付ける。		①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１０１９
１８４	須恵器 蓋	①２０．５ ③８．０	大形有蓋高杯の蓋。丸い天井部よりなだらかに下り、内湾気味に垂下する口縁部に至る。端部の内側にやや窪ませた面を付ける。口縁部上端部に浅い２条の沈線を廻らし、鈍い稜を付ける。		①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１０１８ １０２０ １０６８
１８５	須恵器 高杯	①１８．２ ②２１．４ ③１０．６ ⑤１５．１ ⑥０．８	大形有蓋高杯。丸底の杯底部より内湾気味に受部へと続く。受部の端部より屈曲、折り返して内傾した後直立気味の立上りに至る。脚部はハ字状に開き端部を上下に肥厚させて面を付ける。	杯体部外面は、平行タタキを行った後カキメを施す。底部内面は、同心円文タタキを施した後ナデ調整を行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１０１９ １０２１ １０６３ １０６５ １０７１ １０７５
１８６	須恵器 高杯	①２０．３ ②２２．６ ③７．７残 ⑤－－－－ ⑥０．９	大形有蓋高杯。脚部欠損。丸底の杯底部より内湾気味に受部へと続く。受部の端部より屈曲、折り返して内傾した後直立気味の立上りに至る。		①砂粒を含む。 ②やや軟 ③淡黄橙色	１０１８ １０６３ １０６５ １０７２ １０７４
１８７	須恵器 椀	①１３．２ ③７．２残	底部欠損。底部より内湾気味に立ち上り直立する口縁部へと続き、端部を僅かに内傾させる。口縁部外面に２条の浅い沈線を施す。把手付椀と思われる。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②やや軟 ③灰白色	１０６８
１８８	須恵器 鉢	①１６．２ ③６．４残	底部欠損。底部より内湾して立ち上り口縁端部を外反させる。端部は丸く納める。	底部外面は静止ヘラケズリを施す。他は全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③暗青灰色	１１４６

第88表　５号窯、灰原出土遺物（第１２５図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
２０３	須恵器 短頸壷	①１５．５ ③１５．１ 残 ④２８．０	底部欠損。内湾気味に立ち上る体部より丸い最大径部分を経て内傾し、やや肩の張る肩部へと続く。肩部上端より直立する口縁部に至る。口縁端部は平坦面をなす。	体部外面の下半は平行タタキを行った後、肩部中程までカキメを施す。体部内面は青海波文タタキを行いロクロナデによりナデ消す。口縁部外面にもカキメを施し、他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②甘い ③灰白色	１０２０ １０３８ １０４３ １０６５
２０４	須恵器 短頸壷	①－－－－ ③９．０残 ④２３．４	体部下半・口縁部を欠く。胴部最大径部分は丸い。丸く膨らみを持った肩部である。	外面は平行タタキの後カキメを施す。内面は同心円文タタキの後ロクロナデを施す。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③黄灰色	１０３６ １０４１ １０４３ １０４７
２０５	須恵器 短頸壷	①１０．２ ③１０．５ 残 ④２１．０	体部下半欠損。丸い胴部より肩の張る肩部へと続き、直立する口縁部に至る。口縁端部は丸く納める。	肩部下端部の外面は平行タタキを行い、体部下半にかけてカキメを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０１９ １０２０ １０６９ １０７２
２０６	須恵器 長頸壷	①－－－－ ③１２．７ 残 ④１６．４	口頸部欠損。やや平底の底部より内湾気味に立ち上り丸く屈曲させて僅かに膨らみを持つ肩部へと続く。肩部下端に１条の沈線を廻らし、その上下に刺突文を施す。	底部外面と体部下端部はヘラケズリを施す。体部上半の外面はカキメを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③暗青灰色	１０３２ １０３６ １０４２ １１５７
２０７	須恵器 壷	①１８．０ ③１２．１ 残 ④３２．４	体部下半欠損。やや丸みを持ち肩の張る肩部より、屈曲して外反する頸部を経て口縁部に至る。口縁部はやや玉縁状を呈し、端部を上方に摘み上げる。	肩部外面は平行タタキを行った後、カキメを施す。内面は青海波文タタキをナデ消す。他は、全面にロクロナデを行う。	①細砂を含む。 ②堅緻 ③灰色	１０４３ １０４４ １０７９
２０８	須恵器 甕	①４１．７ ③７．３残	頸部以下を欠く。外傾する口縁部で、口縁端部を僅かに内方に向ける。端部の上端は面をなす。口縁端部外面の上方に１条の突帯と２条の沈線を施す。下方においても２条の沈線を廻らす。	口縁部外面の沈線の間隙に、櫛描波状文を施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③暗青灰色	１０４４
２０９	須恵器 壷	①１４．４ ③１８．５ ④１７．７ ⑤９．０	台付長頸壷。平底の底部よりやや内湾気味に立ち上り、屈曲して内傾する肩部へと続く。肩部上端より更に屈曲し外反する口縁部に至る。口縁端部は僅かに上方に摘み上げる。底部外面の屈曲部の内側に、断面長方形の高台を貼り付ける。	体部外面の上端部に１条の沈線を施す。体部上半から口縁部にかけて自然釉がかかる。内外面ともロクロナデ調整を施す。	①精緻 ②堅緻 ③赤灰色	１００８ １０１２ １０１３ １０３７ １０４２ １０４７ １０４９ １０７５ １０７６

第87表　５号窯、灰原出土遺物（第１２４図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
１９５	須恵器 短頸壷	①７．８ ③１５．０ 残 ④２０．４	底部欠損。外傾気味の体部より緩やかに屈曲しやや肩の張る肩部へと続く。肩部上端より屈曲し、直立する口縁部に至る。口縁端部は丸く納める。	体部外面の下半は、平行タタキを行った後カキメを施す。体部内面は、青海波文タタキを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂粒を含む。 ②甘い ③淡黄色	１０１６ １０４３ １０５７ １０７１
１９６	須恵器 短頸壷	①１０．２ ③１６．４ ④２３．９	やや丸みを帯びた底部よりなだらかに立ち上り、内傾気味の体部中央部へと続き更に内傾して肩部に至る。肩部上端部より僅かに屈曲させて口縁部に続く。端部は丸く納める。		①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０２１ １０３９ １０４０ １０４４ １０６２ １０７０
１９７	須恵器 壷	①－－－－ ③１１．６ 残 ④１２．２	口縁部欠損。やや平底の底部より内湾気味に立ち上り、僅かに膨らみを持って内傾する肩部へと続く。口縁部は肩部上端より屈曲して直立する。	体部下半。底部外面はヘラケズリを施す。肩部下半にはカキメを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰色	１０３２ １０４１ １０５３ １０６４ １０７４ １０８４
１９８	須恵器 壷	①－－－－ ③９．１ ④１２．１	口縁部欠損。やや平底の底部より内湾気味に立ち上り、僅かに膨らみを持って内傾する肩部へと続く。	底部外面はヘラケズリを施す。体部上端部・肩部下端部にカキメを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③褐灰色	１０３２ １０３９ １０６４ １０６５
１９９	須恵器 壷	①－－－－ ③７．０残 ④１３．１	底部・口縁部欠損。やや外傾気味の体部より屈曲して肩の張る肩部に続く。屈曲部外面に２条の沈線を施す。	体部外面はカキメを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③暗赤灰色	１０６４ １０６５
２００	須恵器 長頸壷	①７．８ ③６．２残	体部欠損。屈曲する頸部より外傾する口縁部に続き、端部を僅かに上方に起こす。端部は丸く納める。	全面にロクロナデを行う。口縁部外面にカキメを行う。	①精緻 ②堅緻 ③赤灰色	１０２１
２０１	須恵器 壷	①６．０ ③３．７残	体部欠損。外反気味の口縁部である。提瓶もしくは平瓶の口頸部とも考えられる。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③明青灰色	１００７
２０２	須恵器 瓿	①１１．７ ③２．９残	体部・頸部欠損。外反する頸部より屈曲した後外傾する口縁部に続く。口縁端部は丸く納める。屈曲部外面の稜はシャープである。		①細砂を含む。 ②やや軟 ③淡黄色	１０４４

第90表　５号窯、灰原出土遺物（第１２６～１２８図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
２１７	須恵器 提瓶	①６．８ ③４．６残	体部欠損。僅かに外反し、端部を上方に向ける口縁部である。端部は先細り気味に丸く納める。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０７０
２２０	須恵器 壷	①１５．０ ③７．４残	体部欠損。張り気味の肩部より屈曲し外反して口縁部へと続く。口縁端部外面は面的に肥厚させる。端部上端部は面をなす。		①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０７５
２２１	須恵器 横瓶	①１４．６ ③４．９残	口頸部。胴部の上面に穿孔した後、口頸部を接合する。外反する口縁部で、端部を玉縁状に肥厚させる。口縁部外面に、金属器による斜格子文を施す。	口縁部内外面は、全面にロクロナデを行う。体部外面は平行タタキの後カキメを施し、内面は青海波文タタキを行う。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０４０
２２２	須恵器 横瓶	①１１．３ ③５．８残	口頸部。胴部の上面に穿孔した後、口頸部を接合する。外反する口縁部で、端部を玉縁状に肥厚させる。		①砂粒を含む。 ②堅緻 ③浅黄色	１０４０
２２３	須恵器 横瓶	①１２．６ ③２９．６ ④４３．４ ２５．４	長円形の体部をなす。体部上面に穿孔し、口頸部を接合する。口縁部は外反し、端部を玉縁状に肥厚させる。端部上端部はやや面をなす。口縁部外面の下端部に、金属器による斜格子文を施す。	口縁部内外面は、全面にロクロナデを行う。体部外面は平行タタキの後カキメを施し、内面は同心円文タタキを行う。	①砂粒を含む。 ②堅緻 ③褐灰色	１０６１ １０２３ １０３２ １０６７ １０６９ １０７２ １０７５ １０８４
２２４	石製品 石鏃	全長：２．４ｃｍ残 全幅：１．９５ｃｍ 厚さ：０．３７ｃｍ 重量：９．４３ｍｇ	凹基無茎鏃。基部に抉入を持つ。		サヌカイト	１００２

第89表　５号窯、灰原出土遺物（第１２５・１２６図）観察表

挿図番号	器　種	法　量	形態の特徴	調整手法の特徴	備　考	遺物番号
２１０	須恵器 長頸壷	①１０．８ ③６．６残	体部欠損。僅かに外反する口縁部である。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③明緑灰色	１０７５
２１１	須恵器 長頸壷	①８．３ ③６．９残	体部欠損。やや外傾気味の口縁部である。口縁部外面に２条の浅い沈線を施す。	全面にロクロナデを行う。口縁部外面にはカキメを施す。	①精緻 ②堅緻 ③赤灰色	１０１３
２１２	須恵器 短頸壷	①１７．６ ③２６．３ ④２６．５	やや歪であるが、ほぼ球形の体部をなす。頸部は、鈍角に屈曲し外傾する口縁部に続く。口縁端部は斜め上方に摘み出し、内側に段を付ける。	体部外面は、平行タタキの後全体にカキメを施す。内面は、同心円文・青海波文タタキを行う。口縁部内外面はロクロナデを施す。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③淡黄色	１０１８ １０４３ １０４８ １０５７ １０６１
２１３	須恵器 短頸壷	①１６．０ ③３．６残	体部欠損。外反気味の口縁部で、端部を下垂させる。	全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０１４ １０１５ １０２１
２１４	須恵器 短頸壷	①－－－－ ③２２．８残 ④１９．９	口縁端部欠損。体部はやや倒卵形を呈する。鈍角に屈曲する頸部より外反気味の口縁部に続く。	体部外面は平行タタキを行った後、全体にカキメを施す。肩部・底部内面は青海波文、胴部内面は同心円文タタキを行う。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１００８ １０１５ １０４３ １０６８ １０７４ １０８４
２１５	須恵器 提瓶	①６．７ ③２４．０ ④１８．４ １３．１	球体形の体部側面に、内湾気味に直立する口頸部を接合する。口頸部の両側に、やや退化したカギ状の把手を付す。体部は、平坦な底部より屈曲して立ち上り上部を内湾させ、粘土円板で充填するものである。	体部外面は、平坦面を除き全面にカキメを施す。口縁部外面はカキメを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①砂礫を含む。 ②堅緻 ③灰白色	１０１８ １０３２ １０４９ １０６７ １０７４ １０７５
２１６	須恵器 提瓶	①－－－－ ③１９．７残 ④２０．２ １２．７残	口頸部欠損。体部は、平坦な底部より屈曲して立ち上り上部を内湾させ、粘土円板で充填するものである。口頸部の両側にカギ状の把手を付す。	体部外面の平坦面と側面を除き全面にカキメを施す。他は、全面にロクロナデを行う。平坦面の屈曲部にヘラケズリを施す。円板充填の接合部にヘラ先による押圧痕が見られる。	①細砂を含む。 ②やや軟 ③灰白色	１０２０ １０２２ １０６４ １０６７ １０７０
２１８	須恵器 提瓶	①７．０ ③４．２残	口縁部のみで体部を欠く。外傾気味の口縁部で端部を丸く納める。	口縁部外面はカキメを施す。他は、全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０４９ １０５１ １０５７
２１９	須恵器 提瓶	①６．０ ③１５．０残 ④２１．２	体部の平坦面と充填部を欠く。球体形の体部側面に、直立気味の口頸部を接合する。口縁部外面にナデによる凹線を付ける。	体部外面は全面にカキメを施す。口縁部外面にカキメを行う。他は全面にロクロナデを行う。	①精緻 ②堅緻 ③灰白色	１０１３ １０２９ １０４１ １０６２

報告書抄録

ふりがな	やまのうえとおりやまいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	山ノ上通山遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	3
シリーズ名	郡家町文化財調査報告書
シリーズ番	20
編著者名	中野　知照
編集機関	郡家町教育委員会
所在地	〒680-0463　鳥取県八頭郡郡家町宮谷80番地　TEL(0858)76-0001
発行年月日	西暦　1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やまのうえとおりやま 山ノ上通山 いせき 遺跡	こうげちょう 郡家町 おおあざくちやま 大字口山 のうえ ノ上 あざとおりやま 字通山	31321		35° 26′ 8″	134° 17′ 17″	1991.11.01 ～ 1996.03.31	延べ 7400m²	町営工場団地造成事業に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山ノ上通山遺跡	集落跡 古墳 須恵器窯 窯状遺構	古墳時代前期 中期 後期 奈良時代	掘立柱建物　11 柵列　7 溝状遺構　11 古墳　12 須恵器窯　2 窯状遺構　5	土師器 須恵器 製塩土器 鉄刀 刀子 ガラス小玉	山ノ上32号墳より初期須恵器の樽型瓹の出土を見た

山ノ上通山遺跡
発掘調査報告書

平成9年3月　印刷・発行

発行　郡家町教育委員会
印刷　中央印刷株式会社